

---

# とある神父と魔法先生

北中津

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある神父と魔法先生

### 【Nコード】

N4615J

### 【作者名】

北中津

### 【あらすじ】

シンファナリスハントは今まで三回の世界移動をしている。二つ目の世界で原罪を無くし、三つ目の世界で魔術を学んだ。そして四つ目の世界では……  
とある魔術の禁書目録の力を持ったチート主人公が、ネギまの世界で暴れ回ります。とある魔術と禁書目録のクロスオーバー！

## プロローグ1 違う世界（前書き）

どうも北中津です。

気分転換で書いたら、話になっていたので書いてみました。

この小説は最強要素、独自解釈が入るのでそういうのはダメ、原作がいい！て人はご遠慮ください。それでもいい人よろしくお願いします。

## プロローグ1 違う世界

突然だが俺は死んだ。

いつも通り禁書目録の新作を買って家に帰るとき、交差点で車に轢かれそうになった子供を庇ったら死んでしまったらしい。テンプレ？何がだ？

まあそれより、「らしい」というのは今俺が雲でできた地面のよなところに全裸で立っているからだ。

此処はどこだ？天国か？

「ちよつとシン、今日はあなたのアダム様とイブ様との謁見の日よ、早く行きなさいよ」

うおっ！全裸の女！なんだ此処、本当に天国か！？それより・・・

「アダムとイブ？」

何でその人が天国に？

「そうよ！私たちが生まれるずっと前に悪しき蛇に寄る誘惑に打ち勝ったエデンの父と母よ」

なんかえらく説明口調だな、ていうかアダムとイブって蛇にそそのかされて知恵の実を食べたんじゃないのか？

「さあ、早く行くよ！」

「ちよっ！」

そして俺はなんかローマ辺りにありそうな神殿に来ていた。

「さあ行つて」

俺は中に入った。

「やあ、ようこそ。君は私達のひいひいひい孫のシンだね。」

「さあ、お菓子でも食べて」

そこには超イケメンの青年と絶世の美女がいた。

「分かつていると思うが、我々には老いがない。あの時に知恵の実を食べていなかったからね。」

だから、毎週子供達と一緒に過ごす時間をとっている。」

その後、生活はどうだい等と聞かれ何とか受け答え神殿を出た。

その後も此処での生活が始まった、幸運にも順応するのは早く特に障害もなかった。逆に楽しかったがどこか空虚な日々が続いた。

ミカエル様やガブリエル様にも会うことができた、あの翼邪魔じゃないのか？

そんなある日

「お、おいシン！お前何しでかしたんだよ！？」

なんか友達Aが真っ青な顔をして聞いてきた。どうしたと聞くと

「我らが主がお前を呼んでいるんだよ！今すぐ行けっ！」

そういつて友達Aは俺を引っばっていった。

「それで、主の神殿に着いたと」

「誰に言ってるんだよ」

セオリーだろ

「シン様ですね、お待ちしておりました。さあ中へ」

ちっさい天使が迎えに来て俺は中へ入った。後ろでは、友達Aが別れの言葉を叫んでいた・・・

ここですと言われ入った部屋には、THE GODって感じの人がいた

「よく来たな待つておったぞ。我がお前を呼んだのは他でもない、お前の正体のことだ。」

！気づかれた！俺はどうなる？冥界に強制送還！？

「そう怖がるな、元々お前がここに来たのも我々の手違いだった。まず此処を天国と誤っているかもしれないが、此処は並行世界だ。お前がいた世界の人間は原罪を背負うが、この世界は見ての通り原罪という言葉さえない。お前を天国に送るつもりが此処送ってしまった

た。本当に済まない。」

「いっついえ此处での生活も悪くなかったし」

やべえ、神に謝られたよ。

「並行世界は幾つあっても管理してるのは我と天使達だからな。すこし違う世界でばたかしていた。それとお前の死因が死因だから、今日までの生活を見てお前が生き返るにたる人間かを見極めていたのだ。そして今日、天使達とも話し、お前を生き返らせる事にした。」

生き返れるのか、でも俺の体はもうスプラッタだぞ。

「今の体をそのまま使おう、お前もイケメンの方がいいだろう？」

「……あつありがとうございます。」

「それとお前の原罪は全て洗い流された。その代わりと言っては何だが、生き返ってから我らを信じる心を広めていってくれ。」

「それくらいなら……分かりました。」

「すまないな、それでは送ろう」

俺は光に包まれた。

「それと、生き返る世界はたくさんの派閥があるそうだから頑張ってくれ。」

「えっそれって禁s y・うわあああ  
あ」

俺は生き返った。



## ブローグ1 違う世界（後書き）

どうも北中津です。

今書いている小説の気分転換で書いてみたら、いけるんじゃない？と思ったので投稿しました。

これ以降は人気がある方を中心に書いていこうと思います。

二つ目の世界は、もし失樂園がなかったら？と言う世界です。

ほとんど私の乏しい知識で書いているので、矛盾点などがあつたらお教えください。

## プロローグ2 三つ目の世界（前書き）

どうも北中津です。今回から禁書の世界になります。

## プロローグ2 三つ目の世界

「これより我らが主に仕える者として・・・」

俺はいま修道士になるための儀式のような物をしている。

あの後、生き返った世界はやはり禁書目録の世界だった。俺はイタリア生まれだったのでローマ正教に入った。規模も一番だから多くの人に十字教を広められそうだしな。ついでに言うと聖人だった。

そして儀式が終わった後

「シン・ファナリス・ハント！教皇様がお呼びだ今すぐ来るように。」

教皇が？俺はただの新米修道士だぞ。等と思いつつ教皇様の部屋に向かった。

「失礼します。」

俺が教皇様の執務室にはいると。

「へえ〜こいつがフィアンマが目付けた奴か〜」

「たしかに原罪が全く見られませんねー」

「この者が我らの後継者になるのであるか？」

「そうだ、オイ、お前名は？」

異色な神父四人がいた・・・てか完全に神の右席だろおお！後継者？俺が！？

確かに原罪はないけど。

「シンファナリスハントです。」

「まずお前に問う。何故原罪がない？」

俺は並行世界でのことを話した。

「やはり神聖の国は存在したんですね！」

「原罪がない世界か信じられん」

「神の力や神の薬とも会っているとは」

上からテツラ、ヴェント、アックアである、テツラなんて狂喜乱舞している。

「シン、これからお前はこの神の右席に見習いとして所属してもらう、権力は見習いでも枢機卿並みだぞ。ちなみに拒否権はない。」

この日から俺の神父生活が始まった。

「ピアス付けろ。」

「イヤですよ！そんな食事にも一苦勞なピアス！」

「そうしないと、私の天罰術式は使えねえんだよ。」

3時間の口論の末、指輪やチェーン、ネックレスで妥協した。

「葡萄酒を飲みなさい。」

「僕まだ未成年ですよ！しかもそんな安酒！」

「神父たる者、質素な生活を送るんです。飲みなさい！テッラを上位にシンを下位に！」

「卑怯だアアア！」

無理矢理ビンを口に押し込められた。

「あなたも何かするんですか？」

「いや私は聖母崇拜の結果であるから。いつもの信仰に加えて聖母崇拜もしてもらう。」

私が教えるのは聖人の戦い方と薬草の知識、普通の魔術もしてもらうのである。貴様は普通の魔術も使えるからな」

一番死ぬかと思った。

「最後は俺様だ。」

前言撤回、こいつが最悪。

もう思い出したくも、ありません。

神の右席での修行をある程度修めたら。

イギリス清教にも行った。なんか交換研修のようなものらしい。

「よろしくお願いします。私はイギリス清教の神裂火織です。」

神裂さんキターー

「よろしくお願いします。女教皇様」

「………どういう意味ですか。」

「話は聞いていますよ。周りを不幸にするから天草十字凄教を抜けたと。

何故逃げるんですか、あなたは力がある。なのに逃げて神に助けを求める者に神は救いを与えません」

「それができるのならしている！しかし私はみんなを救うことは・  
・・」

「天草十字凄教はそんなこと望んでいないと思いますよ。彼らはあなたと共に立つ事を望んでいる、後ろではなく横にね。そして貴女は彼らを信用してない事になります。一度話してみるべきです、腹を割ってね。」

「……わかりました！今すぐ行きましょう。ついてきてくださ

い。」

端から見たら痴女に拉致される神父である。

移動中

「ありがとうございます。これからは天草十字凄教の女教皇も並行してやっていくつもりです。」

神裂さんが和解して、俺達はイギリスに戻ってきた。向こうに行つた際、五和さんから料理や魔術を教えてもらった。

「何かお礼がしたいんですが何か欲しい物などありますか？」

「それじゃあ剣を教えてくださいよ、七閃や唯閃。僕も聖人ですから。」

「そつ、それは難しいですね・・・一応私の奥の手ですし、七閃ならワイヤー使うだけだからいいですけど」

そしてワイヤーの使い方を学んで、俺の研修は終わった。

## プロローグ2 三つ目の世界（後書き）

どうも北中津です。

禁書の世界です。キヤの口調が難しいですね。

ここでの神の右席は、内輪には優しい人の集団です。シンはほとんどの魔術をマスターしています。禁書編は後一話続きます。



### プロローグ3 最後の世界移動（前書き）

どうも北中津です。

プロローグ最終話です。あのフラグメイカーも何行かです。

### プロローグ3 最後の世界移動

ローマ正教に戻ってから、俺は様々な機関へ行った。

そこでも魔術を学んだ、なんだかんだで不老（死の概念がない）から極める時間はたっぷりある。

そんなある日、学園都市に行った。（興味本位）

「此処が学園都市か・・・」

俺は学園都市に来ていた。今は夜で人気はない。と思つたら

ゴオオオオオという音と光の塊が・・・そしてあの光がある倉庫がたくさん置いてある所・・・

もしかして・・・あつ！あのツンツン頭はとアルビノの男は・・・

天下のフラグメイカー上条当麻さんと最強のロリコン一方通行じゃないか！！！！

てことは今は3巻の最後って事が、オイ！風力発電の風車が回ってないぞ！

俺は空気のハンマーを使い風の動きに変化を加えた。そうするとプラズマが消え原作通りの結果になった。

数日後、フィアンマから連絡が来た。

「分かってるな、御使堕しだ。俺様達神の右席は大丈夫だが、他の奴らが変わって面倒だ。アックアが言うには、堕されたのは神の力だそうだ。お前会ったことあるだろ、何とかしろ。ブツ・ブツ・ブツ」

なんだこの理不尽が集約された電話。目から、しょっぱい液体が出てきた。

そして来たぜ海！そこにはスタイルと――が居た。

「シンさん！あなたも御使堕しから逃れられたんですね。私です、神裂です！」

「ねーちゃん、誰この人？」

「この人はシン、ファナリス、ハントさんローマ正教の方です。」

「よろしく、僕は上の方に解決を命じられてまして。」

「よろしくにゃー・・・っ！かみやんに誰かが接触したぞ」

あ、あの変態丸出しの服装はサーシャクロイツェフだ。

そして、原作とたいした変化もなく時間が過ぎていった。

そして、夜。

「お久しぶりです、ガブリエル様」

「久しぶりです、シン。あの時の約束通り教えを広めているようですね。」

「ありがとうございます。それとガブリエル様、この魔術の原因を割り出しました。」

「っ本当ですか！？教えなさい。」

「はい、術者はガブリエル様の魔術が通用しなかったあの青年の父親です。」

彼の家に置いた幾つもの偶像が、偶々発動してしまったそうです。これのことをあの陰陽師に伝えれば、ガブリエル様の手も患わず、事は收拾するでしょう。」

「良くやりましたシン、褒美に私が使おうと思っていた術式を使えるようにしてあげましょう。あの世界では使いませんでした、この世界では、二つの街を焼き尽くした魔術です。」

え？それって・・・うつ！頭に知識が流れ込んでくる。

「あなたならこれを悪事には使わないでしょう。それでは」

そしてガブリエル様は去っていった。俺もイタリアに帰った。

御使墮してから数日後、イタリアでのんびり過ごしていると、フィアンマが来た。

「魔神になれ」

そう言つと、有無を言わず聖なる右を出し俺を拉致した。

「一体なんですかこれ!？」

俺は見たこともない、魔法陣の中心に縄でぐるぐる巻きにされていた。えらく古典的だな。

「ちよつと神の右席が魔神になる術式を作ったんだが、まだ不安定でな、お前実験台になれ。」

「何で僕なんですか!他のh「いくぞ」」うわあああああ

目が覚めたら、草原にいた。

「じじどじじ?」

### プロローグ3 最後の世界移動（後書き）

どうも北中津です。

次回から本編に入ります。今回はハッキリ言って、シンに一掃を覚えるための話です。後、シンは今の魔力ではムリですが、神の力が使った、星の位置を変える

魔術の術式と、これはできますが水の羽を出せます。

次回からネギまの世界です。

## 第一話 四つ目の世界（前書き）

どうも北中津です。今回は短めです。

## 第一話 四つ目の世界

「どこどこ？」

俺は見覚えがない草原に来ていた。

「そうだ携帯！あれ？」

携帯を見ると画面が真っ黒だ、充電はしたはずなのにおかしいな？  
仕方なく携帯をしまい、辺りを見わたすと、建物が見えた。

「行ってみるか。」

どこか聖堂に見える建物の入り口に着くと、門番らしい人がいた。

「すいません。此処はどこですか？あと日時も教えてくださいと  
嬉しいんですが。」

「うん？ここはイギリスのウェールズのメルディアナ魔法学校だ。  
それと今は1979年の9月4日だ。」

1979年！二十年以上も前じゃないか！

それに、メルディアナ魔法学校？魔術でもなければ、イギリスの  
そんな組織聞いたこともない。

俺はこの辺りの教会の場所を聞き、その場を離れた。

そして門番から聞いた教会に着いた。



「失礼します。ローマ正教の者ですが、どなたかいらっしゃいますか？」

教会は特に変化は無かった。

「はい、私が神父のビアージオですが。」

「ぶっ！」

ビアージオが居た、スゲーさえないおっさん臭出してる。

「ど、どうかなさいましたか？」

あれ？でもビアージオさんは二十年前には、聖ピエトロ大聖堂にいたって言ってたよな。

「い、いえ、私はローマ正教の者ですが、ローマ正教本部に連絡は取れませんか？」

「ローマ正教？はて、そのような宗派は聞いたことはありませんが？」

は？・・・いやいやいや、ローマ正教って言ったら世界に二十億人も信者を持つ宗派だぞ。

「それじゃあ、今の教皇様の名前は？」

「今の教皇様は 様ですが。」

誰？・・・もしかしてまた。世界移動かよおおおおお！

三回目だよ！そこらへんのSSでもねえぞ。

「あ、あの行く当てがないんなら、此処にいますか？見たところあなたも神父のようですし。」

「そ、そうですか。ありがとうございます。」

なんていい人なんだ。異教徒には死を、とか言ってるおっさんとは大違いだ。

こうして俺は四つ目の世界で生きることになった。

## 第一話 四つ目の世界（後書き）

どうも北中津です。

お気づきの方もいらっしゃると思いますが、この小説の本編は大戦の前から、始まります。ネギ世代のキャラの登場を期待していた方。申し訳ありません。

## 第二話 旅立ち（前書き）

どうも北中津です。今の内にいくつか投稿したいと思います。

## 第二話 旅立ち

この世界に来てから二年後

俺はビージオ（笑）の教会で生活している。

この世界の魔術、いや魔法は魔術以上に厳しく秘匿されていて、幸か不幸かこのウェールズは魔法使いが生活している町であり、メルディアナ魔法学校は相当でかい魔法学校らしい。

この世界には立派な魔法使い、偉大な魔法使いという称号があり、いわゆる正義の魔法使いと言うものだ。その考えはいいが……やりすぎる奴が少ないことを祈ろう。

そして今俺は教会に一人だ。

俺以外の誰もいないせいか、やけに目立つ沈黙の中で迷える子羊を待つ。あーへいwーシン！！匿ってくれ！！」じゃないか。

俺の平穩にそうそうと終わりを告げたこの赤髪は恐れ多くも主の足元に隠れやがった！！それと同時に扉のほうで騒がしい声と足音がする。お、一人が入ってきた。

「ハント神父、ここにナギは逃げ込んできていないでしょうか？」

「いえ、見ていませんよ。」

見た、すごい見たけど、それ以上にここを魔法戦場にしないことを優先するべきだ。

「そうですか、失礼します。……オーイこっちはいない

ぞ！！」

足音が遠ざかっていく、行ったか。俺の平穩限定破壊魔を残して。

「いやあゝ、助かったぜ。」

何故知り合ってしまったんだろう、厄介ごと80%でできている  
こいつと。

## 回想

そのときは町に買い物の帰りだった。

「こらあ！！！！待てナギーーーー！！！」

屋台のおっちゃんの声が響く、泥棒か何かか？

「どけどけ！！怪我するぜ！！！」

後ろを振り向くと、魔力で強化しておっちゃんをどんどん引き離す子供が走ってくる、あれがナギスプリングフィールドか天才肌と聞いていたが、なるほどあの魔力強化、たしかに噂どおりだな。  
だが、俺の眼前で悪事を働くとは……

「うつ、ゲゲー！！！」

真横を通り抜けようとしたナギの首根っこをつかんだ。

「泥棒、ダメ、常識」

「クッソ、離せ！！お前！！・・・うらあ！！」

大人も十分気絶できるであろう蹴り、まあそれくらいしかできないだろうから予想はついたが。

「フン」

「てめえ！！何者だ！？」

この隙に逃げたか。

「俺はシンファナリスハント、神父だ。」

「神父？それにしては強いな、行くぜえ！！」

どうやら、火をつけてしまったらしいな。天罰術式をしてもいいが・・・

「いいだろう、上を教えてやる。」

買った物袋を上投げたと同時にナギの拳が飛んできた。

俺はそれをギリギリで受け止め、そのままナギの体を引き寄せる。そして驚いて硬直しているナギの鳩尾を思い切り膝蹴りした。

「ガハ！！」

魔力で強化していても聖人の力には意味はない、それ以上の力で捻じ伏せるのみだ。

ちょうど買い物袋をとると、うずくまっていたナギに言った。

「才能があるようだが、まだまだな経験が足りないか。」

「まだ、だあ……」

ナギはよろよろと立ち上がる。そして瞬動でフェイントを駆使しながら、攻撃してきた。

「シンを上位に、ナギを下位に!!」

「なっ!! きかねえ!!」

ナギは俺の全身を狙ってくる、顔面、鳩尾、金的、水月、だがそんなものは効かない。

俺はナギが隙を見せた瞬間、光の処刑を解除、そして殴り飛ばした。

一応、集まってきた野次馬に当たらないよう、地面に叩きつける当に殴ったが、大丈夫か？

「クッソ……まだまだ。」

「もうよせ、決着はついた。」

俺も疲れた

「なにがだよ……？俺は負けてなんかいないぜ。」

「……………あーもう、ならば引き分けた。これだけ野次



馬がいる街中じゃ本気も出せないだろう？またいずれ、決着をつけよう。」

「そ、それなら、まあいいぜ・・・また今度、本気でやろうぜ。」

そして俺とナギは固く握手を交わした。

回想終了

何故、最後だけ熱血なのだろう？

「それで？今日は何だ？魔法学校関係者が多かったが」

「ああ、学校辞めた。」

「まったく、いつもいつm・・・なに？辞めた！？なにをしてるんだ！？」

「俺みたいな奴は学校にあわねえんだよ」

「確かにお前の座学はゴミみたいな成績だが・・・いくら才能があっても魔法学校中退はまずいぞ。これからどうするつもりだ？」

まさか、こいつここにパラサイトするつもりじゃないだろうな？そんなことさせんぞ

「ああ、そのことでここに来ただけだな、俺はこれから旅に出





## 第二話 旅立ち（後書き）

どうも北中津です。

誤字訂正したら、3話と全部一緒になってしまった・・・

戦闘描写はあいかわらず下手ですいません。

### 第三話 新たな仲間＋チートバカ（前書き）

どうも北中津です。今の内にいくつか投稿したいと思います。

### 第三話 新たな仲間＋チートバカ

あれからいろいろあった。

戦争に参加することを決めてから、俺たちにも仲間が増えた。

「へえ、宗教に関する魔法を使うんですか」

「ああ、お前も入信するか？」

「いえ、遠慮しておきます。会ったこともない神を信じる来はないですからね」

「俺は会ったことがあるぞ。しかも本人に頼まれて布教している。」

「

「！？」

「あなたも剣を使うんですか」

「ああ大太刀と大剣を使う、でも技も二つだけだ。」

七閃と唯閃もどきな。

「大太刀ですか！私もですよ。しかし十字教なのに日本刀ですか？」

「日本の天草十字凄教を元にした技術だ。江戸時代に幕府からの弾圧から逃れるために発達した、偽装魔術や隠蔽魔術も使う。ああ、俺が使うのは魔法じゃなくて魔術と言っただ。これは師匠も魔術と言っていた。」

「なるほど、「詠春、今月のザ巫女服買ってきましたよ。」おお！ありがとうアル待ってたぞ」

「いえ、ロリっ子通信を買ったので」

「シン！君も読みますか？巫女服はいいですよ！」

「いや、いい俺は巫女よりシスターのほうがいいしな。」

「そうですね、しかし巫女もシスターもあの清楚なところがいいですね・・・」

6時間続いた。ヴェントとの口論以上だ。

そして朝起きたら、枕元にシスター通信が置いてあった。アルめ・  
・

そしてその後、ナギの師匠なる人物が加わった。

「うゝむ・・・おぬし、原罪がないの。」

「驚いたな、わかった奴は初めてだ。」

「いやあ、長く生きると、面白いのに会つ。」

お前何歳だよ。

それから数日後、

「おお！これが、詠春の国の料理か。」

「ええ、鍋と言っんです。煮込みながら食べるから暖まりますよ。」

「もうこの肉いいんじゃないね。」

「待てナギイイ！、それはまだだ、こっちの野菜を食べなさい！」

「ど、どうした詠春。急に人格が変わったようだぞ」

「昔聞いたことがありますよ、詠春の国では、鍋を支配する者を鍋將軍と言っこと。」

「まじか、詠春今日からお前は鍋將軍だ。！っ！」

みんなが後ろに飛んだ。中心の鍋には、巨大な剣が刺さっていた。

詠春以外はちゃっかりとんだ肉を空中でキャッチしていた。

「お前らが紅き翼か！お前らに恨みが無いが、依頼主の頼みでな。」





傭兵は拳を構え、不敵な笑いをした。

あれゝ？もしかして失敗した？

「俺も混ぜろ！」ドガア！とナギが参戦したので、俺は隠蔽魔術を使い逃げた。

「お疲れ様です。さっきのはどうやったんですか。いくらあなたが強くても、あの大剣を破壊できるとは思えません。」

「ああ、あれは知り合いの騎士集団が、剣術で最強になるために地球上の剣術を融合させたんだが、死角が無くなる程複雑になるんじゃないくて、逆にいくつかのシンプルな形になってしまった技術だ。それは射程距離、切断威力、武器重量、耐久硬度、的確精度、専門用途、移動速度だ。俺はこの中から一つを選び、それを極めた剣術が扱える。まあ声に出さないといけないから、何に特化するかわかっちゃってしまうし、一度に種類しか特化できないからな欠点はある。」

「ふふ、十分に凄いですよ。」

しかも、専門じゃないから魔力消費も激しいし、ソーロルムの術式なんてそれ以上だ。

「後で詠春に教えを乞われるかもしれませんね。」

「冗談じゃねえ、お、向こうも終わったようだ。」

「つ、強いなお前。」

「お前もな、今日は帰るがまた来るぜ、あの神父とも決着を付け

たいしな。」

「シンは強いぜ」

何お前ら青春してるんだ。

それから、週一のペースで戦いに来たラカンだが、途中から、毎週来るんなら、一緒に来た方がよくね？と言っことでラカンが仲間になった。

### 第三話 新たな仲間＋チートバカ（後書き）

どうも北中津です。

今回は、紅き翼が出るまでの流れになります。

パターン魔術は強すぎるので、魔力消費をかなり多くしました。

ラカン対ナギは、シンがいたことで、比較的短時間で終わりました。  
戦闘描写はあいかわらず下手ですいません。

## 第四話 全力バトル（前書き）

どうも北中津です。

今回は、ストーリーとしてはほとんど進みません。

## 第四話 全力バトル

あれから紅き翼は、かなり有名になった。

特にグレートブリッジ奪還作戦が大きかっただろう。

あいつらはしゃぎすぎだ。

え、俺？俺はあんな化け物とやり合う術式はないからな、聖なる右は使えない。アドリア海の女王や、エカーテナがあれば何とかなつたが。だから、一般兵のど真ん中に単身派手に乗り込んで、天罰術式だよ。あの程度の奴ならあまり魔力も使わないしな。そのせいで俺も有名になったもんだ。あとアリ力様とも会った。あれの人は洋風神裂さんだな。今は休暇を使って布教活動と、貧困な地域を回って薬草の知識などを教えている、アックアもやってたしな。なんか最強の神父って異名もできた。

そんなある日

今日も布教活動から帰ってきた。

「シン俺と戦え！」

「なんだラカン、俺は明日も布教活動だ、少しは休ませろ。」

「フフ、貴方は本当に熱心ですね」

アル、ロリっ子通信を読みながら言っても全くかっこよくない。

「安心しろシン、そう言うと思ってこれを用意した！これは外と

時間が流れが違つて、一時間が一日になるんだ。」

「私も貴方の全力が見たいですね。あの天罰術式でも貴方の力の鱗片ですからね。」

「あれは、神に仇なす者には天罰だゝって言う理論の応用だ。しかも強い敵にはそれなりの魔力を使う。」

「確かにあの後も息絶え絶えで、後半は負傷者の治療していたな、それでも無茶苦茶だ」

「ワシはそれでも見たいぞ。」

「俺も見えてえ！」

「王女命令だ。」

なんでナギとアリカ様いるの？

「よし決定だ！いくぞ」

「ちよつとmうわあああ！」

アルの重力魔法で無理矢理入れられた。

「さあ！やるぞ」

俺は広場にいた。俺とラカン以外は遠くの方で見ている。しょうがないやるか、術式も埃かぶるし。

「ああ、行くぞ！」

俺は懷から小麦粉の袋を取り出し、辺りにまき散らした。

「小麦粉を上位に、肉体を下位に！移動速度！」

俺は小麦粉のギロチンをつくり出し、移動速度を強化した。

「小麦粉なんざアア」

ラカンがギロチンをたたき落とそうとするが

「っ！」

寸前で交わす。しかし少しかすったらしく、腕にはパツクリと切れた痕があった。

「すげえ切れ味だな。だが俺の剣とはどうかな？」

ラカンはアーティファクトの千の顔を持つ英雄を出した。

「小麦粉を上位に、剣を下位に！」

俺は小麦粉と剣の優先順位を換えた。そうするとラカンの剣を真つ二つにする、そしてそのままラカンの腹に直撃した。しかし優先順位が換わっていたので、あまりダメージはないようだ。

「ん？フフそう言うことか」

ラカンがニヤと笑う。



場は代わり観戦組

ナギ「お、シンが何かばらまいたぞ。」

アリカ「小麦粉のようだな、それと何か言ってるな。．．．おお！小麦粉がギロチンになったぞ。」

詠春「あのラカンの肌を切るとは、かなりの切れ味だぞ。」

ナギ「いや、あれはさっきシンが詠唱したからだ。俺があいつと出会った時、あの呪文を言ったら俺の攻撃が全く効かなくなった。ほら、小麦粉が剣を切れるか。」

アル「ふふ、そう言うことですか。」

ゼクト「アル、何か分かったのか。」

アル「ええ、彼の詠唱で共通しているのは、上位と下位、物のランクを決めています。恐らく、物の順位を換えることができる魔術なんでしょう。そしてその弱点は、二つの物の順位しか返れないんでしょう。二回目の順位の時にギロチンがラカンに当たったとき、ダメージが明らかに違いましたからね。ラカンも気づいたでしょう。」

詠春「あつ！小麦粉をしまいましたよ」

そして広場

ちっ、あの顔は気づいたな、あいつのアーティファクトは相性が悪い。

俺は大量の十字架を取り出す。その内のいくつかの十字架を投げる。

「十字架はその重きをもって驕りを正す！！シモンは神の子の十字架を背負うッ！！」

ラカンの頭上に飛んだ十字架が強大化し、重力攻撃で落下する。ラカンは重力攻撃で上手く動けないようだ。

「うおっ！……でも全然痛くねえな。」

ビアージオオオオオオ！くそ！ならこれだ！

「ドラゴン用だが、対して変わらんだろ。」

俺は影から、占星施術旅団から聞いた構造から作った3・5mの大剣を取り出した。

「やけにでかい剣だな。」

「これはアスカロン、旧世界のある聖剣の物語で出た剣の名をもった。ゝその作中に登場する全長50フィートの悪竜が実在するものとして、その悪竜を切り殺すために必要な剣の理論値とは何か」を徹底的に計算し尽くして作り上げられた怪物兵器だ。分かりやす

く言えば、理論に基づいたドラゴンスレイヤーだ、この剣一本で竜の全てを切断できる。さて、説明はここまでにして、いくぞ！移動速度」

「こい！」

この後はすさまじかった、俺はアスカロンの刃の部分、鋸の部分、ワイヤーの部分、さらには七閃も駆使して戦った。対するラカン様々な武器に姿を変えるアーティファクト、そして奴の最強の武器とも言える拳を時折使ってくる。こっちは重さを聖人の力と、移動速度でカバーしてるのに軽々ついてきやがる。俺が奴の首をねらうと、かわされ、横っ腹をねらうと、剣で防がれる。このような戦いが、何時間も続いた。

「ハアハア・・・そろそろ終わらせるか。」

「そうだな、そうするか。」

「唯閃！（アスカロンver）」

「ラカン最強パンチ！」

ドガアアアア！！！！と音を立て広場は土埃に包まれる。煙かはれりと、広場は凄惨なサイズのクレーターができていた。ドラゴンールかよ。俺とラカンはその中心に倒れていた。

「あーもう動けねえ。」

「俺もだ、これは引き分けかな。」

「この決着は何時か付ける！」

「俺はもうイヤ……」

「いやぁお疲れ様でした。なかなかの戦いでした。」

観戦組が来た、詠春が俺に肩を貸す。

「俺ともいつかやろうぜシン！お前まだ奥の手があるだろ。」

「あるにはあるが、それは殲滅用だ、戦争でも使ってやるよ。」

久々に全力でやった日だった。

#### 第四話 全力バトル（後書き）

どうも北中津です。

今回は戦闘オンリーにしてみました、ネギま勢とパワーバランスを取るために、色々制約を付けました。

天罰術式は、相手の強さと人数で、魔力の消費量が変化します。

光の処刑はほとんど変わりません。

ビアージオの魔術は弱いです。カスレベルです。

アスカロンは、占星施術旅団からアックアにアスカロンを届ける時に構造を学んだという設定です。

ラカン最強パンチはラカンならこんな感じ？みたいな気分で作りました。

次回は話が進みます。

## 第五話 騎士（前書き）

どうも北中津です。

今回は戦闘ありませんがフラグが立ちます。

## 第五話 騎士

俺は今完全なる世界の船にいる。

何故かというそれは数時間前にさかのぼる。

「完全なる世界の証拠をつかんだ、これで戦争も終わる。」

ガトウとタカミチが完全なる世界の証拠をつかんだらしい。

「ならば、ヘラスの者に教えなければ。今からヘラスの第三皇女に会ってくる。」

「イヤちよつと待てよ姫様、一人じゃ危険だ。あんたに何かあったら戦争が激化するぜ」

「それならば、護衛の者を連れて行こう。誰かついて行きたい者はおるか？」

「じゃあ俺が「待ってくださいナギ、貴方が行くのはダメです。貴方には完全なる世界の支部を潰してもらいます。そうですね・・・」  
・、シン、行ってくれますか？そのほうが布教活動もできますよ。」

何？確かにヘラスの人にも布教したいな。

「わかった。俺が行こう。」

今思えば、コレが失敗だった。いや、ある意味正解か？

そして船に乗ってヘラスの第三皇女と面会しようとしたら。

「完全なる世界だ全員動くな！」

そして、今に至る。

「隊長！あいつ紅い翼の最強の神父ですぜ！」

「なに！？あの慈悲と非情を兼ね備えた神父か！こりゃ好都合だ、こいつも連れてくぞ。」

そして、夜の迷宮なる牢獄に入れられた。

「何しとるんじゃお主は、それでも紅き翼か！」

「いやテオドラ様、俺の本来の目的は、完全なる世界の奴の生活を見てどういふ思いで戦っているかを見たかったからわざと捕まった。大丈夫だ、ナギ達は助けに来る。」

「護衛の任務そっちのけだな。」

「大丈夫だアリカ様、ちゃんと護衛の任務は果たす。ついでお前も守ってやるよ、お姫様。」

そう言つて、テオドラ様のデコを小突く。クセエエエ！死にてええええ！



「~~~~~／／／！！！」

それから牢獄生活が始まった。看守の人たちには、十字教の教えを説いていた。

あと、料理がまずいと姫様コンビがうるさいので、五和に習った日本料理を振る舞ったりした。  
テオドラには聖書の話や、神の右席での生活も修業時代として話してやった。

「お主、何でもできるの」

「戦争が終わったら雇ってやろうか？」

激しく遠慮した。

そして、いくらかの時間が流れ。

「アリカ！助けに来たぜ！」

「遅いぞナギ、それよりもお前が来たにしてはやけに静かだな。」

たしかにあの派手好きなナギにしては外が静かだ。

「ああ、なんか神父様はこちらです、って言われた。シンの布教も役に立つな。」

「シ、シンよ行ってしまつのか？もう守ってくれないのか？」

「大丈夫だ、守ってやる」「そうかアリカ！」なんだ！アリカ様！

「？」

「すまぬな、これも女の友情だ。」

アリカ様に後ろから羽交い締めされた、くそっ解けねえこれが女の友情か！ ㇪ 解 場の空気ですㇼ

これは仮契約の魔法陣、むっ！！！！

「ぶはっ、これでいつでも駆けつけられるな。さてパクティオーカードは……方角は中央、徳性は信仰、お主らしいな、星性は太陽、色調は白、番号は005、中央のメシアか」

「はははは！ シン、救世主だつてよ、俺が英雄ならお前は救世主だと」

ナギの馬鹿笑いも耳に入らず、俺はの心を占めたのは、最後の二つだった。

それは、神の右席でのある日……

「オイ！ シン魔法名決まったかよ」

「ヴェントか、単語は決まったんだが番号がなかなか決まらない。」

「

「そんなのなんでもいいよ、早く決めないと戦えないぞ！」

「いえヴェントさん、魔法名は神聖な物、そう易々と決められま

せんよ。そうですねーより多くの人を助けると言うことで、999などどうですかねー？」

「いや、男なら一番じゃなければ行けないのである、001が正しいのである。」

そうして口論の火蓋が切って落とされた。ヴェントはさっさとしろよとあきれ果てている、また長くなるかと思ったら。

「俺様が決めてやる。この神の如き者が決めるんだ、拒否権はねえ。そうだな・・・、005だ、お前は神の右席の五番目だからな、俺様たちを継ぐ者であることを刻み込め。」

この言葉に二人は

「・・・まあ、いいでしょう。」

「・・・異論はないのである。」

「それじゃ決まりだ、ついでにお前の神の右席での名前も決めてやる、今お前のための術式を作らせているが全然できねえ、何してんだあいつらは・・・まあそれができたら、お前も晴れて神の右席だ。」

「フツ、自分が一番率先して作っているのに「なんか言ったかアツクア？」何でもないのである。」

「それじゃあお前の魔法名は005、名前は中央の・・・」

「・・・・・・・・！！・・・・・・・・！！」

「どうしたシン！？涙なんか流して」

「どうしたのじゃシン、も、もしかして私との彼契約はイヤだったのか？」

「イヤ、嬉しいよお姫様、ちょっと昔のことをね・・・・」

俺があの日々を思い出すなんてな。

「それよりシン！お前のアーティファクトみようぜ！」

「まずは此処を出てからな、お姫様いつでも俺を呼んでくれ。」

「わかったのじゃ！それじゃあのシン、いや私の騎士。」

「イエス、マイロード」

そしてその後、アリカ様がクーデターを起こした。そしてガトウの証拠を使って、完全なる世界を墓守り人の宮殿まで追い込んだ、そして今、紅き翼・連合・帝国・アリアドネーと完全なる世界との最終決戦が始まるうとしていた。

## 第五話 騎士（後書き）

どうも北中津です。

主人公にテオドラフラグが立ちました。

あと、回想シーンですが、神の右席、特にフィアンマが兄貴的なポジションに立ちつつあります。あと三話くらいで大戦編も終わります。

## 第六話 最終決戦（前書き）

どうも北中津です。

最後の戦いは、二話続きます。

## 第六話 最終決戦

今俺たちは、明日の最終決戦に備えて・・・宴会をしていた。てか、ラカン！ナギ！飲み過ぎだ！そして周りを巻き込むな！詠春なんて、絶対明日、支障が出るぞ。

「おい！シンこっち来いよ、そんな安酒よりこっちの方がいいぞ」

「俺はお前らみたいに浴びるように飲まん。」

「いいじゃねーかー一緒に飲もうぜ、神父にも休みは必要だって。」

「遠慮だ」

ナギとラカンのからみから逃げ、ベランダに出ていた。

「ここにいたんですか、シン」

「どうした、アル」

俺が振り返ると、あいかわらず不敵な笑みを浮かべ、アルは立っていた。

「明日の戦いが終わったら、あなたはどうしますか？」

「そうだな、せつかくだから魔法世界を回って布教活動と援助活動だな。この世界にも、貧困な地域はあるからな。」

「そうですね、貴方らしいですね。……………それなら明日は、なおさら負けられませんね。」

「ああ」

そして朝

「ガトウとタカミチを除いた紅き翼は、墓守り人の宮殿に攻め込み奴らをぶつつぶす。準備はいいな、みんな」

「もちろん」

「頭が痛い……………」

「腕が鳴るぜ」

「いくかの」

「ああ」

「それじゃ「敵襲――！南に何千体の召喚獣と数十体の鬼神兵が！」「何！」

「さすがにそれは厳しいですね、向こうもなりふりかまっていられないということですか。しかし、ここにいる兵ではとってい構いませんね。どうします、ナギ？」



「敵軍勢、どんどんこちらに向かってきています。」

「仕方がない、あいつらを片付けてか」「俺一人で行く。」シン  
！」

「大丈夫だ、まだ奥の手があると言ったろ。テオドラ、魔力を分けてくれ、俺の魔力では不可能な魔術を使う。下手をしたら死ぬが、テオドラの魔力があれば何とかなる。」

「わ、わかったのじゃ」

「シン！魔力なら俺たちのを使えば。」

「お前達は先に行つてろ、墓守り人の宮殿の奴らは、お前らじゃないと倒せん。」

「くっ！、わかったでも必ず来いよ！」

「ああ、行くぞテオドラ。」

「私が主なのじゃー」

そして此处は要塞の頂上、ガブリエル様、使わせてもらいます。

「テオドラ、頼む」

「わかったのじゃ、契約執行120秒間、テオドラの従者シン・ファナリス・ハント！」

体にテオドラの魔力が流れてくる。これなら行ける！

アストロインハンド  
「天体制御！」

ガブリエル様からもらった術式の一つ、星の位置を変える術式だ。ん？・・・これは！そうか、魔法世界の正体は・・・

「空を見る！」

誰かが叫びみんなが上を見ると。黒、その黒の中にいくつかの光がある、星だ。朝日が全て出きるくらいだった空が、途端に夜に変わった。

「なんだこれは！」「夜になった！」「世界の終わりだー！」

うるせえ、今から世界を救うんだよ。

「ごほっ！！」

血を吐く。いや、体中から血が吹き出す。

「大丈夫か！シン」

テオドラも目に涙を溜めて心配している。

「問題ない、次だ！神の力よ、かつて墮落した都市を裁いた大いなる裁きを！ここに再びその裁きを！」

闇夜を照らすように輝いていた星と星を光の線が結ぶ。空を覆う

巨大な魔法陣をつくり出した。

「これは！」

「一掃オオオオオ！」

魔法陣から何千、何億ともいえる光の矢が降り注いだ。

「ぎゃあああああ！」「グガアアアア！」

南側一面を覆っていた。召喚獣、鬼神兵は跡形もなかった。そこにはただ焦土が広がっていた。

「「「「「「「「「「うおおおおおおおお！」」「」

少しの沈黙の後、歓声が巻き起こった。やべ立てねえ。

「大丈夫か！シン」

「ああ、何とか一命はとりとめたぞ」

「バカ、そんな傷で言うな、でも、さすがは私の騎士じゃな。」

紅き翼

「シンが、何かやったようです。！！まさか星の位置を変えるとは、さらに星座を魔法陣代わりにするとは、あいかわらずすまじいですね、信仰の力は。」

「確かにあの時、あんなに打ったら、修行場が潰れちゃうな、まあ！俺にも出きるがな。」

「シンがやってくれたんだ、俺たちも行くぞ！」

「「おお！」」

そのころ俺は

「シン行つてはダメじゃ！その体で言っても足手まといのなるだけじゃ。」

「それでも行かなければいけない！俺は仲間と約束したんだ！」

医務室でこのようなことを言い争っていた。

「このわからず「テオドラ様！」なんじゃ！私取り込み中だ！」

「申し訳ありません。しかし、ハント神父が敵を倒した場所に見たこともない怪物が」

「何！」

俺は部屋を飛び出した。

「あれは」

ちょうど焦土と化した場所の中心に胎児のような姿をした、翼の

ようなものと輪を持っている怪物がいた。それはかつて、ある科学者が三万人の脳を統べた際、A I M 拡散力場から出た怪物。

「A I M・・・バースト」

「何じゃ！あれを知っておるのか！？」

俺のもう古い、一番最初の記憶、その記憶に残っていた怪物だ。原作では数々の超能力を使ったが、あの怪物は超能力の代わりに、魔法を使うようだ。その魔法を駆使し、一般兵を蹴散らしている。

「あれは俺がやる。俺があれを一番知っている。」

「ダメじゃ！あの化け物の魔力はナギ異常じゃ、いくらお前でも、うっ！？」

俺はテオドラを気絶させた。

「テオドラを頼む。」

俺はお付きの人にテオドラを任せ、A I M バーストの所へ向かった。

「アデアット、・・・いくぞフルンティング」

俺とテオドラの絆の証を手に、悪いナギ、行けそうにないわ。

そしてこの世界唯一の魔術師は、最強の科学へ向かう。

科学の化身と最強の魔術師が対峙するとき、最後の戦いが始まる。

## 第六話 最終決戦（後書き）

どうも北中津です。

創造主と戦うのも物足りないので、禁書側から誰が出したかったんですが。結局コイツになりました。裏設定で召喚獣の大群は、全て創造主の魔力で召喚されたのでパスがつかなくて、そいつ等が滅された時、残留思念が集まって、ああなりました。魔法は、兵隊を襲ったときそいつ等の記憶から学びました。

天体制御はシン一人では不可能です。

第七話 神の右席（前書き）

どうも北中津です。  
今回で決着です。



## 第七話 神の右席

「ギャアアアア！」

「そう騒ぐなよ、体に響くだろ。」

「ギャアアアア！」

AIMバーストが何百の魔法の射手を打つ、それを聖人の体力を使いなとかかわす。しかし俺はさっきの魔術で魔力を使い果たし、聖人の力とフルンティングだけで戦わなければいけない。メイスとアスカロンは重くて使えない、大太刀は細すぎて効くか分からない。

「うおおおおお！」

殺到する触手を切り捨てていく。

「ギャアアアア！」

要塞から大砲の助けもあるが、何重の障壁の前には意味をなさない。

「うらああああ！」

テオドラの魔力を吸収し、3m程になったフルンティングでAIMバーストの障壁を、叩き切る。

パリイイイン！・・・・・・パキパキパキ！

障壁は破れたが驚異的なスピードで障壁を再構築する。

くそ、なんてスピードだ。

ナギ以上の魔力を持つAIMバーストと満身創痍の俺、結果は火を見るより明らかだ。

ズシン！！

「がッ！」

これは・・・重力魔法！くそ動けない！

「ガアアアアア！」

AIMバーストがナギ並みの魔法を使おうとしている。やべえ、もうダメかも。・・・テオドラが何か叫んでる。また怒られるなあ・・・

そして俺が目を閉じると・・・

「おいおい、俺様の後継者がこんな出来損ないにやられるのかよ」

「なっ！！！」

目を見開くと一時的に気絶して、魔法もキャンセルさせられたらしい、AIMバーストがいた。

これは天罰・・・「ギャアアアア！」

まずい目を覚ました！、触手を俺に飛ばしてくる。

スパツと軽快な音で小麦粉のギロチンが触手を切り裂く。

「ギャアアアア」

ドガアアアア！！！さらに本体の上に、巨大なメイスが降り注ぎ、AIMバーストの動きを止めた。

「ガアアアア！」

「今回は特別だぞ、俺様達の餞別だ。やれ！」

そこで俺は、AIMバーストの頭上に見覚えのある魔法陣があるのに気づいた、それはこの世界に来る時に使った魔法陣だった。そこからはやトラウマとなった、不恰好な巨人の腕のような歪で禍々しい光の塊がAIMバーストを握りつぶす。そして、三角柱の形をしたAIMバーストのコアがむき出しになった。そして俺は最後の力を一滴まで振りしぼり、フルンティングを握った。

「うおおおおおおおおお！唯閃！！！！！！！」

バキーン

「ギャアアアアアアアア！！！」

AIMバーストは甲高い悲鳴をあげながら、消滅した。

「お前は此処でお努め果たしてるようだし連れて帰るのはやめにするわ」

「こちらでも信者を増やしてってくださいねー」

「そのメイスは、貴様にやるのである。卒業祝いである。」

「俺様からは言うことはねえ、好きなように生きる。五人目の神の  
右席、中央のメシア、シン・ファナリス・ハント」

そして、魔法陣は消え、俺もその場に倒れた。

「知らない天井だ」

「起きたか！シン！」

テオドラが俺に抱きついてきた。

「痛て~~~~！！止めるテオドア！」

「シン、そう言わない方がいいですよ、彼女は貴方が目を覚ますま  
でずっと、看病してたんですから」

そうか、こいつ・・・

「後、先月分と今月分と増刊号です。」

ドサと三冊のシスター通信を置いて出ていった。あいつ最後の最後  
でなんて爆弾を・・・

ああ、テオドラが凍ったよ。

「シ、シンはシスターが好きなのか？」

何故その単語が出る。

「テ、テオドラ誤解だ〜」

話を聞くと、完全なる世界はナギ達で何とかなったらしい。

親玉はあまりにも強かったらしいが、ナギが倒したらしい。

「それよりも、シン！記念式典が行われるらしいぞ、もうすぐだから早く行くのじゃ。」

あの時間こえた声が本当かどうか分からない。でも俺は、みんなが認めてくれたと思いたい。

こうして、大戦は幕を下ろした。

## 第七話 神の右席（後書き）

どうも北中津です。

最終決戦終わりました。

神の右席の助っ人の件は少し無理があつたかも知れませんが。

神の右席は、魔法陣越しにシンの惨状を見て、助けたという設定です。

第八話 終わってから始まりへ（前書き）

どうも北中津です。

今回は話が少し早めです。

## 第八話 終わりから始まりへ

俺は今、ある離島に來ている。なんでも大戦が終わったことの記念式典が行われる際、最大の功労者である紅き翼に出席して欲しいからだそうだ。あんなに反逆者扱いしたのに・・・あとの戦いがきっかけで、紅き翼の映画も作られたらしい。主人公はもちろんナギだが、俺もかなり美化されて描かれていた。しかも一般人はこれを真に受けたらしく、ラカンや俺のファンクラブができた。俺のファンクラブ会長はテオドラらしい。

こういうのを見ると平和って思うな、詠春

「そうだな、シン。それよりコレ！ザ巫女服増刊号の応募者全員サービスのすめらぎちゃんポスト「七閃！」なにするんだアアア！」

「話の腰を折るな、今日は・・・」

「ああ、俺たちも応援に行くか？」

「もちろん」

王都オスティア崩壊の救助活動だ。

オスティアが崩れていく。

「早く避難船に乗れ！遅れても知らんぞ！」



「子供、老人を優先してくれ。」

俺たちのがんばりもあり、予想されていた被害を大きく下回った。しかし・・・

「なんで、アリカ様が戦争の首謀者なんですか！」

「落ち着くんだクルト」

「これが落ち着けられますか！？いいんですかナギさん！アリカ様が処刑されても！」

「・・・・・・・・」

ナギは黙っている。

それからもうすぐ二年が経とうとしていた。その間は、いつも通り盗賊団を潰したり、布教活動にいそしんでいた。最近では半日に一回は、クルトが連絡を入れている。しかし、ナギは動こうとしない。

そして、アリカ様の処刑当日。

「・・・・・・・・」

紅き翼のアジトでは、全員が口を閉じていた。しかし、しびれを切らしたクルトが、

「みなさん！何故行こうとしないんですか！？シンさん！貴方は仮にも神に仕える者でしょう。」

「確かに俺は神父だ、だがアリ力様はナギが来るのを待っている。俺たちだけで行っても、どこかにしこりが残る、それにナギはこんな事で大切な奴を捨てる奴じゃないさ。」

俺が言い終わると同時にドアが開いた。

「アリ力を助けに行く、来てくれるか。」

「もちろん」「いいでしょう」「一つ貸しな」「ほらな」

そして俺達はアリ力様を助けに行った。この処刑自体が不明瞭だし、今や俺達は英雄だ。下手に公に出せないだろう。そして、向こうは向こうで、

「やっとくつついたか」

「そうですね、これで紅き翼も一時解散か？」

「せつかくの休暇だ、楽しもうぜ。」

と、思っていたが予想外の仕事が入った。

故郷から連絡があったらしい、詠春が真剣な顔をして土下座してきた。

「みんな、僕の故郷で神話級の鬼神が復活したんだ。このままで

は僕の故郷が無くなる。頼む！！・・・封印するのを手伝ってくれ。」

ナギとアリカ様が新婚生活を送っている時、詠春がそんなことを行ってきた。

「よし、アリカ！新婚旅行はまず日本だ！あそこは楽しいぜ！姫子ちゃんも行くよな」

「ナギが行きたいなら・・・」

「神話級だと！俺も行くぞ！」

「私も興味がありますね」

「俺も大日本沿海與地全図の確認をしておきたいな。」

俺のいた日本との違いも確認しておきたい。

「ほ、本当にすまん。恩にきる。」

そして、紅き翼は日本へ向かった。

鬼神は強かったが、ナギとラカンにはかなわなかった。

神話級の鬼神もバグとチートには敵わなかった。

その後は、紅き翼は一時的に解散になった。

俺は大日本沿海與地全図を利用した、日本旅行を楽しんでいたら、

ナギとあの有名な闇の福音がケンカ？をしていた。

「おお、シン！久しぶりだな、どうだこれ、闇の福音の正体だ、これじゃあロリババアだぞ。」

これがあの？ポルノにも引つかかるだろ。

「何がババアだ、うつぶ、その神父は誰だ、おい！笑うな！」

そしてナギは闇の福音をつれて、どっかいった、変なことしたらアリカ様に殺されるぞ。

その後、東北に行って日本旅行は終わった。禁書目録の小説はあったが、まだ三巻だった。

こんな愉快的なことばかりなら良かったんだが、世界はそんな風になっていない……

ガトウが死んだ。俺が弔った、アスナはタカミチが引き取るそうだ。

詠春は結婚したそうだ、どうせ巫女だろう。

ラカン、アルは行方不明だそうだ。

ん？俺か？俺は・

「シン〜〜、政務がきついじゃ〜〜〜」

「それも仕事だろ、しっかりやれ。」

「そう言っても無理なのじゃ〜」

俺は日本旅行から帰ってきてからテオドラに拉致され、ヘラス帝国に住んでいる。教会を建て、そこで十字教を広めている。中央のメシアのネームバリューもあり、信者も何人かいる。

ナギが死んだと言うつわさが流れたが、そんな分けないだろう。なんてたってナギだ。

まあ、ヘラスに来てからは比較的平和に暮らしている。……  
今のところは

## 第八話 終わってから始まりへ（後書き）

どうも北中津です。

今回でナギ世代は終わりです。

次回からネギ世代に入ります。そのために、今回に色々詰め込みすぎました。

アスナは原作を読んでも、長めのエピソードが少なかったので、原作通りです。

## 第九話 日本へ（前書き）

どうも北中津です。  
今回は短めです。

## 第九話 日本へ

ヘラスに居を構えてから、数年が経った。

今日も朝早く教会のポストを見ると。

「ん？詠春からか。・・・」

詠春から手紙が来ていた。

やあシン。何年ぶりかな。

実はおり言って頼みがある。

私の娘の木乃香のことなんだが、今はお義父さんのいる関東魔法協会の本部の麻帆良学園に通っている。

木乃香には何も知らずに生きていつて欲しいと思つてな。

しかし、麻帆良学園には世界樹と呼ばれる神木があり、それをねらった侵入者が絶えないんだ。

何時木乃香にその矛先が向けられるか分からない。

一応護衛も付けている。木乃香の幼なじみで神鳴流を使う桜咲刹那という娘だ。ちなみに烏族とのハーフだ。

問題はその彼女で、一応鍛錬は欠かさずやってるんだが何時強敵



が来るか分からない、だから彼女を鍛えて欲しい。

僕が行けばいいんだが、関西呪術協会の長のせいで動けない。

日本は宗教に関しては緩いから、十字教も広められるぞ。

旧世界にも出てこい。コレで頼む。

巫女の写真と、ザ巫女服の初回限定版が入っていた。

「行ってみるか。」

とりあえず写真とザ巫女服はケシズミにした。

俺はこのことをテオドラに伝えに行った。

「ダメじゃ！」

「なんで!？」

「お主は私の騎士じゃぞ、お主が私から離れたらどうする気じゃ！」

「大丈夫だ、俺のパクティオカードにある処理をして、超遠距離転送も可能になった。いつでも俺を呼んでくれ、すぐに駆けつけるぞ我が姫の元に。」

そう言って、テオドラの頭を撫でる。

「／／／／わ、わかったのじゃ、その代わり今日一日は私と一緒にいる。」

そして、一日テオドラと過ごして、翌日日本に向かった。

## 日本

俺は今、成田空港にいる。とりあえず詠春に挨拶に行くか。

深夜までそこら辺をウロウロし、大日本沿海輿地全図を使って、京都に向かった。

「いらっしやいませ、シンファナリスハント様。」

数百人の巫女さんが出迎えた、完全に詠春の趣味だな・・・

「やあ、よく来てくれたねシン、どうだいどうだいこの光景。」

「うざいどけ」

「全くノってくれないな・・・、まあ頼みを聞いてくれてすまない」

「まあ、俺も布教活動もしたいと思っていたとこだ。それと向こうに連絡はしているのか？」

「ああ、こっちからしておいた。行くのは明日にして今日は泊まっていけ。」

「じゃあ、お言葉に甘えようかな。俺は夜まで京都観光でもしてくるよ。」

「そうか、部屋は準備しておくぞ。」

「頼む。」

そして俺は屋敷を出た。

「あ、あの！」

巫女さんの一人が俺を呼び止めた。忘れ物でもしたか？

「申し訳ありません、実は、握手・・・して欲しくて。」

「ああ、別にいいよ。」

おどおどしてかわい「変なことしたら、殺すのじゃ」「いい子そうだな」

なぜか脳裏にテオドラが・・・

「あ、ありがとうございました。」

ぺこりと頭を下げた走り去った。

その後、京都観光をして、詠春の屋敷に泊まった。

## 第九話 日本へ（後書き）

どうも北中津です。

大日本沿海與地全図使える場所は、京都、長崎、その他色々です。  
これ以降はあまり使わないと思います。

## 第十話 問い（前書き）

どうも北中津です。

今回で主人公がとうとう麻帆良上陸です。

## 第十話 問い

今は夜、俺は麻帆良学園の広場にいる。

何故俺が此処にいるかというと・・・

時は三時。俺は、麻帆良学園の学園長室にいる。そこには

・・・化け物、もとい後頭部がなかなか独特な爺さんがいた。

「おお、よく来てくれたの、話は嬪殿から聞いておるぞ。刹那君の修行をあの中央のメシアがしてくれるとはの」

「まあ、詠春とは長い付き合いだからな。それと学園で布教活動をさせてもらう。あと教会があるらしいから、そこを拠点にするぞ。」

「それについては、構わんぞ。教会には魔法使いもいるからの、歓迎してくれるじゃろう。後今夜、魔法先生と魔法生徒に挨拶をしてみらおう。」

「深夜十二時に世界樹の近くの広場に来てくれるかの。」

「わかった、じゃあそれまで此処を見させてもらおう。」

そして俺は学園長室を出た。

そして、夜

「フオフオフオ、みな揃ったようじゃの」

「近衛学園長、何故招集を？ここ最近は何もないと思いますが。」

「そんな物騒な事じゃないぞ、今日からこの学園に新しい魔法使いが来てくれたので紹介をの。」

「それはどなたなんですか、見たところ誰もいないようですが。」

「ああ、そこで待ってもらっているからの、きていいぞい」

俺は自分と壁の順序を入れ替えて、広場の壁から出てきた。一応顔はフードで隠してある。

「うわっ！」「壁から！？」「誰だ？」

「皆も知っていると思うが、今日からこの学園の教会に勤めてもらうシン・ファナリス・ハント神父じゃ。」

俺はそれと同時にフードを取った。

ざわざわ「・・・中央のメシア！・・・」「・・・紅き翼の・・・」「サインもらおうかな・・・」

俺も有名になったな・・・

「キヤーーカッコイイー」「娘がファンなんだ」「最強の殲滅神父・・・」

最後の誰だ。

「彼は知人に頼まれた所用で来たらしい。それではひと言もらおうかの。」

俺は一步前に出て、

「シンファナリスハントだ、この学園は妖怪や悪の魔法使いが来ていると聞いて来た。警備員の仕事には出るが、今後の魔法世界を担う物のために極力前に出ずに主に後方支援をしたいと思う。何も無い日は、この辺りで布教活動をするつもりだ。」

「それでは解散じゃ。明日も学校があるじゃろ、握手などは明日にしてくれるかの。あとシャークティ君と刹那君は残ってくれ。」

この言葉を最後に、二人を残してみんな去っていた。

「さて、まずはシスターシャークティ」

「はっ！はい！な、なな、何でしょうか。」

話しているときには毅然とした態度だったが、こっちが地なのか？

「そう緊張するな、これから毎日顔を合わせるんだからな。」

「は、はい！ハント神父様は我々十字教徒にとっては、もう神様みたいな方なんですから。」

「それを行っちゃあお終いだろ。俺達が使えるのが神様なんだから、



「まあ詳しい話は明日しよう、女性なんだし夜更かしは美容の敵だろ。」

「はい！それでは失礼しますウウウ！」

シスターシャークティは走り去った。おもしろいな

その傍らで、ポカンとしていた刹那に体を向ける。

「さて待たせたかな」

「い、いえ！それで私は何故残されたんでしょう。もしかして、私が完全な人間じゃないから・・・」

ああ、こういう娘か。まんま神裂さんだな、それも俺と会う前の

「いや、それは関係ない。それより桜咲刹那、お前何故力をを使う」

「！！それは、お嬢様を守るためです。」

目が変わった、しかしまだ怯えと迷いがある。周りを不幸にすると怯えていたあの人のように・・・

「ならば何故、側にいてやらない？何故、木乃香ちゃんと距離を取る？」

「そっそれは・・・」

「お前が完全な人間じゃないからか」

「はい……私が側にいては」

刹那はうつむいて、弱々しい声で答える。どうやらかなりのコンプレックスのようだ

「そうか、お前は木乃香ちゃんが信じられないと言うことが……」

「っどういう事ですか！」

「お前は信じられないだけだ、木乃香ちゃんがお前がどんなモノでも受け入れらると信じることができないだけだ。」

「そ、そんな」

刹那は自分の不信に気付いたんだろう。うつろな目をしてふるえている。

「私は……私は信じられます！そして何時か……何時か」

やっと信じられたか、

「しかし、仮にお前が信じて、木乃香ちゃんがいいと言っても、周りがお前を遠ざけるかも知れない。お前はその時、木乃香ちゃんから離れるか、それでも共にいる。どちらを選ぶ」

「……………」

「どうした！！答えられないか、迷いはそれだけで木乃香ちゃんを危険にさらすぞ。」

「私は・・・私には選ばません！！！！優柔不断かも知れませんが私には選ばません！」

「ハハハ、そうか・・・いいだろう！その意気！桜咲刹那よそれを実現するには、理不尽を打ち砕く力が必要だ。俺がここに来た目的は、詠春に頼まれ、その力をお前に与えるためだ！俺の剣の鱗片をお前に教えよう。ついてこれるか？」

「・・・・・・・・はい！よろしくお願いします！」

これが俺の弟子一号の誕生の瞬間だった。

その頃のシスターシャークティは

「~~~~~！！！」

顔を枕に押しつけ、ベッドの上を転がっていた。

そして彼女の部屋は、シンの乗っている雑誌、シンのポスター、その他シンのグッズであふれていた。

「ま、まさか、ハント様と共に神に仕えることが出るなんて・・・  
・・・、主よ！ありがとうございます！」

狂喜乱舞していた。

## 第十話 問い（後書き）

どうも北中津です。

今回は刹那の決意です。すこしおかしいところもあるかも知れませんが、ご了承ください。

刹那には剣に関する魔術などを教えていききたいと思います。

## 第十一話 教会で・・・（前書き）

どうも北中津です。

十万アクセスありがとうございます。

これからも頑張っていきます。

## 第十一話 教会で・・・

今日から、麻帆良学園での生活が始まった。

今は朝五時、教会の寢室を出て、教会の周りを掃除しているとき。

トントン

ん？こんな朝に懺悔室に？

俺は不審に思いつつも、懺悔室に入った。

「ようこそ、懺悔の間へ、此処には貴方と私、そして我らが主しかいません。自らの罪を懺悔することで、主は貴方をお許しになるでしょう。」

こんな朝早くに誰だ？

「実は、ここに来た古い友人のために旧世界のシスター通信をとっておくのを忘れてしまいました。」

・・・・・・俺は部屋を出て、隣にいる変態を引きづり出した。

「何故ここにいる、アル」

「私はアルビレオイマなどではありません、私の名はクウネルサンダースです。」

「どうでもいいから、もう一度言っ。何故ここにいるアル」

「・・・・・・・・」

「アル」

「・・・・・・・・」

「ア~~~~ルウ~~~~」

「・・・・・・・・」

「ハア、クウネル」

「はい、私はあの後から、此処に居を構えてまして。貴方が来たと聞いたので挨拶に」

ぺらぺらしゃべり出した。コイツ……

「行方不明だと聞いたが、こんな所にいたのか。そう言えばお前はナギのこととか知ってるのか？」

「いえ。知りませんが……」

思わせぶりに、口を止めた。

「どうした」

「生きてるとなら断言できます。」

「何故そんなことが。……ああ、パクティオーカードか」

「その通り、見ての通りナギは死んでません。」

アル・クウネルの手にはあの時と変わらない、クウネルとナギのパクティオーカードがある。

「と言うわけで、私は知人から、シスター通信を譲っていかねければ行けないのでここで、私の家は学園長に聞けばいいでしょう。」

なにがと言うわけだ。ん？クウネルが消えた。幻か？

「まいいや」

俺は掃除を再開した。

放課後になり、学生もちらほらと見えだした。

俺は教会の中で神の血を補充、もとい飲酒をしていると。

中学生くらいのシスターと、褐色の小学生くらいの女の子が来た。

「あー！シンファナリスハント様だ！本物だよ本物だよココネ！」

元気そうな娘の発言に、女の子も相づちを打つ。

「ああ、ここのシスターか、当分此处に世話になるシンファナリスハントだ、よろしくな。」



「は、はい！春日美空です。よろしくお願いします。」

「ココネ」

「ああ、よろしく頼む。あとあんまり硬くしないでいいぞ、職場の同僚程度で接してくれればいい。」

「え・・・、はい！」

（ココネ、ココネ！シスターシャークティに聞いてどんなに硬い人かと思ったけど、結構いい人そうじゃん）（よかった）

「失礼します！ハント神父！」

カチコチになったシスターシャークティが来たようだ。

「こう硬くなくていいぞ、そっちの二人みたいに軽く接してくれればいい。」

クワツとシスターシャークティが二人を見て、二人を連れて行った。

（あなた達！ハント様に無礼な事してないでしょうね！）

（してないですよ、ね、ココネ）

（コクリ）

（それならいいですが、いつもシスターらしく節度ある態度で・・・）

以下三十分省略。

「お待たせしました」

「長かったな……さあ、仕事をするか。」

「「はい」」

そして、二時間ほど仕事をして、

「もう六時か、もう帰った方がいいな、女性が暗い中一人なのは危ないからな。」

「いえ、私はまだ少し」

「いいから大丈夫だって、シスターシャークティも女性なんだから、早く帰った方がいい。」

「そ、それじゃあ……あつそれと、ハント神父の魔法は宗教にちなんだ魔法を使うと聞いていますが。」

シスターシャークティはおずおずと聞いてくる。

「ああ、そう言えばシスターシャークティは十字架を使うらしいな、俺の使うまじゅ、魔法に十字架を使うのがあるんだが、教えてやろうか？」

「ハント神父の個人教授……！ぜひ、お願いします！」

「ハント神父……私も私も！」

「・・・私も」

大人気だな、これでも救世主なんて言われてるからか。

「あ、ああそれじゃ明日からな。」

「「はい!」「」」

昨日に引き続き三人の弟子（教え子？）ができた日だった。

## 第十一話 教会で・・・（後書き）

どうも北中津です。

シスター組はどんなキャラかいまいち分からなくて難しいですね。  
何とかイメージで書いてみました。

## 第十二話 修行（前書き）

どうも北中津です。  
短期間投稿です。

## 第十二話 修行

「それじゃあ、始めるか。」

俺とシスター三人組は、教会の裏の広場にいる。今日は三人に魔術を教える日の初日だ。

「『『よろしくお願いします』』」

いい返事だ。

「それじゃあ前言ったように、十字架を使つまじゅ、魔法を教える。この魔法は聖マルガリタの伝承、聖ルキア、聖クリストフの伝承、神の子処刑の際の伝承を元にした魔法だ。」

魔術って言う言い方も変えた方がいいかな？

「聖マルガリタと十字架と言うことは、悪竜に飲み込まれた際、十字架を巨大化させてその腹を内側から破った、と言う伝承、聖ルキアは千人の男と二頭の牛に縄で引かれても一步も動かなかった、と言う伝承ですか？」

シスターシャークティが答える、まあシスターとして当然だろう。

「……聖クリストフは、怪力と呼ばれた若い頃に背負った神の子の重さに屈服しかけたと言う伝承。」

うんうん、こんな娘も分かるとは、ここのシスターは優秀だ。

「・・・・・・・・え」と・・・・・・・・」

一名を除いて。

「美空~~~~」

「ごめんなさいっ！でも宿題が~~~~」

「そんなの、毎日コツコツやれば大丈夫でしょう！」

「まあまあ、そこまでにしてやれ最後の伝承はわかりにくいしな、最後の伝承は十字架の教史最古の使用法、・・・・・・・・処刑の道具だ。」

「え？神の子の処刑の際は手足を釘で打たれ殺されたのでは？」

「確かにそうだ、だがその少し前、処刑場に向かう時に神の子に、十字架を運べるほどの体力はなかった。」

「・・・・そのかわり、シモンという男が十字架を背負って処刑場まで運んだ。」

「そうだ、見てみる。」

俺は懐から三つの十字架を取り出した。

そのうちの一つを投げる。

「十字架は悪性の拒絶を示す！」

そう言うと、投げた十字架は凄いスピードで巨大化した。

そして二つ目を用意した木の箱の上に投げる。

「十字架はその重きをもつて驕りを正す！」

メキメキと音を立て、十字架が木の箱にめり込み、貫通した。

「そして最後は、シモンは神の子の十字架を背負う！」

「うおっ！お、重」

「最後のは、重力魔法に近い。美空には俺達四人の装備品の重さを上から加えている。俺は幾つも術式用の十字架を持っているからな、重いだろう。俺は魔法のための道具をかなり持ち歩いているからな。これがもし重武装した集団が仲間の時にやればかなりの重さだ、脳震盪もねらえるぞ。」

「凄い・・・」

「さあ練習だ、これらを使うコツは、十字架がそれぞれ、大きな様、重くなる様、仲間の重さを集める様を想像してやることだ。さあ！始めよう。」

それから個人での練習が始まった。

やはりシスターシャークティは筋がいい、一番信仰深いからな。



そして二時間後、

「今日はここまでにしよう、さあ、明日も学校だからゆっくり休め。」

「……はい……」

やはり、この世界の人間に魔術を使うのは、少しこたえるようだ。普通より魔力の消費が激しい。

天使の力じゃないからか？

俺は魔力もあるが、基本的に聖人の莫大な天使の力を使っている。  
(みんなには魔力と言っているが)

それでも一掃や天体制御はできない。あいつ等には天使の力も使わせてみるか。

そして夜、今夜は警備員の仕事だ。チームは刹那と龍宮真名という娘だ。なんでも四階音の組み鈴に所属していたらしい。こんな娘が……今は三人で担当の森を歩いている。

「刹那、お前の修行だが実戦の中でしてもらう、修行内容はお前が戦っているときに指示する。」

「実戦ですか……」

「確かに実戦で覚えるのが一番覚えやすい、より実用的だからね。それによい緊張感になる。」

「そうだな、それじゃあ早速。」

俺は刹那に今回の課題を渡す。

「ワイヤー？」

「ワイヤーですか」

「今回は、夕風を攻撃に使うことを禁ずる。牽制などならいいが、攻撃にはこのワイヤーを使うんだ。一回だけ俺がやる。さあ、来たようだ。」

目の前には、何体かの鬼がいる。それを見ながら、影から大太刀を取り出す。

「ガアアア！」

「チョロいな、七閃！」

剣を振るように、七本のワイヤーで一体の鬼をバラバラにする。

「こんなとこだ、龍宮さんすまないけど此処の鬼は刹那に任せてくれないかな。」

「構わないよ、報酬がもらえて仕事が減るんなら大歓迎だ。それと真名と呼んでもらって構わないよ。」

「ああ、それじゃあ刹那頑張れ。」

俺は背後から迫ってきた鬼をかわし、真名を抱え後ろに飛ぶ。

「／／！これじゃあ、お姫様」

「え！？ちょ、ちよつと！」

「グアアアアア！」

「ちっ！」

刹那は鬼の拳をかわし、夕風を構える。あのワイヤーを俺ほどのスピードで操らなくてもいいが、操るのにはそれなりの力を使う。気で強化するもいいし、烏族の力を使ってもいい、さあどうする。

「そう言えばシンさんは神父だったね、私は巫女のアルバイトをしているんだが、一緒にいてまずくないのかい？」

何で少し顔が紅いんだ？

「確かに俺は神父だが無理矢理改宗させる気はない、信仰とは文字通り信じることであり無理矢理の改宗にそれはない。俺は所詮神の教えを説くだけだ。俺が宗教に関する魔法を使うのは知っているだろう、その中には神道や仏教にちなんだ魔法もある。まあ、俺の先生には異教の猿は死ね！とか言う人もいるけどな。」

「フフ、面白いねシンさんは、気に入ったよ。」

「それは嬉しいな、……さて、刹那はどうかかな？」

刹那視点

「ガアアアア！」

「はああああ！」

私のワイヤーでもがく鬼を縛り付ける。

動きを止めるまではできた。しかし中学生の私力ではワイヤーで切断までは行けない。気で体を強化しているが、まだ足りない！

ブチィ！

「ガアアアアアア！」

ワイヤーをちぎった鬼がこちらに突進する。

「くそっ、どうすれば・・・」

このままではジリ貧だ。そのままやられるのか？ここで私が死んだら

「木乃香ちゃんも守れないぞ！」

「！！！！！！」

あの人は・・・そうだ、信じると、守ると決めたんだ。私が守るんだ、お嬢様を

「このちゃんをオオオオオ七閃！」

## シン視点

その時の刹那の目は仲間を信じた一人の女教皇と同じ目だった。

「七閃！」

「ギヤアアアア！」

刹那のワイヤーは、三体の鬼を切り裂いた。そして力を使い果たしたのか刹那はその場で倒れた。

「真名、あれが信じる力、思いの力だ。別に神でなくても思いの力は強大な力となる。」

「ああ、刹那の思いしか止めに焼き付けたよ。しかしあのままでもいいのかい？」

「残りは俺がやる。」

俺は大太刀を手に取り、

「いくぞ、鬼ども」

「……ん……ここは!？」

「起きたか、ここはお前の部屋だ、学校には真名が連絡してあるから今日はゆっくり休め。」

急に起きあがった刹那を寝かせる。刹那は不満そうだが布団に入る。

「シンさん、私はあの後。」

「急激な感情の爆発で、体内の気が増幅したんだろう。前より気が上がったはずだ。まあ、ソレよりも大切な物を手に入れたかも知れないな。」

そう言って、頭を撫でる。

「／／／／．．．．確かに、ありがとうございました。これから  
も御教授よろしく願います。」

「ああ」

## 第十二話 修行（後書き）

どうも北中津です。

今回は修行編です。

シスターはビアージオさんの魔術を教えました。近々ローマ正教3人組の魔術も教えようかと思っています。

刹那は七閃です。天草十字凄教の魔術も教ええられる物は教えたいと思います。

真名と刹那にフラグが立ちました。

第十三話 吸血鬼（前書き）

どうも北中津です。

とうとうあの永遠の幼女が！



### 第十三話 吸血鬼

今は昼頃、季節も秋に終わりに近づいた。

お茶を飲み一息ついていると、

バン！！

「シン・ファナリス・ハント！貴様がまさかこの学園にいとわな  
！」

「失礼します。」

金髪の少女と、その従者らしいロボット？が入ってきた。

「闇の福音じゃないか、あの時ナギが拉致つてたが此処にいたのか。  
」

というか教会にいていいのか吸血鬼？

「うるさい！！そ、そのことを思い出させるな！

私はあのバカに登校地獄なんて言う変な呪いをかけられて十五年間  
も此処に縛り付けられたんだ！しかし・・・ハハハハハ！その日  
々も今日で終わりだ！貴様の魔法についてはタカミチから聞いているぞ！何でも物の順位を変える魔法だそうじゃないか！それを使えばこの呪いともおさらばだ。」

なるほど、確かに可能だ。それよりタカミチと交流があったのか。

「確かに俺の光の処刑を使えば闇の福音の呪いの順序を変えるのも可能だが、ナギも何か考えがあったんじゃないのか？」

「フン！エヴァンジェリンでいい、あいつ迎えに来る等と言って十五年も姿を消したんだぞ、しかも死んだなんて言われてるし。と言うわけで私と呪いの順位を変える。」

「約束の期限が切れてるならいいか、……エヴァンジェリンを上位に！登校地獄を下位に！」

変化あったか？

「フ……フハハハハ！戻った、戻ったぞ！これで此処ともおさらばだ！」

「あっマスター」

エヴァンジェリンは教会を飛び出していった。

・・・バチイイイ！

「マスター！」

電撃のような物で黒こげになったエヴァンジェリンが戻ってきた。おさらばじゃないのかよ

「どついう事だ——！」

「俺はわからん」

「おそらく、ナギ・スプリングフィールドがかけた呪い以外にも、マスターを抑える何かがあると思われます。」

「何？ シン・ファナリス・ハント！ それも何とかしろ！」

胸ぐらをつかむな。

「無理だ、俺は同時に三つ以上の物の順位は変えられない。それにナギの呪いじゃない何かがハッキリしていないとできない。あつ！あとその魔法は俺から離れるにつれて効果が薄くなるから。」

「そ、それじゃあ意味ないじゃなか！？」

「そうだな、俺の先生はバチカンに来た観光客を使って術式の調整してたが俺はそんなことやらん。」

「調整だと？ よし、ならば私の別荘を使え！そして私の呪いを！」

「別荘？ お前ここから出られないんだろ？」

「フフ、まあ来てみる」

「ここが別荘か？」

俺はエヴァンジェリンにつれられて学園内のログハウスにいる。

「ここは私の家だ。茶々丸！ あれが、倉庫にあったはずだ、探してきてくれ。」

「はい、マスター」

茶々丸は出ていった。

俺達はログハウスの中に入ると。

「ケケケ、ご主人ソイツ誰ダ？吸血鬼が神父なんて連れ込んでいいの力ヨ？」

人形だらけの中、一体の人形が話しかけてきた。

「だまれ、こいつは私の協力者だ。」

俺、協力者決定かよ。

「別荘というのは、一種の魔法空間だ。外での一時間が中で一日になる。それを提供する代わりに私の解呪の技術提供をしる。」

ああ、ラカンとやり合った時のと同じやつか。

「まあ、技術提供くらいならいいが」

「オイオイ、仮にも神父ともあるう者が吸血鬼の手助けなんていいの力ヨ」

「俺は悪党は嫌いだが、一流の悪党は嫌いじゃない。そいつ等はそいつ等なりに信念があるからな。それに、お前達にはこの先世話になっていきそうだしな。」

「どういう意味だ？」

「俺も不老だ。俺も何時か周りの奴に残されていくからな。」

「貴様も不老なのか！何故だ！お前は吸血鬼じゃない。それに人間だ！」

「俺には原罪がない。よって死と言う概念がない。俺は昔臨死体験、と言うより死んだ。その時ちよつとな。」

説明は面倒だ。

「ハハハ！原罪がない？どおりで神父でも異常な神性さなのだな。いいだろう！死なない者の生き方を教えてやる！」

エヴァンジェリンが馬鹿笑いしていると

「マスター見つかりました。別荘は地下に設置してあります。」

「ご苦労、さあ行くぞ。」

エヴァの別荘に入ると

「ラカンのとは違うんだな。」

こっちはどっちかって言うとりゾートだ。

「魔法書も山ほどある、使っても構わんぞ。」

「そうさせてもらっ

俺も今までの魔術じゃ限界だ。新しい魔術を覚えないとな

さて・・・何巻まで出てたっけ？

そして、俺はエヴァンジェリン邸出て、本屋へ向かった。

### 第十三話 吸血鬼（後書き）

どうも北中津です。

主人公に修行フラグが立ちました。

次回は修行シリーズです。

第十四話 修行日記（前書き）

どうも北中津です

今回は短編集風にしました



## 第十四話 修行日記

月×日

「お前、何をする気だ？」

「ん〜ちょっと咸卦法を」

咸卦法、本来反発する気と魔力を融合して身に纏う高等技術だ。俺はそれに少々手を加えようと思う。

「左手に魔力、右手に気」

ボツと全身に咸卦法を纏い・・・

「そして、天使の力！」

そう、俺がしようとしているのは、魔力と気、そして天使の力の融合だ。

「これは！」

普通の咸卦法よりも神々しさのあるエネルギーが体を覆う、成功か。

「咸卦法・天なんてどうだ？」

「フ・フハハハハ面白い、咸卦法に天使の力を加えるとは！さすが神父だな。貴様とは仲良くなれそうだ」

その後、冬休みと言うこともあり、タカミチを呼び戦わされた。

今までは聖人の力だけで、これと言った強化方法が無かったためこれは大きな一歩だ。

月 日

「これなんて読むんだ？」

俺は魔法書とインデックスの一卷を使ってルーン魔術を練習している。

幸い前の世界の知識は残っている。

「今時、ルーン魔術とは、しかもそんな本を使って、なめてるのか？」

「ああこう読むのか、まあ見てなつて」

俺はルーン文字が書かれたカードを持ち、

「灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字！！」

俺の両手に赤々と燃える炎剣と青白く燃える炎剣ができる。

「ほう、それでどうする気だ？呪文に聞き捨てならん言葉があったか？」

あ・・・地雷？

「そんなに殺したいのなら、相手になってやろう……」

「うおおおお！魔女狩りの王！」

エクスキューションソーードにポツキリと折られた、魔女狩りの王は凍った、まだ強化がいるな。

月 日

「お前は何にまで手を出す気だ……」

俺は錬金術の本と、インデックスの二巻を持っている。

「なあエヴァ、鑢ってあるか？鎖のついた」

「鎖のついた鑢だと？何に使う気だ。たぶんチャチャゼロがそんなのを」

エヴァは倉庫に消えていった。

瞬間錬金に使うエーテル体を作るときは、手本があった方がいい。

瞬間錬金はできそうだが、黄金錬金はやらん。やろうと思えば出きるが、二百年以上も詠唱出きるか。

「あつたぞ、料金は……」

「分かっている」

こういう時の料金は俺の血だ。何でも原罪がないぶん、美容などにイイらしい。

俺はこれと同じ形をしたエーテル体を作り、的をねらう……

「瞬間鍊金！」

鏃を投げた。

ジューと音を立て、的は液状の黄金になる。

「な、なんだこれは――！物理的法則を完全に無視してるだろ！何で木製の的が金になるんだ？」

「俺に言うなよ、俺は鍊金術初心者だ。俺が所属してた教会にこれを使う人がいたんだ。」

「どんな化け物だ。だ、だがまあこれで当分の資金面が」

勝手に使う気だよ、コイツ。

月 日

「で、今日は陰陽道か」

エヴァはもはやあきれ果てている。

「まあいいじゃないか、冬休みももう終わる。」

そう言いながら折っていた折り紙を、四方に置く。

今回は的は離してある。

「ピストルにはけっかいを、ダンガンにはシキガミを、トリガーにはテメエのを」

ドンと紅い魔力弾は遠く離れた的を打ち抜く。

「少しずれたな・・・」

「何がずれただ！あんな威力なら問題ないだろう！見ろ！あれなら家一軒壊せるぞ。」

的は粉碎され、クレーターができていた。

「そんなに離れなくていいぞ」

久々の外での練習だ。

俺はエヴァが張った結界の中にいる。そして、その核を特別な処理をして茶々丸に持ってもらい、学園内のどこかにかくしておいた。

「さてまずは」

俺は折り紙を取り出して、置いた。

「へいわボケしたクソツたれども      しにたくなければめをさせ  
！」

バリイイインと結界が割れる。

そして結界の両端にあった符を黒い円に置きその周りに四色の折り紙を置く。

「風を伝い、しかし空気ではなく場に意思を伝える」

折り紙が直立し中心に近づく、そして符に触れた時、衛星写真並みの地図が現れ核の場所を示す。

「ここか」

原作では半径3km位だがこれは2km位だなやっぱり陰陽道は合わないな。

「お前の詠唱って悪趣味だな」

言っな、文句あるなら土御門に言え。

2月某日

俺は学園長に呼ばれて学園長室に来ている。

「フオフオフオ、よく来てくれたの。」

「何のようだ、学園長。」

「実はの、三学期からナギの息子が来るんじや。それでの「断る」なっ！」

「それで、魔法を教えてやれと言っただろう、俺の魔法は聖職者しか使えない。ナギの子供なら才能はあるだろう。それにあの英雄の息子の先生になれるんだ。他の魔法先生も喜んで手を貸す。」

「しかしの〜」

「そう言うのはタカミチにやらせろ、あいつは出張も多いからな、修行なんだし、べつたりになるよりましだ。それじゃあな」

止める声も聞かず、学園長室を出た。

ナギの子供がくるのか、うるさくなければいいが。

## 第十四話 修行日記（後書き）

どうも北中津です

今回は形式を変えてチャレンジしてみました。

今回で主人公が覚えた魔術は、瞬間錬金、赤ノ式、理派四陣、そして大覇星祭で土御門が使った結界破り、そして、咸卦法・天です。ただの咸卦法は紅き翼時代ガトウから習いました。

あと、天使の力と魔力はどちらも森羅万象から集めるような設定ですが、別物と考えて下さい。よろしく願います。



## 第十五話 図書館島（前書き）

どうも北中津です。  
今回は短めです。

## 第十五話 図書館島

俺はいつも通り教会にいる。

「ハ、ハント神父〜！」

いつも通りの時間に美空がやって来るが、どこか焦っている。

「どうした美空？」

「私のクラスメイトが何人か消えたんです。テスト前になって図書館に勉強しに行くと言つて、その次の日からいないんです、先生達がいないと授業も進まないし、期末テストで2 - Aがビリ脱出しないとネギ君が正式に先生になれないんです。」

教師の仕事放棄して何してるんだあいつは、恐らく図書館にいると思うが……

図書館？あいつじゃないよな

俺は学園長室に言った。

「学園長、アルの居場所を教えろ。」

考えられる理由はこのぬらりひょんか、あの刹那的快樂主義者だ、面白そうの理由一つであいつ等を図書館島に閉じこめてもおかしくない。

「む、もう会っていたのかの？まあええじゃろ、エヴァとネギ君には秘密じゃぞ。」

俺はアルの場所が書かれた紙をもらって部屋を出るとき。

「そう言えば、家のシスターからネギのクラスの生徒がいなくなつたと聞いたが・・・」

「フオ！？な、何のことかの？」

こいつか・・・

まあいい、あいつも来いと言っていたしな。

現在図書館島最奥？

「この紙ホントに合ってるのか？なんで、学園の地下にこんなのがいる？」

「ギヤアアアアア！！！」

ドラゴン・・・こんなのは魔法世界ぐらいにしかない・・・  
まあ

「トカゲが、粹がるなよ・・・」

俺は影からアスカロンを取り出す。

「本当に理論通り作られているか、実験だ。」

俺はドラゴンに駆け寄り、切「そこまです、シン」

「うおっ！！！」

アルが目の前に出てきた、転送じゃない、やはり幽霊か。

「この娘は、私が躑けてあるから問題ありませんよ。紙を見せてくれば、」

俺が学園長のサインが書かれた紙を見せると。

「グルルウ」

ドラゴンは服従のポーズを取る。どう躑けたんだ？

中に入ると、明るい空間に出た。中心にはテーブルとお茶がある。

「アル、何故お前俺来ると知っていた。」

「・・・・・・・・・・」

「オイ、アル」

「・・・・・・・・・・」

返事がない、ただのアルビレオのようだ。

「クウネル」

「はい！学園長から連絡がありまして、早速準備しました。」

パアアアと笑顔になり答えてきた、キモイ・・・

「それよりお前、ここの司書をやっているんだろう。ナギの息子とその生徒がここに来ていないか？」

「ええ、確認しています。」

テーブルの真ん中にある水晶にネギと生徒達が映る。コイツがネギか、外見はそっくりだが、妙におとなしいな？あいつの息子だし、なにか企んでるのか？

「何でも学園長が此处で勉強をさせるつもりらしく、罠にはめたそうです。あとネギ君はあれが素です。」

何してんだ、あのぬらりひょん。

そしてあの両親からどうやってこんな子供ができるんだ？生命の神秘だ。

「善意半分、戯れ半分だとか。」

お前と変わらん、何で実力者はみんな変人なんだ。コイツ、ラカ  
ン、詠春とか

「やっぱりな、で大丈夫なのか？」

「はい、安全には細心の注意を、それと貴方の狂信ぶりもなかなか

か変人ですよ。」

「お前達の変人のベクトルは最悪だ、俺は帰るぞ」

俺が出ていこうとすると

「おや、いいんですか？ナギの子供ですよ、しかも私の好みの歪み方です。」

歪みに好きも嫌いもあるのか？

「別に会わなくてもいいだろう、もし会ったのならそれも神の意向として受け入れる。」

「フフ、相変わらずの狂信ぶりですね。」

俺は図書館を出た。

「エヴァ、学校はどうした？」

ついでにエヴァの家に行くと、エヴァはソファアーでお茶を飲んでいた。

「ナギの息子が行方不明でな、自習になったからフケてきた。」

「お前のクラスだったのか、それより・・・何かするのか？」

「するよ、だがまだ力が戻らない。戻った時には、・・・ハハハハ！ナギのあの忌々しき呪いを解くことが出来る！もちろん

お前も手伝えよ、契約だからな！」

俺も手伝うのかよ。それより、吸血鬼笑いが板に付いてきたな。

「あんまり虐めるなよ」

「さあてな、私は悪い魔法使いだからな。」

悪役ぶっても、人形に囲まれてたら意味がない。

まあ、こいつも女子供は襲わないらしいから大丈夫だろう。

## 第十五話 図書館島（後書き）

どうも北中津です。

今回は図書館島の話です。

今回は短めでした。次回は吸血鬼編に入ります。



## 第十六話 テンプレート（前書き）

どうも北中津です。やっと、テスト期間が終わりました。

## 第十六話 テンプレート

俺は今日も布教活動に精を出している。

四月になり、暖かくなった。

あの後ネギのクラスは学年一位になり、ネギも晴れて先生になったそうだ。

新年度初日には、エヴァがネギにちょっかいをかけたらしい。美空や刹那の話を聞くと、エヴァと会ったびにビクビクしたり、さばりも注意できないそうだ。  
やっぱり虐めてんじゃないか。

そんなことを考えていると。

「止めてください!」

「いいじゃんか、ちょっと遊ぶだけだっつて」

まだ絶滅してなかったのか・・・

辞書にでも載っているようなナンパが、女の子を口説いていた。

暖かくなると出るんだよね、ああ言っの。

ああ言っ奴は全身から止めて下さい、ぼこぼこにして下さい、絶

滅させて下さいと自己主張している。

と、言うわけで……

「やめとけ、そんなんじゃ、いやがつて下さいって言ってるようなものだぞ」

「ああ？なんだよ神父様〜？これも神の思し召しってやつですか」

ナンパAがそんなことを言ってくる。

「うざいんですけどっ」

ナンパBが殴ってくるが、軽くかわして腹に一撃入れる。

「うっ！」

「コイツ強いぞ、につ逃げろ！」

「どこまでも、典型的なナンパだったな。」

「あの〜、ありがとうございました！」

ナンパされていた、女の子達が礼を言ってくる。そんな、気分が悪い物でもないな……

「ああ、気にするな、困った人を助けるのも神父としての仕事だからな。じゃあ」

「あつ、あの」

俺は立ち去った。

……俺も典型だったか？

それからまた歩くと、

「こんにちは、シンさん」

「ああ、茶々丸か、どうしたんだ？」

茶々丸がビニール袋を持って、歩いてきた。中身は……ネコ缶

「いえ、私はいつも此処を通るので」

「そうか、でもここは家とは方向が逆だろう？」

「はい実は「にゃ」この子達が」

「うおっ！」

下を見ると何匹もの猫が足下にいた。だからこのネコ缶か

「いつもこの子達にご飯をあげてるんです。」

そう言いながら、茶々丸は猫たちに餌をあげる。

「そうなのか」

俺はしゃがんで、頭を撫でる

「にゃ」

いいな、インデックスの世界からこんな事無かったしな

「だけど、あんまり毎日やるなよ、独り立ちできないからな。」

「はい、もう少し成長したらそうするつもりです。」

それから何分か和んだ。

「そろそろ、時間ですね。それではシンさん失礼します、それとお手伝いの際には私がお伝えします。」

「ああ、頼んだよ。」

茶々丸が立ち去ろうとした時、

「魔法の射手！」

茶々丸に魔法の射手が迫っていた。まずい！茶々丸は猫がいてかわせない！

「マスター、シンさん、私が動けなくなったらネコの世話を・・・」

「炎剣！」

懐からルーンのカードを取り出し、魔法の射手を防ぐ。

「なっ！」

「茶々丸お前は逃げる。それと冗談でもそんなことは言っなよ、かわせる物もかわせなくなるぞ」

猫はすでに逃げていった。

「ありがとうございます、シンさん。このお礼は」

「おいしいお茶を頼む。」

「はい、最高級の玉露を」

茶々丸は逃げていった。

「さて、ネギスプリングフィールド、お前は修行中の身でひと目をはばからず魔法を使っただ、それも一般人に」

「ちょっと待ちな、さっきの嬢ちゃんはある闇の福音の従者だぜ」  
「！」

なんだこのオコジヨ、それに・・・アスナ！

「しかも相手が悪だからと言ってその行動が必ずしも善とは限らない。そして、一般人をこちらの世界に引き込んだ！」

アスナは生まれからこっちの世界だったが、せつかくガトウやタ

カミチが何も関係ない世界に導いたというのに、あの運命を打ち破ったのに

「そ、それは・・・」

「入れ知恵をしたのはお前かオコジヨ、しかも人に言われたことをだけをやり、自分で善悪の判断もしない、そんな奴がよく先生などできるな。」

「へっ、お前さんよ、さっきあの嬢ちゃんに手伝いなんて言われたな、しかもその力、兄貴！コイツもエヴァンジェリンの仲間だそんな奴の話無視しちまえ！」

「う、うんカモ君！明日菜さん！」

俺は少々怒っているようだ。

「また、善悪の判断をしないか・・・奴は善でも悪でも判断をしてそれを貫いていたぞ、問題外だな。・・・天罰術式」

「うっ！？」

「ぎゃっ！？」

「うっ！ちょ、ちよつとネギ！」

ネギとオコジヨは気絶した。しかし気絶しきってないこの娘・・・似ていると思っただが、アスナか。

「あんた！ネギに何したの！」

「少々罰をな大丈夫だ、後で目を覚ます。連れて行ってやれ」

明日菜は何も言わずネギを担いで立ち去った。

明日菜・・・・・・・・

元気に育っているが、結局こちらの世界に、これも貴方の思し召  
しですか・・・・・・・・主よ。



## 第十六話 テンプレート（後書き）

どうも北中津です。

今回は超セオリー物語、僕的にはSSには欠かせない内容だと思います。

現在、毎日更新を頑張ってきましたが、テスト期間も終わったので、これから毎日更新頑張っていきます。

今回の天罰術式は、弱めに設定しておいて、明日菜にはめまい程度です。

紅き翼などトップクラスの人を昏倒させるくらい为天罰術式なら明日菜を気絶させられます。

## 第十七話 果たし状（前書き）

どうも北中津です。

今回はあまり進みません。

## 第十七話 果たし状

今日もいつも通り教会で神の血を飲んでいると。

「失礼します、シンさんは見えますか。」

茶々丸が来た。大停電は明日だから、そのことか？

「どうした、茶々丸」

「実は、……マスターが風邪を引かれまして。私は薬を取ってきますので、それまで見ていてくれないでしょうか？」

風邪……もう春だというのに何してるんだ最強種。

「風邪？真祖の吸血鬼が？」

「風邪と、あと花粉症も併発しています。」

花粉症、何百年悩まされたんだ？

「マスターは基本、普通の中学生と変わらない体ですから。」

「そうか、帰りは何時頃になる？」

「恐らく夕方には」

「わかった、行ってくる。」

吸血鬼の風邪もそう見られない。

「ありがとうございます。」

あいかわらず礼儀正しい子だなあ

そしてエヴァ邸

「ゴホッ、貴様の助け、ゴホッ、などいらん、ゴホッ」

「言動と行動が伴ってないぞ。」

エヴァは冷え　タを張って、ふらふらの状態で二階から降りてきた。

「私は真、ゴホッ、祖の吸血、ゴホッ鬼だぞ。」

「はいはい、エヴァは強い強い、さあ、上で寝てようね、俺は下にいるから呼んでくれ。」

「オイ、子供扱い、ゴホッ、するな！」

文句を言いつつも、闇の福音は風邪に勝てず上に行った。

「さて、ルーンのカードでも作るか。」

俺はルーンのカードを作ることにした、コピーしてもいいんだが魔力をこめながら作った方がカードの質が上がる。

五十枚位作った頃

コンコン

「失礼しまゝす、誰かいませんか？」

この声は・・・、俺は扉を開けた。

「えっ！何で貴方が。」

「何のようだ、ネギスプリングフィールド。」

この前の出来事もあり、少し威圧してしまう俺

「こ、これを、エヴァンジェリンさんに渡しに来ました！」

果たし状？奇襲やら果たし状やら、コイツは極端だな。まあ、多少は自分で考えたんだろう。

「エヴァは風邪だ、今上にいる。あまり時間をかけないのなら上がっていつでもいいぞ。」

「か、風邪！吸血鬼って風邪引くんですか？」

「何でもそうらしいな、そんなにひどくないから、さっさと行け」

このおどおどした奴がナギの子なのか、ないつなら「マジで、吸血鬼が風邪かよ！おいシン！見に行こうぜっ！」くらい言いそうだ。

「そ、そうですか、それじゃあ」

なんと温度差、と思いつつネギが階段に向かうと

「フッフ、その必要はないぞぼうや」

冷え　　タを取って、極力威厳を持ったように見せたエヴァが降りてきた。

「何してるんだエヴァ、まだ風邪は治ってないだろ。」

「フツ、この闇の福音が風邪如きにイーーーーぱた」

エヴァは倒れた。

「だっ！大丈夫ですか？エヴァンジェリンさん！」

「俺が連れて行く、君も来い。」

俺はエヴァを抱えて、上のベッドに行った。

「さて、ネギスプリングフィールド、俺は下にいるからエヴァが起きるまで見ていてくれ、起きたら果たし状を渡すといい。しっかり見ろよ先生。」

「は、はい！」

へんに先生の役職に反応するな、気負いかな。

俺は下に降りてワイヤーの手入れをすることにした。

数分後

「貴様見たなアアアアアア！！！！」

「ご、ごめんなさーい！」

エヴァに追いかけられ、ネギが出ていった。

「どうしたんだエヴァ、ネギが何を見たんだ。お前がそこまで怒るなんて。」

「あ、あいつに、私がナギにやられた日の夢を見られたんだ！」

ああ、あのケンカが、

「あゝ、あの日か」

「そうだ！あの日だ！貴様もいただろう！」

エヴァ、首が痛い、不老でも殺されれば死ぬんだよ。

「起きたら、あいつが果たし状なんぞ渡してくるし、シン！必ずあいつ等を八つ裂きにするぞ。」

「俺まで、悪役に巻き込むな。」

「フフ、私に手を貸した以上、貴様も悪い魔法使いの一員だ。嫌いじゃないだろう。」

まあ、そうだけど。



## 第十七話 果たし状（後書き）

どうも北中津です

今回はエヴァの風邪です。

シンはネギに怒りを抱いていますが、目の敵ほどでもありません。  
「ちょっとダメだろこれは」程度です。

## 第十八話 橋（前書き）

どうも北中津です

前半は本編にあまり関係ありません

## 第十八話 橋

「さて、今日は耐久硬度をやってみようか。敵の攻撃を一体につき二十発の攻撃を受け止めないと攻撃してはいかん」

「はい」

「君たちも頑張るね。」

今日は大停電、学園の結界が無くなり、いつも以上に敵が来るのだ。

俺達はいいつも通り、3人で刹那の修行をしている。

あれから、七閃は気で強化すれば、ほぼマスターしたと言っている。

今はパターン魔術を教えている。元々神鳴流の特性故か、専門用途はあまり時間をかけずに会得できた。

夕凧は大剣と違って細く脆い、なので次は耐久硬度を覚えてもらう。

おや、向こうも始まったかな？

「真名、今日はちょっと用事があるから見ていてくれるか？今日は耐久硬度だからできているかわかりやすいはずだ。」

「あんみつっ」

「それでいいのか？」

「ああ、シンさんがご馳走してくれるから欲しいんだ。」

「そうか、じゃあ俺は行く、頼んだ」

俺はネギとエヴァの元へ向かった。

「・・・・・・・・真名」

「恋愛は自由だよ、刹那」

エヴァとネギが戦っているらしい橋に向かってしていると

「シン・ファナリス・ハント様！」

後ろから声をかけられ、振り替える。

「お前は・・・・・・・・誰だ？」

そこには、中等部の制服を着た少女とウルスラの制服を着た子がいた。

「私は高音・D・グッドマンと言います。こちらは佐倉愛衣です。」

それよりも、ハント様！今日は大切な大停電の日、英雄の一人のあなた様が持ち場を離れば他の者に示しがつきません！聞くとあの闇の福音の所にも出入りしているとか、いくら英雄でもこれ以上は見逃せません！少し頭を冷やしてもらいます！影よ！」

「す、すいません！メイプル・ネイプル・アラモード！」

こつちの話も聞かず攻撃してくる。コイツはあれだな、マギステル・マギが絶対正義って考える奴だな、まあ人がどんな正義を持つても俺は構わん。

天罰術式を使ってもいいが……

「教えてやろう、上というものを」

大太刀を取り出す。

影の使い魔が影を爪状に変形させ、迫ってくる。様々な方向から来るが……

「甘い！」

それを俺はたわいもなく切る。

「……………焼き尽くす……………破壊の王……………」

後ろか！

「紅き焰！」

後ろから奇襲か、連携はいいが・・・

「気配で丸わかりだ！十字架は悪性の拒絶を示す！」

巨大な十字架で防ぐ、

「奇襲ならもつとおとなしく、詠唱に時間をかけるな！」

「ならば！黒衣の夜想曲！」

影の使い魔が迫る、近い！

「切り札は最後まで取っておくべきだぞ。小麦粉を上位に！使い魔を下位に！」

迫ってくる影の使い魔の側面から小麦粉のギロチンが使い魔を切り裂く。

「きゃああ！・・・・・・でも愛衣！」

「はいお姉様！アデアット！全体、武装解除！」

くっ！さっきのは目隠しか！あの影の使い魔が近づいてきたのはこのためか！

俺の大太刀、十字架、天罰術式用のアクセサリが飛んでいく！

「役割分担も上手い俺にこれを使わせるとは、ちょっと油断したかな？・・・だが、一流なら格闘もできないとな！」

聖人の力までは無くなったわけではない！ちょうどあの練習をするか。

「左手に魔力、右手に気、そして・・・天使の力！」

ゴオオオオ！

「咸卦法・天！」

俺は神々しい白銀のエネルギーを纏う。

「行くぞ」

「くっ、影「ドッ」うつ！」

「え？え？？お、お姉様！」

高音は腹に一撃をもらって気絶した・・・。「シュウウウウん？」

「ゲッ！」

「お姉様！」

高音の服が消えた、服も使い魔の一部だったのか・・・

「早く行け、さすがに見てられん。」

「し、失礼します〜〜〜！」

佐倉愛衣は高音を担いで帰って行った。

俺も行くか……

そして、ネギとエヴァが戦っている橋。

「やったー、引っかかりましたね!」

橋に行くと、ネギが捕縛結界でエヴァを捕まえ勝ちを確信していた。

「罨までは上手かったが、そこで油断したらな」

「「あつ、あなた（あんた）は!」」

橋から降りてきた俺に驚いているようだ。

「ククク、その通りだ坊や。」

ブチブチと戒めの風矢が切れる。エヴァはネギ達が驚いている内に結界を解いたようだ。

「ど、どうするのよネギ!あの変な神も来て、敵が3人になっちゃったわよ!」

「ど、どうしよーカモ君!」

「安心しろ、俺は手を出さない。」



「な、なんだと貴様！私との契約は！？」

「別に俺がいなくても大丈夫だろう？闇の福音殿、それともお前はそんなに弱かったのか？」

「フ、そんな分けないだろう。見ていろ！闇の福音の力を！」

チヨロいな。

「と言っわけで、俺は見てるぞ〜」

そう言って、橋の柱の上に飛ぶ。

「さて、少々邪魔が入ったが、いくぞ坊や」

「は、はい！」

そうしてまた戦いが始まった。

「雷の暴風！」

「闇の吹雪！」

お互いの魔力の奔流がぶつかり合う。あんな砲撃のような魔法、俺にはないな。

似たような魔術は……アレか。

それはさておき、あれはほぼ同格の魔法だ。

経験のあるエヴァが勝つか、魔力量の多いネギが勝つか。

「マスター、結界の復旧が予想より早いです！

バチイイ

「くっ！」

エヴァが押し返される。

「ハ、ハクション！」

は？くしゃみの衝撃で、エヴァの服が脱げた。

「……………今日は裸ばかりだな。

まずい！エヴァが川に！

俺は飛んで、エヴァを抱えて橋に巻き付けたワイヤーにぶら下がる。

「大丈夫か？エヴァ」

「／／れ、礼は言わんぞ。」

俺は明らかに強がつてるエヴァを橋に降ろす。

「大丈夫ですか、エヴァンジェリンさん！」

ネギ達が駆け寄ってくる。

「フン！問題ない。坊やの勝ちだ。これからは授業にも出てやる、それでいいな。」

「は、はい！」

「やったじゃんネギ！」

「やったツスね、アニキ！」

「私は帰るぞ、今日は疲れた。茶々丸！」

「はいマスター、それでは皆様失礼します。」

エヴァと茶々丸は帰っていった。

「俺も失礼する。」

「え、ちょっと！」

俺はネギの制止を聞かず、立ち去った。

刹那はどうか？

「シンさん！できました、全て防ぎきりました！」

「私も見ていたが、ちゃんと二十回ずつ防いでいたよ。」

刹那が喜んで近づいてくる。ああ、犬耳が見える。

「よくやったな、刹那」

さすさす、

「／＼あ、ありがとうございます。」

「・・・・・・・・シンさん、私との約束忘れないでくれよ」

「ああ」

バチィ！

刹那と真名の間に火花が見えた。

## 第十八話 橋（後書き）

どうも北中津です

吸血鬼編これにて終了です。

前半はほとんど関係ありません。戦闘シーンの練習程度に書きましたが、あまり上手くできませんでした。

刹那と真名にテオドラを加えてハーレムフラグが立ちました。

刹那と真名はいきなり好きになって????な人が多いと思いますが、その理由は

後ほど語りたいと思います。

## 第十九話 京都（前書き）

どうも北中津です。

今回から修学旅行編です。

## 第十九話 京都

俺は今日もエヴァの別荘で魔術の修行をしている。

「くっそ、さすがに書物が抽象的だ。ここはどうなってるんだ。」

ここ一週間、俺は一つの魔術を修めようとしている。

「どうしたんだシン？お前が行き詰まるとは珍しいな。」

「ああ、エヴァか」

いつものように、あきれ顔のエヴァが来た。

「今度は何をする気なんだ。もう外も夜だぞ」

「お前とネギの戦いを見てな、俺の使う魔法に闇の吹雪みたいな砲撃系の魔法がないからな。」

「そうか、それで何を……………貴様これは!!」

俺が覚えようとしている魔術に関する書物を見て、エヴァが驚愕の色を浮かべる。

そこに…

「マスター、学園長がシンさんをお呼びです。」

メイド服の茶々丸が外から入ってきた。

「そうか、ちょうど息抜き代わりに行ってくるか。」

「オイ！貴様この魔法！」

俺は出ていった。

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに。」

「茶化すな！貴様など巻いてやる〜！」

「ああああ、マスター」

さて、学園長室についたが、こんな遅くにどうしたんだ？

「入るぞ。」

「フオフオフオ、夜遅くにすまんの、実は今ネギ君達が行ってる修学旅行のことなんだがの。」

「それがどうした、俺は向こうの反対が強くてダメだったんだろ。」

そう、関西呪術協会が俺達が行こうとした際、ネギ以上に俺の反発が強かった。

「婿殿と話しての、婿殿の客人として行ってもらうことになったぞ。お主と婿殿は時が経っても有名じゃからな。新幹線のチケット等は準備してあるぞ。」

「そうか、向こうで妨害があるなら刹那の修行になる。それに詠春に教育の結果として戦わせるのも一興だな。早速行ってくる。」



「なんだかんだでお主、教育バカだの。」

「後世に優秀な者を残すのも、俺達の仕事だろ。あとチケットはいいらん、ホテルだけ予約しておけ」

俺は部屋を出て行った。

「荷物はこれくらいか・・・ちょうど十二時だな」

俺は教会に戻り、荷造りをしていた。大抵の荷物は影に入れる。ほとんど四　元ポケットだな。

「しかし、京都と麻帆良に渦があつて良かった。・・・縮図巡礼」

世界樹の根元の渦から、京都の渦へ飛んだ。

そして京都

「ふう、あいかわらず慣れん。此処はどこだ？駅のようなが」

「木乃香さんを返して下さい！」

あいつら・・・早速か

あの和服の女が木乃香をさらったやつか。

「おれさん、おれさん、ウチを逃がして遅れやす。」

あれは前鬼、後鬼か、まあまあの術師のようだが。

「刹那！」

駅のホームの上に立ち叫ぶ。

「シンさん！何故此処に！??」

「その様子を見ると、木乃香をさらわれたようだな、此処ではワイヤー以外使っな、パターン魔術もだ！それと……後で覚悟しておけ」

ニヤアと笑う。

「は……はい」

刹那の背中に黒い線が見える。

「ちょっとあんた！木乃香がされたのよ。そんなこと行ってる場合じゃないでしょ！それに何であんたが桜咲さんに命令してるのよ！」

明日菜、ホントにこっちに足を踏み込んだんだな。

「俺は去年の秋から刹那の師匠をしている、そして俺の修行内容は実戦でこそ意味をなす。それに心配ない、ほら見てみる。」

刹那の方を見ると、

「はあはあ、なかなか強いなあ、あんさんには「私がお相手します

うゝ」！言わなくても来たね」

「神鳴流の月詠ですうゝ、いごおみしりおきを」

新手かあいつは……

「刹那、変更だ！夕凧を許す！パターン魔術もだ！」

「それほど強い……耐久硬度！」

「ざーんがーんけーん！」

「くっ！七閃！」

月詠の剣と刹那のワイヤーが交錯する。耐久硬度をしている分、ワイヤーは切れない。

「硬い鋼系ですわゝでも」

ワイヤーを引き戻す時の隙を見て、月詠という少女が飛び込む。

「ざーんくーうせーん」

ズバアと刀が横一文字に振るわれる。

「くっ」

ガキーン！刹那は夕凧を取り出し、受け止める。

「隙有りィ！奥義！百花繚」

「甘いですーらいめーい」

あの量の気は、さすがに強すぎる！間に合わないっ！

「ちっ！ゼロにする！」

「なっ！？」

「ふえ！？」

コツンとお互いの剣がゆつくりと当たる。

「なんで？なんでや？」

「シンさん、何かしましたか？」

ジロリ・・・二人がこっちを見てくる。怖えよ

「ああ、お前達の武器としての性能をゼロにした。アレ放ったら新聞物だ。それに・・・ほれ」

「木乃香さん、大丈夫ですか！？」

向こうでは、ネギと明日菜が木乃香を助け出していた。

向こうの術師も

「月詠！逃げるでっ！」

「ちえ〜、しょうがないですね〜、それじゃあ皆さんまた今度〜」

向こうも帰っていった。

「とりあえず終わったな、よくやったな刹那、あいつはかなり格上だったぞ。」

「はっはい!」

グイグイ

「・・・・・・」

「?」

グイグイグイ

刹那が頭を押しつけてくる

「ああ、刹那、今日はなしだ。」

「なっ!?!?!?!」

「これが木乃香を危険な目に遭わせた罰だ」

ズーーーーー

「あ、あの桜咲さん、よくわかんないけど元気だそうよ。きっといいことあるって」

こっちに来た、ネギ達が刹那を慰める。

「はい、ありがとうございます。」

刹那は地面に体育座りしていた。

「さあ立て刹那、今度頑張ったらやってやるから。」

「はい」

「早!?!」

「さあ、宿に行くぞ、俺もそこに泊まるだろう。」

「お前達がいないと、他の奴が怪しむぞ。」

「そつ、そうだった!行くわよネギ!」

「は、はい。刹那さんも!」

「はい……………早く来ないかな、敵」

危険な思想を持ったまま、刹那は宿に向かう。

## 第十九話 京都（後書き）

どうも北中津です。

今回は第一回目の襲撃でした。

ソーロルの術式は主人公があまり使いたがりません。

そこそこ魔力消費があり、アレばかり使っているのは成長できないからですが。

現実的にはパワーバランスが崩壊するからです。

## 第二十話 女（前書き）

どうも北中津です。

今回は第三者視点にチャレンジしました。



## 第二十話 女

朝、俺は宿で新聞を読んでいる。

今日はネギや刹那は奈良公園に行くらしい。

そこなら何か起きても、俺が本気で行けば十分間に合う。

「やあ、シンさん本当に来ていたんだね。」

「真名か」

真名の班が上からぞろぞろ降りてきた。

「きゃー！龍宮さん！このカッコイイ外人さん誰！？」

真名と同じ班のやつと思われる髪を二つ縛った娘、典型的な中学生だな。

「彼は学園の教会の神父さんだ、私は巫女のバイトをしているからその縁だな。」

さらつと、こついうウソが言える辺り女って怖い。

ん、また来たな、

（ゲッ、ハント神父！何で此処に！？）

美空か、

（仕事だ美空、お前のことは黙っておいてやる。ネギ達にはばれたくないんだろう。）

（ありがとございますウウウ！！！！）

アイコンタクトが上手い俺達であつた。

「それじゃあ、俺は行くからな」

さすがに生徒が増えてきたので、俺は行くことにした。

「何処に行くかなあ」

### 第三者視点

修学旅行の夜、それは学生の理性を何故かユルくする。

そして、ここにも色々頭の中が外れた人々が・・・

「くちびる争奪！修学旅行でネギ先生ラヴラヴキッス大作戦！！！！  
ルールは全てが語っている！今夜中にネギ君に熱いキスをするだけ  
！武器は枕のみ、それ以外は何も言わない！新田に見つかっても全  
員他言無用だよ！」

「イエエーイー」

3ーAはバカばかりである。

「まったくだ」

「どうしたんですか千雨さん？」

「いや・・ちよつと使命感がな」

第一班 鳴滝風香・鳴滝史伽ペア

「お、お姉ちゃん！正座はイヤ〜！」

「大丈夫だって、かえで姉から教わった秘密の術があるからね。」

史伽が鬼、もとい広域指導員の新田に怯える傍らで、風香は枕を振り回して不敵に笑う。

第二班 古菲 長瀬楓

「きゃー！ネギ坊主相手でも初キッスアルよー」

「ニンニン」

運動神経では最高のチーム、問題は頭。

第三班 雪広あやか 長谷川千雨

「何で私がこんな事を・・・・あいつ等逃げやがって。」

「つべこべ言わず援護しなさい！ネギ先生の唇は私が死守します！」  
雪広あやかは全メンバーで最高の熱意だが、長谷川千雨は絶対零度である。

この温度差はどうカバーするのか。

第四班 明石裕奈 佐々木まき絵

「よーし！絶対勝つよーし！」

「へへへ、ネギ君とキスカ」

この二人がある意味本命。運動神経と意欲のバランスがいい。

第五班 綾瀬夕絵 宮崎のどか

「ゆ、ゆ、ゆえ」

「ウチのクラスはアホばかりですね、せつかくのどかが告白したのに・・・」

ネギへの愛情、知能が一番、問題は体力。

「さあああ！この五チームがネギ先生の唇を狙うよーし！」

そう、この五チームがネギスプリングフィールドの唇を狙う。この五チームが……

#### 龍宮視点

「ふう、ネギ君、朝倉にばれたか。」

この気配は仮契約の魔法陣、この宿全てにかかっているな。ということは

「シンさんと仮契約が」

#### 第六班 龍宮真名

#### 第三者視点

「ゆーな、ネギ先生の部屋に直行すると鬼の新田の餌食だよ、どうする？」

「そんなの……正面突破に決まってるじゃん！」

四班代表のまき絵と裕奈、片方の頭は悪くないはずだが、発想がアホだった。

「なあいいんちょ、もう帰っていいか？」

「千雨さん！往生際が悪いですよ！私の先生への愛のため、あなたには手伝ってもらいます。」

三班代表の千雨と委員長、片方は行動がアホだった。

バツタリ

「いいんちょ！」「まき絵さん！」

ボスッ

二つのアホがぶつかり合う。

「「うへえ」」

お互い顔面に枕をくらい、ひるむ。

「ナイスまき絵！とどめは私が！」

まき絵の背後から裕奈が飛び出し枕を横一文字に振るうが、

（ガキかこいつら）

千雨は一步分程足を前に出し、裕奈の足に引っかける。

「うわぁっ!？」

裕奈はバランスを崩すが、

「おつエモノがたくさんアル」

そこに新たにバカが介入する。

「チャイナピロートリプルアタック！」

「」「ぶっ！」「」

バカが投げた三つの枕が裕奈、委員長、まき絵に直撃する。

「やったわね、古ちゃん！」

アホ、アホ、バカの三つ巴の戦いが始まった。

「千雨さん！援護を！っていない！」

「こんなのやってられるか」

千雨は一人、部屋に戻ろうとするが

「こらあ！長谷川あ！何してるんだあ！」

「げっ、新田！」

長谷川は新田に捕まる。

勝手に巻き込まれ、勝手に怒られた。

「ん？そつちにもいるのか」

鬼は新たな標的を見つけ、動き出す。

「みんなこの声は！」

「一時撤退——！！」

三つの班は、蜘蛛の子を散らしたように逃げる。

「ぎゃふっ！」

一人の生け贄を残して……

「明石~~~~、ロビーに座ってろオオオ！」

「ひ~~~~！！」

「やられてしまいましたね、千雨さん……」

「ゆーな……」

裕奈が連行されるのを隠れて見るパートナーを失った二人。

キラッ

二人の視線が重なり、

ガシッ



「一時休戦と言うことで」

「OK！同盟だね！」

バカ達の夜は長い。

そして、ここに戦う女が一人

「刹那か」

いや、二人

「真名……シンさんと仮契約を？」

「ああ、この際だからハッキリ言おう、私はシンさんが好きだ。初めて意識したのは、君の初めての修行の日、私がお姫様だったなんてされる日が来るとは思わなかった。女は誰も、男性には守ってもらえるような存在になりたいものさ。彼は魔法を使う時、どこか遠い目をするんだ、もう会えない人を思うようにね、それが恋人か、友人か、家族か、師匠かは分からない、ただその目に惹かれたんだ。君はどうなんだい？」

龍宮真名も嘗て、魔法使いの従者として、パートナーを失っている。

シン・ファナリス・ハントは家族、友人、師匠を失ったわけではない、しかし会うことはほぼ不可能である。

その二人の似た境遇を真名は感じたのだろうか。

「私だってシンさんが好きだ

シンさんは、私に大切な事を気付かせてくれた、そしてそのために必要なモノを教えてくれたんだ」

桜咲刹那はシン・ファナリス・ハントが来るまで、中途半端な位置にいた、近衛木乃香を守りたいという傍ら、自分の正体がばれることを恐れて離れていた。それはある女教皇が周りの者を傷つけないため、その者達の元を離れたことと似ていた。この二人に共通すること、それは相手を本当の意味で信じていないことだった。しかしそのことをシンは気付かせ、その後待っているであろう理不尽に立ち向かう術を与えた。刹那がシンに抱いている気持ちは恩義に近いかも知れないが確かに愛情であった。

「そうか・・・それじゃあ私たちは本当の意味でライバルだな。」

そして

「ああ、それじゃあシンさんの唇は」

二人の女の

「「私が！」」

清く、善も悪もない戦いが

「騒がしいぞ、何してるんだお前達は」

始まらなかった。

「お前達何してる、刹那明日は詠春の家に行くんだろっ、今日は何もなかったがこれから何が起こるか分からん。今日は早く寝ろ。」

「は・・・はい。」

「真名、お前は今は普通の中学生だろ、その銃をしまえ」

「あ・・・ああシンさん。それにしてもシンさんも夜遅くまで起きてるんだね。」

さっきの話を聞かれたか！？と言う不安の襲われながら真名は聞くが、

「宿が騒がしくてな、たった今起きた。それで外に出たらお前達がいたんだ。なんだこの騒ぎは、悪意・・・は感じられるがそれほど悪質じゃない。何か知らないか刹那」

どうやら聞いていなかったようである、悪意や殺気に気付くのは熟練者故長けているが、今回の悪意がアレのため気付かなかったようだ。

「は、はい、どうやらうちのクラスの者がネギ先生の使い魔と手を組んで・・・かくかくしかじか」

「あのオコジヨか・・・指導の先生に任せてもいいが、オコジヨは・・・俺が潰す。お前達は休め。じゃあな。」

そう言ってシンは向かう、憐れな毛玉の元へ。

「それじゃあ、寝ようか刹那。」

「私は周りの探索のあとで。」

二人の目当てはいなくなり、トボトボ帰って行った。

## 第二十話 女（後書き）

どうも北中津です。

今回は前半は原作と大差ありません。

後半では以前書いた刹那と真名の理由ですが、少しこじつけな所があるので、そこら辺は、申し訳ありません。

## 第二十一話 敵の影（前書き）

どうも北中津です。

今回は少し長めです。

## 第二十一話 敵の影

### 第三者視点

「さて、どういう事かな朝倉和美、毛玉」

シンは今回の騒動の主犯であり、床に正座している二人？に聞く

「い、いやですね旦那、俺っちはネギのアニキのためにですな」

「そ、そうだよシンさん、これも人助けだよ」

二人は大量の汗を流し、人助けを盾に弁解するが

「黙れ、朝倉和美、お前がこっちの世界に入っても俺は構わん、人が考えて決めたことだ、俺は何も言わん」

シンは基本的に人が考えて決めたことをとやかく言わない。確かに不満などを覚える時もあるが、その行動に責任を持つのなら感化しない。しかし、今回は違った。

「しかし、お前は何も知らないクラスの奴まで巻き込もうとした。今回は一人だが、何人もいてみる、ネギはアレでも英雄の息子だ、そんな奴の従者が狙われないとでも思わなかったのか！」

「！！！！」

「そ、それは」

「まあ、今回は一人だし、初犯だから大目に見てやる、宮崎のどかは自分達で何とかしろ。それと」

ビリィ

「ギャアアア、俺っちの五万オコジヨ\$がアアア」

シンはカモが仮契約により手に入れた、五万オコジヨドルを破る。

「人助けなら、要らないだろう?」

シンは悲鳴を上げているカモをよそに出ていった。

「せつちゃ〜ん!何でいきなり走るん〜?」

「すみません、お嬢様説明はちよつと・・・」

刹那と木乃香、その他早乙女ハルナと綾瀬夕絵の二名は走っていた。

(白昼堂々?相手も四の五の言ってられないか)

何も知らない三人は脳内に?を生産しながら刹那についていく。

「此処つてシネマ村じゃん!桜咲さん、シネマ村に行きたかったんだ〜!?!?」

あてもなく走っていると四人はシネマ村に着いたようだ。



（好都合！）

「綾瀬さん、早乙女さん！私、木乃香さんと二人になりたいので失礼します！」

「え？ちよつと！？」

明らかに人間離れしているであろうジャンプ力で木乃香を担いだ刹那は跳んでいった。

「ムム、これは・・・」

「料金はどうするですか」

ほのかなラヴ臭を残して。

「此処まで来れば。」

「せつちゃんどうやら似合うん？」

刹那が周りを警戒している中、木乃香はシネマ村で貸し出ししている和服を着ていた。

「お、お嬢様・・・とてもお似合いです。」

刹那も大和撫子を再現したような木乃香の姿に見とれる。

「さあさあ、せつちゃんも着ような」

木乃香が服を貸したと思われる店の店員も手招きをしている。

「ちょっと！お嬢様〜！」

数分後

「わあ〜せつちゃんかっこええわ〜」

「うっ、何で私まで」

なんだかんだで剣士の服を着ている刹那

「どうも〜神鳴流です〜」

そこに月詠が西洋風のドレスを着てやってくる。

「ちっ、此処まで！」

刹那は木乃香の前に立つ

「いえいえ〜此処ではやりませんよ〜」

月詠は手袋を刹那に投げ

「決闘を申し込みます〜三十分後、ここの日本橋で」

月詠は馬車に乗り、去っていく。

（仕方ない、ここは本気で）

「面白そうな事してるじゃないか、刹那」

「シンさん！何故此处に！」

シンは放浪の侍のような服を着て、大太刀を持っている。

「お前を捜していたら、面白そうなことをしてるからな。もちろんあの決闘受けるだろ？」

シンはあの後、刹那達を探そうと刹那の持っている符を理派四陣で調べた。

「はい、必ずお嬢様はお守りします。」

ワアアアアアア！と一部始終を見ていた一般人が歓声を上げる。これを何かのイベントかと思っているようだ。

「桜咲さん！凄いいじゃない！私たち二人の恋路、応援しちゃうよ！」  
どうやら刹那以外に来ていた、3-Aが集まっていた。

「え！？これは！」

「桜咲刹那アツ！師匠として許す！全力で木乃香を守れ！」

「シンさん！？」

「師匠のお許しも出たよ桜咲さん！？て、言つかその人ダレ？もしかして……カレシ？」

当然の疑問である。色恋沙汰など中学生が最も興味を持つことだ。

「／／／えっ、そ、それは」

「俺はある時は一人の美少女剣士の師匠、ある時は放浪の侍、その正体は・・・麻帆良学園の教会の神父！シン・ファナリス・ハントだ！」

「／／シンさん・・・今日変ですよ」

このノリの良さは変と思った、刹那は問う。

「さっき向こうで酒を勧められてな、予想以上に酒が強かった。たまには日本酒もいい」

何してるんだ聖職者

「ウチの学園の神父さん！？こんなイケメンがいたなんて聞いたことないよ！？」

「ちなみに刹那の師匠は本当だぞ、さあ、我が弟子刹那よ！見事木乃香を守ってみよ！」

「・・・はい」

そして日本橋

「待ってましたよーセ・ン・パ・イ」

日本橋には何十人の観客と月詠がいた。

「せつちゃん、なんかあの怖い・・・」

月詠みの狂気を感じとったのか、木乃香は怯える。

刹那はそんな木乃香に微笑み、

「大丈夫です、お嬢様は必ずお守りします。」

「せつちゃん・・・」

「さあ！そちらに加勢はないのですか？こちらは桜咲さんのクラスメイトがお相手します！」

花魁の服を着た委員長が声高々に叫ぶ。

「あなた達には～～この子達が～～」

月詠が何枚も繫げられた符を取り出す。

ブワッとたくさんのマスコットのような護鬼が現れる。

「キャーーーー！可愛い・・・」

「ガアアアアア！」

「くーーーーーい！」

マスコットの中一匹だけ、鎧武者のような格好をした巨大な鬼がいた。

「なんで一匹だけ、こんなにいかついのもー！」

「ガアアアアア！」

巨大な鬼が観客に襲いかかる

「俺に任せろオオオオオ！」

ガキインと音を立て、鬼の刀を受け止める。

「シンさん！」

「コイツは俺が何とかする。・・・さあこいよ、デカブツ」

「オイ、こつちでも始まったぞ！」「スゴイCGだ！」「カッコイー！」

あいかわらず周りにはイベントとしか思っていない。

「にとれんげき、ざんく〜せん！」

「七閃！」

刹那と月詠の剣とワイヤーがぶつかり合う。

「くそっ、シンさんは手が空いてないし・・・ネギ先生！ネギ先

生を見せかけだけ等身大にします。木乃香お嬢様を」

先ほどまで空気と化していたネギの式神が等身大のネギに変身する。

「分かりました！木乃香さん！」

「えっ！？ネギ君、何時の間に？」

「それより、こっちです！」

ネギは木乃香の手をつかみ、近くにある城に逃げ込む。

「ハアハア、此処まで来れば。」

ネギと木乃香は頂上の部屋に来たそこには・・・

「やっと来たな」

天ヶ崎千草と白い少年がいた。

刹那視点

「オイ！こっちでも始まったぞ！」

天守閣を見ると、ネギ先生とお嬢様を狙い敵の鬼が弓を構えている。

「さあ、少しでも動いたらイチコロや、そっちは紙型のようやし、あきらめてお嬢様をわたしい！」

まずい、周りには誰もいないし、ネギ先生は実体がない！

「木乃香さん、すいません」

お嬢様！今助け

「余所見してたらいかへんえ」

「くそっ！七閃！」

コイツは攻撃を止めない。

「ええよ、せつちゃんを守ってくれるって言ったんや、きっと助けてくれる。」

かなら・・・お嬢様！

ビュウッ

鬼がやを！間に合え！

「捕まえました〜センパイ」

「なっ！」

まずい！ワイヤーを剣に絡めて！間に合わない！

お嬢様をネギ先生が庇うが、意味がない。



「お嬢様アアアア！」

「ゼロにするっ！」

ポトリ・・・

矢は力をなくしたかのように落ちる。

「刹那、さすがに相手が悪かったな、今回は罰はなしにしておいてやる。」

シンさん・・・それは京都駅で使った。

「くそっ何で矢が・・・きやつ！」

シンさんは一瞬で間合いを詰め、鬼を一刀両断する。

「チエックメイトだ」

剣先を術師の女に向ける。

「くっ！ちょっとアンタッ助っ人やろ？ずっと見ていないでなんかせえ！」

助っ人？そんなの何処に

「さすがに中央のメシアと戦うのは割に合わないよ。」

なんだあの子供は！全く気づけなかった。

あれ？シンさんが驚いている？

シン視点

「何故お前がここにいる、あの時死んだはずじゃなかったのか。」

いきなりでできた子供、間違いない！完全なる世界のアイツだ。

「久しぶりだね中央のメシア、いや、ローマ正教、神の右席のシン・ファナリス・ハント」

！！！！何故コイツがローマ正教を、しかも神の右席は各宗派でもかなりの上位職じゃないと知らないはずだ。

「何故それを知っている。言え！」

「僕の仲間に詳しい人がいてね」

仲間だと、俺と同じでインデックスの世界から来た奴がいるのか。

「詳しく教えてもらおう、……天罰術式」

バシャア

・ 天罰術式が作動したら、子供は水になった。水を使った分身か……

「くそっ、あいつ何一人で逃げてるんや、月詠！私らも逃げるで！」

ちっ、アイツとの話しに気を取られすぎた。くそ

「大丈夫ですか、シンさん！」

くそっ、天罰術式とソーロルムの術式、使いすぎたか。

「刹那、詠春のとこへ行こう、あそこに近づくには待ち伏せが怖かったが仕方ない。」

「はい、私もそう考えていました、お嬢様、お嬢様のご実家へ向かいます。ネギ先生達と合流します。」

## 第二十一話 敵の影（後書き）

どうも北中津です

今回で禁書側の敵の影が見えてきました。

原作で神の右席はインデックスも知っていたので、ある程度上の位に行けば、ローマ正教以外でも神の右席を知っていると解釈しました。

## 第二十二話 一時の休息（前書き）

どうも北中津です。

今回は戦闘シーンはありません。

## 第二十二話 一時の休息

シン視点

「「「「「お帰りなさいませ、木乃香お嬢様」」」」」

俺達は先ほどの戦いの疲労を癒すため、木乃香の家、つまり俺の仲間の詠春の家であり、関西呪術協会の総本山に来た。

そして、巨大な門をくぐると、何十人のお出迎えの巫女の人数・・・詠春、ここまで堕ちたか。

「うわぁ、木乃香の実家っていいんちょ並じゃん」

木乃香の家はかなり広い、スクナ封印の時、まだこの家が詠春の家になる前に訪れたことがあるが、この家は京都の山の一角を占めている。

木乃香のルームメイトの明日菜も驚いているようだ。

「さあ、こっちょ」

そんなことは知らず、木乃香は家に友達連れて来たかのように平然と案内する。

しばらく歩いて、木乃香に連れられてきたところは、かなり広い和風謁見の間のような部屋だった。

「ちょ、ちよつと真ん中に座っていいの？」

「ええよ、ええよ」

みんなが部屋の真ん中に用意された座布団に座る、友達の家でもここまでの豪華さでは木乃香以外は慣れていないようで緊張している。

お、来たか

「よく来てくれましたね、木乃香のクラスメイトの皆様。そしてネギ君、任務ご苦労様です。」

部屋の奥から陰陽師の服を着た詠春が出てきた、やはり俺と違って歳はとってるようで、もう立派なおっさんだ。少し痩せたか？

「お父様久しぶりや〜！」

「こらこら、木乃香。」

木乃香が詠春の胸に飛び込む、

一見、仲のいい親子の再会だが、アイツの趣味を知っている奴にとっては……犯罪だな。

所変わって、今は宴会場に来ている。詠春が夕飯を準備したのでみんなと共にご馳走になっている。  
みんな今日はかなり走ったからなのかよく食べる。これでまた疲れなければいいが。

「もつと飲め飲め〜」

「ちょっと、これお酒じゃ」「そんなわけない」完全に酔ってるでしょ。」

各々楽しんでいるようだ、俺は刹那とネギの間で懷石料理を食べている。

「刹那君」

「は、はい長！」

仕事を終わらせると言って席を外していた詠春が戻って来て刹那に後ろから声をかける。

その声に刹那は瞬時に振り返り詠春に跪く。

「そんなにかしこまらなくていいですよ、貴方は昔からそうですからね。」

「い、いえ」

そう言われても真面目な刹那だ、そう簡単に態度は変えられない。

「貴方にはこれまで苦勞をかけましたね、まさか昼間から向こうが襲ってくるとは」

「いえ、こちらの不注意でお嬢様を危険な目に・・・」

刹那はやはり申し訳なさそうな顔をする。周りは騒いでいて、女子高生がおっさんに跪いているという一見犯罪臭のする行為に気付い



ていない。

「ははは、大丈夫ですよ、木乃香はどこか抜けてますし、周りもイベント程度にしか思っていないのでしょうか？」

まあそうだろうな、あれだけのことがあってイベントで済ませるくらいだ。大抵のことは許容できそうだが、学園長がアレだからか？

「それにシンが助けてくれたのでしよう。シン、礼を言います。」

俺に頭を下げ、礼を言う詠春、こいつ口調が穏やかになったな、あの性癖は変わってないようだが家庭を持って多少変わったか？

「気にするな、これも神父の勤めだ。」

俺は酒を飲み、普通に返す。

「ええっ！長さんとシンさんって知り合いなんですか！？」

ネギが驚く、そうかこいつには話してなかったな。

「ああ、詠春とはかなり前からの付き合いだ、刹那に剣を教えているのも詠春に頼まれたからだ。ああ、そうだ詠春、明日にでも刹那と模擬戦をしてくれないか？こいつの成長ぶりを見てもらいたい。」

「ええっ！ちょっとシンさん！私が長となんて」

俺の隣で話を聞いていた刹那はいきなり戦うと言われ、案の定驚首をスゴイスピードで振って遠慮する。

「大丈夫だ、コイツももう歳だしブランクもある。」

元英雄でも旧世界ではこれと言って大きな事件もなかったし、関西呪術協会のトップになって実戦も久しくしてないだろう。

「ええ、面白そうですね、刹那君、明日の朝私と戦いましょう、何処までシンの技術を受け継いでいるか見物です。」

詠春もあの時の目になる、決まったな。アイツは昔ラカンほどでは無かったが弱戦闘狂だったからな。

「と言うわけだ刹那、明日のために早めに風呂に入って寝ろ。」

「は、はい・・・」

刹那は立ち上がって風呂に行った。

刹那視点

「ふう、全くシンさんは・・・」

私は湯につかりながら、今日の宴会のこと思い出す。

まったくシンさんは何を考えているんだ、私と長を戦わせるとは、

も、もしかしてシンさんは私をそこまで信頼して／／／

私の顔が熱くなる。

「刹那さんも災難だったね」

「あ、明日菜さん」

屋敷の大浴場に明日菜さんが入ってくる。

「あのシンって人、木乃香のお父さんと仲良さそうだったね」

「ええ、長が結婚される前、つまり十年以上の仲だそうです。」

お母様より長い仲と言うことですね。

「え???てことはあの何歳なの???アレは完全に二十代よ」

「そ、そう言えばそうですね・・・私は分かりません。」

たしかにそうだ、長との仲間で大戦にも参加したのにあの若さはおかしい。

もしかしたら私のように・・・

ガラガラ。シンさんの若さについて考えていると扉の音が、お嬢様達かな?

「わあー!おつきいねカモ君!宿も良かったけどこっちもスゴイや  
!」

ネギ先生!?!と使い魔のオコジョが入ってくる、そうか、ここは混

浴だから・・・

「ちょっとネギ！何でアンタが入ってくるのよ！」

「えっ！？明日菜さん！？ぼ、僕は長さんに入ってこいって言われたから。」

いつも通り明日菜さんがネギ先生につかみかかる、またこの人達は

「それで何でこの風呂なのよ！エロガキ！」

「あ、明日菜さん、ここは混浴なのでネギ先生が来てもおかしくありませんよ。」

「あんたは、いつもいつも女湯に入ってきてー！」

聞いてないし、ああ、始まってしまった。

ガラガラ、また！？今度は

「ははは、貴方は変わってないなシン。」

「お前はもつと変われ。」

長とシンさん！？どどどどうしよう／＼わ／＼私、裸・・・

「ネギ先生！明日菜さん！こっちはです。」

私は何故かネギ先生と明日菜さんを連れて近くの岩に隠れた、混浴

なのに。

どうやらシンさんは気付いてないようだ、よかった。

そういえば二人は何を話してるんだろう？

「そう言えば、アルを見つけたぞ。（刹那と明日菜とネギとオコジヨカ、悪意はないからいいか。）」

「アルを！？私は行方不明と聞いていたのに。」

「フン、アイツには口止めされていたがそんなの知らん。あいかわらず暗躍してるよ。」

アル？聞いたことのない名ですね、二人の友人でしょうか？長がそんなに驚いているのは始めて見ました。

岩陰からシンさんの話に聞き入ってしまう私、明日菜さんやネギ先生もそのようだ。

「アルが生きていたとは、ならあのバカもどこかで生きているんだろうな」

「ナギのバカがそう簡単に死ぬか、後話は変わるが、ここに来る時・・・」

「え！？父さん！？」

「ちよつとネギ！、ばれるわよ」

二人の会話にネギ先生のお父さんの名前が出て、我を忘れて飛び出そうとしたネギ先生を明日菜さんが抑える。ああ、またケンカに、ばれてないかな？

二人を見ると・・・長が驚いている？何を話してるんだ？二人がうるさくて聞こえない

「・・・！？・・・あるとき確かに・・・完全なる・・・」

なんて言ってるんだ？

すこし岩陰から頭を出そうとしたら

「ちょっと夕映酔ってるんじゃない？」「そんなことないです！」

ん？また来た、この人数はお嬢様達か、まずい！ここには男性が！

「！みんな来たようだな」

「大丈夫だ、ほらあそこに裏口がある、ここは混浴だからこういう時のためにな」

シンさんと長もみんなに気付いたようで、窓の方にある裏口に走っていく。あんな所に裏口があるとは。

私はネギ先生と明日菜さんを何とかしないと

「覗きようか？」

「違います！！私が好きなのは巫女服であり」

「あーもういい」

二人は出ていった。それとほぼ同時にみんなが入ってくる、ネギ先生と明日菜さんは気付かずケンカ？している。

「きゃー！ネギ君と明日菜なにしてるん？」

また騒がしくなりそうだ。

## 第二十二話 一時の休息（後書き）

どうも北中津です。

今回は宴会と風呂です。

シンと詠春は完全なる世界のことを話しましたが、しかし、インディックスの魔術については話していません。



## 第二十三話 襲撃（前書き）

どうも北中津です。

更新が滞りしません。

## 第二十三話 襲撃

### 第三者視点

「ごめんね木乃香、刹那さん運ぶの手伝ってもらって」

「別にかまへんよ。」

風呂で一騒動あった後、明日菜達が刹那を見ると真っ赤になって目を回していた。

どうやらシンがいなくなった時、照れとか緊張とかそ言う感情が一気に来たらしい。

さすがに中学生にはきつかったようだ。そして、みんなが寝室へ戻る時、明日菜と木乃香で刹那を運んだのだった。

「さあて、もう寝よ」

ゴン、明日菜の頭に何かが当たったようだ

「痛く何なの？」

何かが部屋から出ていたようだ。それは

「石像？」

「刹那さん！」

「ネギ先生！」

ネギと刹那もまた、異変を感じとっていた。二人は急に人気が無くなった屋敷を走る。

「明日菜さんとお嬢様は！？」

「分かりません！」

しかし、たった二人でこの広い屋敷から明日菜と木乃香を見つけるのは、いささか骨が折れる。

「そうだアニキ！パクティオーカードだ！」

ネギの肩に乗り今後のことを考えていたカモがパクティオーカードの念話の機能を思い出した。

「そ、そうか！えっと・・・明日菜さん、明日菜さん」

ネギは懷からパクティオーカードを取り出し念話を始めた。ネギが連絡を取っている間、刹那は辺りを警戒している。

「はい、・・・はい・・・、それでは木乃香さんをお願いします。刹那さん、木乃香さんには明日菜さんがついているそうです。後二人が・・・石化したこの人達を見つけたと・・・」

「そ、そうですか、良かった。しかし石化の魔法はかなり高度な魔

法です。敵もそれほどの実力者かと。」

木乃香の安全を知り、ほつと胸をなで下ろす刹那。しかし、敵が高位の術者とわかり、警戒を強める。

「ネギ！刹那！」

そんなとき三つ目の声が二人の背後から響く、二人はいきなりの呼び声に身構えるが、声の主を知り構えを解く。いつも声を聞き慣れている刹那も構えてしまった。

「シンさん！それに・・・長！」

シンは下半身が石化した詠春に肩を貸しながらやってきた。

この協会でも事実上トップの詠春がやられたことを知り、二人は驚愕する。シンには見たところ石化などの症状は見られない。

「すまん油断した。」

それは少し前

「どうですか、どうですかこの巫女さんは！」

シンは飲み足りないのか詠春の部屋で飲んでいた。・・・がいつの間にか詠春の巫女講座となっていた。

「黙れ、お前結婚したんだから、こういうのもう止めろよ」

「何を言う！せっかくシンという趣味を共有できる友が来たのに」

「俺は共有したくない、あんまりうるさいと奥さんと木乃香に言うぞ」

「頼む！それだけは！」

瞬動術の応用の瞬間土下座である。なんて技術の無駄遣い。

「なかなかの土下座だな、そんなことよりもう日本酒はないのか」

「お前も飲み過ぎだ、前はワインばかりじゃなかったか？」

「あれは魔法用………後ろだ！」

ポフウと煙のような物が詠春の後ろの障子から吹き出す。しかもこれは只の煙ではない。

「くっ、これは石化の」

パキパキパキと詠春の足の先が石化していく。

「やあ、またあったね、シン・ファナリス・ハント。」

煙が晴れるとそこにはシネマ村で会った白髪の少年悠然と立っている。

「貴様！」

「そう言えば自己紹介がまだだったね、僕の名前はフェイト・アーウェルンクス、君の予想通り僕は完全なる世界の者だ。」

「何故、お前がこんな所で」

シンは大戦での最後の敵であり、魔術を知っている敵に敵意をあらわにする。魔術は魔法ほどの火力はない、シンが使う魔術は特別製であり、普通の物には扱うことが出来ない。しかし、普通の魔術でも凶悪な物は存在する、誰にでも使えて、カード一枚で1000度もの炎の剣をつくり出すことも出来る。故に魔術はあまり広められない。

「それは言えないね、ヴィシュ・タル・・・」

しかしシンの質問には答えず、詠唱を始める。また石化魔法をする気のようなのだ。

「チツ、天罰術式！」

バシャア！とフェイトは水になり、部屋を水浸しにする。また水による分身だったようだ。

「クソツ、またか！」

シンはまた同じ事をしてしまい憤りを感じる。

「シン、木乃香を・・・」

それをよそに詠春の石化は進んでいく、もう太腿の辺りまで石化している。

「詠春、今助けを呼ぶ！」

そして今に至る。

「アイツは強い、下手をしたら天ヶ崎千草よりも、……早く木乃香を！」

シンは焦る、二人には言っていないが完全なる世界の者がいる、それだけでシンが特別警戒する理由になった。

「はい！二人は今お風呂に！」

念話で二人は風呂に逃げ込んだと聞いているネギは答える。

「シン私はもうダメです、木乃香を」

パキ……。詠春は完全に石化した。シンは顔を伏せ、すぐに上げる。

「くつ、行くぞ刹那、ネギ！」

「「はい！」」

「も、もうダメ……」

「大丈夫ですか明日菜さん。」

風呂に行くと明日菜は全裸で、痙攣していた。男には目の毒である

「シンさん……。」

刹那はシンをじろりと睨む、この目も嫉妬故の物なのか。

「ごめんネギ、木乃香が……。」

木乃香はさらわれたようだ。ネギと刹那が明日菜を診てると

「後ろだ！」

シンが叫ぶと、そこにはフェイトが

パン、ドッ

「カハッ！」

刹那の手を払い、腹に一撃を食らわす。

刹那は浴場の端まで飛ばされ、壁にぶつかる。

「刹那さん！許さないぞ！」

ネギは激昂するが……

「フウ、君にナギが出来ると思うんだい？ネギスプリングフィール  
ド」



フェイトは用を済ませたようで、水を使ったゲートを使い、消えた。

「大丈夫か刹那！」

シンは刹那を起こし、安否を確かめる。どうやら問題はないようだがフェイトの格闘技術はそこら辺の格闘家よりはある。

「はい、何とか・・・しかしお嬢様が」

「名案を思いついたぜえ！」

もつとも信用できない動物からの名案。

「刹那の姉さん！仮契約だ！」

「／／えっ！???」

刹那は尋常じゃない赤さで赤面する。

「いいじゃね〜か〜、それで木乃香の姉さんを救えるんだぜ〜」

狼狽する刹那をカモがじりじりと詰め寄る。

「し、しかし・・・いえ、分かりました！」

刹那も覚悟を決めたようで

（よっしゃあー！これでアニキの戦力アップだー！しかも五万オコシヨ\$も）

カモは内心でガッツポーズを取る、しかし刹那はカモの喜びを軽々と打ち砕く。

「シンさん！お願いします！」

「はあ！？俺かよ！」

「ちょ、ちよつと刹那の姉さんそこはネギのアニ」黙って下さい「はい」

カモは狙いがはずれ焦るが、刹那は気迫で黙らせる。

「シンさんお願いします。」

「それはお前が考えたことが、そのオコジヨが言ったからじゃないのか？」

「はい」

シンは基本的に人が考えて決めたことには口出ししない。もしその考えが、場に流されたりして出た考えや対して考えずに言ったことではそれをよしとしない。

「しょうがない、いいだろう。（何故か断れん？）」

ここにシンとテオドラを仮契約させた場の空気、再び。

「カモさん、お願いします。／／／」

「くそおおお・・・しょうがねえ、パクティオー！」

「んっ！！」

そして、シンと刹那は仮契約を果たす。

「／／／／行きましょう！、皆さん」

「「「おう！」「」「」

「よくやったやないか、どうやって本山の結界を抜いたんや？まあええ、これでアレが」

天ヶ崎千草とフェイトは本山近くの湖に来ていた。

「待て！お嬢様を返してもらっ！」

「チツ来よったか・・・しかし、これでどうや・・・」

千草が詠唱すると

「「「「ギアアアアア！」」「」

軽く百匹を超える妖怪を召喚した。それは烏族、鬼等様々であり、昼間に月詠が見せた物とは違う真正銘百鬼夜行だった。

「な、なによこの量」

「どうします、ネギ先生」

「僕が杖で飛んで木乃香さんを助けに行きます、その間皆さんは此処で」

「わかった」「はい」「了解した」

シンは本当は、フェイトにインデックスの世界の者について聞きたかった。しかし、この量では一般人に被害があると考え、此处に残ることにした。

「刹那、アーティファクトを」

「はい、アデアット!」

刹那がアーティファクトを出すと、それは二メートル以上ある日本刀になった。

「アーティファクトの名前は・・・天草の絆?」

そう、それはある十字教の宗派とある女教皇の絆、彼らが共通して持つモノ、剣だった。

「刹那、それは俺の知り合いが使っていた刀、七天七刀だ。」

シンは刹那の持つ七天七刀を見て語る。

「それを使っていた人はお前と同じで、特異な体質のため周りを遠ざけ、そして周りを信じることで真の仲間を得た、そして俺に七閃を教えてくれた人でもある。お前らしいじゃないか。・・・・・・しかし、その剣がアーティファクトなら名前は七天七刀となるはずだ、天草の絆と言うことは・・・」

シンは七天七刀を手に取り、イメージする、教皇を待ち続け教皇代理として居続けた者の剣を。

「それは！」

シンが手に持った剣はフランベルジュとなった。

「やはりな、このアーティファクトは変化する機能がある、今は七天七刀だけでいいだろう。それは魔術が効率よく働く用になっている、夕凧と使い分ける。」

「はい！」

シンもフルンティングを手に取り、

「行くぞお！」

駆ける。

それはこの先に待つ大きな戦いの始まりを告げる、小さな戦い。

## 第二十三話 襲撃（後書き）

どうも北中津です

刹那のアーティファクト登場です。

名前は天草の絆、

天草式がもつ太刀、洋刀、槍、斧などに変化する万能武器です。

特殊な能力はなく、強いて言えば武器が魔術向きに装飾されている  
という点です。

第二十四話 参戦（前書き）

どうも北中津です。

今回は長い、とても長いです。

## 第二十四話 参戦

「加速、加速！」

ネギは飛ぶ、木乃香がいる湖の中心の儀式場へ、儀式場では千草がもう儀式を始めており光の柱が見える。

そしてネギが湖の端辺りに来た時、

ゴゴゴゴゴゴ

「な、何だ！？」

ネギが杖から降り地に足をつけると、地響きが起き、地面が隆起する。

「うわあ！な、何だ！？」

地面から泥と土でできたゴーレムが現れる。

「お、大きい。こんなの見たことない……」

そのゴーレムはネギが学校で勉強したゴーレムを大きく上回る大きさだった。そう、このゴーレムはこの世界の技術で作られたゴーレムではなかった。しかも……

「待ってたで！ネギ！」

「こ、コタロー君！？」



犬上小太郎 参戦。

ザシュツ！

「くっそっ！負けてもうたなあ」

シンはかなりの敵を切り伏せた、シンが天罰術式を使わないのは、この先来るであろうフェイトとの戦いのために魔力を温存しているからである。そして湖の方を見ると。

「アレは！」

シンが見たのは、インデックスの世界でシェリークロムウェルが作ったゴーレムだった。

「フェイト・アーウェルンクス・・・挑発のつもりか。」

シンは湖に向かおうとするが

「うわぁ！」

シンと共に戦っていた刹那と明日菜は手練れの妖怪に苦戦していた。これではシンは湖の方に行けない。

「くそっ！此処で俺がいなくなれば・・・」

只でさえ敵が押しているのに、敵の優勢は止まらない。

「刹那センパイ、またお会いできましたね。」

どこからともなく現れた月詠が、不気味な、狂気にまみれた笑顔で刀を構える。

「月詠！まずい」

シンは駆けるが間に合わない。

- - - - - パン - - - - -

「なっ!?!」

銃声が響き、刹那を捕まえていた鬼の額を貫く。

「大丈夫か、刹那。」

「真名、何で此处が・・・」

刹那はいきなり来た真名に困惑している。仲間の中で今連絡が取れそうな者が刹那には思いつかない。

「何、内のバカブラックがね。」

真名は術式を加えた弾丸で妖怪を打ち抜気ながら答える。そう、今石化しているハルナに助けられた夕絵が少し前に救援を頼んだのであった。

「ちなみに私もいるアルよー」

真名の背後から古菲がひょっこり出てくる。古菲は始めて見る妖怪達に興味津々である。

「あと楓もな、それより刹那、君のその剣は見たことがないが・・・」

「フッ、シンさんとの仮契約だな。」

刹那はこんな時に余裕の笑みで答える。

「なっ・・・」

真名は驚愕するが、すぐに気を取り戻し、スタスタとシンの元に行き

「シンさん、私が手伝ってあげようか？」

「ち、近いぞ真名」それで助けて欲しいのかい！？」そ、それは、助かる、むっ！！！！！！」

真名はシンの返事を依頼と確認してすぐ、シンの唇を奪った。

「プハッ、報酬は前払いだよ。」

不敵な笑いをして、真名はパクティオーカードを持つ。

「お、お前は・・・仕方ない！頼んだぞ真名」

シンは湖に向かっていった。

「さて、行くか古」

「オウ、アル！」

龍宮真名 古菲 参戦

「ネギ！俺と勝負しろ！」

小太郎は神社でのリベンジのみを考えてここにいる。千草の儀式も西洋魔術師への恨みも今はない。

「コタロー君、僕は木乃香さんを！」

しかし、そんなことよりも木乃香のことを優先したネギは小太郎の挑戦を断る。

しかし次の言葉は9歳のネギを動かすには十分だった。

「お前男やろ！戦ってから、俺に勝ってから此処を通れ！」

小太郎の軽い挑発。

「！！！！わかった、カモ君一分で終わらせるから待ってて。」

「アニキ！今はそれよりも！」

ネギはカモの制止を聞こうとしない。

「きゃあああ！」

その時、第三者の声、いや悲鳴が。

「夕絵さん！何で此処に！？」

声の主である夕映は少し上の崖でゴーレムに襲われかけていた。

ドガン！

ゴーレムの拳が崖を吹き飛ばす。

「夕映さああああん！」

ネギは叫ぶ、しかし夕映の返事はない。

「ニンニン、リーダーは大丈夫でござるよ。」

夕映の返事は、

「楓さん！」

桜の木の上に、夕映を抱いた楓がいた。

「これで目も覚めたでござろう、大局を見誤ってはいけないでござるよネギ坊主、ここは拙者が請け負うでござる。」

長瀬楓 参戦

「さて、アデアット・・・これは弾倉？名前は七曜の弾丸。まあ使ってみよう、お丁度使える。」

真名の新しいアーティファクトは弾倉だった

丁度持っている銃に使えるので、銃に入れ、襲ってくる妖怪に打つ。

パン、ガン

「痛つてゝゝ、なんやこれ、壁かいな？」

妖怪は壁に防がれ、進めないらしい。

「これは・・・結界弾と言うことかな、じゃあ次」

真名は二発目を打つ。

ダアアアン！

「ウギヤアアア！」

片手銃からあり得ない銃声がして、そこら一帯の妖怪を吹き飛ばした。

「・・・炸裂弾かな、次は」

パン、今度は普通の音だ。

「・・・散弾だね」

確かに幾つもの弾が何体もの妖怪の額を穿つ。しかし、弾道が物理的法則を無視していた、ある弾はあり得ないカーブを、ある弾は急停止し方向転換した。

「次は、四つ目か。」

パン

今度は一個の弾だし、至って普通・・・じゃなかった。

「おおおお！力が漲ってくるでえ〜！」

弾が当たった妖怪がガンガンと結界を殴り始める。

「こ、これは回復弾のようだ・・・」「ガンガンガン、ピシィ」  
次々〜」

パン、ヒュン

「「え？」」

この声は、真名であり、妖怪でもある。

弾はあり得ないスピードで妖怪を貫通していった。

「スゴイスピードと、貫通弾だ。次は」

パン、ピピッ

弾丸は放った瞬間重力に逆らい上に行く。

「これは、上空からの映像？あの弾か！」

六つ目の弾は上空からの映像を撃ち手に見せるそうだ。

真名の横にB4くらいの映像モニターが出ている。

「これは便利だな。さて、大体分かった。七曜というのなら弾は七種類、それも曜日にちなんている。

月曜 月は守護の意味を持つ結界弾

火曜 火の持つ単純な破壊弾

水曜 様々な動きをする散弾

木曜 繁栄の回復弾

金曜 最高硬度の貫通弾

土曜 地形を知る索敵弾・・・と言うことは。」

パン！ピカア、キイイン

「ウルセエエエ！」「目があああああ！！！」

「うわああ！」

「日曜 光と音のスタングレネードのようだな。しかし弾を使いきってしまったな。」

ガシャンと空の弾倉を取り出すと、弾倉がパクティオーカードに戻り、カードに数字が出てくる。

ピッピッと音を立て数字が増え、七で止まる。

「フム・・・なるほどそう言うことか、アデアット」

真名の手には再び満タンになった弾倉があった。



「一秒に一発か、ある程度のデメリットは覚悟しないといけない」

一秒に一発、確かに早撃ちの真名には長すぎる。

ガシャンと再び弾倉を入れる。

「だが今は火曜と金曜があればいいんだが。」

「一発目は結界弾や！離れていれば問題ないで！」

鬼も知識はあるようで、一発目が結界弾と学んでいた。

ダアアアン

「ギアアアア、一発目は結界弾やないんかい！」

「一発目から炸裂弾？弾丸の種類も変えられるのか。それなら・・・」

「

銃を構え

「全て火曜だ！」

ダダダダアアン！

「魔法の射手！光の一矢！」

ズバァツとネギの放った魔法の射手がゴーレムに直撃する。

「グアアアア！」

ゴーレムはよろめき少し腕が崩れるが、すぐに修復される。

「ダメだ！すぐ修復される！」

「アニキ！これを操ってるのはあの白髪の小僧だ！あっちを狙った方がいいぜ！」

幸いゴーレムはそれほど早くない、杖で行けば余裕だ。

「ウン！わかった！杖よ！」

杖に乗り、儀式場に向かう。

「ん！んーっ！」

儀式場では、千草の儀式が完成しようとしていた。

「魔法の射手！風の一矢！」

儀式に付き添っていたフェイトに捕縛用の魔法の射手が巻き付く。

「此処までです！木乃香さんを返して下さい！」

「ヘッ！いくら実力者でもゼロ距離で捕縛魔法を打たれたら動けな

いぜ！」

カモが自信満々に叫び、ネギが王手をかける……だが千草は余裕の笑みを崩さない。

「フッフ、残念やったなあ。」

ドバアア！千草の背後の光の柱が太くなり、10メートル以上ある巨大な二つの顔を持つ鬼神が現れる。

「ガアアアアアアアアア！」

「飛騨の鬼神、リヨウメンスクナノカミや！かつてサウザンドマスターに封印された鬼神が復活したで！！これで私の勝ちやあ！」

千草は木乃香と共に宙に浮き、スクナの肩の辺りに昇る。

「ここまでだね、ネギスプリングフィールド」

フェイトも捕縛魔法ほ解いたようだ。

「グオオオオオオオ！」

ゴーレムも到着する。スクナと比べれば小さいが、その修復能力は侮れない。

逆王手、まさにそれだった。

「ネギ！」

「シンさん！」

しかしそこに救世主シンが湖をすべりながら到着する。

「ネギ！従者を召喚する！このメンツを二人では負けに等しい。」

スクナ、フェイト、ゴーレムを相手に嘗て救世主と呼ばれたシンと魔法学校を卒業したばかりのネギ。この二人だけで挑むのは、一個師団に大砲一つで挑むような者だ。

「はい！」

足下に魔法陣が現れ、刹那と明日菜が呼び出される。

「ちょ、ちょっと！何よこの状況！」

「お嬢様！」

明日菜はこの状態に驚愕し、刹那は上空にいる木乃香を見る。

「シンさん、お嬢様は私が！」

「え！？でもあんな高さで」

確かに、スクナの肩と言うことは十メートルは軽く行く。

「大丈夫……です。」

「刹那」

シンが刹那に声をかける。

「シンさん」

刹那は大切な人を見て、名前を呼ぶ。

「信じろ」

「ハイ！」

バサア！刹那の背から純白の羽根が開く

「ネギ先生、明日菜さん、これが私の正体です。」

刹那は二人を信じて、おびえが残る。

「カッコイイじゃない！何これふわふわー」

「か、カッコイイです刹那さん！」

しかし、そんな怯えは必要なかった。むしろ羨ましがっていくくらいだ。

「な、信じて良かっただろ、いいじゃないか、神父の従者が天使なんて。」

「天使ノノノ、シンさん！行ってきます」

「ああ」

刹那は羽ばたいていった。守る者のために。

「ネギ、明日菜、お前達はそのゴーレムを頼む、あのゴーレムは明日菜のアーティファクトでは破壊できない、せいぜい動きを止める程度だ、あのゴーレムの中心に核がある、それを破壊しろ！」

「はい（分かったわ）」

「俺は・・・アイツに話がある。」

戦いは加速する。

## 第二十四話 参戦（後書き）

どうも北中津です。

真名のアーティファクト、七曜の弾丸です。

性能は文中にあります。他に弾丸が七つ以上リボルバーやバズーカ以外は手に持っている銃の弾倉に自動で変わります。

あと長くなつてすいませんでした。切りどころに迷つてこういう状態になりました。

## 第二十五話 伝説の前触れ

### 第三者視点

「うおおおお！」

ドゴン！シンが振りかぶったメイスが儀式場を砕き、湖を割る。  
しかしフェイトはメイスを軽くかわし、

「ヴィシュ・タル……」

詠唱しながらシンの懷に潜り込む、

「石の槍！」

フェイトの目の前から飛び出した石の槍がシンに迫る！メイスの長さのせいで防げない

「優先する！人体を上位に、石を下位に！」

シンは光の処刑を発動すると、石の槍はシンには突き刺さらず、シンに刺さる寸前で止まる。

「おや？君は聖人と言う者だから、刺殺に弱いと聞いたのに」

フェイトは距離を取るように後ろに飛び、この世界では知りもしない知識を口からこぼす。

「！何故それを知っている！」



シンはそれを聞き逃さず、メイスを横に振るいながら、叫ぶ！

「だから言っているだろう？こちらに詳しい奴がいるんだよ」

激昂しているシンのメイスはかわしやすく、フェイトは上に飛ぶ

「我らの下に姿を現せ、冥府の石柱！」

そのまま上空で詠唱を始め、フェイトの背後から巨大な魔法陣が現れる。

その魔法陣から巨大な神殿を支える様な石柱が降り注ぐ。

「それなら！」

シンは湖の水面をすべるように動き、そのシンの周辺1キロメートルの水が宙に浮く、その水の塊はゆづに2000トンを超える。

そしてシンは水の一部を操作し、複雑な魔法陣を描くき、残った水は20メートル程の水の槍になる。

「行け！」

シンとフェイトの間で水の槍と石柱が衝突する。

ドバァッ

お互いの威力はほぼ同程度で、石柱は破壊され、水の槍はその形を失い再び湖の一部となる。

「やはり、魔術の言うのはスゴイ、無詠唱でそれほどは」

フェイトは上空で手を組み、無詠唱で冥府の石柱を破壊するほどの威力を持つ魔術に素直に感心する。

「俺以外に魔術を使う奴がいるのか！」

そして湖の上に立つシンは問う。フェイトは魔術を前に見たことがある素振りだった。

シンは自分以外に魔術が使える者がいたとして、それがフェイトと手を組んでいたら自分がけりを付無いと思っけないと思っている。

（どうする、一応情報を聞き出そうと戦いを長引かせているが、天罰術式を使えばアイツを倒せる、しかし、アイツほどの実力者を昏倒すほどの魔力を使い、その後このスクナをどうするか）

シンはチラと千草と対峙する刹那を見る。

（今は千草が木乃香の力を使い制御しているが、刹那が木乃香を助けた後スクナの制御は無くなり破壊の限りを尽くすだろう。他の奴にアイツを倒せられる者はいない！どうする。）

シンがこの後の事について考えていると

（ククク、あの中央のメシアがお困りのようだな）

「この声は！？」

脳裏に今まで麻帆良という牢獄にとらわれたヒトならざるモノ、最強種の一角、エヴァンジェリンの声だった。

（そいつは私が相手をしよう、貴様はスクナであの魔法の練習でもしている。）

ズズズ・・・とシンの影から手が伸びる。そのまま、頭、体、足と出てきて、

「ウチの者が世話になったなア！」

ドガァン！

エヴァの声に驚いていた隙について突進したフェイトは、影から出てきたエヴァに殴り飛ばされる。

「さあ行くがいい、シン・ファナリス・ハント！貴様がここ一週間かけて覚えた魔法を見せてみる。」

エヴァが到着する少し前

ネギ視点

「きゃあああ！」

「明日菜さん！」

ゴーレムは明日菜さんを殴り飛ばす。明日菜さんは何とか防いだけどこのゴーレム、何度攻撃しても地面の土や泥で修復しちゃう。シンさんが言うにはゴーレムの中心にある核を壊せばいいらしいけど、ゴーレムの体ぶ厚すぎる。

「白い雷！」

バチィ！

「グアアアア！」

白い雷でも少し動きを止める程度、明日菜さんのハマノツルギでも少し動きは止められるけど・・・

「ネギ先生！お嬢様は無事救出しました！お嬢様は問題ありません！」

刹那さんが木乃香さんを助けたようだ、刹那さんは羽根で羽ばたかせ空で木乃香さんを抱えている。

よかった。・・・でもこっちも何とかしないと。

やっぱりこの方法しかない！僕は何とか立ち上がった明日菜さんに駆け寄り。

「明日菜さん、一瞬でいいです。あのゴーレムの動きを止めて下さい。」

・・・それと、これでゴーレムを倒せられなかったら、シンさんに頼んで下さい。」

・  
この攻撃に僕の魔力を全てかける。これで倒せられなかったら・・・

「アニキ！それはちょっと勝手すぎねえか！オイラは反対だぜ！」

「そうよ！アンタが力尽きたらどうするのよ！」

カモ君と明日菜さんはやっぱ僕を止める、二人は優しいから、でも

「大丈夫です、失敗しなければいいんですから。」

そう失敗しなければいいんだ、幸運にもあのゴーレムは動きが遅い。僕は杖を構え詠唱する。

「ああ！もう分かったわよ！」

僕が詠唱を始めて観念したのか、明日菜さんは駆ける。あのゴーレムの動きなら明日菜さんは簡単にかわせる。

「はああああ！」

ドス！明日菜さんがハマノツルギをゴーレムに斬りつける、剣が土にめり込む

「グ……」

今だ！

「魔法の射手！光の97矢！明日菜さん逃げて下さい！」

バシユウ！と97本の光の矢が僕の視界を埋め、様々な軌跡を描きやっとな動き出したゴーレムに直撃する。ゴーレムの体は大きく揺られ、よろめく。明日菜さんは……よかった、何とか離れられたようだ

「グオオオオオオ・・・」

ゴーレムの腹部が完全に破壊され、ゴーレム中心の歪な人形のような核がむき出しにされた。

「アレだ！開放！雷の暴風！」

ズドオオオオ！と旋風と稲妻の奔流が土塊に流れ込む。僕は遅延呪文で雷の暴風をゴーレムが修復する前に打てるようにしておいた。でも、97本の魔法の射手のあとに打ったら、やっぱりきついや

ギギギギ、バキン！

核となっていた人形も耐えきれなくなり、粉々になった。

### 第三者視点

「ハアハア！た、たおせた・・・」

魔力をほぼ使い果たしたネギはその場に倒れる、トスッ。

「シ・・・シンさん、あの、白い奴は・・・」

倒れるネギをシンが抱える。エヴァの助けで自由になったシンは自分の世界の者としてあのゴーレムを破壊しようとしたが、ネギと明日菜が破壊してしまった。これはさすがにシンも驚いた。

「大丈夫だ、エヴァが相手をしている。それよりもよくやったな、春のお前とは大違いだ。成長したな。」

シンは湖にネギを寝かし、湖を渡る。その見据える先には制御を失い今にも暴れ出しそうな飛驒の大鬼神スクナがたたずむ。

「お前はそこで休んでろ、今からサウザンドマスターの盟友、中央のメシアの力を見せてやる。」

シンはそこで未完成と言ってもいい術式を発動する。その術式は空想上の生物、形は違えど世界中で語られる悪魔とも神とも言われるモノ、ドラゴンの息吹。

シンは原作知識とアスカロンの理論からの逆算、エヴァの文献とアルのドラゴンからぼぜロから独自につくり出した。神の右席の時に培われた知識や技術もあいまって完成した。最強の術式。

「聖ジョージの聖域！」

鬼神と竜王、二つの伝説が体现した時、戦いは終結へ向かう。

## 第二十五話 伝説の前触れ（後書き）

どうも北中津です。

エヴァ参戦です。

そしてシンのスーパーチートタイムはまだまだ続きます。



## 第二十六話 伝説対伝説（前書き）

どうも北中津です

とうとう来ました決着編。

それではお楽しみ下さい。

## 第二十六話 伝説対伝説

「聖ジョージの聖域！」

バキン！とシンの周辺の空間にあり得ない罅が入る。

体現する伝説に呼応するように空気が震える

そしてシンの目の前には数メートルある魔法陣が不気味に輝く。

「竜王の………殺息！」

ドガアアアアアアアア！

魔法陣から放たれた死と破壊の息吹がスクナに放たれる。

スクナはそれを察知したのか四本の腕で竜王の殺息を抑えこもうとする、鬼神と竜王、伝説の竜の一撃が伝説の鬼を襲う。

メキメキメキ、スクナの腕が悲鳴を上げる。小さな光の粒子の集まりが鬼神の豪腕を貫かんとするが、ぎりぎり持ちこたえる。

「な、なんやあの魔法、人間があんなの打てるんか、う、うわー  
ー！！！！！！」

常軌を逸した力の戦いに、最も近くにいた小さき存在、千草はその衝撃を受け、木の葉の様に飛ばされる。

その衝撃は遠くまで響きわたる。

「オイ！アレ見てみいや！スクナの大將が押されとるで！なんやあれ！」

ある者達では自分達の大將と言っていい鬼神が苦戦しているのを見る、

「真名真名！アレ見るアルよ！綺麗アルねー」

ある者は二つの幻想が描く姿に見とれる。

「あれは・・・フツ、シンさん、さすが私が認めただけある。」

またある者は愛する人の強さを垣間見る。

「これで終わりだ飛騨の大鬼神、術式変換、術式名へ悲しむ者は幸いなり そのような人々は慰めを得るであろう」

カアアア！

白く輝いている竜王の殺息が赤く、紅く、朱く！

それと同時に竜王の殺息の破壊力が増しスクナの腕が・・・破壊された！

「ギャアアアアア！！！！」

ドガアッ！

そのまま紅き光がスクナの腹を貫く。

「ガアアアア・・・ガ・・・ア・・・」

スクナの腹には丁度、竜王の殺息と同じ大きさの穴が、

そして、スクナは立ちつくし、動き出す気配はない。

竜王と鬼神の戦い、勝者は竜王となった。

「ハハハハハ！本当にやりおったぞこの男、あの悪竜のブレスを再現した！素晴らしい、素晴らしいぞシン・ファナリス・ハントオオオオ！」

エヴァはフェイトを退けたようで大笑いしながらこっちにやってくる。エヴァにとってもあれほどの大魔法は600年生きて初めてだったかも知れない。それを一週間でほぼ会得したシンはエヴァが認めるに値する存在だった。

「ははは・・・ちょっと魔力を使いすぎたけどな、でもオリジナルは人工衛星を打ち落としたんだぞ」

シンは弱々しく地面に座り込む、この日の戦いで魔力も天使の力もほとんど使ってしまったようだ。

「シンさん！お疲れ様です。きっとやってくれと信じていました！」

「さすがシンさんだね。」

「お、お疲れ様です・・・すごいですね・・・」

「ちょっとネギ！無理しないいで！」

刹那と木乃香が空から降りてきて、妖怪が還ったので助けに来た真名、小太郎を退けた楓と夕映、満身創痍のまま明日菜に支えられネ

ギが来た。しかし、スクナという難敵を倒したことで頭がいっぱいで、もう一つの巨大な敵を忘れていた。

「中央のメシアと真祖の吸血鬼、なかなか厄介だ。」

その声に気付いたのは二人、その二人はまさに標的になった二人だった。

「危ない！」

ドス！――――二本の石の槍が二人の最強を貫く。

「ガハッ！」

シンに石の槍、聖人にとっての最悪の処刑道具はシンの横腹を大きく貫いた。

それは聖人であるシンにとって致命傷と言っても良い物だった。

「シ・シンさー――――ん！」

シンは刹那と木乃香を庇い腹に石の槍を喰らった。シンは光の処刑は魔力節約のため解いてしまっていた。エヴァも喰らったようだが完全に力を取り戻したエヴァには意味がなかった。

「シンさん！シンさんシンさんシンさん！」

刹那は大粒の涙を流し自分を庇ったシンの名前を呼び続ける。何が起きたのか分からない他の者は呆然としている。喜びから一転、場は混乱と怒り、悲しみが締める。

「貴様ああああ！」

真名はシンの安否よりもフェイトを殺そうと、どこから出したのか  
対戦車ライフルに火曜の弾丸を加え放つ。

ドガアアアン！

煙がフェイトがいた辺りを覆う。

煙が晴れると・・・少し傷つけられた障壁に守られたフェイトが  
いた。

フェイトは真祖や中央のメシアがいるので障壁には最も力を入れて  
いたようだ。フェイトは余裕の表情を崩さない。

「どうしたってもう遅い、満身創痍のネギスプリングフィールドの  
治癒魔法じゃその傷は直せない、それに彼は聖人という特異体質で  
ね、神の子の性質を受け継いでいる。」

フェイトは何事もなかったかのように語る。しかし、その意味を理  
解するのは十字教圏内ではない日本の中学生には難しかった。みん  
な言葉の意味が理解できず、フェイトを睨むだけだ。

「！！！！も、もしかして」

「ゆ、夕映、何か気付いたの？」

みんなの最も後ろにいて楓に守られていた夕映は、何かに気付いた  
のか明らかに驚愕していた、

それに気付いた明日菜は声をかける。それは読書に人生をかけてい  
ると言っている夕映が真っ先に気付くのが道理だった。

「どうやら気付いたようだね、聖書の中で神の子は槍によって処刑されている。つまりその性質を受け継いだ聖人にとって刺殺等の攻撃は天敵なんだ。まあ、まだ息があるようだけど、どのみち彼はここで完全に殺すけどね。」

フェイトが相変わらずの無表情でシンに近づく、今のシンなら魔法の射手一本でも殺すことが可能だ。

「させるかああああ！」

しかしそのようなことを簡単にさせる刹那達じゃない。

ガキン！ダアン！

「ムダだよ、君たち如きにこの障壁は破壊できない。それこそ真祖や中央のメシアクラスじゃないとね。」

刹那や真名、楓がフェイトを止めようと攻撃するが全く効いた様子はなく、フェイトは只前進する。

「みんな！そこどいて！」

明日菜が三人の背後からハマノツルギを振りかぶりフェイトの障壁を縦に切り裂く。

「君は僕への唯一の対抗策について何も考えていないと思っていたのかい？」

パシィ！フェイトは障壁をたやすく破壊したハマノツルギを掴み、それを引いて、それにつられ引っぱられた明日菜に蹴りを加える。

「うわぁあ！」

明日菜は何メートルも飛ばされる。フェイトは障壁を再構築して進もうとするが、

「私なら破壊できるんだろう？ 若造。」

ドガン！ 真祖の吸血鬼の全力の一撃がフェイトにもろに当たる。

バASHYA！ フェイトは50メートルほど飛ばされる、一撃の余波で周辺の地面がえぐれている。それほどの一撃を放つことが出来たのは、エヴァがシンを盟友と認めた故かも知れない。

「なかなかだ、真祖の吸血鬼、まさかあの一撃からこんなに早く回復するとは、しかしそれならここら一帯を・・・吹き飛ばす！ 冥府の・・・」

フェイトはシン達全員を吹き飛ばすつもりらしくフェイトは宙に浮き、頭上に魔法陣をつくり出す。

「ハハハ、ナイスだエヴァ・・・」

みんながあきらめた中、一人の小さな声が響く。

バキン！ バキンバキン！

「！？！？！？！？な、なんだこれは！」

フェイトの腕は吹き飛んでいた、フェイトの周辺には純白の羽根が



何枚もヒラヒラと誰かを祝福するように舞っている。

「竜王の殺息を喰らった物質はそのような羽根になる、ゴフツ！、その羽根は触れた物に多大なダメージを与える。ゲホッ！なんせ頭に触れただけで脳細胞だけを破壊するくらいだ……」

「な、なんだと「バキン」ぐあっ！」

フェイトが始めて顔に苦痛を浮かべる。もうフェイトは五体不満足だ、だが羽根は何枚も残っている。

「どうやら潮時のようだ、命拾いしたね、神の右席、シン・ファナリス・ハント」

フェイトは転送魔法で消える、月詠も逃げたようだ。

「そ、それよりシンさんを！助けて下さい！」

刹那は誰も助けられないと分かっているにも懇願する。

「私からも頼む、シンさんは大切なマスターなんだ。」

真名も冷静な言葉とは裏腹に目には涙を浮かべている。

しかし、返ってくる返事はない、いや

「まだ希望はある！」

エヴァがあきらめの空気を破壊した。

「近衛木乃香、こいつがシンと契約すれば助かるかも知れない、こいつの魔力量、才能は東洋一と言っている」

そう、木乃香の隠された才能はすばらしい、魔力量はナギスプリングフィールドさえも越える。

木乃香は自分が助けられると知り、とつさに動く。

「私やるわ、け、契約つてき、キスのことなんやろ？そ、それなら／＼／」

「ま、待て木乃香、そんな安直にこつちの世界に来ては・・・」

シンはこんな時にも人がこつちの血なまぐさい、ファンタジーとはかけ離れた世界に足を踏み入れるのを止める。

「フン、バカが！そんなこと言って悲しむ人間が何人いると思う、お前は救世主だ、ナギが死んだという噂が流れている中で、お前まで死んだら悪人はますますつけあがるぞ、それに近衛木乃香がこつちに踏み入れるのはもはや運命と言っている、必然だ」

エヴァはシンの言葉など聞かない

「しかし・・・」ドス「ウツ！？エ、エヴァ・・・」

「ちょ、ちょっとエヴァちゃんやり過ぎじゃ・・・」

エヴァはシンの頸動脈打ちをし、シンを気絶させる。それを見たみんなはまたしても言葉を失う。

刹那と真名はエヴァをジロリと見る。

「ウツ・・・そ、そんなに睨むな！！これもこいつのためだ！おい小動物！準備しろ」

「りよ、了解です！」

カモはシンの周りに魔法陣を書き始める。

「・・・ティオー！」

シンはこの声を最後に意識を手放した。

## 第二十六話 伝説対伝説（後書き）

どうも北中津です。竜王の殺息出ました。それと羽根も。羽根は当麻の脳細胞を破壊するほどだからこれくらい行くとおもいます。それでは次回。

第二十七話 答え（前書き）

どうも北中津です。

今回はあまり進みません。

## 第二十七話 答え

シン視点

「フィアンマ、学園都市で大規模魔術の発生を確認したのである。」

アックアが部屋に入ってきてそのようなことを言う。学園都市で？

「学園都市？何で魔術に最もかけ離れたあそこで大規模魔術なんか？」

神の右席の談話室の机に座っているヴェントも疑問に思ったようだ

「魔術は聖ジョージの聖域と竜王の殺息である。それに学園都市の人工衛星が破壊されたようである。」

ああ、そう言えばもうそんな時期か・・・俺はとうとう原作が始まったと今までの修行の日々を思い返しなから思う。

「そりゃあれだ禁書目録の自動書記が作動したんだろ、あんな大魔術それくらいしか思いつかん」

フィアンマはやはりそのことを知っていたようだ。

「竜王の殺息？つまりあの悪竜のプレスと言うことですかねー、アレは私たちの魔術に匹敵しますねー」

「はっ、俺の聖なる右の相手じゃねえ、それにあんな砲台覚える気にもならねえ」

やっぱり聖なる右の方が強いのか、使うのはもつと先だが、様々な結界が施された聖ピエトロ大聖堂を吹き飛ばす程だもんな

「そもそも、我々には使用できないのである、普通の魔術も使える我が輩でも技術的な問題で無理である。あれは禁書目録の原典の知識故の物である。」

やっぱり、あれはインデックスならではの魔術なのか

「でも……お前には出来るかもなあ」

フィアンマはこっちを向いてそんなことを言う。

「は？」

「ハハハ！過保護、過保護！」「相変わらずである」「相変わらずですねー」

「うるせえ！」

「知らない天井……じゃないな」

一応セオリーだから言っておく、どうやらここは宿のようだ。

さっきの夢は……久々に見たな、みんな……

それより俺はフェイトに腹を、って治ってる！？

「起きたようだね、シンさん。」

「真名、今日はまだ修学旅行じゃ」

真名が枕元にいた、今日は修学旅行最後の日じゃないのか。

「従者がマスターを残して遊べるわけないだろう」

フフと真名は笑う、そうか仮契約してしまったんだ、テオドラになんて言われるか・・・

俺は起きあがり

「俺はあの後、どうなったんだ」

俺は最もあり得る展開をそうであって欲しくないと願って聞く。

「残念だけどシンさんの思っている通り三人目の従者が助けてくれたよ。ほら」

やっぱりそうか、真名の持つ木乃香とのパクティオーカード見て確信する。

「やっぱり彼女がこつちの世界に来るのは反対かい？」

パクティオーカードを渡し、真名はそんなことを言う、俺のパクティオーカードを見る目のせいか、

俺が瀕死の状態でも反対したからなのかは分からない。だが

「もちろんだ、木乃香は今までも狙われる存在だった、しかしこつ



ちの世界に入りいつ来るか分からない敵に怯えながら生きることになる、しかも俺の従者になった事で敵は一気に増える。」

そうだ、向こうにその気はなくても世界は近衛木乃香を俺の従者と認識する。仮契約だから解除も出来るが救世主の元従者と言うことで調べられても、次には詠春の娘という事実とあの魔力量が来る。結局、魔法世界のよからぬ事を考える奴が、今まで一般人だった木乃香に興味を持たせるだけで問題なのだ。

「それならシンさんが教えればいいじゃないか、陰陽道、多少は出来るんだろう？」

まあ、それしかないな。陰陽道も家系からして扱えるだろう、しかし

「木乃香を疑う分けじゃないが、魔法を覚えると言うことは拳銃を常備することと同意だ。木乃香はやさしい、だが若い、それこそ刹那達が殺されたりした時、木乃香が怒りを完全に抑えられるか分からない。日本なんて平和な国ならなおさらだ。」

日本は平和だ。アメリカのように拳銃を持ち歩いたりしないし、犯罪率も高くない。そんな国で暮らしていた中学生が親友を殺されて正気を保つのは不可能だ、涙が枯れるほど泣くくらいならまだいい、しかしその殺した者を今度は木乃香が殺してしまうのが怖いんだ。

「だと言っているが、どうなんだ二人とも？」

真名が扉を見て言う、ここには俺以外いないが……まさか

「言っただろう、従者がマスターを置いて行くわけないって」

「シンさん……」

「刹那、木乃香」

刹那と木乃香が入ってきた。二人ともお世辞にも笑顔とは言えない。

「シンさん、ウチに魔法教えて下さい！……ウチ、今まで何も知らなくて、お父様やせつちゃんに知らないうちに守られてて、でもそんなのイヤや！何も知らずに自分だけ安全に生きてるなんて！」

木乃香は自分の胸の内を語る。刹那は木乃香の半歩後ろで何も言わず立っている。

「しかし木乃香、例えば刹那が殺された時お前は正気を保つてられるか？」

俺はもう木乃香に魔法を教える以外の道はない。すでに知ってしまった、仮契約してしまった。

もう自衛のための魔法を覚えてもらうしかないんだ。しかし、彼女のことだ必ず戦場に出ようとする。その時に生半可な気持ちで出て欲しくない。だから俺は問う。

「……」

木乃香は黙ってしまった。まあ、下手に返事するより迷った方がいい。

「シンさん。」

刹那が今まで閉ざしていた口を開く。その顔は何かを決心した者の顔だった。

「シンさんと私が初めてあった日、シンさんは聞きましたよね、お嬢様がいいと言っても周りが私を疎んで遠ざけた時、私がどうするかと、あの時は考えればいいと言いましたよね、今答えを決めました。」

私はお嬢様と一緒にいます何があっても、お嬢様がもういいと言うまで、お嬢様が一人でも戦っていけるまで。・・・だから私は死にません！ずっとお嬢様と、お嬢様の周りを守っていきます。だから、だから大丈夫です。」

刹那それがお前の答えか・・・いい答えじゃないか。

「せつちゃん・・・ううん、それじゃダメや、ウチも戦う。一緒に助け合っていけばいいんや。今は半人前かもしれん、でもみんなでがんばっていけばいいんや。」

「お嬢様・・・」

木乃香と刹那が見つめ合う。おーい百合の花が見えるぞー

「・・・勝った・・・」

「ん？何か言ったか真名？」

いいままで空気を読んで黙っていた真名が隣で何かつぶやいた気がしたが

「い、いや何でもないよシンさん。それより二人は答えを出したようだが。」

真名の言葉でまた空気が張りつめる。とつとつ手を繋ぎだした二人もこつちを向く。

「お前達の答えは聞いた。俺はこういう答えに正解もハズレも無いと思っている。一人一人が考えて考えて考えた答えが正解なんだ。だからお前達が答えを出した時点で合格だ。学園に帰ったらエヴァの所で修行だ。」

俺は立ち上がり二人に合格を言い渡した。二人は

「やったよせつちゃん！」

「こ、このちゃ！お嬢様！」

二人も喜びをかみしめ抱き合う？一方的ぽいが嫌がっていないからいいか。そして真名、なぜガッツポーズを？

「シン！ナギのアジトに行くぞ！すぐに準備しろ！」

タイミング良く、スパーン！と扉を開けてエヴァが入ってきた。紅き翼でスクナを封印した時、一時的に拠点にしたのあそこに行くのか。

「お前と近衛詠春しか知らないアイツの暗号があるかも知れないからな！一緒に来い！」

ずかずかと入ってくるエヴァ、ここは俺の部屋なのに・・・

「わかったから、表で待ってる。準備をしたら行くから」

シッシツと手でエヴァを払う。エヴァは三分で来いとか言っ出ていった。相変わらずの態度だな。

吸血殺しの血でも採取しておけばよかった。

「さあ、着替えるからお前も出てけ。先にみんなと合流してる。」

「私は別に着替えてもいいが？」

何を言う真名。フッフじゃない

「／／／わ、わたしも別にこのままでも／／／／」

刹那お前まで・・・

「わたつ、わたしもええ、よ／／／・・・きゃ」

ギロオ！目怖！前の二人怖！それより

「いいから出てけえ！」

ポーンと三人を部屋から出す。擬音が凄いな。さて、着替えに着替え。

刹那視点

「お嬢様、さっきの言葉はどういう事ですか？」

「そうだ、じっくり教えてもらおうかな……」

私と真名がお嬢様の問題発言について問う。これ以上ライバルが増えてたまるか！

「え、えーとお……シネマ村の時にかっこえなくて思ったり、昨夜からさっきまでずっとウチ達のこと本気で心配してくれて……きや」

「「キヤ じゃなーーーーーい！！！！！」」

ハモった！真名とハモった！しかもなんて早いほれ方だ！さすがお嬢様。

「それに刹那！君はシンさんではなく木乃香じゃないのか？」

いきなり真名がこっちを向いて言う、何だと！！??

「な、何でそうなる！」

もちろん違うお嬢様はライクでシンさんは……ラ、ラブなんだ

「—————」

「せっちゃん、せっちゃん、声に出取るで」

「フッフ、刹那、シンさんの部屋の前でよく言えたな。」

サアーーーーー、耳に聞こえるようだった。シンさんは！

気付いていないか。

「それより、二人もそうみたいやし、これからライバルとしてもよろしゅうな！」

終わらない女の戦い、木乃香、参戦。

しかし、三人は知らない。シンと最も始めに仮契約した一人の姫のことを……

## 第二十七話 答え（後書き）

どうも北中津です。

シンのスーパーチャートタイムは終わりましたが

スーパーハールームタイムが始まりました。

それがいつまで続くか……。分かりません。



## 第二十八話 帰還（前書き）

どうも北中津です。

修学旅行編終了です。

## 第二十八話 帰還

### 第三者視点

「ここがナギの日本での拠点です。ずっと使っていないから汚れているかも知れませんが。」

詠春とシン、そして真名を加えたネギ一行はナギの日本での拠点に来ていた。

京都にあるにしては洋風の建物で、手入れされず生い茂っている木々の隙間からは天体観測用の望遠鏡が見える。

「ここが父さんの……皆さん！行きましょう！」

ネギは憧れの存在である父の拠点ということで、教師と言うことも忘れてはしゃいで入っていきみんなもそれについていく。

「す、すごい本……」

入ると4メートルほどある本棚に詰まった本がみんなを出迎える。のどかや夕絵などの図書委員は感激し一目散に走っていく。しかし本はギリシャ語やラテン語など中学生には難解な文字の本ばかりで読めないようだ。

「アニキ、何か手がかりはあったかい!？」

「うーん、これと言ってないな」

みんなは別々に家を見て回り、ネギはナギの実験室のような部屋

にいる。日記や実験のレポートなどを読んでいるがナギの消息を記す物は見つからないらしい。

「ネギ！此処以外はあらかた見て回ったわよ、私たちだから見落としがあるかも知れないけど、何もなかったわ。」

明日菜を筆頭にのどかや刹那など魔法関係者が入ってくる、夕映やハルナなどはまだ本を読んでいるようだ。ナギの手がかりは見つから無かったらしい。

「あれ、これってお父様？」

木乃香が見つけたのはフラスコや書類に紛れて立てられた写真。二十年前、大戦が終結した時に撮った写真だった。

「おや、これは懐かしいですね、真ん中がナギ、その隣に私と逆側にシンですね。」

写真には15歳のナギ、若りし頃の詠春、全く老化現象が見られないシンが写っていた。

「お父様若い、でもシンさんは年取っていないな。」

確かにそうだ、今のシンと写真のシン、しわ一つ増えていない。みんなも写真と本人を何度も見比べる。

「そうじろじろ見るな、別にいいだろ。こつちの世界には人間より長命なんてごろごろいる。王族から人間じゃなかったしな。」

「フ、ヘラスとウェスペルタニアのことが確かにあの二つの一族

は人間とは違うな。」

詠春とシン、そして魔法には精通しているが魔法世界にはあまり行ったことがない真名以外に魔法世界について知っているエヴァが気付いた。

ヘラス帝国は亜人が多くいる国で、その王族も亜人でありテオドラがこれに当たる。今は無きウエスペルタニアは人間が多かったがその王族は創造神の末裔と呼ばれており代々異能を持っている。これにはアスナが当たる。

「・・・・・・・・」

「どうかしたんですか明日菜さん？」

さつきから何も話さず、何か考え込んでいるように見える明日菜に隣にいた刹那は声をかける。

いつも騒がしい明日菜が黙り込んだらさすがに不審がったようだ。

「え！？い、いやちよつと・・・・・・・・この写真始めて見た気がしなくて、それにそのウエ、ウエス、ウエスペルタニア？それって・・・」

「

「そ！それよりシン！長命と言えば彼女も！」

詠春は強引に話を変えようとする、明日菜の記憶が戻りかけているからだろう。

記憶を消しても、小さなきっかけで戻るかも知れない

「あ、ああ！テオドラのことか！確かにアイツは長命だな！」

シンも焦って話を合わす、しかし何故この話題だ、と詠春を睨む。

「テオドラだと???・・・お前それってヘラスの第三皇女じゃないのか！何でお前がそんな奴と、しかもアイツってなんだアイツって！」

エヴァは気付いたようでシンにつかみかかる、しかしこの中にいる大半の者は事の重大さに気付いていない。

「いやエヴァ、これでも俺は紅き翼だぞ。テオドラとは大戦の時に知り合ってそれからの付き合いだ。」

シンはエヴァをどかして話す。エヴァはあ！という顔をして納得。

「へえ……………」

「そうなんですか……………」

「そうなんか……………」

しかし、女達の目は危険な光を孕む。

「そう言えば紅き翼って英雄いうけど、思ったより少ないのねもつというかと思っただわ。」

明日菜はさっきの疑問を忘れたのか、新たな疑問を口にする。確かに英雄の集団でも10人にも満たない人数だ、普通は戦争を生き抜けない

「紅き翼とは言い換えれば旅をしていたナギについてきた集団ですから、ナギと戦ったり手を組んだりしてナギを気に入った人が集まったんです。確かシンが最初の仲間でしたよね。」

明日菜はへえ〜と感心している。

手を組んだりしたのは詠春やアル、戦ったのはラカンだ、ゼクトやシンはそのどちらでもない。

「俺はナギが魔法学校時代から知り合いだった。始めてあったのはアイツが果物屋でいたずらした時に俺がたたきつぶしたんだ。それからよくナギは村の教会に来たな、それで布教活動も兼ねてナギと旅に出たんだ。」

ナギは英雄などと言われるが元々不良だ、そんなナギとシンの関係は悪ガキと先生のような関係だった。

英雄がいたずら？とほとんどの人は首をかしげるが、詠春、エヴァは光景が簡単に浮かんだようだ。

「それよりネギ君、……………何も見つからなかったな。」

木乃香はオオズレしていた話を元に戻したが、空気が一気に冷める。

エヴァも心なしか残念がっているようだ。

「大丈夫です！……確かに何も見つかりませんでした。父さんのことがたくさん知ることが出来ました。それに、ここの物をいくつか持って行って、学園で調べたいと思います。」

ネギは思いの外落ち込んでいなかった、僅かに見えた希望をつかんでいた。

みんなもネギの言葉に頷く。

「みんなー！記念写真とろうよ！」

そこに今まで他の所にいた者も集まる。

「っっハイ！チーズ！」

その希望は小さいかもしれない、しかしネギにとっては大きい手がかりであり、新たなスタートでもあった。

「みんな新幹線に乗ってくださいーい！」

場所は京都駅、ワイワイガヤガヤと各クラスの生徒が新幹線に乗る。

その中にはシンの姿もあった。

「楽しかったねー」「ククク、写真、高く売れそう」「来週から学校かー」

生徒の中には思い出を語り合う者、来週からまた始まる日常にうんざりする者、不純すぎる理由で喜ぶ者と様々だが。

3-Aの新幹線の車両、その最後尾にひととき異質なオーラを放つ席が・・・

「さて、大帝国のお姫様と仲がよろしいシンさん。話を聞かせてもらおうか・・・」

シンの逃げ道をふさぐように木乃香が隣に座り、前には真名と刹那がシンに問いただす。

「な、何を」「そのテオドラって人との関係だ（です）（や）  
！」「あ、ああ」

「ちょっと何アレ！もしかして修羅場って奴？」「木乃香と桜咲さんと龍宮さんが」

「ククク、いい気味だ」「シスターシャークティが聞いたら・・・」

「

周りがこそそと話すが三人には聞こえていない。

シンは周りに気付いてまずくないかと思いつながらもテオドラとの関係を話す。

「と、言うわけだ。俺はテオドラとそんな関係じゃない。」

（どう見る真名？）

（恐らくシンさんが気付いていないだけだ）

（そうやな、シンさんこつこつに鈍感そうやし）

（ということは）

（（（四人目がいる）））

3人の心、いや恋心がシンクロした時だった。



「クシュ！・・・誰かが噂してるのかな、それにしてもシン、なかなか帰ってこないのじゃ、手紙でも出してみるかの。」

テオドラ本人のあずかり知らぬ所で、参戦。

## 第二十八話 帰還（後書き）

どうも北中津です。女の戦いテオドラ参戦です。あと明日菜の記憶はちよつと強引だったかも知れません。シンハーレム拡大は話の進み具合で決めたいと思います。

**第二十九話 弟子入りのための弟子入り？（前書き）**

どうも北中津です。

今回から弟子入り編です。

## 第二十九話 弟子入りのための弟子入り？

### 第三者視点

「ハント神父ー！」

最近エヴァの別荘にすることが多いシンだが今日は神父として教会にいる。

シンが教会の周りを掃除していると、制服姿の美空が来た。

「おお、美空、修学旅行ぶりだな。」

シンは修学旅行から教会に顔を出していない。

シンはフェイトとフェイトについている魔術師について調べるため、麻帆良を離れていた。

そして情報屋などを回って昨夜帰ってきた。

「ハント神父！今まで何してたんですか！？あんな凄じいことがあって翌日からいなくなっちゃって、シスターシャークティなんて、見捨てられたー！！」とかいって号泣でしたよ。」

どうやらシンが離れていた間にいろいろあったようだ。

「それはさっき見た、すまなかったな。・あぁ、あと京都では旅館を守ってもらって悪かったな、何もなくて良かった。」

シンは美空がくる前にシスターシャークティに会っていた。その時はこいつ本当にシスター？と思う泣きっぷりで周りみんな引いたらしい。

「お、おやすいご用でしたよ！これでもシスターですし！（ぐっすり寝てたなんて言えないー！）」

シン達が湖で死闘を繰り広げている間、他の魔法先生が守っている中で美空は一般の生徒に混じって眠りこけていた。そんなこと言えない美空の額には汗がだらだらと。

「それより、ネギ先生が最近古菲に中国拳法を習っているらしいですよ。毎朝世界樹の広場で集まってるって。」

美空は急に話題を変える。ボロは出したくないからだろう。

「中国拳法か」

「ネギ君？エヴァちゃんに弟子入りするためにしてるって言うってたよー」

シンは美空の話を聞いてから、気になってネギの同居人である木乃香に電話で聞いてみた。

木乃香はシンからの電話に始めは焦ったが、普通に答える。

「エヴァに弟子入りするために何で古菲に弟子入りしたんだ？まあ本人に聞けばいいか。ありがとな木乃香、今度礼はするぞ。」

「そうかー楽しみにしてるわー（デート！デート！）」

電話を切る

弟子入りのための弟子入り？とシンは思うがエヴァのことだからどうせ無理難題をふっかけたんだろうと結論づける。

「美空、ちよつと教会を空ける、留守番頼んだぞ。あと魔法の練習もしておけ。」

シンは電話を置き、修道服に着替えた美空に留守番を頼む。さすがに教会を空っぽには出来ない。

最近は一スター達の魔法を見てやる時間がなく、自主練がほとんどであり例によって今日もそうであった。

「えーまたですか、お気おつけて」

美空は力なくシンを見送って、また一スターシャークティの愚痴を一人で聞かなくてはいけないとうなだれる。

「ぼーやの弟子入り試験か、内容はぼーやが茶々丸に一撃入れることだ。」

「無理だろ」

シンはエヴァの家に行き、弟子入りの試験についての内容を聞いた。シンはどうせ無理難題だろうと思っていたが、シンの予想の斜め上を行ったらしい。シンはソファに座っているエヴァの対面でお茶を一口。

「しかし、ネギに勝機はあるのか？茶々丸は結構な使い手だろう。」

茶々丸は合気柔術を会得しているエヴァと、真帆良の最強頭脳と呼ばれ、古菲と互角に渡り合える中国拳法の使い手の超鈴音が作ったガイノイドであり、戦闘技術は計り知れない。

茶々丸とシンが戦えば、シンの聖人の力のこり押しで勝てるかも知れないが、そんな力がないネギには勝つ見込みが極端に低い。

「茶々丸の計算では勝率3%らしいがそんなものに負けるようじや、私の弟子になる資格はない。しかし、もしぼーやが弟子になれなかったら貴様の元に行くかもな。ククク」

茶々丸の計算はおおよそ正解だろう、付け焼き刃の中国拳法で勝てるわけがない。

エヴァもまた茶を一口。

「試験は今夜だ。今頃最後の練習でガキ共と楽しく修行中だろうさ。世界樹の広場だろうから見に行ってみろ。」

エヴァは広場を指さし、言う。

「ああ、そうするよ。」

シンは立ち上がり、外に出る。古菲は一般人の中では最強クラスの人間だ、そんな者に一对一で教えられたネギの成長に興味を持ったシンだった。

「あ！シンさん！」

シンが広場に行くと3-Aの何人かが夕食をとっていた。  
その中の木乃香がシンを見つけて手を振って呼ぶ。

「頑張ってるようだな。エヴァから聞いたぞ、試験は難しいが100%負けるわけじゃないんだ。月並みだが、あきらめなければ勝てるさ」

シンは木乃香の隣に座りながらネギに励ましの言葉を言う。修学旅行の一件からシンはネギを多少評価しているようだ。

「す、すいません。あの春の時ありがとうございました。」

大河内アキラと和泉亜子がシンに礼を言う。春の時とはシンが二人をナンパから助けたことらしい。  
シンは少し考えて、思い出したらしく。

「ああ、あの時の娘か。気にするな、アレは向こうが倒してくれと自分からアピールしていたようなものだ。」

確かにあの手のナンパは倒される以外の道がない。あれが運命なのだろう。

「そう言えばシンさん。なかなか出来そうアルネ、どうアルか？  
此処で一勝負。」

古菲は夕食を食べ終え、食後の運動代わりにシンに勝負を挑む。  
ネギは夜の試験が控えているので戦えないので、高レベルの戦いを見せるだけでもしようと思ったのだろう。

「俺は我流だぞ？それでもいいなら構わんが。」



シンの戦闘は基本的に我流である。メイスの使い方はアックアから学んだが、格闘や大太刀やアスカロン、フルンディングは実戦で学んだ。それ故に非常に実戦向けで中国拳法のような形式美はなく、悪く言えば野良犬拳法である。

「もちろん、望むところアル。」

しかし、強い者と戦う事のみを求める古菲には関係なかった。

「それじゃあ、」

シンは立ち上がる。

「尋常に」

古菲は構える。

「「<sup>アル</sup>勝負！」」

二人がぶつかり合った。

「はっ！」

シンは正拳突きを叩き込む。まずは小手調べらしい。

「甘いアル！」

古菲は壁を貫通するほどの正拳突きに手を添えるようにかわし、

そのまま肘打ちをする。

「ぐっ！」

肘打ちはシンの腹に当たるが、後ろに飛んでダメージを減らし、聖人の体によりほとんどダメージはない。シンは瞬動で距離を詰め直し蹴りを喰らわせる。

古菲は両手を交差させ防ぐ、そして至近距離での

「はあああああああ！」

「うらあああああ！」

ドガ！バキ！

殴る殴る殴る殴る！もはや拳法もあつた物じゃない。殴り合いながら二人は次のアクションのタイミングを計っていた。

動き出したのは古菲だった、シンの腕を掴み。そつと、手を添える。

「きまつた、アル」

バン！少し時間が経ってから、シンの体から巨大な音が。

「なかなかの浸透だ。だが……俺は普通の人とはちよつと違うんだ。」

ドン！

「かはっ！、……………ズ、ズルイアルよ。」

古菲の浸透剄を物ともせず、シンは油断した古菲に重い一撃を入れる。

「悪いな、戦闘技術だけじゃ完全に負けてたよ、俺も精進が必要かな？」

この勝負、シンの勝利。

「大丈夫ですか！？古老師！」

ネギが古菲に駆け寄る。

さすがにあの一撃の重さは一般人でもわかつたらしく、みんなも集まっっていく。

「ははは、弟子の前で情けないアル。シンさん、私の負けアルネ。」

「

「そうでもないけどな、技術だけならお前の方が上なんだからな。ネギ、いい師匠を持ったな。」

「ハイ！」

ネギは自分の師匠に誇りを持つ。古菲は中国拳法の師匠としては最高の師匠だろう。

「こらー！私だって！教えるのは上手いんだぞ！」

「どうかしましたか、マスター？」

「い、いや、何でもない」

空気を讀んだ吸血鬼。

## 第二十九話 弟子入りのための弟子入り？（後書き）

どうも北中津です。

今回は弟子入りのきっかけと、組み手です。

相変わらず戦闘描写は苦手です。

ちよつと今回は無理矢理文字数稼いだ感もありましてすいません。

### 第三十話 試験とその後

#### 第三者視点

「それではぼーやの弟子入り試験を始める！条件は分かっているな。貴様が茶々丸に一撃加えられたら合格、その前にくたばったら不合格だ。」

ヨーロッパ風な時計塔が十二時を指す、エヴァと茶々丸、ネギと仲間達が世界樹の広場に集まり、エヴァが試験内容を再確認する。

「ハイ！よろしく願いします！」

ネギは拳を合わせ中国拳法の礼をする。対する茶々丸はよく見るメイド服や制服姿ではなく、動きやすいラフな姿でいる。

「それでは始め！」

エヴァが開始を宣言した。

「行きます！」

茶々丸はネギに突進し、左ストレートを放つ！

「契約執行！90秒間ネギスプリングフィールド！」

ネギは自分に魔力供給をし左ストレートを防ぐ。

パカッ！茶々丸の右肘が開きブースターが飛び出し、強烈な右ストレートがくるがネギは紙一重でかわす。

それからはお互い攻めて防ぐ状態になる。

「自分への魔力供給、よく考えたな。……さてどう見る、シン。」

エヴァは二人を見ながら隣にいたシンに試験の様子を聞く。まだ始まったばかりだが、二人は激しい撃ち合いを始めている。

「長期戦はネギの負け、無作為に突っ込んでネギの負け、勝つとしたら短期でのカウンター位しかないだろうが」

「ああ、茶々丸もそんなこと重々承知だ。まあ茶々丸は、多少手を抜いているから行けるかもしれんがな……チツ、あのボケロボ」

シンは客観的に二人を見る、長期戦ではジリ貧になるだけだ、短期決戦で決めるしかない。

そんなこと分かっている茶々丸だが、何の気なのかその隙を与えている。その理由を知るのもう少し先の事である。

「ケケケ、ゴ主人二似タンジャネーノカ？最近丸くナツチマツテヨー、アーソレトシン、才前の頭貸セヤ、コツカラジャ、ミエネー」

エヴァの一番最初の従者で、従者の中で唯一エヴァにタメ口なチャチャゼロがエヴァを冷やかす。

かつて闇の福音などと呼ばれたエヴァだが今では半ギャグキャラ化である。

「あいよ」

ポンとシンは動けないチャチャゼロを頭に乗せる。いつも茶々丸に乗っているチャチャゼロは今回はチシンの頭である。

「オッ見エルゼ見エルゼー、妹ヨリ眺メイイジャーネーカ、ヨシ！  
ココハ私ノ特等席ニ決定ダ！」

「姉さん！？」

チャチャゼロはシンの頭を気に入ったようである。それを聞いていた茶々丸はちよつとシヨック。

バキッ！

「うわっ！」

「きゃああ！」

シヨックを受けながらも、着々とネギを痛めつけている茶々丸。ネギは狙いのカウンターをかわされ、魔力供給もなく、ボロボロである。それでも立ち上がるネギを観客も見えていられない。

「やさしい神父様は止めないのか？迷える子羊が痛めつけられてるぞ」

エヴァは隣で静観しているシンに言う、しかしシンは顔色一つ変えず

「アレが迷える子羊の目か、言うなれば千尋の谷に突き落とされただけの獅子だな。アイツはなんだかんだでナギの息子だ。アイツのあきらめの悪さ、知ってるだろう？」



「ぐ・・・た、確かにそうだが・・・」

シンは助けるつもりはないらしい。この試験がネギが決めたことで、その結果がアレならシンは関与しない。それにあの程度で負けるようなら元々ダメだと言わざる得ない。

「ネギ君は大人なんだよ！今・・・今止めたらダメなんだよ！」

シンが顔を戻すと、3・Aで最も子供っぽいまき絵がシンの向かいで言っていた、それをみんな聞き入っていた、茶々丸も・・・

「っ！茶々丸！」

「えっ？」

パシ、弱々しい、触れるくらいの一撃、確かな一撃が茶々丸の顔に当たる。

「へ・・・へへ、い、一撃入れました。」

ネギは安心したのか疲労故なのか、その場に倒れる。

「マスター」

茶々丸はネギを抱え、エヴァに判定を仰ぐ。

「~~~~~！！！！ネギスプリングフィールド、ご、合格だ」

歓声が上がった。

「くそ～～～あんな青い言葉に～～」

エヴァはまき絵の言葉に負けたも同然でかなり悔しがっている。

「だが、まき絵の言葉も正論だ。」

シンはニヤニヤしながらエヴァを見る。子供っぽいまき絵の言葉は中学生が言える言葉じゃなく、シンも感心していた。

翌日

「それで何のようだア……クウネル」

「いやあ～今度はちゃんとしてくれましたね！」

教会、ワインを飲んでいたシンにアルが訪ねてくる。アルはシンにちゃんと名前を呼んでもらったようで、上機嫌だ。

「……………」

「おいどうした！？今回はちゃんとしたらう」

シンに言葉にアルは反応しない。

「貴方も言っして下さい」

私ですか……教会、ワインを飲んでいたシンにクウネルが

訪ねてくる。クウネルはシンにちゃんと名前を呼んでもらったように、上機嫌だ。

「OKです。」

「なんのことだクウネル？」

「いえ、こっちのことです。」

なんだこいつ。

「それで何のようだクウネル。わざわざ此处まで分身をよこして」

シンの元に来たのはクウネルの分身だった、本体はドラゴンの守る地下にいるらしい。

「私の元に来てみませんか？なかなか面白いものが見られますよ。」

「面白い物？お前の面白いは怖すぎるぞ。」

シンは今までの経験から特別警戒に入る。クウネルは笑顔のまま。

「ははは、そう言わずに」

グワツとシンの足下に穴が空き。

「これは転送用の！クソオ~~~~~」

残ったのは、もぬけの殻の教会と空のワインボトルだけだった。

「ドラゴン!?!?!?なんでこんな物があゝゝ!」

「に、逃げますよ、夕映さん!のどかさん!」

「ははは、こんな物がある負けじゃないですか。」

「そうだねゝ私初めて見たゝ」

「二人ともー!ー!」

「ネギ先生、逃げましょう。」

「茶々丸さん!」

「で、これが面白い物が・・・クウネル」

「若き者のあふれる勇気!探求心!素晴らしいじゃないですか!」

二人はドラゴンが守っていた部屋の中でネギ達のやりとりを見ていた。シンは呆れかえっているがクウネルは満足らしい。

「もちろんこれだけじゃないですよ、昨日のキティの試験素晴らしいじゃないですか。」

クウネルは話を変える、どうやら昨日の試験を見ていたらしい。

「キティ？・・・」「エヴァのミドルネームですよ」ああ、エヴァのKってそう言う意味なのか、まあネギにしては上出来だっただろう。」

シンはエヴァのミドルネームに驚きながら、テーブルに置かれた紅茶を飲む。

「あきらめの悪さは、ナギらしかったですね。彼の将来が楽しみです。フッフ・・・さて、本題ですが」

シンの向かいに座るクウネルの目が変わる。その目は大戦の時の目だった。

「シン貴方、シスター通信集めてますか。」

クウネルが大戦時、シンにシスター通信を薦めた時の目だった。

「・・・誰があんなの集めるかああ！！！」

ドガアア！

「おお！これがジャパニーズ卓袱台返し！シン・・・まさか会得していたとは。」

「お前・・・巫山戯てるのか？」

シンは大太刀を取り出す。

「いえいえ、そうだと思って・・・シンの従者に送っておき

ましたよ。段ボールで」

「は？」

ブルルルル

シンの携帯電話が鳴る。名前を見ると真名からだった。

「や、やあシンさん、今朝私と刹那に段ボールがふたつ来たんだ。差出人は書いてなかったんだが、君に届けてくれと書かれていますね。・・・貴方は巫女服には興味ないかな？それなら私がっ！ちよつと待て刹那！」

「シンさん！私も袴姿が有りますよ！それに・・・シンさんがそんなのでも私は／／／／／」

ガチャ

ブルルルルル

「シンさーん？なんかシンさん宛の段ボールがウチに届いたんだけど、開けていいん？」

「フッフ、彼女には刺激が強いと思ひまして、貴方宛にしておきましたよ。変な影響を与えたら詠春がうるさそうですし。」

「木乃香！今から取りに行く！それを守れ！特に刹那と真名に！・・・クウネル、何時か殺す！」

シンは走っていた。

「パクティオーカードで召喚すればいいのに、此処は飽きませんねえ」

そのころの茶々丸

「ハカセ」

「おっ！どうしたの茶々丸！定期検査はまだだと思っただけぞ。」

「あの・・・頭を変えて下さい！」

姉思いの妹の一時。

### 第三十話 試験とその後（後書き）

どうも北中津です。

お陰様で三十話まで行くことが出来ました。

これからもある神父と魔法先生をよろしく願います。  
次回から悪魔襲撃編に入ります。



### 第三十一話 雨、そして始まり（前書き）

どうも北中津です

今週から学年末テスト期間に入り、多忙な日々が予想されます。  
よって更新が滞る事があるかも知れませんがご了承下さい。

## 第三十一話 雨、そして始まり

### 第三者視点

#### 雨の降る夜

コートを着た男が学園を訪れる。しかし、コートの男は何故か止まる。

「協力者がいると聞いたが。」

コートの男は傘も差さず周りを見わたす、しかし他に人影はないように見えたが

「ヘルマン伯爵ですね、お待ちしておりました。」

ヘルマンの背後から誰かが声をかける。

「……！おや、全く気付かなかった、まったく……私も衰えたかな？」

ヘルマンが振り向くと、爽やかさが服を着たような高校生くらいの青年がいた。こっちは傘を差しているようだ。

「犬上小太郎の居場所は確認しています。」

二人は並んで歩く雨の中を

「フフフ、まだ行けるだろう、若いんだから」

「ま、師匠、僕！も・・・もう」

「ちよつと何してるのよー！」

雨が降る中、ネギー行は晴れ渡る空の下にいた。

「お、お前等！・・・まったく、勝手に入ってくるとは。」

ネギー行とエヴァはエヴァの別荘に来ていた。明日菜達は初めてらしく魔法のすさまじさを再確認している。他の者もあちこちを回っているようだ。

「シンさんも教えてくれればいいのに、・・・それに真名何でお前がいる。」

刹那は茶々丸と組手をしていたシンに言う。シンは古菲との組み手以来、格闘の修行をしている、ネギほどではないが、聖人の並はずれた身体能力によりかなり進歩している。

「従者として、マスターの側にいるのは普通のことだろう？」

真名は組手を終えたシンにタオルを渡す、何も言わずに渡す辺りかなり先を越されたと刹那の中は焦りと嫉妬が入り交じる。

「エヴァがうるさくなるから口止めされていたんだ。まあ、もう意味はなさそうだが。」

「オイ、メシの用意が出来たぞ」

エヴァがシンを呼びに来る。他の人はもう宴会を始めているらしい。

空は赤みがかっており、丁度夕食時だった。

「行きましょうシンさん！」

刹那はシンの腕を引く。どこか、焦っている刹那だった。

「お！おい刹那！」

「ケケケ、何時ノ時代デモ女ツテモンハ」

夕食後

「プラクテ・ビギ・ナル・火よ灯れ！」

夕映とのどかは初心者用の杖を片手に呪文を唱えていた。本好きな二人が魔法使いに憧れるのは分かり切っていたことだろう。

「うゝん出ないなゝ」

初心者である二人にいきなり魔法を使うのは難しかったらしい。

二人は杖を持って首をかしげる。

「みんな何してるのー！？」

他の者も興味を持ったようで、わらわらと集まる

魔法を知ったばかりの者にとって、初級魔法なら自分にも出来るかも・・・、と言う淡い夢を持ったりするものである。

「何してるんだ、お前等！」

「え？シンさん？何ですかその・・・格好」

シンも声を聞いてやってきた。紳士服の上にエプロン姿で、刹那や真名などシンの人柄を知っている人にとっては違和感バリバリである。エヴァは大笑いしている。

「ああ、ちよつとデザートをな、お前等此処出たら学校だろ？滋養強壮、体力回復etcの術式が盛り込んであるマフィンだ。ここに来てから作ってなかったからな。一応美肌も入っているが。」

「「「頂きます！」」」

女は正直である。

シンは天草式でこのマフィンの作り方を教えてもらったらしい。偽装を主とした天草十字凄教は日常のさりげないもので術式を作るのでこれもその一つであり、シンの自室は術式だらけである。

「おいしーい！」

味もなかなかである。何たってシンの料理スキルはまだローマ正教にいたオルソラ直伝である。

それに五和の教えが合わさったので、かなり、旨い。

「わ、私だつてこれくらい」

「・・・・・・・・負けた。」

刹那と真名のような戦いに生きたりしていた二人は好感度を上げ

るカードを一枚奪われうなだれる。

「シンさん、ウチにこれの作り方教えてくれへかな？出来れば二人つきりで・・・」

3人の中で料理が出来る木乃香はシンに教授を仰ぐ。  
この勝負、木乃香の勝利

（そ、その手があったかああああ）

（教えてもらっ二人つきり！好感度アップ！お嬢様、恐ろしい娘）

教えてもらうという料理下手ふたりに残っていたカードも木乃香に切られてしまった。

「シンさんって、ネギ君のお父さんの仲間だったんでしょ！？じやあこれの魔法のコツとか知らないの？」

マフィンを食べていた朝倉がシンに聞く、確かに英雄の一人であるシンは何かしらのコツを知っているかも知れない。

「悪いな、俺は普通の魔法は使わん。ほら」

シンはルーンのカードを人差し指と中指で持ち、火をともし。それと共に、カードは燃え散る。

「へえー旦那、ルーン魔術とはなかなかマニアックだねえ」

ネギの肩に乗っていたカモが言う、魔術は無くてもルーン魔術く

らいはあつたらしい。

「はっ、こいつは普通の魔法は使わないんだよ、だから無詠唱であの威力、卑怯なんて物じゃない。」

マフィンをモクモク食べているエヴァが言う。エヴァも600年生きて見たことがないらしい。

「他にその魔法を使う人っているんですか？」

「少なくとも教えた師匠がいるだろう、以前言っていた。何処の誰かは知らんが。」

ネギの質問にエヴァが答える、しかし、エヴァのひと言で師匠は誰？という質問が誰の口からでもなく出てくる。

「まあ、……个性的な人だった、とだけ言っておこう。」

シンは遠くを見る目で行った、それを察した、刹那、木乃香、真名、エヴァは話題を変えた。

「お前等！もう寝ろ！シンはどうせ魔法を教えないだろうし、ぼーや……まさか私の教えじゃ不満かな？」

エヴァはわざと迫力を出していった、空気を読んだ刹那や木乃香はすぐに寝室に向かう。それにたられるようにみんな寝室に向かった、残ったのはエヴァと茶々丸、真名だけだった。

「悪いな、エヴァ。」

シンはエヴァの心境が分かっており、エヴァに礼を言う、その顔は元気がなかった。

「フン、あのまま行ったら空気が一気に冷めてたぞ、しかしその魔法の事、何時か話してもらっぞ！」

「私にも教えてもらっよ、従者として。」

「何時かな……」

シンは空を見ながら答えた。

「あとあの本についてもね。」

「落とすな！」

夜、月が昇り、静かさが全てを支配する。

そこに、覗き見という目的に一つの本に群がる者達

「ネギ君……こんな事が」

「うつ、うつ、ひくっ」

「ケケケ、死ンダ！ヤット死ンダゼー」

ネギが明日菜に自分の過去を教えるために精神をリンクしている時、他の物はのどのアーティファクトでその過去を見ていた。

ネギの過去に驚愕する者、泣き出す者、悪魔が死んで興奮する者



様々である。

「父さーん！」

どうやらネギの過去は終わったようだ。最後にはナギと思われる人物が飛んでいくところで終わった。ナギを知っているエヴァとシンはのどかのアーティファクトを通して見ていたので本物かは判断できない。

「僕はきつと父さんを見つけます。」

「ネギくーん！ウチらも手伝うでー」

みんながネギに駆け寄る。ほとんどの者が泣いていて、泣いていないのはシン、エヴァ、真名くらいだった。シンは何か考えている。

「ネギ、失礼を承知で聞くが、助かったのはお前とネカネという娘、アーニヤという娘だけか？」

シンは真剣な顔でネギに聞く、みんなもその真剣さを感じとったのか黙る。

「は、はい、助かったのはその3人だけで他の人達は……石化されてしまいました。」

ネギは少しつらそうな顔をして答える。シンも苦しそうな顔をして。

「お前の村の神父でビার্ジオという人を知らないか、あの村に俺がいた時に世話になったんだ。」

そう、シンは初めてこの世界に来た時世話になった神父、ビアー  
ジオの事が知りたかった。

しかし、ビアージオの正体をシンは知らなかった。

「ビアージオ・・・いえ僕の村の神父様はそんな人じゃありませんでした。もしかして！僕の村のファナリス教会って。」

「ああ、俺がナギと旅に出るまで居た教会だ。」

「ククク、しかし教会に高名な神父の名を付けることはあるが・・・ファナリス（狂信者）教会とは」

ファナリス教会とはシンが紅き翼として有名になってから付けられた名だ。

ファナリス教会はヘラス帝国にもいくつもあり、亜人が多い中、隔たりなく救済活動に勤しんだシンに感動し、入信した者達が神父を勤めている。

「それじゃあ、ネギ君の前途を祝して」

朝倉がどこからか、大人のジュースを取り出し

「・・・かんぱーい！」「」

雨が降る外

二人の男、そのうち傘を差していないコートの男が言う

「しかし、悪魔の隣でよく平然と居られるね。」

それに答える傘を差した爽やかな男

「此処は結界が発達してますし、僕にだって自衛の手段くらいあります。それにこの学園では僕は一般人ですから、助けを呼べばすぐに誰かが駆けつける。」

雨は降る。

「はっはっは！私相手にそこまで言えるとは！君は何のためにそこまでできるんだい？出来る願いなら格安で受けるが？」

悪魔故なのかここで契約を求めてくる。

「そうですね、ちょっと前ならいけ好かない、元魔術師現科学者を殺してもらおうと思いましたが、今ありませんね。大切な人もある人に任せてきましたので。まあ、こっちでも大切な人は出来ましたが。」

「おや、思い人かい、君も人間らしいじゃないか！」

傘を差す男は空を見る。その空は雲と雨が全て覆っている。

金星はまだ……………見えない。

### 第三十一話 雨、そして始まり（後書き）

どうも北中津です。

恒例の原作の敵に禁書の敵がくつついてくるシリーズです。

幻想猛獣、ゴーレム、と来ましたが今回は……分かりますよね。

ちよつと金星主張しすぎました。

あとファナリスとはfantaticをもじったモノです。

第三十二話 魔術師（前書き）

どうも北中津です

更新が滞り誠にすいません。

## 第三十二話 魔術師

### 第三者視点

雨が降る夜

「じゃあねエヴァちゃん！」

明日菜達は一日を別荘で過ごし、寮に帰っていった。  
残っているのは、エヴァと真名とシンだけだ。

「エヴァ」

「放っておけ、狙いはばーやだろうし、いざとなったらお前が助けるんだろう？」

シンは気付いていた、この学園に入っている悪魔を、しかし結界の力で弱まっていると思い、ネギに任せることにした。

（何だ？この胸騒ぎは）

「早速、敵が動き出したようだね。見に行くかい？シンさん。」

真名は魔眼により、敵が動き出したことを感知して、シンに伝える。真名はシンが動かないなら動かないようだ。

「もちろんだ、場所は……世界樹のステージか。エヴァはどうする？」

「ぼーやの潜在能力も知りたい、茶々丸！用意しろ」

「はい、結局ネギ先生が心配なマスター」

「貴様あああああ！巻いてやる」

「あああああ、ましたー」

## 世界樹の枝の上

「やっているようだねネギ先生、おや、彼は京都の」

4人は世界樹の枝の一本の上に乗る。枝と言ってもそこいらの大樹の幹並みなので4人が乗っても問題ない。4人は悪魔が来ていることなど気にせず、ほとんど野球観戦の気分と同じだ。

四人の視線の先にはスライムと戦っているネギと小太郎、水の牢獄に閉じこめられた裸の刹那達が居た。

「彼は犬上小太郎殿でござるよ。」

そこに5人目が来る。それは京都で小太郎を軽くあしらった長瀬楓だった。

彼女は制服姿で現れた。どうやら騒ぎを聞きつけてやってきよう  
だ。

「君はあの少年と戦っていたね。二人が戦って勝てそうかい？」

彼女の魔眼はずっと下で戦っているネギを見据えながら聞く。

「ん、ちよつと難しいでござるよ。4対2でござるし、あの4人？は一人一人がなかなか出来るでござる。」

楓の判断は当たっていた。従者である3体のスライムは連携が取れており、一度に相手にするのは非常にキツイ、コートの男はそれを従えている以上スライムより強い。

「それもあるが」

エヴァは戦っているネギ達から、視線を明日菜に移す。

「ああ、あの明日菜に施されたネックレス、何かある。」

シンがエヴァの言葉を繋げる、しかしシンにはその“何か”の目星がついていた、

（アレは恐らく明日菜の魔法無効化能力を利用した術式、ネギ達が使う魔法じゃアレは破れない。）

「なんだアレは！」

ドガアッ！、シンがステージを見るとコートの男が無詠唱でかなりの威力のパンチを放つ。その大砲のような一撃はステージのイスを吹き飛ばす。

「あの男、化生の類でござるか？」

楓が結論に行き着く。人間が無詠唱であれほどの威力を出すのはそれこそシンやナギレベルだ。しかしそんな者が人質など回りくどい事をするはずがない。



「そうだろうな、しかも爵位級だ。・・・ほら、本性を見せたな。」

コートの男の顔が変わる。山羊のようなねじ曲がった二本の角、凹凸ない卵のような頭に稲妻のようにジグザグに避けた口。あれで悪魔でなければ何だというのだろう。

「ネギ先生の魔力が格段に上昇！これは・・・魔力の暴走です！」

「あの悪魔、ぼーやの記憶にあつた悪魔じゃないのか？」

茶々丸がネギの魔力暴走を感知するが、魔法を知らない楓でもその雰囲気から理解していた。それほどネギの体からは憎しみと怒りが噴き出していた。

なぜならあの悪魔はネギの村を襲った悪魔の一体であり、スタンが封印したモノだった。

「ぼーやの魔力は近衛木乃香には劣るが、あの馬鹿譲りの尋常じゃない魔力だ、あの歳で扱いきれる魔力量じゃない。それが怒りという一種のトリガーが解き放ったんだろう。しかし完全に振り回されているがな、貴様は相も変わらず静観か？」

エヴァは視線を外し、シンを見る。シンは全く動こうとしない。

「・・・・・・・・・・おい」ああ！悪い！ネギの従者達が何か考えてるから大丈夫だろう」

シンはネギの方を見てはいるがエヴァの話は聞いていなかった、

エヴァに呼ばれると、驚いたように返事をする。シンは主の危機にこそ従者としての真価が問われると言う。

「どうした？どこか上の空だったな、従者が危険にさらされて目も離せないか？」

「いや、ちよつと……胸騒ぎがな」

シンは何か感じていた、気でもない魔力でもない何かが此処に在ることを。

「……！！悪魔が本性を現したね、アレはまた……絵本にあるような悪魔だね。」

暴走したネギの猛攻に対し、悪魔は先ほどの頭に加え、大きな黒い翼、先が鋸の用になった尻尾を出した、そしてグパアと口を開け、石化の魔法を放とうとしていた。

空中で悪魔に特攻してきたネギはもう防いだり、かわすことも出来ない。

「このアホオ！」

しかし、ネギに当たる寸前、横から小太郎がネギに突撃してネギを射程から外す。

ドバツと悪魔の口から禍々しい光が飛び出し、ネギが居たところをのみ込んだ。

「さすが小太郎殿でござる。」

「それに、従者の奴らも動き出したようだ。」

そして、これを初めに魔法使いの反撃が始まる。

木乃香達は一本の杖を手に、エヴァの別荘で練習していた初級魔法を唱えていた。

小さな希望の火種は木乃香の魔力を糧に大きくなり、水の牢獄を焼き尽くす。

それからは木乃香と古菲が別の牢獄にとらわれていた刹那と千鶴を助け、のどかと夕映がスライムを封印、朝倉が明日菜のネックレスを外す。

「まあ、従者としては正解だろうな、あの小動物も助言者としてはまあ・・・いいだろう。まあ茶々丸には敵わんがな！」

エヴァはカモと従者達をある程度評価していたが、結局茶々丸を褒めるが

「「「・・・」」」

「・・・つつこめえ！」

誰も突っ込まなかった。

「さて、ネギ達も持ち直したし、もう問題ないだろう。」

シンはもう大丈夫と見切りを付けた。

シンの言つとおり、小太郎が前衛、ネギが後衛として、ヘルマンを攻める。

他の人達はもう問題ないらしい

「おっ！アレってエヴァが教えた奴だよな」

ネギは魔法の射手から雷の斧の合わせ技でヘルマンにとどめを刺した。

その合わせ技は別荘でエヴァが教えた物だった。

「フン！あんなものすぐにモノに出来なくてどーする。．．．．．ま、まあぼーやはぼーやなりに頑張ったが」

「シンデレツンデレ」

「うるさあい！」

突っ込んでもらって、ちょっとホッとしたエヴァだった。

「おや、とどめは刺さないのか？甘いな」

真名はネギの甘さに辛口評価だ。

「でも、それがネギ先生のいいところじゃあるよ。」

楓は風香、史伽姉妹とよく一緒にいるのでそう言う子供らしいところは好きらしい。

「！！マスター！一般人です。この時間に来るなんて！」

茶々丸はステージ裏に居た一般時と思われる人物を見つける。

「本校の生徒です！」

「違う！」

シンは聖人の脚力でステージに飛んだ！

「ハハハハハ！また会えることを祈っているよネギ君！それと・・・まだ敵がいるようだから、貴おつけたまえ」

ヘルマンは下半身から消えながら叫んだ。そして、・・・消えた、いや、本来居るべき場に還った。

「ネギ・・・・・・」

空を見るネギに明日菜は声をかける。

「ネギ先生！危ない！」

刹那の声が響く。ネギの背後には高校生くらいの青年が居た。青年が何かを投げる・・・・・・

その何かは人間が投げたとは思えないスピードの閃光となりネギに迫る。

ドガアアアアン！

何かは止まった、ネギに直撃する前に、ネギの眼前に突き刺さったメイスによって。

「その術式、月ウサギに関する暦石だな。」

声が響く。青年は振り向く

「へえ、よく知ってますね、さすがは神の右席」

もう一つの声がステージに響く。

「その術式を使う魔術師でありその風貌、貴様……アステカの魔術師、エツアリか？」

2人の魔術師以外は状況が飲み込めず只見るだけ。

「データ照合、彼は6年前にこの学園に転校してきた学生です。  
名前は……」

「エツアリ……か、その名前もいいけど。どうせならこっちで呼んで欲しいな」

魔術師はもう一つの名、愛する人を守るための名を言う。

「「海原光貴」」

雨はやんだ、

夜は明けた

そして二人の魔術師は魔法使いの地で対峙した。

### 第三十二話 魔術師（後書き）

どうも北中津です

とうとう来ました海原さん。

ヘルマンはエヴァ達目線で書いてみました。

第三十三話 トライウィスカルパンテクウトリ（前書き）

更新が遅れすいません。

この状態は来週まで続くかと思われます。



### 第三十三話 トライウィスカルパンテクウトリ

#### 第三者視点

「海原君！？」

全員が戦慄している中、明日菜が魔術師の名前を呼ぶ。  
数ヶ月前まで一般人だった明日菜の口から出るのはおかしな事だった。

「明日菜、あの人知ってるん？」

木乃香達はネギと明日菜の元に集まり、木乃香が明日菜に聞く。

「う、うん、新聞配達のバイト仲間です。」

「どうも神楽坂さん、ごきげんよう、今度一緒にお茶でもどうですか？」

海原は明日菜の方を向きホテルマン顔負けの爽やかフェイスで挨拶をする。しかし、真名やエヴァなどの実力者はその笑顔の裏に隠れ蠢く狂気を見抜いていた。

「海原光貴、麻帆良学園高等部の3年生、いわゆる御曹司で成績は学年トップクラス、新聞配達などのバイトをしています、しかしそのことを鼻にかけず、男女両方に人気があり、魔法関係とは一切関係ありません。魔力も一般人程度です。」

「しかしさっきのを見る限りこっち側の人間だろう。」

茶々丸が話す海原の情報聞きながら、降りてくる傍観組。

「お前の明日菜への態度……確かに似ているがまさかお前。」

シンはあることに気付く。それはシンのみが知っている知識故のものだった。

「いえ、僕が未来永劫愛しているのは御坂さんです。神楽坂さんは……彼女と似て居るんでしょうね、常軌を逸した力を持つ辺りも、厳しくも易しいあの人柄も。」

「お前が悪魔を手引きしたのか」

シンは問う、悪魔が的確に動くにはこの学園は広すぎる、必ず手引きした者が居ると目星を付け。

「ええ、僕は貴方がこの学園に来たという情報を手に入れた上司の命令でこの学園に侵入しました。しかし、命令は貴方の監視だけではありません。ネギスプリングフィールド、貴方が来てから命令の追加があった。ネギスプリングフィールドとその従者の神楽坂明日菜の監視がね、しかし神楽坂さんを見て思った。彼女と一緒にだと。」

海原はネギと明日菜を見ながら語る。

「待て、貴様は6年前からいたと情報にはある。シンが来たのは去年の秋だ。」

エヴァが情報との矛盾点を指摘した。

茶々丸は麻帆良学園の技術が凝縮されたガイノイド、その茶々丸のデータに誤りがあるとはエヴァには思えなかった。

「ええ、海原光貴は六年前からこの学園にいましたよ。僕の魔術には人の皮膚を符としてその人に成りすますものがあります。ここに海原光貴が居て良かったですよ、並行世界様々ですね。」

海原は丁寧に答える。しかし、エヴァは最後のひと言を聞いて目を見開く。

「並行世界だと！！貴様は並行世界から来たと言っても言つのか！！？」

「僕と彼の使う魔法、正式名称は魔術と言っていますが、その魔術とあなた達が知る魔法、違いすぎると思いませんか？無詠唱での威力、異常なまでの宗教や神話関連、此処まで来ては技術の発祥から違うと思いませんか？魔力の乏しい僕でもあの威力、魔力でも気でもない、地球には第三の力があるからです。」

「第三の力、だと？」

エヴァは顔をしかめる。

「これ以降は・・・戦いながら話しましょう！」

海原は懐から黒曜石のナイフを取り出す。怪しく煌めくそのナイフは全てを破壊する短い槍。

「逃げろオオオオオオオ！」

カッ！と不可視の光が走る！

光はシンに迫るが、その光の恐ろしさを知っていたシンは黒曜石のナイフを見た時点で逃げていた。

光はシンの修道服のアクセサリーに辺り。

ジャラジャラジャラと幾つものアクセサリーが分解され落ちる。

「なんだ！何が起きたんだ！」

みんな何が起きたか分からない、当人以外には海原が黒曜石のナイフを取り出し、それを見て逃げたシンのアクセサリーがバラバラになるくらいにしか見えなかった。

「みんな！物陰に隠れる！あの黒曜石のナイフで反射した金星の光に触れるな！死ぬぞ！」

みんな蜘蛛の子を散らしたように物陰に隠れる。

「ははは、やっぱり知ってたね、そう、この魔術はトラウイスカルパンテクウトリの槍、槍に模した黒曜石のナイフに反射した光に触れた物は・・・ほら」

海原が黒曜石を動かし、近くに止まっていた車に当てる。

ガシャガシャンバキ、と車がねじ一本のレベルまで分解される。車がもしも自分だったら・・・そう考えた者の額に一筋の汗が走る。

「そうだ！トラウイスカルパンテクウトリというのはアステカの

金星と災厄を司る破壊神です！」

のどかが自分の知識の海から取り出した知識を叫ぶ。それを聞いたエヴァは納得し

「魔術の異常な宗教や神話関連、シンが言っていたアステカの魔術師とはそう言うことか」

「金星の光なんてどうすればいいのよ！」

確かに不可視の光をかわせと言われても出来ない要望だ

「真名！土曜の弾丸で海原の位置を把握！茶々丸はそれから光の反射を計算してくれ！」

「「わかった（わかりました）！」」

物陰に隠れていた真名の拳銃からバシュッ！と索敵弾が放たれる。

「シンさん！右によけて！次は足下！」

真名のモニターを見る茶々丸の計算で、シンはトラウイスカルパシオンテクウトリの槍をかわす。

「そんなところにあつたらダメですよ！」

海原は黒曜石のナイフを掲げる、すると索敵弾がバラバラに分解される。しかし高く掲げたその黒曜石のナイフは一瞬の大きな隙を産む。

「はあああああ！」

シンは咸卦法・天の状態で海原に突っ込む。そのスピードはすさまじく、シンの全身を覆う光は閃光と化す。

「甘い！」

海原は手首を器用に動かしシンに反射光を当てようとした。

そう、当てようとしただけだった。

「????なぜだ！なぜ分解されない！？角度は完璧だし、ナイフに曇りもない！」

海原は動揺する、目の前まで迫っている敵も忘れ。

「お前には不備は無かったよ。」

ドン！シンの蹴りが海原を吹き飛ばす。海原は数メートル吹き飛ばされ、ボロぞうきんのようにぴくりとも動かない。

「種はこれだ。」咸卦法

シンが足下を指さすと、そこには何十枚のルーンのカードが落ちていた。

「答えは蜃気楼、光を曲げて反射光を曲げたんだ。」

それはステイルが三沢塾で使用方法だった。しかしこの場でそれを知る者はいない。

「なるほど、．．さすがは神の右席。しかし、僕の手札がそれだけだと思ってはいないでしょう？」

海原は立ち上がる、その動作には全くダメージが見られない。

その片手には、獣の皮膚で作った巻物があった。

「何であんなにピンピンしてるんや！」

小太郎が叫ぶ。聖人と咸卦法の力を合わせた一撃を喰らって全くダメージが見られないというのはおかしい。海原はハハハと爽やかに笑い、立ち上がる。

「生と死に関する時間に関する暦石か！」

「ご名答、原典の迎撃術式だ、聖人でもそう簡単には破れない。それにナイフは破壊しておくべきだったね！」

海原は黒曜石のナイフを取り出す。

パライイン！黒曜石のナイフは粉々になる。

「ご忠告ありがとう。」

声の主は真名、金曜の弾丸で黒曜石のナイフを狙撃した。しかし驚愕するのは海原ではない、シンだった。

「お前ら！真名を取り押さえる！」

「「「へ？」「」」

みんなの声がシンクロする、まさに異口同音。

みんながあっけにとられていると

「何してるでござるか真名！」

いつものんびりしている声とは違う、何か焦りと驚きが混じる声が上がった。見ると、米神に銃口を当てている真名と、それを必死に止めている楓が居た。

「何してるの龍宮さん！」「何をしている龍宮真名！」

みんなが必死に取り押さえる。そして何とか銃を引きはがす、すると真名の動きは止まり。

「ハアー、ハアー」

「みんなも武器を捨てろ！あいつの持っている巻物は武器を持つ者を自殺させる術式だ！」

「どんな術式だ！」

みんなアーティファクトや杖を手放す、真名はトラウマになったのか何十丁もの銃を涙目で出している。

「何処にそんなに……」

「攻撃手段はまだあります、君も言っていたでしょう。」



海原は不敵な笑みをして、懷から石板を取り出す。その石板は初め、ネギを殺す時に使ったモノと同じだった。

海原には二つの原典、シンには感卦法・天と聖人の力のみで魔術は使えない。

しかし、戦いは加速する。

### 第三十三話 トラウイスカルパンテクウトリ（後書き）

最近迷走している北中津です。

海原戦始まりました、魔術ってほとんど即死系だから（槍とか炎剣とか小麦粉ギロチンとか・・・）戦闘描写が難しいです。しかし駄文なりに頑張ってみました。

### 第三十四話 闇（前書き）

更新が滞り申し訳ありません。  
今回は非常に長いです。

## 第三十四話 闇

### 第三者視点

日が昇り、空も明るくなってきた。

世界樹のステージには二人の魔術師、ステージの端には魔法使いとその仲間達がいる。誰もが動こうとせず、停滞が場を支配する。

その支配から逃れた者が一人

「僕にはまだ攻撃手段が残っていますよ。」

それに続くように他の者は、地面に突き刺さって深く挟られたメイスを見る。

「月ウサギ、嘗て神々は月にウサギを投げることによって明るすぎる月の光を弱めた。月ウサギとはその応用であり、骨を弾丸にする術式。ああ、安心して下さい、骨は名も無き犯罪者のを使っていますから。」

海原の周りをシュルルルと巻物が覆い、海原は骨を取り出す。

「それを使い何故ネギを殺そうとした！」

ドガァー！！シンは感卦法・天で殴る、しかし、原典の守護でほとんどダメージはない。

「貴方なら分かるでしょう！上条当麻と一緒にすよー！」

海原は骨を投げる、それはシンの腕に当たりゴキイ！！と嫌な音を出す。

「知っていますよね！僕がグループとしてドラゴンについて調べた事！その後の小さなゴミ掃除で敵が魔術師だった！そいつの術式が暴走してこっちの世界に来た！貴方も一緒にしよう！そこで僕はある組織に拾われた！」

「ある組織！？」

「その組織に命令を受け僕はここに来た、組織が魔法世界で行動を起こす時に驚異になる可能性があるシン・ファナリスハントを監視すると言っね、しかしそこで出会った、彼女に似た神楽坂さんを！組織は彼女が介入してくるようなら利用すると言っていた、僕は安心した。一般人の彼女が介入するなどまずあり得ないから！しかしそこで貴様が来た！ネギスプリングフィールド！」

海原は憎しみがにじみ出る顔で、ネギを睨む、その目には殺意、怒り、嫉妬、のような負の感情が凝縮された危険な光を孕む。

「貴様が来てから神楽坂さんはどんどこち世界に入ってきた！そして先日、あのリヨウメンスクナノカミを封印するという大業をしていまい、組織も黙認できなくなった！もうネギスプリングフィールドを殺す以外方法はない！彼女は、御坂さんは彼が守ってくれると言った！しかし貴様は弱い！何時か必ず神楽坂さんに危険が及ぶ、その前に僕はしなければ行けなかった！」

海原はシンに骨を投げる投げる投げる！

その弾丸は聖人の力と感卦法・天を持ってしてもすべてかわすこ

とが出来ない。

そしてそのうちの一つがシンをとらえる。

「ぐあっ！」

「シンさん！！」

シンの足で嫌な音がする、それを聞いた刹那が悲鳴を上げる。

海原は動きが止まったシンをに近づきながらシンの胴体を狙う、聖人の肉体でも至近距離で喰らえばそこには風穴が開かれるだろう。

「死ねえっ！」

海原は腕を振りかぶる、その手には骨が、

「ふざけんじゃないわよ！」

バキ！・・・誰かの拳が原典の守りを貫通し海原に直撃した。

「私が何時守って欲しいって言ったのよ！！何でネギを殺すなんて方法なんて選ぶのよ！もっと他にあったでしょう、もっと、もっとみんなが笑顔でいられるような方法が！」

海原を殴った明日菜の目には涙がたまっていた。しかし、彼女は自分の思いを叫ぶ、原典という危険を知っておきながら。

「僕が裏切れば貴女に危害が及ぶ！それこそあってはいけない、組織は貴女を利用しなくても計画を進められる。だから、このまま

平穏な日々を送って欲しかった。」

魔法無効化能力を持つ明日菜に殴られ、海原の顔には顔に罅が生え、そこから海原光貴ではない、魔術師エツアリの顔が見えていた。

「私は守ってもらわなくていい！私だって戦える！」

明日菜はネギの方を向く、しかしその顔は決して嫌悪の顔ではなかった。

「明日菜……」

海原は見た、それは嘗て愛した超能力者の少女と同じ目だった。

海原は力が抜けたように原典を落とし。

「ははははは、貴女は何処まで彼女にそっくりなんだ。」

海原は地面にへたり込み、笑う。

「……そうですね、うん、貴女の言うとおりだ、僕も裏では無く表で守って……」

ドス！ 海原の体から赤い噴水が飛び出した。

「ガハアッ！」

ドスドスドスと海原の体内から巨大な針が飛び出す。

海原の口と体からブシュッ！！と血が噴き出し、紅い華が海原を彩る。

しかし、明日菜はそんなこと意識できない。

「海原君！」

明日菜が海原に刺さっている針に触れると針は消えた、しかし針が開けた穴は残る。

塞いでいた針が無くなった傷からはドクドクと血が噴き出す。

「私が治療を！」

木乃香がパクティオーカードを取り出し駆け寄る。  
それに遅れて、みんなも集まる。

「ダメだ！まだ原典が作用している。武器を持てば原典の力で君が死ぬ。」

海原は木乃香の手を掴み、アーティファクトを取り出すのを止める。

しかしそんなことはなかった、海原が原典を手放してこれほどの傷を負った時点で原典の力は無くなっていた。

海原はそのまま地面に仰向けに倒れ

「まさか、こんなモノを仕込まれていたとは・・・目的は果たせなかったし、守りたい人に諭される。まったく、いいことなしだ。」

海原の顔にはあきらめの色が浮かび。その奥の本当の顔はどこか安らかで、安堵のような色が見える。

それだけでシンが確信するための大きな要因になった。



「海原光貴、…………お前、始めからネギを殺す気など無かったな。」

シンが言った言葉に、みんなが、特にネギが驚愕する。

「分かっていましたか」

「あれだけ隙があつてネギを殺さないのはおかしいだろ。それに明日菜の周りの世界にはネギも入っている。」

ネギはヘルマンとの戦いで満身創痕、周りの者も月ウサギを使えばかわせなかっただろう。

シンの足をやった時点で殺しにかかっても良かった。

「ははは、そう……僕はネギ君に知って欲しかった、戦いというものを、裏の世界というものを。そして……死というものを。彼は、上条当麻は以前から戦いを知っていた、死と何度も隣り合わせになった。しかし、ネギ君、君は若い。」

上条当麻はステイルや神裂、三沢塾や一方通行など何度も死と隣り合わせになった、そのたびに乗り越え生還した。しかしネギはエヴァやスクナなどかなりのレベル大きな敵に当たったが、死にはほど遠かった。

「ネギ君、裏の世界というのは深く、暗い、そのことを知った上で、神楽坂さんを守……いや、神楽坂さんと戦ってくれるか？」

「はい！」

ネギは満身創痕の身でよく通る声で答える、その目には決意の光

が輝いていた、しかし同時に涙がうかんでいた、それが恐怖なのか、悲しみなのかは分からない。

海原は納得と悔しさが混ざり合った顔になって

「まったく……彼と同じで最悪の答えだ。

僕はつくづく女運が無いようだ。……シン・ファナリス・ハント、原典は君に預けるよ、この世界で扱えるのは君かあいつ等だけだ、君に預けた方が神楽坂さんは安全だ。」

海原は石板と皮膚の巻物をシンに渡し、シンはそれを受け取る。

「お前の女を見る目はいいと思うぞ、美琴も明日菜も、ただ本命がいただけだ。」

「ははは、そうですね、……しかし気をつけて下さい。私を拾ってくれた組織には、まだ魔術師は居ます、彼らは強い、恐らく教皇クラスです。それと最後にこれを」

何を出すかと思うと、海原は魔術とは真逆のディスクを取り出した。

「僕が学園都市に居た時、裏の世界で集めた情報です。この学園の技術力は異常だ、一部では学園都市に匹敵するほどの物もある・・気をつけてくれ。ゴホッ！」

体に幾つも穴が空いている状態で、これほど話せた海原ももう限界のようだ。

「そろそろ、のようだ、魔術で延命していたがもうこれまでらしい、僕は、海原光貴はここで死ぬ、それじゃあね、ネギ君、シン・

ファナリス・ハント、神楽坂・・・さん。」

ディスクを持っていた手は力なく落ち、海原光貴は目を閉じた。

「海原君・・・」

明日菜の声が、小さな声が、ステージに響いた。

他の者には目に涙を溜めている者もいる。初めて見た死に言葉が出ない者もいる。

しかし、明日菜以外の声は上がらなかった。

「みんなは戻れ、もう夜明けだ、それとこのことは他言無用で頼む。」

シンは立ち上がり言う。顔は俯いており、みんなにはシンがどんな顔をしているかは、分からない。

他の者は誰からと言うわけでもなく帰っていく。

そしてステージに残ったのは二人

一人はシン

「おい、結界は張ったぞ。もう起きろ。」

シンはもう一人に声をかける。

「やはり分かってましたか」

「海原光貴は死んで、アステカの魔術師エツアリは死んでないってことか。」

もう一人はアステカの魔術師、エツアリだった。

「ええ、僕は海原光貴ではありません。魔術だけではなく、冥土返しの技術で何とか頑張りましたよ。」

バリバリバリと海原光貴の顔がはがれ落ち、アステカ人の顔が顕わになる。

「だがその出血、魔術と科学の力でもでもやばくないか？」

エツアリの腹からはいまだにドクドクと血が溢れている。常人でこの出血量なら既にショック死している。

「後数分持つか微妙ですよ……。ゴホッ！治癒魔術、お願いできますか？」

「分かった、治癒魔術は苦手だが何とか……。」「

シンはその肉体故に治癒魔術はあまり使わなかったので、苦手だ。紅き翼時代の時も、アルや詠春にやってもらっていたのでほとんど使わなかった。

フォン……とエツアリとシンの足下に魔法陣が広がる。

「これは！」

「あいつか……エツアリ、治癒のプロのところ行くぞ。」

二人は消えた。

エツアリが目を開けると巨大な木の根が天井を占め、地下なのに何故か明るく広い場所に出た。

「シン、そしてアステカの魔術師、エツアリさんでしたか？お二人の戦いは見せて頂きました。私はクウネル・サンダース、エツアリの治癒は私がやりましょう。」

転移した先、そこはクウネルの部屋だった。クウネルの手が、やさしい光に包まれその手を床に寝ているエツアリに添える。

「ありがとうございます、紅き翼のアルビレオ・イマ、いやクウネルサンダースですか。」

「彼は正直でいいですね〜シン」

クウネルは初めからその名で呼ばれ嬉しいのか、上機嫌でシンを見る。

「へーへーそうですね、……それよりエツアリ、これからどうする？」

話を本題に戻す。エツアリとクウネルも顔が変わる。

「僕はまた、裏で頑張りましたよかね、原典もそっちにわたりましたので敵が僕の死体を回収することもないでしょうし。とりあえず貴方専属の情報屋にでもなりましょう。貴方はグループの上司よりはいくらかましですし。」

エツアリは薄く笑う。シンとクウネルもそれに続くように笑う。

「あいつらよりはいいだろうな、それじゃあ早速、魔法世界に行ってもらおうか。敵はそっちにいるんだらう？」

「わかりました、今分かっている情報はディスクに入っています。それと……」

海原は明日菜のためにも懸念していた事を口にする。

「魔術は誰にでも扱えます、原典は必ず誰の手にも渡らないようにして下さい。」

原則として魔術は誰にでも扱える。扱えないのは上条当麻や明日菜のような魔法無効化能力に準ずる能力を持つ者、超能力者くらいだ。よって超能力者がいないこの世界では魔術は誰にでも扱える。

「ああ、分かっている。」

シンは魔術の凶悪さを知っているが故にそう簡単に魔術は教えない、今でも刹那と、シスター組にしか教えていない。

「さあ、治りました。どうしますか？」

クウネルは治療が終わったらしく、立ち上がる。あれほどの傷か

ら完治させるにはかなり魔力を使っただけ、すこし息が上がっている。

完治したエツアリは立ち上がり、シンとクウネルの二人に向かい合っただけ。

「ありがとうございます、・・・私はもう出ます。シンさん、ネギ君はあ言いましたがよろしくお願いしますね、クウネルさん外の駅までお願いします。」

「ええ」

フォン・・・・エツアリの足下に魔法陣が広がる。

「また情報が集まったら連絡します。それでは」

エツアリは消えた。

夜は明け、金星はもう見えない、海原光貴は朝日を、光りを迎えず闇の中で死んだ。

そして魔術師は行く、大切な人のため、再び闇の中を。

### 第三十四話 闇（後書き）

どうも北中津です。

海原、シンパーティーに加入です。

魔術サイドの仲間も欲しかったので生存させました。  
個人的にも海原は好きなので



第三十五話 翌日（前書き）

どうも北中津です。

すこし執筆が乗ってきたので出しました。

## 第三十五話 翌日

刹那視点

「それではH Rを終わります、皆さん気をつけて帰って下さい。」

「「「さようなら」「」」

あの夜からまだ半日くらいしか経っていない。

私を含めあの夜にいた人はみんな元気がなく、真名でさえいつも以上に静かだ。

「せつちゃん」

「お嬢様・・・」

お嬢様が明日菜さん達を連れて来た、恐らく内容は

「シンさんの様子、見にいかへん？シンさん、色々抱え込んでるやろっし。」

案の定シンさんのことだった。

「私も行こう」

「真名・・・」

帰宅の準備を終えた真名も加わる。

彼女も知りたいことはたくさんあるだろう。先を越すなどはもう

関係ない。

「この時間帯ならシンさんはエヴァンジェリンの別荘に居るだろう、今日あの二人は休んでいたし。」

エヴァさんと茶々丸さんは今日、休みだった。昨日あんな事があったので理由は聞かなくても分かる。

「行きましょう。皆さん」

私たちはエヴァンさんの別荘に向かった。

エヴァ視点

「ぐがあああああああああああああああ！」

私の前で一人の男が苦しんでいる。

しかし、外傷は全くなく健康そのものだった。それでは何故目の前の男は悶え苦しんでいるのか、それは

「マスター！シンさんの脳波が異常な数値を！これ以上は！」

私の隣の従者が言ってくれたな

男、シン・ファナリス・ハントは頭を抑えながら悶え苦しんでいる。

その手には皮膚の巻物が

「ダメだ、これはこいつが望んだことだ、それに何があっても止

めるなど言っただろう。」

しかし原典の毒素がこれほどとは、異常なスピードで魔法、いや魔術を覚えて言ったこいつがこれほど苦しむとは。今でも強いのにこれを覚えようとするこいつも異常だが。

「シンさん!？」

チツ、面倒くさいのが入ってきた。

### 刹那視点

私たちがエヴァンジェリンさんの家に入るとエヴァンジェリンさんも茶々丸さんも居なかった、いつもエヴァンジェリンさんが陣取っているソファーには

「ケケケ、御主人達ナラ別荘ダゼ・・・マア、今行クノハお前等二八刺激ガ強スギルカモナア」

刺激が強すぎる!？な、何を／／／・・・ってそんなはずがない。

「もちろん行くわよ、行こう刹那さん」

明日菜さん・・・あのチャチャゼロさんが刺激が強いと言ったんですよ!何があるか。

「行こう刹那、何があるかは知らないがシンさんが居るんだ。」

「わかつているが」

「ケケケ、ドウナツテモ知ラネエカラナ」

チャチャゼロさんの言葉に後ろ髪を引かれながら私たちは地下の別荘へ向かった。

### 真名視点

地下から別荘に移動した私達を出迎えたのは、あの人の悲鳴だった。

「があああああああああああああああああ！」

シンさんが頭を押さえ苦しんでいた。それをハラハラしながら見る茶々丸と静かに見ているエヴァンジェリンが居た。

「何で止めないんですか！うわっ！？」

刹那がシンさんに駆け寄るが何かに止められる。ワイヤー！？

「こいつは自分の意志でやっている、それを止めるようなら、  
・・・殺すぞ？」

「でもこつれてどう考えても普通じゃないでしょう！？」

神楽坂がエヴァンジェリンに反論する、彼女がそう簡単に考えを

変えないと思うが。

「あああああああ！・・・・・・・・つ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まずい！気絶したかつ！茶々丸！シンを運べ！」

シンさんが糸が切れたように気絶した、

「シンさん！」

刹那はワイヤーを引きちぎる程の勢いで叫ぶ、シンさん・・・

「せつちゃん！これ以上はダメや！」

刹那の体には切り傷がどんどん増えていく、顔は自分が女という事など忘れて今ほどにクシャクシャだ。

近衛が刹那を止める。

そして茶々丸に担がれてシンさんは運ばれていった。

茶々丸が一步一步進むたびにシンさんの腕が力無く揺れる。あのシンさんが・・・

「エヴァちゃん！シンさんに何したの！？」

「私は何もしていない！むしろ見ていてくれと言われたんだ！何が起こるか分からないからと！」

そんな事はわかる、あんなモノを見てくれなんてエヴァンジェリンくらいにしか頼めない。

「あんなになるまで何していたんや!？」

「昨日の海原が石板と巻物を渡しただろ!あの魔術書を読んだんだ!」

「魔術書?僕も魔法学校で何冊も読みましたけどあんなことには……」

私の死んだパートナーもそうだった、魔術書を読んであんなに苦しむことはなかった。

「たわけ、あの魔術書は学校にあるような写本じゃない、完全オリジナルの魔術書、原典だ。」

原典?みんなも首をかしげている。

「なぜ写本が作られるのか?一つはより知識を広めるため、そしてもう一つは……原典の毒素を軽減させるためだ。奴の魔法、いや魔術は未だに信じられんが違う世界のものだ、むこうの原典にはそんな毒素があるらしい。こっちの魔法書とは全く違う。」

そんな物なんで……

「そう……俺の世界の原典には意志がある、原典自身が主を選び、その原典の知識を最も広める者に味方する。」

「シンさん!もう大丈夫なんですか!？」

シンさんが茶々丸に肩を借りてやってくる、意識は戻ったのはいいが……顔は真っ青だし焦点も定まっていな。そんな姿になって、

何で私にも黙って………！

「お！おい真名！」

私は気付かないうちにシンさんを抱きしめていた。

「もう……やめてくれ………」

私の目には涙が、口からは言葉が……

「悪かったな……真名、それに刹那も木乃香も。」

シンさんも私を抱いてくれた。

「そうや……私たちに黙って……」

「そうです！私たちはシンさんのパートナーなんですよ！」

二人も少し涙目だろう、見なくても簡単に顔が浮かぶ。

「お前達にも話さなきゃ行けないかな、……ネギも話したんだし、俺の過去を。」

「フン！やつと話す気になったか、もちろん私にも教えてもらおうぞ！」

エヴァンジェリンが見ると言うことは

「僕も見たいです！」



だよねえ、まあネギ先生の時もそうだったしいいか

「生臭いこともあると思うけど、それでもいいならな。」

光に触れたものを分解させる、武器を持つている者を自殺させる、そんな魔術が使われる世界、そんな世界でシンさんが生きた記憶。

「大丈夫よ！ネギの過去もなかなかエグかったし・・・」

ネギ先生の過去も人の大量虐殺、悪魔の大量虐殺だったからねなかなかきつかった。

「それに私たちは宮崎のどかのアーティファクトでみる、あの絵はなかなかメルヘンだから多少はましになるぞ。」

「ふえ！？またですか？」

エヴァンジェリン達は宮崎のを使うのか。

「それじゃあ、少し休んだらやろう。」

そして私は、愛しい魔術師の過去を知る。

### 第三十五話 翌日（後書き）

どうも北中津です。

シン、絶叫を上げるの巻きです。

シンは魔術に関しては天才なので多少の毒素には対応できます。  
しかしまだ完全に理解してません。

真名のデレはちょっとやりすぎた感がありました。

### 第三十六話 過去（前書き）

どうも北中津です。

過去編始まります。

プロローグで語られなかった部分も出ます。

## 第三十六話 過去

木乃香視点

「それじゃあ・・・行くぞ」

私達3人とシンさんは魔法陣の中にいる。シンさんの記憶をパクテイオカードを通して見るためや。

「「「はい」」」

『これより我らが主に仕える者として・・・』

此処どこや・・・キャツ／／／／！な、なんで裸なんや！？

「こ、これは仕様のようですね。」

「し、しかしこれは・・・」

せつちゃんと龍宮さんが後ろにいた、やっぱり裸なんや・・・

「す、すまん、これは聞いてなかった。ま、まあ見なければいいし話を進めるぞ。ここは聖ピエトロ大聖堂の中、ヴァチカンにあるんだが、俺は此処で神に仕えることになった。」

『シン・ファナリス・ハント！教皇様がお呼びだ今すぐ来るように』

儀式を終えたシンさんが神父みたいな人に呼ばれてる？なんでシンさんだけなんや？

あのシンさんも困ってるな。

「俺はここで大切な人に出会った、…………俺の師匠達だ。」

へえ、シンさんの師匠、個性的な人って言うてたけど、どんな人なんやろ？

『へえ、こいつがフィアンマが目をつけた奴か』

「「「！！！！！！！！」」」

「一人はまともそうだけど」

「舌ピアスの女に」

「2メートル近くの巨人」

「ちんちくりんのガリガリ」

「「「こんな人達がシンさんの師匠！？」」」

何なんやこの人達

「この人達が俺の師匠、俺はこの人達の後継者として力と知識を教えられた。…………これから地獄の修行だが…………刺激が強いので割愛する。」

シンさん顔が青いな、どうしたんやろ……

グル！

周りの風景が変わった！？ここは……あの時計塔って事はロンドン？さっきまでヴァチカンやったけど。

「俺が所属していたのはローマ正教という所だ、しかし世界には十字教と言っても幾つも宗派がある、こつちの世界にはプロテスタント等があるが、こつちではローマ正教、イギリス清教、ロシア成教等があるんだ。今は交換研修という名目でその中のイギリス清教に来ている。」

『よろしくお願いします。私はイギリス清教の神裂火織です』

「シンさん、この痴女は？」

「ま、真名……」

凄い格好の人がきたで、凄い胸や、那波さんよりありそうやしシンさんやっぱりそう言うの見慣れとるのかな？

服装も……ジーンズの片方をすっぱりと切って。へそも出てるし、でもイギリス清教って言ってたからあの人もシスターさんなんかな？

「あの人は神裂火織、一応……俺に剣を教えてくれた人だ。七閃などはもともとあの人の技でもある。刹那が使ってる技だな、あの人は強い」

「あの人がですか！？そう言えばあの人の持つてる刀、七天七刃ですね……」

せつちゃん驚いとるなー、シンさんに剣を教えてくれたってことはせつちゃんの師匠でもあるわけやし。あ、なんか話しとるな

『・・・ついてきて下さい』

シンさん神裂さん引っぱられてったな、どこ行くんやろ。

「ちよつと飛ばすぞ。」

グル！

また風景が変わったと思ったら・・・変わってない？さっきと同じ場所や

『ありがとうございます。これからは天草十字凄教の女教皇も並行してやっていくつもりです。一応天草のみんなはイギリス清教に吸収されると思いますが、当人達は気にしてないようなので良かったです。』

神裂さんがお礼？なのかシンさんにペコペコしてる、シンさんも困ってるな。あんな白昼堂々道の真ん中でやられてもな。

「あの後俺達は日本に行ったんだ、彼女と彼女の仲間を和解させるためにな、今はそれも成功して帰ってきたところだ。」

『それじゃあ、最大主教の所へ・・・』

神裂さんの顔がキリッ！となったで、あれが仕事の顔ってやつなんや。

今度は引っぱられず、二人はスタスタ歩いていく

『こちらです。』

シンさんが連れてこられたのは・・・私知ってるわ！聖ジョージ大聖堂や！おつきいな～

あ、二人ははそこの中に入っていく、結構奥に行くなー

奥に行くに連れて空気も重くなってるみたいや。

『此処が最大主教の執務室です、・・・最大主教、失礼します。』

豪華で派手な扉が開く、どんな人が・・・

ゴクリ・・・

『ようこそいらしたりけるのよー！』

「「「・・・」」」

アカン、沈黙や。茶色の修道服を着た凄い綺麗な金髪を持った人がいた。

『最大主教！仮にも清教派のトップであられる方がそのような態度をとってどうするのです！』

神裂さんが刀の鞘で最大主教さん？を小突いてる。ホントに上司なんか？



『ぶー、神裂のケチンボなるよー！私はその神父様に感謝してるのよ、ハント神父のおかげで天草式十字凄教をまるまるイギリス清教が吸収出来たるのよー！』

「あの人はローラスチュアート、一応イギリス清教の魔術師のトップだ。言葉があんなが・・・」

『なんでもう知ってるですか！？話したのはつい先日ですよ！』

『フッフッフ、最大主教を舐めたるまじよ！そんな情報とうに届きたりけるわ！そこでお礼として一発芸をば』

『ま、まさk『イツツ！シヨーーーーターーーーーイム！』最大主教！こんなとこd『ビッカアアアア！』やっぱりー！』

「ちよつとシンさん！大丈夫なんですか！？あれ、どう見ても」

「まずい・・・よね」

「俺達は思念体みたいなモノだから大丈夫だろ。」

「『『本当ですか！？』』」

なんか最大主教さんの髪の毛が

パワー

テカー

ピカー

ピカアア！

ビッカアアアア！てなつとる、五段変化や！フーザより多いで！

しかも光の綺麗さに反比例して危険さが……

『ハント神父！恩人である貴方だけでも！』

『おやあゝ？神裂？その神父様がお気に入りたりけるのかしら？  
そんな必死に守りて。』

『／／／！そ、そんなことは、わ、私は……………』

む！やつぱり神裂さんも！……………まあ、ここは異世界やから安心やけど。

『時間切れなるのよ神裂！』

ドッガアアアアアーーーーー！

「そして、聖ジョージ大聖堂の部屋が一つ無くなった。」

「シンさん、そう締めくくっても……………」

『『最大主教ウウウ！』』

『ヤー！痴女が追いかけたりけるのよー！それにステイル！炎剣を振り回して！何時の間に居たりけるか！？』

『誰が痴女ですかーーーーー！』

『書類に不備があつたから来てみれば貴女またこんなことをー  
！！！！！！！！』

「先行くぞ。」

「……はい」「」

グル！

また風景が変わった、今度は……やけに都会やな。

「看板等を見る限り、日本のようですね。」

確かに日本語ばかりやけど……こんなところ見たことないで。

「その通り、ここは日本の学園都市だ。……海原光貴もここにいた、まあアイツは違う理由なんだが。」

あの人も此処に、『ドガアアア！』な、なんや！？

「始まつてるな、あれは……この学園の最強と最弱の戦いだ。」

コンテナ置き場を見ると白髪の人と何処にでもいそうな人が戦ってた。

『グシャア！』

「！！！！！！」

白髪の人が地面の石を蹴飛ばして……なんであんな速いんや！？  
それが当たった人なんて……ウワア

それで何メートルも飛ばされた黒髪の方は立ち上がり、白髪の人に右ストレートを打つ！

でも、決して互角や無かった。  
ほとんど蹂躪や……

グシャアア！

またや……もう見てられん。

グオオオオオオオオオ！

あの白い人なんか元 玉みたいの出してるで、アレやばないんか？

「あれって高校生くらいですよ、それでこんな……」

確かにあの二人が戦ってるコンテナ置き場は辺りがボロボロでそれだけで戦いのすごさが分かる。

片方の人は所々血が出て、フラフラや。

「あの二人は偶々偶然が重なっただけで非日常に落ちていった、ただ一人の少女を助けただけで、人より強い力を持っただけで」

どこかウチや、魔法に首を突っ込んだ人達に言ってるようやった。

「二人の生活は壮絶の一言に尽きた、黒髪の奴、上条当麻と言うんだがアイツはいつも死と隣り合わせだった、時には右腕がスッパリと切られた、そして白い奴は一方通行と言うんだがアイツは高校生で一万人以上の少女を殺した。」

「「「!!!!!!」」」

「しかし二人は形は違えど主人公<sup>ヒロイ</sup>だった、一人は誰に教えられなくても、自信の内から湧く感情に従ってまっすぐに進もうとする者、もう一人は過去に大きな過ちを犯し、その罪に苦悩しながらも正しい道を歩もうとする者、そんな主人公<sup>ヒロイ</sup>になるちよつと前の戦い。・・・俺もあんな二人、まあ後一人いるんだがそんな奴に憧れた。」

「「「・・・・・・・・」」」

私たちは黙ってまう、魔法と魔術の違いはあるやろうけど危険な世界には変わらない、そんなことを私たちだけじゃなく、シンさんに伝えたかったんやな。

「さあ、帰るか」

そして私達は、死が跋扈するファンタジーに戻っていった。

### 第三十六話 過去（後書き）

どうも北中津です。

ローラ、暴走の巻です。

シンはみんなに現実の厳しさを教えたかったんです。  
禁書の主人公では、私は浜面が一番好きです。

## 第三十七話 現在へいま

### 第三者視点

場所はエヴァの別荘、その屋上にネギ達はいた。空では大きな日が彼らをジリジリと見る降ろす。

「……」「……」「……」

シンの記憶を見た後、みんなはネギの時のように涙を流す者は無く。

全員が口を閉じていた。

「俺の記憶はこんなとこだ、まあ見てもらいたかったのは……わかるよな。」

沈黙の中、シンは口を開ける。

その声は、反省した悪ガキを諭すような、優しいものだった。

「最後の、学園都市ですか？」

刹那がおそるおそる聞く、他のみんなも察しが付いていた。

シンはそうと短く言い

「そう、他の話は思い出話程度、本命は最後だ。」

「おい、あの学園都市での二人、片方は上条当麻と言っていたな？」

エヴァが立ち上がりシンに聞く。

「よく覚えてたな、上条当麻、海原光貴は大切な人をあいつに任せた。上条当麻はあんな戦いをいつもしていた、イギリスのクーデターにも巻き込まれた、こっちの世界だけで起きたが第三次世界大戦にも参戦した。あいつは1年足らずで世界規模の戦いを幾つも経験したんだ、少し前まではただの高校生だったのに。海原がネギに明日菜を任せられず、大切な人をあいつに任せられた理由、わかっただろう？」

「はい……」

ネギは力なく答える。

それにつられるように周りもどこか暗くなる、しかしシンは笑い

「そう暗くなるな、上条当麻だって無力だったわけじゃない、それにアイツは自分の意志に従ったことだ、後悔してないだろうさ。俺が言いたいのはアイツのように自分の意志で行動しろって事だ、そうすれば……お前等だって、主人公ヒロインになれるかもな。」

みんなはその言葉にホツとした表情になる。

そのまま、みんなはいつもの元気を取り戻す。

「ナギだって、自分の意志で行動してた、まあ悪く言えば唯我独尊だったか。」

ナギも自分勝手でお調子者だった、しかし自分の意志だけは曲げなかった。

ネギも決意を新たにした。



しかし、それで終わらない者も居た。

「それよりも魔術の事なんてまったくなかったぞ！そつちも教える！」

「あゝ・・・いいけど」

そのまま魔術講座に突入

「才能の無い人間がそれでも才能ある人間と対等になる為の技術、  
か。」

「ということは私たちにも・・・」

「『シンさん！私たちに「断る！」なんで！？』」

魔法使い以外がシンに迫るがシンはそれを一刀両断した。

「いったらう、今まで何も知らなかったお前達に教えるわけにはいかん、そんなことをしたらこつちに本当に戻れなくなる。（シスター達はもう入っていたから教えたが）あきらめろ。木乃香達と違って何もしなければ問題ないんだから。」

木乃香やネギは今のままでも様々な者に狙われる、しかし他の者は基本的に一般人だ。それを魔術という希少技能が使えることで危険は一気に跳ね上がる。シンが使う魔術は特殊だが魔術は普通発動するのに儀式場の準備や詠唱など非常に時間がかかる、そんな魔術

では自衛にもならない。

「ほら！これで終わり！明日も学校だろ、寝ろ寝ろ。」

シンはどうせこねるだろうと思い、話を無理矢理終わらせた。

そして夜

「あ、あのシンさん……」

「ん？どうした明日菜？」

みんなが寝静まった夜、そこはさつきとは違う沈黙が支配していた。

太陽と対をなす月は音もなく優しく下を見下ろす。

シンは外で夜風に当たっていた、そこに明日菜がやってくる。  
海の方を見ていたシンは、振り向いて答える。

「あの……海原君の事なんですけど。」

シンには明日菜の話すことが分かっていたかのように、頷き明日菜の方を向く。

「海原か」

「海原君、私のためにあんな事して、それで……死んじやつて。シンさんはあの人の事を知ってるみたいで、教えて欲しいんで

す、あの人のこと。」

明日菜は海原の事を唯一知っていそうなシンに尋ねた。  
明日菜はその場に座る。

「海原か、そうだな・・・俺の記憶に学園都市ってあったら、あそこは完全に科学だけの都市で魔術なんて考えられなかった。海原は俺の時のようにある人物を監視するためにあそこに訪れた。」

「ある人物？」

「ああ、記憶に出てきただろう、学園都市の最弱、上条当麻だ。あいつの右手は全ての異能を打ち消した、お前と一緒にだな。そしてあいつの近くにいた海原の想い人、御坂美琴という少女と出会った。」

明日菜は自分と同じ魔法無効能力者に驚きつつも、無言で話を聞く。

今明日菜にとって重要なのは魔法無効化能力ではない。

「上条当麻は何人もの敵と戦った、そいつ等は誰もが悪というわけじゃなかった、一人一人に正義があり、それに上条当麻は自分の思いをぶつけた、それに感化され今まで戦った敵は、何時しか上条当麻の周りに集まるようになった。それは一人一人が世界に通用する実力者であり上条勢力と呼ばれた、それを危惧した海原の居た組織は学園都市に海原を送り込んだ、そして上条勢力には御坂美琴もいた。」

とうとう出てきた御坂美琴という存在に明日菜は緊張する。  
額に一筋の汗が走る、しかし明日菜は拭こうとはせず、そのまま顎

まで行き、雫となつてい落ちた。

「海原がなんで御坂美琴に惚れたのかは分らない、とにかく御坂美琴に惚れた海原は上条勢力が他の魔術結社に攻撃されて御坂美琴が危険にさらされるの防ぎたかった、損得ではなく感情で動く上条勢力を止めるにはその中心である上条当麻を殺せば良かった。」

シンの口から出た『殺す』、その言葉に明日菜はこの世界の残酷さを再認識する。

「そして海原は負けた、そして頼んだ、御坂美琴と彼女の周りの世界を守ってくれと。・・・お前と時とほとんど一緒だよ。」

「・・・・・・・・」

明日菜は何も語らない、シンは続ける

「まあそんな奴の願いだ、これからもネギと一緒に戦ってくれ。」

「・・・・はい！そうですよね、私ができるのはネギと戦うこと！ありがとうございました！」

「ああ」

明日菜は寝室に戻っていった。

場は再び沈黙に支配される、そこには2つの人影が。

一つはシン

「お前も寝たらどうだ、・・・・真名」

柱から出てきたもう一つの人影

「夜戦も出来ないと言っていけないよ、一晩寝なくても大丈夫。」  
真名だった。

「シンさんと話しがしたくてね。」

長い夜を丸い丸い月は妖しく見下ろす。

第三十七話 現在へいま（後書き）

どうも北中津です。

本日はこれと言って進みません。

まだ過去編は続きます。

### 第三十八話 とある聖人の始まり（前書き）

更新が遅れました。

まだこのペースが続くかも知れません

## 第三十八話 とある聖人の始まり

### 第三者視点

「シンさんと話しがしたくてね」

真名は柱の影から出てきて、シンの隣に座る、しかし向いている方向は逆でお互いがどんな顔をしているか分からない。

「・・・シンさん、私は昔、マギステル・マギのパートナーだったんだ。」

シンは何も言わない。

「しかし、彼は二年前に死んだ。・・・その後なんの因果がこの学園に来て、そこで貴方に出会った。そして貴方と仮契約した、何故か貴方と私で何か似たものを感じたんだ。それが・・・今日わかった。」

シンの顔は分からない。  
しかし真名は続ける。

「私も貴方も大切な人ともう会えない、だからシンさん！・・・シンさんだけは私から離れないでくれ、私はシンさんが「真名」」

絞り出したように紡いだ真名の言葉を、いままで何も言わず聞いていたシンが遮る。

「それに木乃香、刹那」



シンは振り返り、何本もある石造り柱の一本に声をかける。  
するとパジャマ姿の木乃香と刹那が少し気まずいと思ったような  
顔で出てきた。

「やはり分かっていましたか」

「だから隠れるなんて無理やって言たのに」

二人が真名の隣に座つたのを確認したシンは話し出す。

「俺には原罪がない。」

「……………」

刹那と木乃香は頭に？を浮かべる。

しかし、NGO団体、四階音の組み鈴の一員世界中を飛びまわつ  
ていた真名は理解できたらしい。

「原罪……知恵の実を食べたと言う罪を背負つたアダムとイ  
ブの子孫である私たちにまで引き継がれている罪、だったかい？そ  
んなものが「存在する」」

半信半疑な真名の言葉をシンは遮る。

「俺は並行世界から来た……しかし、俺が居た並行世界は  
一つじゃない」

「……………どういふことですか？」

シンの言葉に驚く刹那が聞く。  
そんなこと昼間は全く言わなかったことだ。

「見れば分かる。」

シンを含めた4人の足元に昼間に3人をシンの記憶に誘ったのと同じ魔法陣が現れる。

### 真名視点

シンさんの記憶、  
目を開けるとただの街、特徴を全て抜き取ったような町並みだった。

ん？高校生くらいの男性が走ってくる、本屋の袋を持っているところを見ると帰り道かな？

「シンさん、此处はどうい「グシャアア！」なっ！？」

刹那がシンさんにこの夢のことを尋ねようとしたら、さっきの男性が車に轢かれた。

胴体はひしゃげ、手足は曲がっては行けないほうに曲がっている、恐らく即死だろう。

すぐそこで子供が泣いているところを見ると、庇った？

「あそこで死んだ男、……は俺だった男、アイツは魔法も何もない世界で、平凡な日々を送った、特別才能があるわけでもなかった、努力家だったわけでもなかった、唯一違ったことは目の前で

子供が車に轢かれそうな時、とつさに庇ったことだ。」

シンさんだった男？どういう……

風景が変わった。ここは……

「天国？」

近衛が私が考えていたことを口にする、そう天国、ここはその言葉が最も会う場所だった。

雲の地面、そこに生えている木々、檻にいるわけでもない沢山の動物

「ちよつと違う、ここはもう一つの並行世界、失樂園がなかった世界。」

失樂園がなかった世界？つまり、アダムとイブが知恵の実を食べなかった世界と言うことなのか？

「俺は何故かここに来た、そしてシン・ファナリス・ハントが生まれた。」

雲の上にある湖の畔にシンさんは居た、湖をのぞき込んで、何か騒いでいる。

そこに女の人に来てシンさんに話しかけている、そのままシンさんを引き連れてどこかに行く。

ギョル！

風景が変わる、目の前にはギリシャにあるような神殿があった。そこにシンさんが入っていく。

『ようこそ』

神殿に入るとそこには、凄いイケメンの男性と、絶世の美女が居た。

しかし、どこか優しい暖かいものを感じられた

「二人はアダムとイブ、原罪がないこの世界の人は全員不老だ、だからこの若さでも俺のひいひいひい祖父と祖母だ。」

そして3人は話をした、シンさんの口調はどこかしどろもどろとしていた。

この後はシンさんの生活があった。

この世界は何かと快適だったようだ、しかし天使と会っていると……

「この世界の人生も楽しかった、しかし俺は元々違う世界の人間、何時かはばれる時が来る。」

そして場所は神殿に、しかしさっきよりずっと大きく、ずっと神々しかった、まるで中に居るモノを象徴するように。

しかし、視界を闇が染めた。

### 第三者視点

「この後俺は我らが主、神に出会った、そして主の計らいで昼間

の世界に来たんだ。」

各々驚愕する、自分の好きな人であり、仮契約した人が神に会ったことがあると言うことに、元々信じられることではないが、あの記憶を見た3人は納得せざる得なかった。

「神云々はいいとして、俺は原罪がない、つまり不老者なんだ。・  
・・・・俺はほとんど人間とは言えない。」

不老者、時の流れに取り残され、一つの土地にとどまることが出来ず、愛する者達には先立たれる。  
その苦しみはエヴァの人生が語っている。

シンは言った、自分の秘密を、シンはこの機会に自分のことを話すことにした、この先、仮契約を解除するのなら今がベストだと判断したから、しかし、シンの予想は外れた。

「で？」

「私も完全な人間ではないですが？」

「お父様の仲間だったのにシンさんだけ若いやんか、そんなこと察しがついたわ。」

3人には意味がなかった。3人は一般常識を仰々しく説明されたような、今頃何か？と言ったような反応をした。

「本国には人外がいっぱい居るんだそう言ったのはシンさんだろう?。」

「みんなを信じろと居たのはシンさんじゃないですか。」

「でもシンさんが私たちに言ってくれたってことは、私たちを従者として認めてくれたんやろ？」

「……………ハハ、ハハハハ！そうか、そうだな、俺がお前達従者を信じなくてどうするんだよな、ありがとうな、3人も、ちよつと疲れてたようだ。」

シンは心のもやが晴れたように笑う、昨夜からの暗さは従者達が完全に晴らした。

（もう心配は要らないね）

「それじゃあ私は寝るとしようかな、授業は問題なくても夜更かしは美容の敵だからね。」

「私達もそうします」

「そうだな、刹那はバカレンジャー予備軍だしな。」

「う……………それは」

真名の言葉に刹那が続く、そして3人は寝室に戻った。

そして寝室への道

「真名」

「なんだ？バカレンジャー予備軍」

刹那の声に、真名が楽しそうに皮肉る。

「だからそう言うな・・・私だって仕事が・・・って！それより、お前さつきシンさんに・・・告白しようとしたな？」

「う／＼・・・そ、それは、その・・・場の勢いと・・・言うか・・・」

真名は真っ赤になり少し涙目で言う、

（（か、かわいい！））

その顔に二人は衝撃を受ける、ギャップの恐ろしさに・・・

「ま、まあ抜け駆けとは言わないが、私は負けないぞ！」

「私もや——！」

女の夜は続く。

### 第三十八話　とある聖人の始まり（後書き）

過去編終了です。

過去編はオリジナルで、結構難しかったので矛盾していたりこれは変じゃねえのか！等とあるかも知れませんがその際はご容赦下さい。



### 第三十九話 幽霊騒ぎと手紙と殺意

第三者視点

時間は昼

「お手紙が……テオドラからか」

教会に住んでいるシンのポストにヘラスからの手紙が来ていた。  
シンが手紙を見ようとすると

く響き合うく願いが今目覚めてくく譲れない未来のためにく

「ん？学園長か」

シンの携帯が鳴る、相手は学園長だった。

「おお、ハント君、悪いが学園長室まで来てくれんかの？」

「わかった、すぐ行く。」

簡潔な内容の身を答え、シンは携帯を切った。

そしてまっ暗に染まった画面を見て

「来たか……」

悪魔と海原の件、それ以外見当が付かなかった。  
重い足取りでシンは学園長室に向かう。

「入るぞ。」

「おお、いきなり呼び出してすまんの。それでは「分かっている」」

一刀両断

シンは学園長の話をばつさりと切った。

そしてそのまま話し続ける。シンにとって魔術の事はあまり詮索されたくないことの一つでもあった。

「どうせ悪魔のこともここから見ていたんだろう、魔術についてはそれだけだ、並行世界については知らん、俺がこの世界に来たのも偶然だからな。」

「し、しかしの、まだ本国には「悪魔が来てもネギ達に全部任せていた奴が言うことか、本国には俺から偵察を送った、そいつはこの手のプロだ、餅は餅屋と言うだろう?」しかし、お主とネギ君を狙って・・・「ここには俺がいる一般人は巻き込まん、魔術師は全て俺が潰す。」」

学園長が話し終わる前にシンは次々と話す。学園長も反論できない、シンの実力は大戦という歴史が語っている。魔術師の強さが分からない学園長はその言葉を信じるしかなかった。

「それじゃあ行くぞ」

「お、お主！ちよつ「学園長、よろしいですか？」し、しずな君かの！？い、今は・・・」「いいぞ、もう終わった」「ハント君！」「それでは失礼します」・・・もついい・・・」

全ての言葉を遮られた学園長はもうあきらめた。  
アイコンタクトでGJ！と言う、二人だった。

「実は、女子中等部で幽霊騒ぎが・・・3-Aの相沢さよが出たと」

「ぬ！？あ、相坂君かの・・・」

学園長は人間離れした後頭部からダラダラ汗を流し、幾つもの滴を作る。

へこむ学園長を見て、ニヤニヤしていたシンはそれを見逃さなかった。

「何か知っているのか？」

「じ、実は、相沢君はワシの同級生だったんじゃ。中学三年生の時に、の」

「つまり自縛霊として六十年近く、この学園にいたと」

シンはジト目で聞く、学園長は気まずそうに。

「一応学園内なら移動でき」とうとうアレを試す時が来た。じゃあな学園長「ハント君！・・・彼もナギに毒されたかの？」

そして夜

「だだだ、誰か助けて〜！」

女子中等部の校舎、一人の幽霊少女・・・もとい相坂さよが二人の少女に追われていた。

いままで誰にも気付かれずひっそりと死んでいた（？）さよはある日悪霊扱いされて退魔師の真名と刹那に追われていた。

「くっ！なかなか速い！刹那！」

幽霊少女を追う一人、真名が術式を込めた弾丸を放ちながらもう一人の少女に言う。

「わかった！奥義！斬魔剣！」

ズバァッ！！と床が切り裂かれる、しかし相沢さよは偶然にもかわす。

しかしそれは二人の火に油を注いだ。

「私たちから逃げるとは・・・本気で行くぞ刹那！」

「ああ！」

「なんでですかーーーー！」

ズバァッ！ドガァッ！ガガガガ！

斬撃が飛ぶ、弾丸が穿つ、少女は逃げる

そして少女は校舎の端に逃げる、しかしそこは行き止まりであり、後ろからは二人の退魔師が

「よく逃げたな・・・しかし此処までだ。」

「ふええええ」

しかしそこに少女の正体を知った教師と生徒が・・・

「待つてくださー」「ちょっと待ったアアア！」え！？」

来る前に一人の魔術師が追う者と追われる者の間に来る。

「シンさん・・・これはれっきとした仕事なんだが・・・」

シンは春先なのに全身を覆うコートを着ている。

真名はいくらシンでも仕事人としての本意は忘れない。

「あ、ありがとうござい」「俺は殲滅白書が使うこれの性能を試しなくてな・・・」「キャアーーーーー！」

シンがコートを広げるとそこには金属ペンチ、金槌、L字の釘抜き、ノコギリ、ネジ回し、ドライバー等が、それを使うと言われた相沢さよは肺の全ての空気をはき出すような悲鳴を上げる。

「拷問用の器具をサーシャが使うと言うことは、在らざるものにも効果があるだろうからな、在らざるものがいなくて今まで試せなかった。が！丁度良かった。」

「シ、シンさん？そんな物を退魔師が使うなんて聞いたことが・・・ウツ！？このにおいは・・・」

刹那はさすがにまずくないですか？と言ったように声をかけると、何かに気付いた。

「ああ、やっぱりウイスキーはいいなあ、世界が回って見える。」

「酔ってるぞこの人ーーーーー！みんな止めろおお！」

そして古菲、楓、アキラと言った体力自慢がシンを取り押さえる、しかし聖人の前では長時間押さえるのは難しく。

「離せえええええ！これの実験がああああ！」

「な、なんて馬鹿力アル！も、もう」

「これは、まずいでござるな・・・」

「『ウワアッ！』」

「やっと実験があああ・・・な！！！」

3人を引きはがしたシンはユラリと幽鬼の様に相坂を見るが、そこにはスウと消えていく相沢の姿が

「『無事、成仏しました』」

清々しい顔の四人が言う

「いや、まだい」「まで刹那！今いると言ったらシンさんが」「無事成仏しました！」

まだ成仏していないと突っ込もうとした刹那の口を、真名が押さえ耳打ちする。

「・・・・・・・・・・」

二人がシンさんの方を見ると、シンは茶々丸に頸動脈打ちをくらって気絶していた。

「とりあえず明日にでも別荘で事情を聞くぞ、こいつは私が連れて行く。」

（キヤー！ハント神父が闇の福音に――・・・・・・・・・・ま、いっか）

非情なシスターが片隅から見ていた。

その日、別荘でいつものメンバーでシンに、幽霊騒ぎについて聞いていた。

「で、なんであんな事に」

「すまん、景気づけに飲んだら思ったより強かった。（クウネルから年代物をもらったのにあんなに強いとは・・）」

シンは何とか幽霊騒ぎを覚えていた。

「マスター、シンさんが飲んだウイスキーを検査したところ、大量の魔法薬が・・・」

「何だと！どんな薬だ！モノによつては解毒剤も作らなくては・・・」

エヴァは敵対魔術師の攻撃かと思い、薬の内容を聞く。

「えつと・・・本国でも高価な催眠薬で・・・効果はその何というか、感情を高ぶらせるというかと言うか、頭の中が、そのアホになる薬で・・・」

（クウネル・・・シスター通信に続いて・・・殺す。）

「大丈夫なんですか！シンさん！？」

「ちょ、ちよつと刹那・・・「ポト」ん？」

刹那がシンの肩をつかんでグラングラン揺らすと、シンの懷から昼の手紙が・・・

「これは・・・本国からの手紙じゃないか！しかもヘラスの皇族から！」

エヴァが手紙を拾い差出人を見ると、叫ぶ。

「いや、今日届いたんだ。」

「私知ってる、これホログラムみたいになって「おい！勝手に」



ブウン」

「おおシンの！お主のテオドラじゃ！お主が出て行ってヘラスも寂しくなったぞ、早く帰ってきて欲しいのじゃ、（略・テオドラの愚痴80%シンへのデレ20%）「姫様！仕事をして下さい！」うるさいの、それじゃあ切るのじゃ、お主のテオドラより（はーと（「

ブツ

「あれがヘラスのお姫か？」

「皇族なんてあんなものだ」

「」「」「負けられない！」「」

ある日常の1ページ

### 第三十九話 幽霊騒ぎと手紙と殺意（後書き）

どうも北中津です。

前回のコメントを軽く裏切った投稿申し訳ありません。思ったより早く出来たので投稿しました。次回から学園祭編です。

## 第四十話 予想外の発見

### 第三者視点

「おはようございます、ハント神父」

「おはよう、シスターシャークティ、今日は早いな。」

時間は早朝、まだ朝早くいつも見る登校する生徒もまだいない、いつもはもう少し後に来るはずのシスターシャークティが教会に  
来た。

「ええ、ハント神父は去年の秋からここに来たじゃないですか、だからアレも知らないと思ひまして、お誘いに来ました。朝食は  
ま  
だ  
です  
よ  
ね  
？」

「まだだが・・・何処に行く気だ？」

「言つてからのお楽しみです。」

人差し指を口の前に置く姿は、・・・適齡を完全に誤解した行  
動  
だ  
っ  
た。

「どういう事ですか!」

「ここか・・・」

「はい、学園祭期間中は特別価格なので。」

二人が来たところは路面電車を使った点心屋、超包子だった。早朝にもかかわらず沢山の客が来ていて、中には学園祭用の着ぐるみを着た人もいる。

「オッ！安いな。」

「もちろん、これが売りなので。私は点心にしますが、ハント神父はどうしますか？」

「俺もそれにしようかな、すいませーん！」

二人は注文するために店員を呼ぶ。

「はいアル！おっ！シンさんじゃないアルか、ようこそアルよ！ご注文は？」

来た店員は古菲だった、ローラーブレードを手足のように使い、シン達の机の前でキュ！っと止まる。

「それじゃあ、点心二つで」

「了解アル！」

そしてシャーと古菲は路面電車に注文を伝えに行った。待つこと数分、二つの腕に入った点心が来た。

「上手いな！」

「ええ、この学園NO1の屋台ですから。」

二人で点心に舌鼓を打っていると、ガシャーン！と幾つもの椀が落ちる音がする。

2人もそつちを見ると、ネギ達が騒いでいた。

「あいつらか……ちよつと見てくる。」

シンはスタスタとネギ達の方に行ってしまった。

「あつ！ハント神父！……もう、最近私の扱いひどくありませんか？」

いえいえ、真面目キャラは貧乏くじを引くものです。

「そうですね、……もう自棄です！店員さん！点心五つ追加！え！？りよ、了解アル……」

「お前達何してるんだ？」

「あ、シンさん、おはようや。」

「おはようございます、実は茶々丸さんが……」

茶々丸はお盆を持ってしょんぼりしている。

そこに茶々丸のエヴァとは違うもう一人の生みの親と言える葉加瀬が難しい顔をして来て。

「茶々丸、ちょっと放課後バラしてみよつか。」

「……バラすう!?」「……」

「分かりました、放課後ラボに伺います。」

「……あつさり承諾!?」「……」

4人はいきなり出た単語に驚き、それをさも常識のように話す茶々丸にも驚く。

「葉加瀬、俺も言っていいか?あ、俺の事は分かるよな?」

「もちろん!エヴァさんから聞いてますよ、……。魔術の事は茶々丸のメモリーで見ちゃいました、すいません!」

さすがに魔術の事を話さなかったエヴァだが、茶々丸のメモリーを見た葉加瀬は魔術を知ってしまったようだ。茶々丸もプロテクトをかけなくてすみませんと言う。

「ばらさなかったり、手を出したりしなければいい、科学者のほとんどは研究に関しては何も見えなくなるからな、その時注意してくれればいい。」

シンはあつさりと許す。

エヴァなどが近くにいれば魔術をそう簡単に試したりしないだろうし、それにあの映像を見たのなら分かるだろうと判断したからだ。

「そうですか、それじゃあ茶々丸と来て下さい、待ってますから。」

「ああ。」

そして放課後、麻帆良大学工学部前

「なんだ、お前達も来たのか」

東京に乱立するビルのような工学部の前で待っていたシンは、茶々丸と合流した。

「機械は苦手なのでこの機会に勉強をと思ひまして。」

「私ら付き添いや、それにシンさんも来るっていったし」

しかし、来たのは茶々丸だけではなくネギ達もいっしょだった。

「それでは行きましょう。」

「失礼します」

「おっ！待ってたよー！」

葉加瀬は軽く反応するが、……持ち主と違ってラボの中は軽くなかった。

バチバチバチ！と妖しげな電極がうなり、巨大なアームと、何キ口も先が見えるような目の周りを全て覆うゴーグルを付けた葉加瀬

がいた。

「おい、それやばくないか？」

シンの指さした電極の音が大きくなる、シンはその電極から脳天気な最大主教の金髪を視た。

そしてドカーン！と何とも平凡な爆発が起きた。

「ケホツケホツ、ごめんごめん！ちよつと失敗しちゃった。」

「失敗したじゃないわよ！どうするのよこの部屋！？メチャクチャじゃない！」

外からも見えるほどの爆発だったのに、煤が付いただけという頑丈な7人は葉加瀬を睨む。

「ハッハッハ！安心したまえ！こういう時こそ！」

葉加瀬が「ドンと来い！」と言ったように笑うと

バン！と扉が開く、そこから出てきたのは、ドラムのような形をした機械、シンの腰くらい有り剎那くらいなら上に乗ることが出来るうだ。

「へえ、掃除ロボ？すごいじゃん！」

「汚れを感知して・・・凄い！どんどん汚れが、ってシンさん？どうしたんですか？」

4人が掃除ロボに驚く中、シンだけはもつと違う、戦慄にも似た



驚きが顔を占めていた。

「葉加瀬……これはどこで作られた。」

「え？確か上の階のチームだと「ちょっと見てくる、みんなは先に帰っていい。」」

「シンさん!？」

木乃香の声も聞かず、シンは出ていった。

上の階

（アレは完全に学園都市にある物だった、普通あそこまで似る者じゃない、つまり……学園都市の人間がここにいる。）

さっきシンが見たものは学園都市全体で使われている掃除ロボだった。

（そう言えば海原もこの学園の技術力は異常だと……「探し人は見つかったかナ？シンさん」

シンの背後から声がする、シンはゆっくりと振り向く。

「……誰だ。」

「自己紹介がまだだったネ、私は超鈴音、れっきとしたこの世界の人間ヨ」

シンに声をかけた人物はネギのクラス生徒、超鈴音だった。  
制服の上に白衣を羽織り、不敵な顔で言う。

「この世界の人間？まるで別世界の人間を見た事があるような言い方だな？」

「それなら……今現在も見てるヨ」

ツウ……超の首筋に一筋の紅い液体が流れる、その正体は、シンが首筋に添えた大太刀から滴る命の雫、血液だった。

「色々と教えてもらおう。」

「いきなり過ぎるヨ、シンさん！……実はシンさんに折り入って頼みがあるヨ。」

「頼みだと？」

「結局帰ってこなかったなシンさん、どうしたんやろ？」

「まあいいじゃん、明日にでも聞こうよ。」

「そうですよ、またエヴァさんの別荘にいますでしょうし。」

この日から、シンは麻帆良から姿を消した。



#### 第四十話 予想外の発見（後書き）

今回より学祭編もとい科学編始まります。

超といったら科学だからここで出さなきゃ何時出す！と言ったように出させて頂きます。

## 第四十一話 能力の影

刹那視点

工学部に行ってから数日、シンさんは帰ってきていない、どうやらエヴァさんにも言っていないようだ、学園長は十字教の仕事で出張と言っていたが、そんなわけがない、シンさんは異世界の人間であり、この世界の十字教徒ではないからだ。

私は今学園祭の出し物のお化け屋敷の内装の準備をしている、と言ってもベニヤ板に黒一色に塗るといふ単調な作業なので（複雑な部分は早乙女さんなどが描いている。）こんな事を考えてしまう。

「刹那、まだシンさんから連絡は来ないのか？」

私に声をかけてきたのはシンさんのもう一人の従者であり、仕事の仲間の龍宮真名である、彼女もシンさんがいなかったことについて知らなかったらしい。

これでシンさんがいなくなってから30回目だ。

「全くだ、従者を置いて何をしているのか……」

「あの……桜咲さん、」

私が真名に愚痴っているとえっと……春日さんが声をかけてくる、彼女とはあまり交流がなかったのに……

「実は、これを……」

春日さんが一通の手紙を渡す、差出人は……シンさん！？

「なんでこれを春日さんが！？」

「い、いやあくさつき校舎の前でシスターさんに渡してくれって（く、苦しい）、そ、それじゃあ私は行くから！（ボロが出ないうちにー）」

「そういうことか」

「何がだ真名？」

真名が何か納得したような顔をする。

「いや、それより手紙を見てみよう、普通の手紙だしいいだろう」

手紙は以前の映像が出るような物ではなかった。真名が促したの手紙を読む。

内容を簡潔にするとこうなる。

真名、刹那、木乃香へ

俺は今、北欧に來ている、もちろん魔術がらみだ

何も言わずに出たので心配すると思うが問題ない、ちょっと北欧の魔法書を読みに行くだけだ、なるべく原典に近い形で読みたくてな、学祭の前日には戻る。

お土産は期待しないように、それじゃあ。

シン・F・ハント

「やけに短いね」

「だが安心した、お嬢様にも読ませて差し上げないと。」

お嬢様もシンさんを心配していた、明日菜さんがフォローしてくれていたがさすがに答えているらしい。

「そうだな」

私はお嬢様の元に走っていった。

シン視点

「おお！あなた様が中央のメシア！まさかこんな所までお越し頂けるとは。」

「いえ、それより手紙でも書いたように魔法書を見せて頂きたいのですが・・・」

俺は今スウェーデンの魔法図書館にいる、ある魔術を使用するための知識を得るためだ。

今は司書の男に挨拶に来たところだ。

「はい、こちらに揃えてあります、北欧神話についての本ですね。」

「はい、ありがとうございます。」

連れられたところは一人が作業するには十分すぎる広さの部屋だった。わざわざ俺一人のために個室まで、さすが英雄特典。

「そんな滅相もない！あなた様の武勇伝はスウェーデンにまで行き届いております。あなた様の力になれるなら本望です！」

ここまで来るとさすがに気まずいなく、まあもらえる物はもらうが。

「・・・そ、それとご無礼を承知でお頼みしたいのですが」

なんだ？魔術とかなら即決でダメだが。

司書の男は申し訳なさそうに

「サイン！頂けないでしょうか？実は息子があなた様のファンで」

司書の男はどこからか色紙とペンを渡してきた。

「・・・え？あ、ああもちろんいいですよ。」

サラサラと色紙にサインを書く、ヘラスでは日常茶飯事だったが此処でもするとは。



「あ！ありがとうございます！……それでは失礼します、何か用事がある時は呼び下さい」

「ええ、ありがとうございます。」

司書の男は出ていった、俺は一人になった部屋の中心の机に積まれた魔法書を適当に取り、いすに座って読みながら学園での事を思い出す。

「頼みだ？」

俺は大太刀を降ろす。

ここは情報を可能な限り引き出すのがベストだと考えた、さすがに中学生に拷問は出来ない。しかも、こいつが学園都市について知っているなら。

「そう、私の計画に加担して欲しいネ」

「計画？内容は」

俺が計画に加担することのメリットが言われていないが、ひとまず計画の内容を聞く、報酬などは俺を動かすことができる代物だろう

「内容は言えないネ……だけど報酬は何故ここで学園都市の技術が使われているか、でどうかナ？」

言えないか、いかがわしいことだけは確かだな。

「そんな不確定要素満載の計画に参加すわけがないだろう。」

確かにその情報は知りたいが下手に契約を結べない。

「やっぱりそう力……だけど私はあきらめない！また勧誘に来るヨ！」

ここまでか、まあまた来るようだしその時に情報を引き出せばいい。

「そうか、まあ内容を教えてくれれば考えないこともないが？」

だが少し探りを入れてみる。

しかし麻帆良の最高頭脳と言われる目の前の女、そう簡単には揺らぐず、逆にこつちを揺るがす言霊を放った。

「ソカソカ、それじゃあ……私の能力は暴走回路オーバーサーキットって言うんだヨ」

「能力だと！？」

ゴゴゴゴゴ！と建物が揺れる、くそ！罠か！？

「おや？茶々丸が暴走したかな？娘が自立するのはいささか悲しいもののネ。」

茶々丸？あいつ等よけいなことを！

「そんな事より！お前！」

俺がさっきの事を問いただそうと突っ込む、しかしドガァッ！と天井が崩れ出す。

「じゃあね、シンさん」

崩れるガレキの隙間から超が笑顔で手を振るのが見える。

「迎えに来ました、超」

ガレキが崩れる音が全ての空気を振るわせる中3つ目の声が聞こえる。

助っ人か？

「お！ナイスタイミングネ！」

誰だアイツは！？

俺はガレキの隙間から超を迎えに来た誰かを何とか見ようとする。

そして見えた物は

「！！！！！！！！、アレは………」

しかし、ガレキが治まった時には超はいなかった。

俺は魔法書のページめくる

パチパチと暖炉の炎が揺れる。それに伴い部屋の壁から天井にかけて出来た俺の影が揺れる。

あの時、超の後ろは行き止まりだった、  
つまり超の仲間、超に超能力を与えた人物は少なくとも空間系の能力者だ。

しかし俺の記憶にはそれを結論づけられない事がある。

あの時降り注ぐガレキの隙間から見えた物

血のように紅く、ルビーのように輝く、全てを飲み込むような二つの瞳。

超はエヴァから魔法に付いて聞いているはずだ、それに学園都市の技術、それこそ滞空回線アンダーラインのようなものがあればこの学園の魔法先生など観察し放題だ。

もしあの瞳が見間違いではなかったら

もし助っ人があの能力なら

もしその能力者の自分だけの現実がファンタジーの世界まで拡張

バーソナルリアリティ

されていたなら

この世界の魔法使いでは・・・勝てない。

## 第四十一話 能力の影（後書き）

どうも北中津です。

とうとう出てきた超能力者、

原作のロシアで頑張ってるロリコンではありません。

第四十二話 230万分の1の能力（前書き）

更新停滞していました。  
本日から再開します。

## 第四十二話 230万分の1の能力

### 第三者視点

「只今より第78回、麻帆良祭を開催します!!」

日本のある学園

そこで何万人もの人々の歓声が上がる。

その中に修道服を着た神父が1人

「大規模とは聞いていたが・・・これほどとは」

北欧から帰ってきたシンはその祭の規模に圧倒される。

周りでは精巧に作られた着ぐるみが闊歩し、観光客と思われる家族も見られる。

某ネズミランドもびつくりだ。

「こ、これってどういう事ですか――!?!」

「わ、分かりません!?!とりあえず現状を――」

その喧騒の中、シンの耳がある二人の声をとらえる。

「ネギと刹那じゃないか?どうしたんだそんなに騒いで」

「シンさん!帰ってきたんですか!」



シンの声に刹那はいち早く反応し、涙目で迫る。  
刹那の動揺にちよつと引くシン

「今朝にな、それよりどうしたんだ」

「実は……説明……」

ネギは先ほど起きたこと、学園祭初日に夜まで寝過ごししてしまったて騒いでいると、急に朝に戻ったこと。

「それは……」

シンは刹那に目配せする。

「やっぱり……」

刹那も予想は同じようだ。

「「タイムマシンだよな（ですよね）」」

「タ、タイムマシンですか!？」

ネギは二人の結論に驚く。

「アキニ！それしか考えられないと思うぜ！なんてったってそれを作ったのは超鈴音だぜ！」

（！……やはりこれも……しかし学園都市にタイムマシンなど）

シンは思考の海に漂いながら今まで読んだ原作の記憶を掘り返す。

「それなら僕……恐竜時代に生きたいな〜」

「『おい』」

思考の海から帰還したシンと刹那とカモは見事にシンクロツコミをきめた。

「シンさんも行きたい時代ってあるんですか？」

刹那はシンにそんなことを聞く、やはりシンの行きたい時代なども知りたいようだ。  
シンはう〜んと少し考え

「江戸時代だな！」

「い、意外と普通ですね……」

刹那は意外と平凡なシンの答えに意表をつかれ逆にリアクションが取れない。

しかしシンのその答えの理由は常人とは全く違った。

「俺はある人物に会いたい、……伊能忠敬、恐らくあの人は日本人で最高レベルの魔術師だ。俺の世界の伊能忠敬が作った偶像是超ハイレベルで、本物の天使が降りるとも言われた。」

「そうだったんですか!？」

刹那は驚く、ネギとカモはピンと来てないが、日本史を学んだ刹那は驚きを隠せない、日本地図で有名な伊能忠敬が最高レベルの魔術

師と知れたら驚くだろう。

「ああ、もし江戸時代に行ったら伊能忠敬の偶像を作ってもらいたい。」

「・・・・・・・・・・」

二人は呆然としていた。どうやらついて行けないらしい。

「それより超を探すか、そのこともアイツに聞かないと分かん・・・・・・・・もしかしたら次元の狭間に閉じこめられるかもなあ？」

「ひiiiiiiii！」

「シンさん！ネギ先生が・・・・・・・・」

ネギはシンの脅しに恐れおののく、さすがに刹那もシンを窘める。

「悪い悪い！まあ、行こう。」

「シンさん！私たち朝の私たちと会つかも知れないのでこの服装は・・・・・・・・」

「アニキ！あそこに貸衣装屋があるぜ！」

カモが貸衣装屋を見つけたようだ、学祭の着ぐるみでも分かるようにかなりクオリティが高い。

「それじゃあ、早速。」

結論から言って、3人ともコスプレをした。

ネギは全身のウサギの着ぐるみ

「ネギ先生似合ってますね（委員長が見たら、拉致しそうですね）」

シンはぶかぶかの服、1メートル程もの長さの靴紐、首には小型の扇風機が4つ、それはある教皇代理の服装だった。

「シンさん……それは。」

「まあ、面白そうだったんでな。」

そして刹那は……

「刹那……それは（何でこれが此処に!?!）」

「店員の人を着ろって言ったんですよ！そして無理矢理……」

伝説ここに蘇り、堕天使エロメイド、……再臨……

「早く行きましょう!」

「ここにいると思います！」

シューティングゲーム会場

「次は此処だと！」

3D映画の放映

「いやーいませんねえー」

「「「ちゃんとさがせえ！」」「」」

ネギの搜索はこんな物だった。

だが、これが10歳の正常な反応かも知れない。

「まあいいじゃないか、元気な弟を持ったようで」

シンは建宮コスチュームで堕天使エロメイドの刹那に言っ、  
その顔は兄と言うより、父親のようだった。

（私は兄弟よりも……親子の方が／＼／）

「次はあそこに行きましょう！」

ネギが指さしたのは巨大な飛行船だった。

「よし！行こうか！」

「はい！」

走っていくネギの後を、刹那とシンが行く。  
その姿は確かに、仲むつまじい夫婦のようだった。

「わあゝ！凄いな」

「アニキはこんなのいつでもみられるじゃんか」

「杖とは違うよ！」

ネギは飛行船の窓に顔を押しつけるほど見入っている、いつも杖で見ている景色だが乗る物一つ違うだけ印象は変わってくるようだ。

「ちょっと僕、トイレに行ってきますね。」

ネギは映画の時にジュースを飲み過ぎたのか、トイレに駆け込んでいく。

そして残ったのはシンと刹那、カモ（空気）になった。

「どうでしたかシンさん。この学祭、いえ、この学園を」

刹那はシンに聞く、去年の秋から来たシンにこの学園への思いを知りたくなった。

「そうだな、この学園はまずやさしい、外で問題になっている様な虐めもない、ケンカしても地は固まる。俺の世界の学園都市は科学の街、何人もの科学者が裏で非道な事をしてきた。しかし、こっちはそんな物はない。」「学園都市もそんなにひどくないと思うけどネ

「?!?!超!」

シンの話に割り込んできたのは超包子の服を着た超能力者、超鈴音だった。

「早速勧誘に來させてもらったヨ、シンサン、今日はもうちょっと情報を渡すネ」

「勧誘って、どういう事ですかシンさん!」

シンが帰ってくる少し前、刹那は間違いとは言え、魔法先生に追われる超を守った。

その時魔法先生が言っていた、『問題児』、それがどういう意味をなすのかは刹那は知らない、しかし魔法先生にマークされている時点で警戒するには十分だった。

「情報とは何だ?」

しかしシンは刹那の声を聞かず、超との話を進める。

「それは、彼女ネ!」

シュン!と超の後ろに人影が現れる。

「!!!!!!お前は……………」

色素を全て抜き取ったような腰まで伸びる純白の髪とそれに負けず劣らず美しい白い肌、フランス人形のような華奢な手足、あまり成長しているとは思えない胸、それを覆う白と黒を基調としたゴシッククロリータの服、そして……純白の肌の中に爛々と紅く輝く双眸。

「紹介するネ、ワタシの一番の同志、鈴科百合子ダヨ」

「超！私はその名前使っなくなって言ってるでしょう！-」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シンは言葉を失っている。

「シ、シンさん？」

「刹那サンはワタシと話すヨ、百合チャンはお二人でドゾドゾ！」

「百合ちゃんって何です！・・・・まあいい、シン・ハント、来てください、場所を変えます。」

百合子は超にツツコミを入れてから、シンの腕をつかむ。

場所を変えると言って空間移動をするとすぐ理解したシンは特に抵抗もない。

「待て！貴様・・・・・・・・」

シュン！とアーティファクトを出した刹那の目の前で2人は消えた。

「サア、こっちはこっちでネ」

その顔はとても輝いていた。



シュン！2人の異世界人は飛行船の外、あるカフェに来ていた。

「それでお前は学園都市の人間なのか？」

シンは聞く。一応分かり切っているが再確認のため質問した。

「他に何が？モチロンそうです、私は学園都市第一位、元長点上機学園主席、鈴科百合子です。」

その風貌からは想像が付かない口の悪さで、百合子は答える。

（第一位が鈴科百合子？並行世界だから女なのか？しかし、あの能力は・・・）

「私の能力について考えてるんでしょう？教えましょう。」

一方通行と違い清楚で大和撫子のようなイメージを与える百合子は無邪気というよりも妖艶な微笑をする。

「ワ」

ニヤニヤと笑いながら鈴科百合子は自分の能力を言おうとする。

「タ」

百合子が手を伸ばして触れた紙コップがシンの目の前に瞬間移動し、

「シ」

そのコップが独りでに浮き上がり、クルリと一回転し、糸が切れたように机に落ちる

「ノ」

紙コップの中のコーヒーが竜巻の様に巻き上がる

「ノ」

バチィ！と言う音を立てて巻き上がったコーヒーが瞬間的に電気分解さる

「ウ」

残ったコップにいきなり火がつき、灰になる

「リョ」

そしてその灰が不自然な風に吹き飛ばされる

「ク」

百合子の顔がグニャアと歪む

「ハ」

空気の振動を使わず、シンの脳裏に声が響く

AIMフェイカー  
「贗作能力、これが学園都市最強で、230万分の1の最強の能力です」

## 第四十二話 230万分の1の能力（後書き）

鈴科百合子登場です。

外見は一方通行の長髪状態ですが、性格は大和撫子系です（北中津の趣味です）

最後の能力は順番に、空間移動、念動力、水流操作、電撃使い、発火能力、風力使い、偏光能力、念話能力です。

## 第四十三話 決戦の場

### 第三者視点

「A I M フェイカー 贗作能力？一方通行じゃなくてか？」

百合子の能力はシンの予想を大きく外した。

シンは百合子の風貌から、能力は完全に一方通行だと思っていた。

「一方通行？それも出来ますよ。この髪はその副作用ですし。」

百合子は自分の脱色されきったような髪をさわりながら言っ、しかしその髪は絹のようにサラリと百合子の手から逃れる。

「なんで超に加担する？」

シンは聞いた。

「利害の一致、これにつきます。超に口止めされていたのは計画だけなのでいいでしょう。私は学園都市の人間です。第三次世界大戦のずっとずっと後の」

「なに？」

シンは怪訝な顔をする、エツアリが来たのは第三次世界大戦の前、しかし百合子はそのずっと人間だと言うからだ。

「話しはここまでです、これ以降は計画に加担してから……  
と言いたいですが大出血サービスです、今日明日にかけて学祭でま

ほら武道会というお遊びがあります、その本選で私に勝つたら無条件で教えて差し上げましょう、負けたら計画には加担してもらいますが情報は教える、悪く無いと思いますか？」

「それでお前のメリットは？」

そう、これはあまりにもシンに有利すぎる、勝っても負けても最終的には情報はもらえるのだから。

シンにとってはまほら武道会に出るだけで情報が手に入る。

「私は確かめたいんですよ、科学とオカルト、どっちが強いかを。」

さっきの妖艶な笑み、その笑みと共に現れた、紅いモノそれは科学者の目でそれは狂人の目でもあった。

本来の鈴科百合子が一瞬だけ姿を現した。

ゾクリ……とシンの背筋にナニカが走る、それは豹変し

た百合子への驚きか、超能力と戦うことが出来る事への武者震いか。

「いいだろう」

シンは立ち上がる。

「オカルトの力、見せてやるよ。」

「いいでしょう、楽しみにしてますよ。」

シン！と百合子は消えた。

「まほら武道会……いいだろう、ならば……アレだな。」

「シンさん！ここにいたんですか？」

シンが百合子の対策を丁度思いついた時、刹那とネギがシンを見つけた。

2人はかなり探したようで、一般人を大きく上回る体力の持ち主の2人が息を切らしていた。

「あの、さっきの白髪の女性は……」

刹那は百合子が見当たらず、きよろきよと辺りを見る。

「アイツはもう行った。それより刹那、俺も急用が出来たから行ってくる、何か起きたら電話してくれればいい。」

「え、ちょっと、シン「悪い！」あ、行っちゃった。……」

ズーーーーー

と刹那が沈む、

（私って魅力ないのかなあ……）

「刹那さん！元気出して下さい！」

「そうだぜ！旦那もさっさと用事終わらせて、姉さんと一緒に学祭回るためかもしれないぜ！」

「ありがとうございます……」

そんなことも知らないシンは

『はい、僕の世界では学園都市最強は一方通行でしたし、能力も贗作能力等という能力じゃありませんでしたよ？』

シンは、仲間の中で唯一学園都市のことを知っている魔術師、エツァリに百合子のことを聞いた。

『鈴科百合子……全く聞いたこともありません、第一位と言うのですからレベルは5だと思いますが、……やっぱり僕は力になれませんね、申し訳ありません。』

「いや、悪かった、こっちは俺だけで何とかする。」

『しかし、一方通行を使えるんでしょう？それもチョーカーなしで、それじゃあ勝ち目なんて。それこそ幻想殺イマジンプレイカーがないと』

彼は最強状態の一方通行の能力への対抗策を挙げる、それは最弱であり最強でもある能力、しかし歴史上一方通行に対抗できた戦法は3つある

一つは先述した幻想殺し

二つ目は無意識に反射するベクトルを選別していることを逆手にと

った垣根提督の未元物質

そして一方通行のAIM拡散力場を解析し尽くした木原数多の戦法だった。

「大丈夫だ、それじゃあそっちも情報収集頼んだぞ。」

電話を切る。

シンの携帯の画面は黒一色になる。

「さて、エヴァの別荘に行くか。」

シンはある業を修得するため、この学園で最も修行するにふさわしい場所に行く。

「えーシンさんどっか行っちゃったん？」

「はい、何でも急用が出来たと。」

刹那はネギとのかのデートを尾行している木乃香と合流してシンの事を説明する、学祭と一緒に回ろうとしていた木乃香はシンの失踪に不満顔だ。

「こんな時に、でも刹那さんにも言わないなんて、……また魔術師が……」



夕映はシンがどこかに行つた理由を考え、行き着きたくない結論を魔法を知らないハルナに聞こえないくらいの声で口にする。

その結論はあながち間違つてはいない、それを聞いた明日菜と木乃香の顔は周囲の気温が五度は下がったかと思つてしまつほど青くなる。

「かもしれませんが、しかしそれなら私や学園長に避難などを要請するはずで、なので恐らくそれほどの危険はないかと。それにシンさんが何処に向かったかわからないので、探しようが。」

「ちよつと！何話してるの！？ネギ君とのどか行っちゃうよ！」

「待つてハルナ！」

一般人のハルナの言葉でみんなは2人の追跡を再開する。

456

「それでユリの能力まで教えたの力？」

暗い空間、その部屋を照らすのは10枚近くあるモニターだけ、そして何百本ものコードが床を全て覆い隠す。その中で蠢く人影が4つ

「ええ、彼の目の前で空間移動を使つて、この髪と目からも一方通行が使えると予想されていましたが、その時点で能力を複数使えると推測されますから。」

純白の髪を揺らし、外見からは予想も付かない言動で話すのは鈴科百合子。

「まあ、いいんじゃない？彼は大会に出るようだし、大会で説明不能で超常現象が起きれば。」

そう言うのは白衣を着た眼鏡の少女、葉加瀬聡美。

彼女は尋常じゃないスピードでキーボードを叩きながら話す。

「それにシンさんはマスター同様、私たちの計画には介入してこないかと、魔術や百合子さんの超能力には非常に厳しいですが、それ以外は基本的にノータッチです。」

耳飾りを付けた、科学と魔法のガイノイド、茶々丸も葉加瀬同様、キーボードを叩きながら話す。

「ようこそ麻帆良生徒及び部外者の皆様！……………」

「おや？そろそろ出番のようネ、じゃあ行ってくるヨ。」

中華風のドレスを着た少女、超鈴音は懷中時計を片手にシュン！と消える。

「フウ、超もなんであんな回りくどいことを？」

百合子は計画の回りくどさにため息をつく。

それを見た、葉加瀬はそれじゃダメですよと笑い、

「超は憎しみの連鎖を嫌うから、田中さんだってチームは服を吹き飛ばす程度だけど、その気になれば大量殺戮兵器にだってできた

んだから。」

「甘い、科学者としてテロリストとして、革命家として……  
・私も行かなくては」

百合子も空間移動で予選会場に行く。

2人は外のまほら武道会予選を見る。

「そんな甘さも超さんのいいことですし、それでも計画は十分達成できます。」

「百合も分かっているのにね。それに超は私たちの同志であり、超能力者であり、……魔法使いでもあるんだから。」

「ホントに父さんがこの大会に!？」

「そう言えばそうだったかなあ?」

超のひと言に予選会場にいるネギ達は騒然としていた。

「父さんが……ここで」

ネギは拳を握る、その拳にはどのような思いが、決意が、気持ち  
が込められたのか分からない。

「それは事実だ、アイツが優勝してウェールズに帰ってきた時、俺が初めてアイツと会った。」

新たな声が響く、そっちの方を見るといつもの見慣れた神父服を着てはいるが、いつもの優しい目と違う目を持つシンがいた。

「シンさん！急用は大丈夫なんですか？」

「ああ、まあな。」

刹那はシンに急用のことを聞いたが、シンは何とも言えない返事ではぐらかす。

急用の全てがこの大会のためと言ったなら刹那になんと言われるか分からない。

「何故お前がここに？、賞金などお前の魔術を使えば問題ないだろう。まさか試合観戦なんて言わないよな？」

エヴァは答えが分かりきった質問をする、質問と言うより確認と言った方がいいかもしれない。

それに答えるようにニヤ・・・とシンは笑う

「もちろん、俺も出る」

「さあーーーー！参加希望者はくじを引いて下さい！引いた人は中へどうぞーーーー！」

司会である朝倉の言葉で、参加者は動き出す。

「サア、行るかア」

「さて、行くか」

「行きましょう皆さん！」

それぞれの思惑を孕み、まほら武道会が始まる。

「オイオイオイ、まさか一方通行まで来ちゃったかああ、こり  
やあ我<sup>オレ</sup>も黙って見てられねえな」。」「

## 第四十三話 決戦の場（後書き）

とうとう決戦の場が整いました。それぞれの思惑の中シンが戦います。これで当分禁書キャラは現れません。

## 第四十四話 嵐の前、黒いナニカ

### 第三者視点

「それでは予選。開始イイイイイ！」

朝倉によって予選の開始が宣言された。

それぞれの思惑が混ざり合い、まほら武道会は混沌と化する。

「おおおお！前年度ウルティマホラ優勝者の古菲選手！たった一人で次々と選手を場外に！」

A～H組まで分けられた8つの戦場、D組には古菲と真名、他はほぼ一般人なので本選出場者は火を見るよりも明らかだ。

それぞれの組に上手く実力者が別れ、驚異的な実力を見せる。

そして一際注目を浴びる、――いや浴びたグループが一つ

A組 シン・F・ハント、鈴科百合子

ゴオオオオオオオ！とA組にのみ、超局地的台風が訪れる。

「「「「「うわああああ！?!?」」」」」

「おおおおお！謎の突風が選手を吹き飛ばす！どいう原理なのか！？」

朝倉は何とか持ちこたえながら実況を続ける。

「ここからは理解不能領域です。」

百合子は誰にも聞こえない声で呟く。

「くそ！なんだこの風！？……でも敵は減った！その優男！お前も場外に出てもらっぜ！」

シンと百合子の他の者、その巨体に伴った体重故か、何とか残ったボディビルダーのような筋肉達磨はある人物を狙う、世界に数人しかいない聖痕持ち、聖人を。

「ん？俺に来るか？」

ヒュン！！

「……………え？」

シンはだるそうに二メートルはある筋肉たるまが放った拳を掴み、空き缶を捨てるように後ろに放り投げる。

「……………！！！！！！！！！！」

その間一分半、約90秒という時間でA組は決着が付いた。

A組本選進出者、シン・F・ハントと鈴科百合子は畏怖の視線を



気にせず退場する。

「初めのは風力使いか？それとも風のベクトル変換か？最後の筋肉塊がお前じゃなく俺に襲いかかってきたのは視覚阻害エアロシユター  
タミチエックだろうが。」

「さて？」

「なんですか、あの雰囲気！後から出てきて！」

「ちょ、ちよつと刹那さん……」

そして、全ての組の予選が終了した。

「お疲れ様です！これで全ての予選が終了し、本戦の組合せが決定しました！（何故か、予選前にトーナメント表は出来てたけど……）」

「本戦は明朝八時！場所はここです！それでは先にトーナメント表を発表しましょう！どうぞ！」

朝倉の横にある布のかけられた巨大な板が姿を現す、それはこの先の戦いを最も早く知る物。

第一試合

村上小太郎VS佐倉愛衣

第二試合

クウネル・サンダースVS長瀬楓

第三試合

シン・F・ハントVS中村達也

第四試合

龍宮真名VS古菲

第五試合

高音・D・ゲッドマンVS田中

第六試合

ネギ・スプリングフィールドVSタカミチ・D・高畑

第七試合

神楽坂明日菜VS桜咲刹那

第八試合

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルVS鈴科百合子

「いきなりタカミチとーーーー!?」

「アイヤー、いきなり真名アルか、しかもその後はシンさん・・・

みな、各々の感想を口にする、しかしその中でも異彩を放つ二人が。

「戦うのは決勝になりそうだな、・・・エヴァ、別荘借りるぞ。

「あ、ああ」

シンはそう言って、会場を出ようとする。

「そんな数時間で勝てるほど私は甘くないですよ?」

一番奥にいた百合子ボソ・・・と言う。

「数時間ならな・・・」

百合子はエヴァの別荘、時間の流れをねじ曲げた空間を知らない。

「シンさん!」

シンは木乃香の呼びかけに答えず会場を後にする。

「貴様、何者だ。」

シンがいなくなったことでネギ達の視線は百合子に向く。

中には裏の世界の実力者もいるが、百合子はそんなこと気にもせず

「私は、……ただの科学者ですよ。」

百合子はさっぱりと言うように手を広げ、首を振る。

しかし、それはネギ達を煽ることになった。

「巫山戯るなっ！」

刹那の百合子に近づき叫ぶ。

「貴様鈴科百合子とか言ったな……どうやらシンと戦う気がしいが初戦は私だぞ？」

エヴァは激昂する刹那を押さえ前に出て、初戦の自分の存在を再認識させる。

しかし、600年の時を生きる真祖の吸血鬼の威風も、百合子には意味がなかった。

「決して切れない時の鎖に縛られ、輪から外れた過去の遺物が？」

空気が凍る。

「な、なんてことを……」

「死んだな。」

周りの者はがく然とする、600万\$の賞金首の不死の魔法使いにそんなことが言えたからだ。

とうの本人は俯き、プルプルと震えている。そして顔を上げると

「ハハハハハハハ！ 齢15にしてこの私にそんな口がきけるとは！！！！褒めてやろう！だがしかし！！！！力の差という物が見えてないようだな。・・・・明日ゆっくり教授してやる。」

エヴァは笑う、それが怒りを越えた故か、本当に認めたのか分からない。

しかし他の者の脳裏に浮かぶのは、明日の虐殺だけだった。

「それでは」

と不気味な笑みを見せた百合子はシュン！と空間移動を使い、会場を後にした。

「フツ！・・・・ハッ！」

シン・ファナリス・ハントはこの学祭の大部分をこの別荘で過ごしている。

元々、学祭を楽しむ気はあまり無かったし、一緒に回るなどの約束もない（北欧に行っていて、刹那達が誘い損ねた。）

今エヴァの別荘にはネギ達もいる、しかし刹那や木乃香でさえシ

ンの元には行っていない。

シンは自分が修行している所一帯に人払いの魔術結界を張っている、エヴァやネギも魔術の結界には気づけない。

今回の大会、シンは必要以上に刹那達を避けている。

しかしそのことにシンは気付いてない、邪魔無く修行したいのか、単に刹那達を巻き込みたくないのかは分からない。

しかし1つ分かっていることがある。

シンは無意識に、百合子と戦うことを楽しみにしていた。

それはまだとある魔術の禁書目録を読んでいた頃、物語の登場人物はシンにとって憧れの主人公の一人<sup>ヒーロー</sup>だった、その生き様、その強さに憧れた。

それと同じ能力の持ち主であり、非常に酷似した人物、鈴科百合子と戦うと聞いた時、シンの中は異世界人としてのケジメを付けるという使命感と共に『一つの感情』が目覚めていた。

それは喜び。

『一方通行という能力に挑戦できる』という喜び。それは後にネギがナギに抱く感情に近かった。

それに加えてある願望がカフェでの百合子との会談で生まれ、急速にふくれあがる。

『<sup>ダークマター</sup>未元物質と戦いたい』

『超電磁砲が見たい』  
レールガン

『原子崩しを打ち破りたい』  
メルトダウン

『念動力に力で勝ちたい』  
テレキネシス

『室素装甲を破壊したい』  
オフエンスアーマー

『空間移動を捉えたい』  
テレポート

『心理掌握から逃れてみたい。』  
メンタルアウト

もしかしたら百合子が使えない能力があるかも知れない。

だがシンは願う、望む、祈る、期待する、希求する 切願する  
懇願する、熱願する。

『超能力と戦いたい』

初めはただの憧れだった。

後に生まれた感情は黒く、深い。

しかしシンはこの感情に悦楽を見いだす。

止めどなく湧き出る黒い感情は、憧れさえも飲み込み、シンを内側から染めていく。

そして明朝

「それでは選手と観客の皆様！ご入場して下さい！」

朝倉の声で龍宮神社の大門が開いた。

ある者は父の背中に追いつくため

ある者は友との約束を果たすため

ある者は好敵手と決着を付けるため

ある者は裏で暗躍する者を監視するため

ある者は2つの幻想の戦いの果てを知るため

ある者は、異邦人としてのケリを付け、自分に生まれた黒き願望を叶えるため。



1つの地に集う、

幾つもの思いが交差する地で、真の戦いが始まる。

「さあて、幾つ能力を数えられるかねえ？シン・ファナリス・ハントよ・・・」

#### 第四十四話 嵐の前、黒いナニカ（後書き）

次回から本選です。

ページ稼ぎが三連続くらいありましたが  
華麗にスルーして下さい。

## 第四十五話 本選開始

### 第三者視点

「失礼しまーす。」

ネギと小太郎、明日菜と刹那が選手控え室に入る。

神社の一室を使った選手控え室、その中には表の人間でありながら達人の域に達する猛者や裏の世界でも名の知れた強者が無言で戦いを待っていた。

その場違いとも言えるような空間に息をのむ子供達。

「よく来たね、ネギ君」

そんなネギ達を出迎えたのはネギの幼少時代からの友人、タカミチだった。

学園内でも裏の世界でも広く知られるその男は、比較的温厚に、しかし後の戦いに心震わせながらネギに話しかける。

「今日ようやく君の成長が見られるよ。」

タカミチはニツと笑う、自身の仲間であり、憧れであり、高い壁だったナギの息子の成長がとうとう見られる。そんな心情も兼ね備えていた。

「僕、今日は頑張るよ、だから……手加減はしないでね」

ネギの背後で小太郎は頷く。

「後はシンさんだけですな。」

刹那の声で、ネギ達は部屋を見わたす、確かにシンの姿はない。

そして狙い澄ましたようなタイミングでガラガラガラとネギの後ろの扉が開く。

そこから入ってきたのは最後の選手、シンだった。

「シ！………シンさん？」

刹那は一瞬、顔に喜びが現れるが、すぐにその笑みが消える。それは他の者も同じだった。

今のシンの目にはいつもの慈悲深く、優しい光は無かった、シンの目にあるのはガラガラと光るケモノの目、闘争本能が埋め尽くす双眸は刹那や真名に恐怖を与える。

「ヨオ刹那、……あ……あとタカミチ」

シンは口を開け、チヨイチヨイとタカミチを手招きする、普通の人が聞いたら何も感じないだろう、しかし今まで側にいた刹那や真名、長年仲間として戦争を切り抜けたタカミチはその言霊に込められた感情、今にも言霊からあふれ出しそうな感情を感じとった。

「今日の戦いさ、超の事とか二人に任せるわ、どうせソツチも加味して大会に出たんだろ？」

「え？ど、どういう事ですか？」

タカミチは焦り気味で言う、あの紅き翼でも比較的平和なシンが

そんなことを言うからだ。

「俺はさ、今日戦うために来たワケ、だからソツチ方面は任せろって。」

シンは魔法使いの使命などを完全に放棄した、それが魔法使いとして知名度、実力ともにトップクラスの英雄の口から出たことは二人の心を大きく揺らした。

「シンさん……」

そこにいるのは神父ではなかった。ただ戦闘者、戦うことに生を見出し、悦楽する者。

「さあ！全員揃いましたね！これより本選の説明をします！」

異質な空気を残したまま、場は本選に移る。

「それでは第一試合！佐倉愛衣選手と村上小太郎選手、FIGHT！」

第一試合は結論から言えば戦いはすぐについた。

佐倉はアーティファクトを取り出すが、小太郎は瞬動術で佐倉の懐に入り、拳を作らずに手を振り上げその風圧で場外送りにした。

それは悪魔襲来の時誤って千鶴の肩に傷を付けてしまった故の、無傷での試合の終わらせ方だった。

選手席では

「コタロー君！」

「なかなか優しいわね。」

ネギ達はそれぞれの言葉でコタローの配慮と勝利を讃えていた。

「シンさん何処に行ったんだろう？」

刹那の疑問を除いて。

「シン、あの鈴科百合子という少女。」

クウネルとシンは選手控え室の屋根にいた。

クウネルの存在を知る者は学園長とシン位であり、クウネルがあまり知られたくないとその場所を選んだ。

「そう言うコト、お前も知っているだろ、アイツは学園都市の能力者だ。」

クウネルはイノチノシヘンでエツアリの人生、学園都市でのグループの日々を垣間見ていた。

クウネルのイノチノシヘンには百合子と非常に酷似した人物が記されていた。

「しかもあの風貌、グループの構成員だった……」

「イヤ、鈴科は一方通行じゃない、アイツは本来不可能と言われた多重能力者デュアルスキルつつうのでな、ようは複数の能力を使えると思ってくればいい。勿論そのなかには一方通行もある。詳しくは勝つたら、だつてよ。」

クククと笑いながらシンは控え室の二階にもたれ掛かり答える。

「そうですか……。しかし私もナギとの約束があります、そう簡単には負けません。」

クウネルはフードで見えない顔の顎に手を乗せ、何か考える素振りをする。

「自分優先大いに結構、俺は今猛烈に戦いたいんでな。残念ながら初戦はアレだ、準決頼むぞ。」

「変わりましたね、シン」

「ククク、俺もナギやラカンみたいな戦闘狂に毒されたかもな」

（そんなことが……）

シン達が立っている場所の裏、そこには真名と楓がいた。  
今のシンは周りが見えていない、二人の存在に気付いているクウネルはシンの変化を探るため黙認している。

（何があつたんですか……。シンさん。）

「次は私の番ですね、それじゃあ」

「あり得ねえとは思うが、負けんなよ。」

「フッフ、どうでしょうか？」

フツ  
とクウネルは消えた。

「さあて、次も俺だし行くか」

シンも屋根から飛び降りた。

「それでは第二試合！ FIGHT！」

朝倉の宣言と同時に、楓は身構える。

「さっきの話を聞いていましたね？」

クウネルは構えようとせず二人が辛うじて聞こえる声で話す。  
シンの聴力も異常だが、楓の忍者としての聴力も勝とも劣らない、  
その楓が辛うじて聞こえる声ならばシンも聞き取れない。

「もちろんでござる。」



楓はクウネルに縮地で近づき、正拳突きをくらわせる。  
しかし、その正拳突きはクウネルの体をすり抜ける

「む!？」

楓も驚く。そしてバックステップで距離をとる。

「私は友を止めなければ行けません、よって本気で行きます。怪我をしたら私が直しますので。」

クウネルがスウと手を挙げる、

ドガアアアア!と楓を中心に巨大なクレーターが出来る、中心にいる楓の関節は本来曲がらない方に曲がっていたりする。

ように見えた。

「いやあ〜スゴイでござるね〜」

「これも魔法でござるか〜」

「私がシンさんを止めてもいいのでござるっ?」

「と言うわけで、」

「「「「いくでござる!」「」「」」

クウネルの周りに4体の影分身があった、クレーターの中心には靄のように漂う煙のみ。

影分身はクウネルを中心に四方に拳を喰らわせる。

「「「「四つ身分身 朧十字！！」」」」

ズガアアア！ステージに十字の跡が残る、しかしクウネルには外傷がない。

（手応えがない！？）

ズズズズとステージを巨大な黒い球体の影が覆う、

「まず                    グアアアアア！」

黒い球体、重力の塊が1つずつ、影分身に迫る。

3つの影分身は消え、本体のみが虚空瞬動で何とか逃れる。

しかし、球体はどんどん落ちていき、大量の水飛沫が霧となる。

「その年で虚空瞬動まで、素晴らしい！取っておきたかったのですが仕方がない。」

クウネルは懷から何かを取り出す。

（カード？）

楓は何が来ても反応できるように構える。

「アデアット」

しかし、構えの意味はなかった。クウネルのアーティファクトは

イノチノシヘン、人の人生を記し、その者の運動神経と身体的特徴の再現、もう一つはその者の人格、癖、運動神経の完全再生

クウネルはそのうちの前者を使った。

クウネルの外見が変わる、しかし全身を覆う服のせいで観客は誰かは判断できない。

「まずい！」

楓はその人物の雰囲気で判断した、強いと。十数人の影分身で一斉攻撃をする。

ドガガガガガ！

しかし、クウネルはほぼ一瞬で倒す。

空中でその内の一体の首をつかんでいる。

「

」

何かを話す。

そのまま、ボロボロのステージに降り立ち、

「私の負けでござる。」

朝倉にこう言った。

「第二試合は！クウネルサンダースの勝利です。」

ワアアアア！と歓声上がる、一試合目に比べ、二試合目の迫

力は映画顔負けだったこともありその音量はすさまじい。

「シンさんは任せるでござる。」

「ええ、それと彼のことと鈴科さんの事は内密に、そのことを知ったネギ君達が何をするか分からないので。」

「アイアイ、龍宮にも言うておくでござる。」

二人はステージを降りた。

（ウツハア！！クウネル汚っねえ）

「第二試合は白熱した試合でしたアアアア！第三試合はどうなるのか！・・・なおステージの損傷がひどいので十五分ほど休憩にします！古選手などのプロマイドは入り口で販売しております！」

商魂たくましい朝倉の司会で場はいったん落ち着く。

「十五分後は第三試合！シン・F・ハント選手と中村達也選手の試合です！」

（ハア~~~~~、タリイ）

ナニカが動き出すまで、あと十五分。

## 第四十五話 本選開始（後書き）

どうも北中津です。

本選がとうとう本選始まりました、戦闘シーンは相も変わらず拙く申し訳ありません。

## 第四十六話 温度差

### 第三者視点

「それではステージの改修も終了しました！それでは入場してもらいましょう！シン・F・ハント選手、中村達也選手です！」

ワアアアア！客席から歓声上がる。

特別に増設された観客を含め、何百人もの人が次の試合に期待し、声を上げる。

その中には図書館探検部の者もいた。

「あれ？」

「木乃香？どうしたの？」

その中の一人、シンの従者である近衛木乃香もシンの変化を感じとっていた。

「それでは第三試合！FIGHT！」

朝倉の声と共にナニカが動き出す。

「おい」

シンは中村達也に声をかける。その顔には生気が感じられない。

「一撃だけ先に打たせてやるよ、全力で来い、俺は絶対に防いだりかわしたりしねえからよ。」

シンの不敵とも言える提案、中村選手は案の定ポカンとなる。

「フン！墓穴を掘ったな！」

しかし内容を理解した中村達也はほくそ笑む。

シンは身を低くし構える熱血な中村達也に対し、腕を組み、ただ冷徹に敵を見据える。

その2人には果てしない温度差があった。

「絶対にかわすなよ！ウオオオオオオオオオオオ！裂空双掌！」

中村達也は一般人の中で遠当てができる数少ない人物だ、しかしやはり一般人の遠当てであり威力はあるがタメが長いのがネックだった。

しかし、シンの提案によりそれが無くなった、そして最高の裂空双掌が放たれる。

ドガァン！

シンは宣言したとおり遠当てをかわしたり防いだりせず直撃した。モクモクと土煙が起こり、何がシンの様子は分からない。

「何っ！？」

中村達也が叫ぶ

煙が晴れると、そこには無傷のシンがいた。初めの位置より何メ

ートルか後退しただけだ。  
シンの生気の無い顔はさらに無くなり、目はもう無関心で染まっている。

「ハア……」

シュン！ドガア！……ドン！バシャアアア！

そして試合は終わった。

観客の見ていた光景は、一瞬で中村の達也懐に入ったシンがアツパーで何メートルも上空に飛ばし、落ちてきたところに回し蹴りを喰らわせ、そのまま場外の湖に叩き込んだ。湖には気絶した中村達也が浮いている。

「……」

観客は呆然としている。

シンの顔は晴れない。

それを見ていた木乃香は難しい顔をしていた。

「シンさんって、あんなに怖かったっけ？」

「いえ、もっと温厚だったかと。」



のどかと夕映が顔を青くしながら話す。

「本屋ちゃん！アーティファクト貸して、シンさんの心が知りた  
いんや」

木乃香はシンの異変を探るため、のどかに協力を仰ぐ。対象の表  
層意識を読み取るのどかのアーティファクトはシンの考えを知るに  
は最適だった。

「う、うん・・・アデアット」

のどかも気になったようで、ハルナにばれないようにいどのえに  
つきを取り出す。

「ええと、シンさん、シンさん・・・キャアア！」

ドン！とのどかは自分とネギの絆とも言えるであるいどのえにつき  
を放る。

「どうしたののどか、のどかが本を落とすなんてめずらしいね  
え、どんな本なの？ってうわ！何これ、呪いの本かなにか？」

ハルナが手にした、いどのえにつきにはこう書いてあった。

『弱い弱い弱い弱い弱い弱い弱い弱い弱い弱い弱い、脆い脆  
い脆い脆い脆い脆い脆い脆い脆い脆い脆い、物足りない物足り  
ない物足りない物足りない物足りない物足りない物足りない物足り  
ない』

戦いたい、闘いたい、争いたい、競いたい、殺し合いたい、試合た  
い、仕合たい、死合いたい、削り合う身、すり減る精神、滴る血、

脈動する心臓、一瞬の駆け引き、生の執念、死への恐怖、勝利の栄光、

敗北の屈辱。足りネエ、全部足りネエ！」

そして絵の部分はクレヨンのようなもので真っ黒に塗りつぶされていた。

「シンさん……」

木乃香は無言でステージを去るシンの背中、まるで泣いているかのような背中を見る。

「続いて第四試合！龍宮神社の一人娘龍宮選手と我らがウルティマホラ優勝者、小菲選手です！！」

ワアアアアアア！と今までで最大の歓声上がる。

それに後押され、真名と古菲が入場する。

その時、中村選手を瞬殺したシンとすれ違う。

「真名、次の試合楽しみにしてるぞ。」

すれ違い様にシンは真名に言う、シンの声は狂気に満ちあふれている声で、2人でも裏の世界で生きる真名との戦いを望む。

「待っててくれ、シンさん。（貴方は私が）」

「真名、私にも意地と言つものがあるネ、シンさんが墮ちようとも私は負ける気はないアルヨ。」

古菲もシンの異変に感知していた。

「それでは第四試合 FIGHT!」

パン!!

古菲の額に乾いた音が鳴る。

それと同時に吹き飛んだ古菲はピクリとも動かない。  
真名の得物を知るネギや明日菜は

( やっちゃったーーーーー! )

「こ、これは・・・」

2人に最も近かった朝倉も、現状が把握できていない。  
場が騒然となる中、カラン、と硬い物が落ちる音がする。

「五百円玉?」

一枚の五百円玉がステージに落ちる。

「今のは・・・羅漢銭ですね」

「羅漢銭とは?」

客席にある解説席の豪徳寺薫の発言に茶々丸は問う。

「分かりやすく言えば銭形平次の銭投げですね、しかしあれほどの威力は見たこともない。頭部直撃はちよつとまずいかも・・・」

「問題ない、だろう古？、お前は後ろに飛んで衝撃を緩和させたはずだ。」

豪徳寺の懸念を真名は一蹴した。

真名の言葉に古菲は体をねじり、立ち上がる。

「それじゃあ本気で行くかな？」

「こいアル！」

真名は袖から一万円分の積み重なった五百円玉を取り出したためらもなく打つ。

それをかわす古菲だが全てをかわせるわけでもなく、バチッ！バチィ！とじわじわと当たっていく。

（間合いに入れば！）

このままだとジリ貧になると考えた古菲は中国拳法の活歩、ネギ達が使った瞬動術の様な物で一気に突進するが、その直線的な動きは、真名にかわされる。

ガシィ！

古菲は瞬時に反転し、真名の腕を掴み、密着する。

（行けるアルか！？）

「私に苦手な距離はない。」

古菲の思い空しく、真名は掴まれてない手で古菲の顎に羅漢銭を放つ。

顎をやられ上手く着地できない古菲を真名は容赦なく狙う。

ドガアドガアドガア！

何十発の羅漢銭が古菲の全身に直撃し、チャリンチャリンとステージに五百円玉が落ちる。

古菲の服は所々破れている。

そのままグタリと横になる古菲、

（さすがに勝てないアルか・・・）

「古老師！あきらめないで！」

「！！！！！！ネギ坊主！！・・・そうアルネ、師匠が頑張らなくてどうする・・・アルカ！」

古菲は叫びながら、腰の布を取り、鞭のように羅漢銭をはじく！！

（後一撃いけるか分からない！これで決めるアル！）

古菲は布の槍、布槍術で真名を牽制しながら一撃のタイミングを計る。

（今アル！）

古菲が操る布が真名の腕に巻き付き、そのまま真名を引き寄せろ！引き寄せられながらもジャラジャラ！と真名は五百円玉を取り出す。

ドドドドドン！

小刻みなリズムで金属の弾丸は古菲にゼロ距離攻撃を喰らう。

「なかなかやるじゃないか、古菲。」

しかし、称賛の言葉を贈るのは真名

「まだまだアルよ。」

バアアン！と先ほどよりも大きい音が響く。  
その音の発生源を物語るように、真名の服の背中の一部が吹き飛んだ。

真名はそのまま倒れた。

「古菲選手勝利——————！あの苦戦から大逆転でした——！」

ワアアアアアア！歓声が古菲を祝福する。

「大丈夫かよ？」

「シンさん……」

10秒のカウントの間気絶していた真名は、今シンの腕の中にいる。

「悪いねシンさん、負けてしまった。」

「大丈夫だ、お前も本気だっただろうし、条件が悪かったな。」

シンの顔はいつものやさしいシンの顔だった、戻ってくれた……  
・と真名が思うが

「だが……お前と戦えないのは残念だったわア。まあク  
ウネルと鈴科との戦い、楽しむとするかア」

シンからどす黒い『何か』があふれ出す、いや、あふれ出すように  
視えた。

それを刹那やクウネルも視た。

（貴方はまだ………帰ってこないのか。）

真名の魔眼は少女の目となり、清らかな涙を溜めていた。

## 第四十六話 温度差（後書き）

どうも北中津です。

最近投稿が遅れてすいません！やはり戦闘シーンは難しいです。  
シンがグレ出しました。



## 第四十七話 前哨戦（前書き）

非常に長い期間の未更新

一つ言えることは、義務教育なんて消えてしまえ、これだけです。  
誠に申し訳ありませんでした。

## 第四十七話 前哨戦

### 第三者視点

先ほどまで無人だった選手控え室。

「ナギの遺言ねえ、確かにお前のアーティファクトはもってこいだな。」

今現在控え室に居る人物の一人、魔術師シン・ファナリス・ハント

「ええ、ですから私も負けてはいられません、私は次のネギ君の試合を見に行きますが、シンは行かないのですか？」

そしてもう一人、英雄クウネル・サンダース

「いや、俺は遠慮する。」

「俺がこの後戦うのはお前と鈴科だけだ、これは予言じゃないぜ、決定事項だ。」

「……………」

クウネルは何も言わず消えた。

「続いては第六試合、噂の子供先生！ネギスプリングフィールド選手と死の眼鏡高畑選手です！」  
デスメガネ

「いくよタカミチ！」

ネギの声が木霊し

「FIGHT！」

朝倉が響く。

この勝負は本来この世界が歩むはずだった歴史を忠実に辿った。

豪殺居合い拳を使い出したタカミチに対し、遅延呪文を上手く使ったネギの特効により決着はついた。

「すごいじゃないネギ君！感動したよ！」

「そうだよ！高畑先生やりすぎじゃない！？」

選手控え室の一部を使った医務室、そこにはネギとその生徒達が集まっていた。

「ヨオ！よくやったじゃねえかネギ！！！！！」

そこに来た一人の男。

「・・・あ・・・・・・・・シンさん・・・」

シンはタカミチに勝利したネギを激励する、それ自体は特に問題ないがただ一つ問題があった、シンの手には黄色い液体、そして絆創膏。

「ほら、お前次もあるんだろ、飲め飲め！ハント印の特製クエン酸ドリンク！疲れた時には酸味だ。それとこの絆創膏！！貼っとけ。」

ぽいと、特製ドリンクと絆創膏の不穩度500%の物体を二つ、ネギに投げつける。

「シンさんこれって……」

「おいおいおいおい、世の中無知は罪だが、知りすぎも良くないぜ、物事を知るためにはそれに見合った力を持て」「それじゃあな！！夢に生きる青少年！！次の試合は……ああ、あの露出正義娘か、じゃあ問題ねえか、だけどそんな次は……がんばれよ。」

シンはそれだけ言って出ていった。

「シンさ「止めておけ、刹那」……真名」

「今の彼はいつものシンさんじゃない、彼は少なくともこの大会が終わるまで帰ってこない。今は見守るだけだ。」

「そうやえ。」

「お嬢様！？」

真名の言葉に賛同するようにのどかと夕映を引き連れた木乃香が話す。

木乃香はいつものポワポワした雰囲気はない。

「これ、さっきシンさんが戦った時の心をのどかのアーティファクトで見たんや。」

それはのどかがあまりもの内容に放り捨てた、いどのえにつきだった。

「やはりな・・・今のシンさんはいつもと違う、何を言っても聞かない。」

「そんな・・・」

「第七試合に参加する選手は更衣室に行ってください!」

アナウンスが話を強引に終わらせる。

「行こう!刹那さん!」

「ちょ、明日菜さん!」

明日菜は有無を言わず刹那を引っばっていった。

残った者は。

「私も負けてしまった、シンさんをいち早く止めるのはあのクウネルという方に任せるしかない。」

「そうなんや……」

ガキイイ！

二人の剣戟が舞う、

長年神鳴流剣士として鍛えられた刹那、数ヶ月前まで一般人だった明日菜

何故この二人が互角に戦えるのか？

「ええい！貴様！！何かしてるだろう！」

「ハッハッハッハ」

クウネル  
変態のせいだった。

クウネルは黄昏の姫御子の時の記憶をほんの少し引き出すことで、ウェスペルタニアの王族の力を引き出した。それは始祖が創造神だったと言う伝承が残る王族の力、烏族とのハーフである刹那以上のレアな血族だ。

「それよりも古き友エヴァ、あなたの相手の鈴科百合子、彼女には初めから全力で行きなさい、そうしないと、……負けますよ」

「と、唐突だな、それよりも私が負けると思ったのか！？ハハハ！これは愉快だ！貴様もあの酔狂が私より強いと？」

「エヴァンジェリン。」

クウネルはエヴァの名前を呼ぶ。それは友への忠告、最強の魔法使いへの警告だった。

「……わ、わつかた、貴様がそこまで言うなら。」

エヴァはクウネルの雰囲気押し黙り、不本意ながらもクウネルの忠告を受け入れる。

「何をしてもムダですよ、ここからは未知の領域、あなたの踏み込める余地はない。」

3つ目の声がする、二人が振り返るとそこには見られない制服をきた鈴科百合子がいた。

「貴様、……何時の間に。」

「それはテレ」「それ以上は言わないほうがいい、学園中を吹き飛ばせば本体も吹き飛ぶでしょう」「おおこわいこわい」

百合子のことを教えようとしたクウネルを百合子は純粋な殺気をぶつける。

百合子はその気になればこの学園を焦土にすることも容易い、実際、無駄な犠牲を拒む超がいるので そんなことはしないが。

しかしクウネルは姿を消す。

「お先に」

百合子が向かったステージでは歓声に包まれ明日菜と刹那が固く握手をしていた。

「エヴァンジェリン、貴方には賭けの賞品を渡さなければ行けませんね、時間がないので率直に言つとナギは」

「次は一回戦、最終試合！ 囲碁部のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル選手と量子力学研究会副会長鈴科百合子選手だ――」

そして二人は入場する。

「お互い格闘とは無縁そうな風貌だがどんな戦いを見せてくれるのか！？」

「キヤー！ カワイイ！ などと声が飛ぶ。 事実二人は最強レベルの力を持つが外見は普通の女の子だ。」

二人の実力を知らない観客は暢気に叫ぶ。

しかし百合子は気に入らないようで

「五月蠅い、司会者！ 始めてください」

紅い瞳が朝倉を射抜く。 言動からは全く感じない恐ろしさに朝倉はそのプレッシャーに汗をダラダラと流しながら。



「ハ、ハイイ！それじゃあFIGHT!」

最強の魔法使いと最強の超能力者の戦いの火蓋が切って落とされた。

ドン！とエヴァは一瞬で間合いを詰め、百合子の腹に右手の拳をぶち込む。

「ガアアア!？」

しかし上がった悲鳴はエヴァの物だった。

殴ったはずの拳は反射され、エヴァは後ろに吹き飛ばされ殴った右手を押さえて悶えている。

（くっ！なんだアレは！ダメージが全て右手に??）

「<sup>マスター</sup>師匠!」

選手席に戻ってきたネギはいきなり右手を押さえたエヴァを呼ぶ。明日菜や刹那も目を白黒させる。

その選手席にコツ、コツとリズムよく足音が近づく。

「シンさん!」

刹那は、第八試合ではなく、百合子を見に来たシンに気付く。

「シンさんも師匠<sup>マスター</sup>の応援に来てくれたんですね！」

ネギはいままで選手会場にいたシンが来てくれたことに喜ぶが、その喜びはシンの言葉にボロボロに打ち砕かれる。

「いやいやいや、俺はあの女を見に來ただけ、エヴァは何も知らないし何も分からない、だから勝てない。」

「え？……」

直球、それは十歳の少年の幼い精神には耐え難い衝撃を与えた。

「ちょっとシンさん！いくら何でもそれはないんじゃない！確かにエヴァちゃん是一般人より強い程度だけど……」

明日菜が反論する。

エヴァは世界樹の魔力で、一般人よりは強いが、身体能力だけで考えると明日菜にも劣る。

しかしエヴァにはこの世界でも随一の600年という圧倒的経験がある。

「エヴァが全力だったらそれこそ瞬殺だ、エヴァは絶対に勝てない、そうだな……あのクールっ娘のキャッチフレーズの一つを教えてやるよ」

全員が息をのむ、いままでよそよそしかったシンがこうも流暢に話すからだ。

「最強最悪インドアクール女子高生、鈴科百合子は核爆弾が直撃

しても無傷である。」

「ゲアアアアアアアアアア！」

吸血鬼の悲鳴が木霊する。

二度目のエヴァの悲鳴にみんながステージを見ると、そこでは虐殺が行われていた。

念動力という不可視の力でエヴァは持ち上げられ、何度も何度も地面に叩きつけられる。

エヴァは合気柔術という武術の達人でもある、不死を最大に利用し、一世紀、つまり100年かけて合気柔術を研鑽した、しかし合気柔術とは名の通り、相手の力を利用する武術である、本来対人間用に編み出されたそれは、異能の前には無力でしかなかった。

「こんなのですか、大幅に力が押さえられるとは聞いていました  
が拍子抜けですね、まああまり虐めると家の娘が泣いちゃうので」  
ちやちやまる

百合子は念動力で、ボロボロになったエヴァを湖に捨てる。

「司会者、カウント！」

百合子は最小限の言葉で朝倉にカウントを求める。

「・・・ハイ！ワ、1、2――」

百合子は朝倉にカウントを促す。

（最強の魔法使いもこんなのか、……………つまらないな、この能力）

百合子は水面に映る自分の髪と目を睨む。

バシャアア！と激しい水音が鳴る。水音の正体は見るまでもない。鈴科は本来敵が復活したのにもかかわらず、狂喜に顔を歪ませる。

「意外と頑丈で……………！？」

ギューウウ！と百合子の意識はエヴァの瞳に引きずり込まれる。

「此処は……………？」

百合子はある城にいた、それは海に囲まれた塔ともみられる建物。エヴァの別荘だった。

「ハハハハ！貴様のためにここを用意してやった！幻術空間だがここなら本気の私と戦えるぞ！来い！鈴科百合子！」

幻想の空間で2つの別世界の幻想が、衝突した。



## 第四十七話 前哨戦（後書き）

どうも北中津です。

とうとう始まりました、さりげない最強決戦。

その場は幻想世界、原作で刹那と行った空間ですね、そこで本当の戦いが始まります。

## 第四十八話 決着と始まり

### 第三者視点

「二人が目を合わせたまま動かない！どうしたのか！」

幻術空間で戦いが繰り広げられている間、現実では虐殺から完全な停止へと変貌したステージに何も知らない観客はブーイングを飛ばしていた。

「ちよつと！エヴァちゃんどうしたの！？」

「こりやアレだ！幻想空間でやり合ってるんじゃないか！」「セイカイダ」アニキ！」

観客の中には明日菜達も含まれており、滅多に見られない魔法の前にネギもそう簡単に結論に行き着けず、行き着いたのはネギの使い魔であるカモであった、さらにエヴァの一番最初の従者であるチャチャゼロの証言で、今の二人の状態を確信するネギ達。

「わかった！夢見の魔法だね！……ラステル……」

「私も！「俺達も頼む」シンさん！？」

春にネギがエヴァの夢を覗い夢見の魔法を利用して幻想空間へと行こうとしたネギ達は、詠唱の途中で乱入してきたシンと刹那を加え、幻想空間へ行った。

「ハハハハ！これが最強の魔法使いの力だアアア！さっきまでの威勢はどうした！」

幻想空間では、幾つもの光が飛び交っていた。

一見魔法の撃ち合いに見えるが、エヴァの放った魔法が百合子の反射の鎧に直撃し、反射した魔法がエヴァの他の魔法に当たっているだけだった。

百合子は目を閉じ、何かブツブツと言っている。

「これは……」

ネギはエヴァの本気に恐怖の念を抱く。

彫刻のようだった城は、全くの無傷、それも反射故の物であり、上空から放たれた上級、最上級魔法は城の屋上の中心に佇む百合子に反射され、エヴァの居る上空へと向かっていた。

「刹那、よく見ておけ、これが次のお前の相手だ……」

次の相手、それはどちらを指すかは明確であった。



「はい……」

エヴァは口では威勢のいい言葉を放つが、内心では焦燥感に駆られていた。

（なぜだ！何故私の魔法が！無詠唱と言っても無傷だと！？）

「面白い……」

百合子さつきが動き出す。

「こっちですよ」

エヴァの背中が衝撃が走る。

ドゴオオオオ！と今まで無傷だった城の一角が弾丸のように吹き飛んだエヴァによって破壊される。

エヴァは仰向けになりうっとうとクレーターの中心で唸る。

「このような魔法は見たことがありませんでした、流石最強の魔法使いです、ですがこの魔法も、もう……私の現実です。」

ドバア！とエヴァの腹の辺りから空気の塊が噴き出しクレーターをさらに深くする。

「ゴハア！」

メシメシメシィ！とエヴァの体が声なき悲鳴を上げる。

「この短時間で自分だけの現実を拡大した！？ハハッ！しかもこの仮想空間での力の源である意志の力を心理掌握で増幅した！？  
バーソナルリアリティ  
メンタルアウト  
流石だぜ！鈴科百合子」

シンは百合子の一方通行をも上回りかねない実力に狂喜し、大声で笑う！

「これで終わりです、最強。」

百合子の右腕に危険な光が集まる。

「精神だけなら死なないでしょう、……………壊れるかもしれません。」

ゴバァ！と危険な光がエヴァの視界を飲み込んだ。

ドサ、と音がした。

金髪のフランス人形のような吸血鬼、エヴァンジェリンが倒れた音だった。

「え、え？」

「カウントです、司会者。」

鈴科は混乱している朝倉に再度、カウントを促す。

「は、はい！1、2、3・・・」

「マスター  
師匠・・・」

幻想空間から戻ってきたネギ達は何も言わず、ぐったりとしているエヴァを見ている。

シンは戻ってくると控え室に行った、この結果はシンにとっては想定済みであり、これ以降の見る価値は見出さなかった。

「10！、勝者！鈴科百合子選手ーーーーー！」

朝倉の勝利宣言を聞いた瞬間、エヴァの体がフワと浮き上がる、百合子がエヴァの体を念動力で持ち上げ、ステージを降りて、ネギ達に放り投げる。

「楽しめました最強、貴方にも私達の戦いに参加してもらいたかった。」

鈴科は空間移動で消えた。

「マスター  
師匠、大丈夫ですか！」

場所は代わり今まで何人もの選手が訪れた医務室、その中には真祖の吸血鬼もいた。エヴァは目を覚ましていて、ネギや明日菜も来ている。

自分の師匠であり、魔法世界に名を轟かせた闇の福音が万全ではなかったとは言え、いとも容易くやられた事と、百合子の顔全体を満たしていた余裕の笑みにネギは驚愕していた。

「問題ない・・・精神のダメージはまだ残るが・・・外傷は治った。精神の方も寝てれば治る。」

エヴァのダメージの大部分は幻想空間でのダメージであり、それは全て精神に来る、ステージでの外傷は医務室に運ばれた時、木乃香が治したが、精神ダメージは治しきれなかった。

ネギ達は知らないが幻想空間とは言え、学園都市第四位、威力だけなら三位にもなる原子崩しをモロにくらったのだ、もし現実ならその危険な光により跡形もなく吹き飛んでいる。

「<sup>マスター</sup>師匠あの人は・・・」

「分からん・・・恐らく知っているのは、シンと「私ですか」  
うお！？いきなり出てくるな！」

エヴァの背後にクウネルが現れる、長年の付き合いらしいエヴァでも驚くようだ。

「と言うかお前！私の次の試合だろ！こんな所にいていいのか！？」

エヴァは一回戦最終試合、次の二回戦第一試合はクウネルと小太郎だ。

「・・・・・・・・・・」

「何故ぼーやがそんな顔をする？・・・・・・・・・・ああ、そうか。」

エヴァはクウネルに言ったのに何故か隣にいたネギの表情が陰る、それを見たエヴァは数瞬の思考で、その意味を見いだした。

「ぼーや、次は何試合目だ？」

エヴァが目を覚ましてからかなり立っている。

その間にクウネルと小太郎の試合は終わっていた、それほどエヴァの疲労は大きかった。

自分がそれほどのダメージを負ったことが未だ信じられないエヴァは現在の試合を聞いた。

「次が第3試合・・・・・・・・鈴科さんと刹那さんです・・・・」

「・・・・・・・・そんなにつ！・・・・・・・・」

エヴァは横の柱をその幼い力で叩く、ジンジンと自分の拳が痛む中、自分のふがいなさを噛みしめる。2試合の間も気絶していた事に、自分の30分の1も生きていない者に再び負けたことを。

「オイ！鈴科百合子の事を全て教えろ！」

エヴァはクウネルに言うがクウネルはスタスタと外に出ようとしていた。

クウネルは首だけ振り向き、

「私が教えると彼女がお怒りになるので、ただ教えられる事は・・・彼女が使う力は魔法でも魔術でもない、しかし彼女だけが持つ固有技能と言っわけではない、とだけ言っておきましょう。それとネギ君。」

「は、はい・・・」

クウネルは百合子の超能力の秘密の一端だけを答え、ネギに話を振る。

全くの他人にいきなり話しかけられたネギは驚きながらも返事をする。

「もし君が彼女を倒し、決勝で私と戦うことがあれば・・・・・・  
・・・俺と戦わせてやる。」

「え・・・・・・？」

「お・・・おい！貴様まさか！」

スウとクウネルは消える、場に謎だけを残して。

「さああああ！次の試合は第二回戦最終試合！かわいい女子学生かと思いきや巧みなデッサン捌きで敵を倒す桜咲選手！対するのは謎の力でマクダウェル選手を倒した鈴科選手だ！」

外では第二回戦最後の試合が始まろうとしていた。

「お前は魔法は使わないんだろオ？なら私の敵じゃねえな。」

入場する寸前、刹那をにらみながら鈴科はそう言う、挑発などではなく本当に敵ではなかった、

エヴァを軽くあしらう百合子、そのことは刹那も十分分かっていった。

（どうする！？・・・彼女に勝つには・・・魔法は聞かないあれは障壁なのか？それとも何か特殊な魔法を・・・）

刹那は第二回戦の時からずっと百合子の対策を考えていた、しかし分かることはエヴァの魔法を跳ね返していたこと、手から謎の光を出すこと、シンが言っていた自分だけの現実の拡大、そこから百合子の贗作能力を導き出すには情報が乏しすぎた。

AIMフェイカー

バーソナルリアリティ

「おーい！刹那ア、・・・俺からのアドバイスだ。」

（シンさん！？）

刹那の脳内に直接声がする、パクティオカードによる念話能力だ。いままでよそよそしかったシンからの助言に刹那は内心歓喜する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「えっ！？それでいいんですか！？」

「まあ、俺を信じてみろって！！！！これが上手くいけばアイツに

攻撃を与えることは出来る。行け！我が従者刹那！ヾ

（ハイ！）

刹那はステージに上がっていた。

そして、準決勝への最後の椅子を決める戦いが始まった。



## 第四十八話 決着と始まり（後書き）

どうも北中津です、

弱体化エヴァは百合子にフルボッコされましたと、百合子の魔法反射は上級魔法は魔法使いでもある超から原理、自己解釈ですが万物に宿る魔力をそれぞれの属性に打ち出すのでそれを聞かされていたので反射できました、しかし幻想空間へと飛ばす魔法は初見だったので自分だけの現実の拡大が必要だったと解釈して下さい、エヴァを倒した能力は原子崩しです。

## 第四十九話 策と手札

### 第三者視点

「それでは第3試合・・・FIGHT!」

朝倉の声で最後の試合が始まった。

「はあああああああああ!」

刹那がデッキを大きく横に振る、刹那を中心に半径約1.5メートルを気で強化されたデッキが一閃する、その範囲にもろに入っていた百合子はそれを全く気にしない。

バシン!!とデッキが百合子の脇腹に当たる。

デッキは本来刹那が振るった方向と180度真逆に飛ぶ、はずだった。

ヨロ・・・と百合子の体がほんの少し、グラと揺れた、外部からのベクトルによって、

そしてそのベクトルを加えたのは、他でもない刹那だった。

「!!!!!!!!!!!!!!」

「成功だな・・・」

声のない驚きを発したのは二人、攻撃された百合子と攻撃した刹那。

その光景に声を上げたのは刹那にある助言をしたシン。

百合子は肩を振るわせる、それは最強の鎧を破られた故の驚愕では合ったが、怒りなどよりも圧倒的にある感情が上回った。

「まさか私の鎧を、多少とはいえ破るとは………流石彼の従者、見直しました！」

狂喜、格下の敵が格上の自分によるめくらいだがダメージを与えた事への喜び。

（本当に攻撃が通った。）

刹那はシンの助言を思い出す。

（アドバイスって、彼女の攻略法があるんですか！？）

（まあな、ただしこれができたからと言って勝てるとは限らない、鈴科の強力なカードの一枚を封じるだけだ、しかしこれでお前はかなり戦いやすくなる………出来ればだが。）

（どんな方法なんですか！？教えて下さい！）

（わかってる、アイツの鎧を破る方法それは………寸止めだ。）

（は？）

（だから寸止めだって！ほら、行った行った！

ブツ）

（あつ！切っちゃった、・・・・・・・・・・）

「なるほど・・・・反射の応用でデッキを反射の直前に引き戻すことで『遠ざかるベクトル』を内側に反射させたか・・・・まだ未完成だが、・・・・あの魔術師の入れ知恵ですか？」

百合子はシンの考えを即座に理解する。

「そうです・・・・よ！」

話しながら瞬動で瞬時に間合いを詰め、デッキを振るう。

全く攻撃がきかない百合子に対しては何とか寸止め戦法を使うしかない。

「そうですね、貴女があのに乏しい情報からこの解を導き出したのなら、鈴科百合子市場での桜咲刹那株は見事バブル景氣を迎えたでしょうが・・・・残念です、ああ、勿論一位は超で、彼は四番目です。」自分の最強防御を未完成ながらも突破された事など何処吹く風と言ったように言う百合子「それでは一方通行は止めておきましよう、他の能力が埃をかぶってはいけません。」

百合子はポケットから小さな鉄球を三つ取りだし刹那に投げる。

「これは！・・・・・・？？？」

「鈴科選手が投げた鉄球！が超スローで進んでいる！！何だこれは！？！？！？」

三つの鉄球はそれこそ人が歩く程のスピードでゆっくりゆっくり刹那に向かっていく。

（なんだこれは・・・・・・）

刹那は警戒しながらもデッキで鉄球を叩き落そうとするが、刹那はその時の能力を知るよしもなかった。

バキイ！と鉄球を叩き落とそうと振り下ろしたデッキがへし折れた。

「な！！！！」

「絶対等速ねえ、レベルは3つてどこかな？」  
イコールスピード

屋根の上で安物のワインを飲みながらシンは、野次馬気分で観戦していた。百合子の一方通行以外の能力の使用はシンにとっては予想外以外の何物でも無かった、シンの思惑ではあのまま木原神剣もどきを何度も使用させ、実戦データを取るともりだったが百合子は他の能力の使用を開始した、

「まあ、手札が分かるのならそれでもいいけどな。」

「あなたに敬意を表し、一方通行以外の能力で貴方を倒しましょう。」

その声は数瞬前の百合子の立ち位置からの声では無かった。刹那の背後、空間移動によって移動して正拳突き構えた百合子の言葉だった。

ドゴツッ！と刹那の体が飛ぶ。

百合子の華奢な体から放たれた拳は刹那を16メートル程地面と平行移動させ、観客席の手すりを破り、突っ込ませた。

「せつちゃん！大丈夫なん！？」

そこに都合良く居合わせた木乃香は一撃で吹き飛ばされた刹那の安否を気遣う。

いままで守ってくれてた刹那が華奢な少女に軽くあしらわれているからだ。

「だ、大丈夫です、お嬢様、気で強化してますから。」

ヨロヨロと立ち上がった刹那は一瞬でステージ戻る。

あの反射はもう使わないと聞いて、刹那は寸止めなどを意識せず

全力で先が折れたデッキを振った。

刹那は吹き飛んだ百合子の追撃まで考えていたが、それは全て無意味になる。

ガキイイ！

沈黙、それは百合子もピクリともせず刹那が全力で振るった、常人ならばあばらが何本か折れているだろう一撃は反射もされず、百合子にも触れず、ナニカに阻まれていた。

（なんだっ！？なにかがあの人の上に。）

「他にも防御方法がありますよ？」

「オフエンスアーマー室素装甲ねえ、車に轢かれてもライフルで撃たれても無事だからなあ、そう簡単にや破れんよ。」

シンにしか分からない情報、それを誰も聞いていない中、彼は口にする

「さて」

「！！！！」

百合子は刹那の腕を掴む、素手で、室素が阻まないその行動は、新たな能力の使用を意味した。

「手札を見せるのもこれくらいにして……終わらせますよ。」

バチイイイ！

と刹那の全身に幾つもスタンガンを押つけたような音が響き渡る。

バチバチバチバチバチと数分間、刹那の中を電流が蹂躪する。

「ぐああああああああ！」

数分後

シューウウウウウと音と共にドサ、と音が鳴る。

「気絶しています、命に別状はないでしょうが医者に診てもらってください。」

スタスタと百合子はその場を去った。

一人の敗者を残して

「・・・・・・・・・・・・・・・・勝者！！！！鈴科百合子選手！」

冷酷にも、朝倉の勝利宣言が木霊した。

「せ、せつちやああああああああああん！」

「さあ、お互い圧倒的な強さで敵を倒してきた、ハント選手とク



ウネル選手！どちらが決勝への切符を手に入れるのか！！」

ステージ上にはかつて世界を救った二人の英雄、その二人が今戦おうとしている。

しかしその様なことを知らない者はその場を占める空気にまったく気付いていない。

気付いているのは僅か、エヴァンジェリンとその従者、チャチャゼロ、そして超一味のみだ。

（この戦い、どうなる？）

（シンサン・・・何処まで暴れてくれるカナ？）

各々はこの戦いの結末を想像する。

「ずっと分身なんて無粋なマネ、しないよなあ？」

シンは旧友に話すように軽い口調で、今まで戦っていたクウネルの分身に言う。

ずっと分身ならば基本的にシンに勝ち目はない、もしそうならば開始と同時に天罰術式で決めるつもりだった、分身ならばそれほど天使の力も消費しないし、殺意は無くても戦う時点で敵意は存在する。

「ええ、しかしシン、貴方と戦うのは私ではない。」

「FIGHT！」

クウネルの言葉にかかるように朝倉が試合開始宣言をした。

ドゴオオオオ！とシンを中心に第一試合で長瀬楓の時と同様の重力の塊が降り注ぐ。

「うおおおおおおおお！」

しかし、楓をも押しつぶした重力の塊をシンは聖人の力のみで耐える。

そのGに耐えられずシンの周辺の様子はメシイ！！と音を立て括れている。

「フム、さすがは聖人、では・・・」

ドゴン！と闇色の球体がシンの頭上に落下する。

それも巨大なGの塊であり、シンは地上の数十倍のGを浴びせられる。

「左手に・・・魔力ウ！、右手にイイ・・・気イ！そして・・・  
テレズマ天使の力アアア！」

ゴオオオオ！とシンの全身を神々しいエネルギーが覆う、  
咸卦法・天、超高等技術咸卦法に魔術師が手を加えたシンの強化技法。

「なめるあああああ！」

ドバアアアア！とシンはGという二重の束縛を力ずくで破壊する。

その余波はステージと観客席を隔てる湖の水を吹き飛ばし、その水飛沫は戦場と日常を完全に分断した。

「力ずくとは……ラカンじゃあるまい。」

クウネルは陸の孤島と化したステージ上で、力ずくで魔法を打ち破ったシンに感服と共に、一人の盟友を視た。

クウネルも自分の魔法を打ち破られたのが答えたのか、隠れた額に冷や汗が走る。

「イイゼイイゼ！こういうのを待ってたんだよ！！やっと戦いらしくなってきたああ……それで？次はどうするんだ？」

狂喜するシン、その目は京都で刹那と相まみえた剣士の目と一様だった。

その言葉にクウネルは意を決したのか、懷から一枚のカードを取り出す。

「言ったでしょう？貴方と戦うのは私ではないと、これは単純な目くらましです。それでは……アデアット。」

クウネルの周辺を大量の本が渦巻く、それはクウネルのアーティファクト、イノチノシヘンであり、それを理解したシンは、誰と戦うのかを誕生日プレゼントをもらった子供のような、無垢で危険な眼で見る。

「餅は餅屋、目には目を、齒には齒を、魔術師には……魔術師を。」

この瞬間、ギラァァ！！とシンの目が狂気に染まった。

「シンさんは!？」

その声は刹那、たった今目を覚まし木乃香の治療で全快した刹那は選手席でシンの戦いを垣間見た、

しかし今は水飛沫のカーテンにより、何も見えない。

そのカーテンも何時かは重力により、本来の元へと返る。

「あ!、あれは!?!?.....」

カーテンの奥に見えたのは二人の神父、

「おお!!まさか相手が自分とは!!しかもなんだここ!？」

片方の神父、シンが言う、この大会のことも知らないようでキョロキョロと首を振る。

クウネルによって再生されたシンはどうやら学園祭が始まる前、最後にクウネルに会った時のシンのようだ。

そちらのシンはいつも通りのシンで、鮮やかな金髪が首を振るたびに揺れる。

「おいおいおいマジかよ!?!クウネルも粹なマネするじゃねえか!?!」

もう一方の神父、シンが笑う、叫ぶ

笑いに伴うように、少し黒ずんだように見える金髪が揺れる。

「まあいいや、.....おいシン!制限時間は十分だ!さっさと始めよぜ!?!」

「ハッ！激しく同意だ！！ルールは簡単、殺しはなし、場外、ダウン10カウントで負け、詠唱禁止！天罰術式なんて無粋なマネするなよ！！！」

お互いが構える、

「左手に魔力、右手に気、そして・・・天使の力テレスマア！！！」

ステージに神々しきハーモニーが響く。

「行くぞオオオオ！！！」

嘗て、神を越えようとし、救世主と呼ばれた魔術師が衝突した。

#### 第四十九話 策と手札（後書き）

どうも北中津です。

刹那の策は木原神剣でした、数多の木原神拳の様に一方通行のAIや演算パターンを解析したワケでもない刹那では奇跡的に微量のベクトルを加えるまでとなりました。

## 第五十話 偽物へホンモノと本物へニセモノ

疾ッ

一つ拳が空を裂く、本来その場にあつたモノは身代わりとなつた空気の数センチ横に逃れる。

その拳を放つはシン、その一撃は岩などなら容易く碎く。

敵じぶんの一撃を躲したモノ  
裂ける。

シンの頭部は弧を描くように  
軽やかに裂けた口は見た者にいやおうなしに恐れを与える。

「ハアッ!!」

ドゴン!と拳が振るわれる、振るわれる拳は神の裁きの如く、己に逆らう者全てをなぎ払う。

その一撃を防ぐのは同じく神の如き一撃、互いの一撃は互いの勢いを削ぐことで終わる。

二人の魔術師は距離をとり、向かい合う。

「お前、本当に俺か? 実力の違いはいいとして、癖が微妙に・・・な?」

クウネルのアーティファクト、イノチノシヘンによって現れたシン、彼はこの打ち合いの中で現在存在するシンとの微妙なクセの違いに気付いた。魔術師としての鍛錬を怠らないシンは自分のクセな

ども理解していたシンには子供がするような間違い探しのように容易く見つける。

「いや、俺はシンだ、お前と違ってチョット本能的になってるだけだよ、使う魔術も同じ、使う技も同じ、体の構造も同じ。違うのは生きた時間とそこくらいだってコト。」

向かい合ったシン、観客からすれば二人の佇まいはまさに双子が合わせ鏡、クウネルのシンと本物のシンは時間がもったいないと言ったように再び殴り合いを再開する。

「何ですかあれは!?!」

観客席の中でも一際ステージに近い選手席、その席でこの戦いを垣間見るのは魔法使い達、その者達はこの戦いについて行けない。その中でも勤勉なシンの従者である刹那はまずその疑問が優先した。しかしそこにいる者達は答えられない、選手のほとんどが裏を知って半年、ネギでも数年、しかし答えられる者が一人、魔法に触れて数百年存在自体が幻想のエヴァンジェリンである。

「.....あれはあの男、アル.....クウネル・サンダーズのアーティファクトの能力だ、あの男のアーティファクトの能力は特定の人物に化ける、化けると言っても外見や戦闘能力もまねる、完全な再生だ。」

エヴァは饒舌に答える。



「それでは！！彼h「まあ待て、桜咲刹那それは早計だ」」

刹那はそれを解を急いだが、エヴァは話を続けようとする。

「奴のアーティファクトにはもう一つ的能力がある、特定人物の完全再生それこそ性格までだ、さつき偽シンの方が俺と行っていたところを見るとそっちだろう。」

刹那達はその結論に到達し、それぞれの胸中を語ろうと、

ひゅうううううううううううううううう  
するが

トン

「どうするどうする？このまま試合見ちゃおつか？つてああ！！ハント神父じゃん！！あの人出張から何時帰ってきたのよ！！？？全く生徒を置いて何してるんだか？こっちはこんなに頑張ってるのにね」

「ミルミル」

音の長さに見合わない着地音で選手席に来た、というより着地した二人組、中学生くらいの風貌と小学生くらいのシスター。手にはパクティオーカード、確かにあの高さからのダイブで無傷なのも何らかのアーティファクト使用があれば納得がいく。

しかしそれ以上にネギ達を驚かせたの事が一つ。

「美空ちゃんじゃない!？」

「ゲッ！い、いや、私は春日美空などでは「ねえ！美空ちゃんですよ！」」

その通り、謎のシスターの招待はネギのクラスの生徒！春日美空なので「うるさーい！」

その通り、謎のシスターの招待はネギのクラスの生徒！「だから違ー！ー！ー！」

そ「もつどつかいけー！ー！ー！ー！ー！」

この後明日菜や謎のシスターは、空気兼初戦敗退兼ヒゲの高畑の救出のため地下に潜るが、割愛する。

「ハア！」

「ガア！」

『本物のシン』は完全な物量で攻め立てる、その一撃一撃には正確性やスタミナなどを全く考慮していない獣の攻撃。両手は獣の牙、低く屈んだ身は獣の体躯、その戦闘本能が暴れ狂う瞳はそのまま獣の瞳、弱点？スタミナ？構え？そんなものは忘却の彼方へ旅立った。彼の脳内には『攻める』、ただこの一つ

「くそ！・・・ハア！」

一方の『クウネルのシン』、こちらのシンは本来のシンの戦闘スタイルである。

シンの扱う武器は大太刀、メイス、アスカロン、フルンディングである。

どれも連続攻撃にはほど遠い、本来のシンの戦闘スタイルはカウンターを中心とした戦闘スタイルで一撃に全てをかけ、ただ無造作に攻める攻撃ではない。

「お、オイ！お前本当に俺かよ！！なんだよこの攻撃！？」

さすがに自分ならば気付く、『クウネルのシン』は嵐のような攻撃を何とか防ぎながら話す。  
周囲は驚きに声も出せない。

「ハッ！

所詮人間は理性が強いだけの、

ケ

ダモノ、ダア！

テメエの、ストイックさは

称

賛ものだア！」

獣の呻きにも似た声の節々で本物のシンは答える。

それは自分に向けるように、自己嫌悪のよう話した。

「ゼツ

G A！

ハア！

ㄥ

本物のシンは獣の様に攻め立てる、ネギ達にとっては完全に本物と偽物が逆転していた。

しかしベースは同じなのかなかなか勝敗はつかない、一見『本物のシン』が押しているように見えるが、その攻撃のほとんどを『クウネルのシン』はいなししていた。

『本物のシン』は決定打を与えられず、『クウネルのシン』は攻撃の機会を潰される。

しかし、一瞬の空白が出来た。

「七閃！」

十四本のワイヤーがステージを切り刻み、絡み合う。

必断の鋼糸は周囲を切り刻む、しかし二人の魔術師は無傷、ステージを切り裂いても自分は切り裂かれんと互いのワイヤーを操作した。

「知ってるか？これに勝つたらあの一方通行と戦えるんだぜ？」

「！！！！？一方通行が・・・だと？」

「隙アリ」

ドガア！！と『クウネルのシン』が飛ぶ、発射台は『本物のシン』の拳、ミサイルのようにそのまま観客席の屋根に直撃したシンは、科学に物を言わせた障壁は屋根を貫通するほどではなかった、外傷はないものの、腹部と背部に受けた衝撃は『クウネルのシン』にとつての足枷には十分だった。

『クウネルのシン』はヨロヨロと起きあがろうとする。

「くっそ・・・一方通行が・・・」  
「まだまだ」  
「ガッ！？」

何とか『クウネルのシン』が立ち上がった瞬間、『本物のシン』の追撃が迫る、首を掴まれた『クウネルのシン』は再び屋根に叩きつけられる。

「悪いな、俺は一方通行と戦いたいんだ。」

首を押さえ、そのまま『本物のシン』は話す。

「本当に一方通行が・・・いるのか！！？」

自分を押さえる手を掴みながら『クウネルのシン』は事を確認する、しかし『クウネルのシン』の疑問はもう一つあった、自分以上に機関銃のような攻撃を繰り出した『本物のシン』が自分を片手で押さえつけていることだ。

それを語るつもりは『本物のシン』には皆無である、よってこの場を借りて語ると、シンはエヴァの別荘で修行していた際、シンの食事は全て天草印の食事であり、漬物の数から全て魔術によって決められている、その中には筋力増強や滋養強壮など様々である。この尋常じゃないスタミナもこれ故である。

「一方通行だけじゃないぜ、贗作能力とか言うので禁書に出る能力はほとんど使えるっばい、俺が見ただけでも八種類くらいはあると思うぞ？ホレ、あの席にいかにもアセロラな娘がいるだろ？」

ニヤと笑いながら、『本物のシン』は懇切丁寧に顎で示す。それに合わせて視線をずらした先には無表情でこちらを見る純白の髪に紅い瞳。

「た、確かにそうだな・・・」

「だろ、名前も鈴科百合子だぜ、こりゃ出来すぎだ」

「・・・・・・・・」

『クウネルのシン』は苦笑いと呆れが混ざり合った表情で視線を戻す。

「さて・・・」

『本物のシン』はおもむろに手を離す、それはそれを見ていた観客全てに疑問を残す。

それは『クウネルのシン』も同じであり、シンを怒を孕む目で睨む。

「何のつもりだ？」

「時計の勉強だ、俺はステージから飛んで9秒、さて？お前は何秒外にいたでしょう？」

この大会のルールを確認しよう、刃物、飛び道具の禁止、ダウンまたは場外で10カウントである。

なぜ『本物のシン』はわざわざ『クウネルのシン』が立ち上がったから追撃を仕掛けたのか、シンほどの実力者なら一瞬のうちに追撃は可能、その答えは一般人である朝倉でも確認できるほどの確実な1秒の差をとるためであり、百合子の事を懇切丁寧に語ったのも一種の時間稼ぎであり、自分が興味を持つ物などを考えるのは造作もなかった。

「これはクウネル用の作戦だったが、上手く成功したな。」

この場外カウントの作戦は本来クウネル用の作戦だった、大会に出ているクウネルは本体ではなく幻影であり攻撃する時だけ実体化なども可能である、よって『本物のシン』が選択した勝つ方法が場外であった。

「朝倉アーーー！！10カウントだアーーーー！！」

「え？あ、ああ！！勝者！シン・F・ハント選手！！！！」

朝倉の宣言と同時にクウネルは本来の姿に戻る。

「まさか場外カウントとは……これでナギとの約束はお預けですか。」

「安心しな、ちゃんと約束は果たさせてやる。」

シンは埃を払いながらクウネルに言う。

今だ、二人は屋根の上にいるので話は聞き取られない。

「手の内は見せない……と言うことですか。」

最強の能力者、鈴科百合子は呟く、準決勝第一試合でシンは七閃以外の魔術を使わなかった。

それはシンが決勝に向けての手をむやみに見せないためだった。

「それでは第二試合!!」

「

「私は出し惜しみしません。」

長点上機学園の制服を着た百合子はステージに上がっていった。

第五十話 偽物へホンモノと本物へニセモノ（後書き）

どうも北中津です。

まずは、魔術の応酬を期待していた方々、非常に申し訳ありませんでした。イノチノシヘンのシンは本物とほぼ同じであり、戦法の違いはあれど、実力的には同じであり、長期戦になるのは確実、そして決勝での手札を隠すため今回はコスイ手を使ったという言い訳であり、最終的には北中津の実力不足が原因という事になります。しかし決勝では現在執筆中ではありますが、能力と魔術のオンパレードとなっています。



## 第五十一話 超能力者の手札

### 第三者視点

「私は先の戦いで理解しました。」

「え？」

まほら武道会準決勝第二試合、ネギスプリングフィールドと鈴科百合子の決勝への最後の切符をかけた戦い。もう始まった戦いの中、中国拳法の構えをとるネギに対し、ダラリと手を下ろした百合子はおもむろに言葉を発する。

「最強だけでは無敵にはなれない、最強ばかりでは何時か敗北を産むと、よってこの戦い、最強に準ずる術は自粛します、さあ、始めましょうか。」

「杖よ!!」

話を終えても構えもしない百合子に攻撃するのを躊躇っていたネギはその言葉から判断し選手席に立てかけた杖を呼ぶ、爆ぜるように杖が飛んだと同時に瞬動で百合子の背後に回り込んだネギは魔法の射手を周囲に作り出す。

ドガアと杖の突きに乗せた魔法の射手が百合子の背中に直撃する。

観客と客席の屋根に不法侵入した3 - Aの生徒達は決まったと確信する。

「まだ！」

選手席で観戦するシンはただ一人叫ぶ。  
それに気付く者がもう一人、

（手応えが・・・ない！？）

ショックアブソーバー  
「衝撃拡散」

その声はネギの背後で響いた。

ドガア！！とネギが飛ぶ、その攻撃は超能力では無く、純粋な力  
だった。

テレポート  
「空間移動、メタモルフォーゼ  
肉体変化」

ドボン！！とネギは意表をつかれた故かそのまま湖に突っ込んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ネギが湖に沈んで数秒、水面はネギの存在を忘れてしまうように  
穏やかになる。

しかしそれは水面での事だった。

（なんだコレ！？水がまとわりついて！？）

穏やかな水面に対し、水面下では嵐のように水が渦巻いていた。

「水流操作」

「せ、7・・・8・・・9」

ステージでは恐る恐る朝倉がカウントをとる。  
観客もざわつきながらも水面を見て、選手席では飛び出そうとして  
いる刹那を止めようと楓達を取り押さえている。

「テ「バシヤアア!!」」

ギリギリ約9・5秒、ネギは水の呪縛から生還した。

それはネギの実力ではなく、百合子が能力を止めたからである、  
急におとなしくなった水に気付いたネギは瞬動術で水上に上がり、  
灯籠を足場にステージに戻った。

「ゲホッゲホッ、ハ、ハーーー」

ネギは数秒間肺から離れた空気を大きく吸い込む、しかしその行  
動に清々しさはなく恐れと強敵の存在への畏怖だった。

（あの人・・・完全に遊んでる。）

「暖めてあげましょう。」

（また後ろ!?!）

ゴオオオ!とネギのロープのに紅き炎が走る、ロープを侵す紅き  
能力をネギは恥などお構いなしにのたうち回る、ネギのロープがズ  
ブ濡れだった事もあり火はすぐに消えた。

「乾かした方が正解でしたか?」

ゴオオオオオ!!と予選でも見られた突風がネギを吹き飛ば

す。

「うわアアアアア!!」

「ネギ先せええええい!!??」

客席の屋根で観戦（不法侵入）していた3 - Aの面々はネギのやられっぷりに気絶寸前だった（委員長のみ）

「ちょっといいんちょ!!止めなつて!!下手したらネギ先生が負けになるって!!」

今にもフラフラになりながらも飛び出しそんな委員長をみんなで止めていた。

その時みんなはもつとも団結した。

「円なにしてるの!!??」

不法侵入組の一人釘宮円は委員長を止めずネットブックを凝視していた。

「ちょっとコレ見てよ!!」

円が見せた画面にはこう書かれてあった、『子供先生涙の過去』と。

「あ、あれ??」

戦闘の真っ直中であるネギ・スプリングフィールド、彼は戦うための術を身に付けて数ヶ月、しかし敵を見失わない程度の技術はあった、しかし今ネギの視界に敵の少女はいなかった。

「ダミーチエック視覚障害、さあ私は何処にいますでしょう?」

ただ声だけが響く、対象物を『見ている』という認識そのものを阻害する能力でありネギだけがその対象であった。今観客の目にはキヨロキヨロしているネギの周りをウロウロしている百合子が見えているだろう。

「なるほど、そのような過去があったとは……フフ、村がほぼ全滅とは。」

「なんでそれを!??」

「マインドハウンド記憶操作」

その名の通り、百合子はネギのトラウマとも言える雪の日の夜の出来事を読み取った、しかしネギ本人に強く根付いたその記憶はレベル3程度では書き換えられるようなものではなく、読み取るのが精一杯だった。

「あなたが魔法を覚えようとしたのもそれが原因ですか、フフ、

実に黒く不純な動機です、しかしそれを覆い隠すように正当な動機が乱立している、父を見つける、立派な魔法使いになる、みんなを守る、強くなる、それほど自分を正当化したいと。」

「ち、違、ぼ、僕は」

姿無き声がネギの周囲を囲む、それはネギの根源を脅かし白昼の元にさらす。

同時に複数の能力を扱うことが出来ない百合子は姿を現しているのにネギは全く気付かない。

「何が違うのですか？あなたが日本に来る前にイギリスで覚えてきた九つの魔法、その九つ目の上位古代語魔法、それが教師に必要ですか？」

「そ、それは」

「聞けばその魔法は爵位級の悪魔おも葬り去れると、実に凶悪ですね」

ネギが今だ見せない魔法、それは教師が覚えるような魔法では無かった。その魔法がネギの根本を示していた。

「う、うわあああああああああ！！！！！！」

「ど、どうしたのか！？ネギ選手！いきなり頭を押さえて叫びだした！！！！」

百合子の言葉はネギに戦いを放棄させるほどのモノだった。

9歳の未熟な精神にはこの仕打ちは耐え難い事であり観客も騒然

とする。客席からも「どうした？」や「大丈夫かよ？」と言う声が聞こえてくる。

「ぼ、僕は、僕は……」

ネギはガタガタと頭を抱え震える。

口では自問自答をくり返し、決して脱出できない迷宮に迷い込む。

「自分を見つめられない者が強者を目指すなど甚だしい。」

百合子は片腕の延長に念動力をつくり出す、今のネギを吹き飛ばすのはただの九歳児を吹き飛ばすのと等しい。それ百合子はネギの元にゆっくり近づく。

「それでは、いk「何してんのよネギ——————！！！！！！」……超、逃がしたのですか。」

「あ、……明日菜さん！それにタカミチ！！」

客席の雰囲気打ち破るよう選手席から明日菜の声が走る。準決勝が始まる前に地下に捕らわれていたタカミチを助けるために場を離れていた明日菜は百合子の予想以上に早く戻った。

「何言われたのかわかんないけど！そこで立ち止まる理由にはならないでしょ————！さっさと勝って来なさいよ！！みんなだつて見てるのよ！！！！」

その声が途切れると同時にネギは周りを見わたす、今にも気絶しそうな図書館探検部の人達、ふてくされながらも見守る千雨と無表情の中に恐れが見える茶々丸、もっともネギの近くで見てきた朝倉、

不法侵入してまでネギを見に来た3-Aの面々、タカミチを助けに行っていた魔法使い達、そして

「がんばれよ子供先生ーーーー！」「最後まであきらめるなーーーー！」

ネギの過去を見た一般人たちがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ネギは無言で立ち上がり、大きく深呼吸をする、自分の中の毒素をはき出すように。

ドガア！！と百合子の背中に衝撃が走る。

「実にキレのいい瞬動です、思わず窒素装甲が作動してしまいました。」

しかし窒素装甲による窒素の壁によりネギの攻撃は阻まれた。だがネギの攻撃は続く。

何回もの連続瞬動によって百合子に牽制するネギ、その中でネギの周りには魔法の射手が貯まる

（さっきのは何か壁の様な物があつた、それなら僕の全力で！！！！）

ネギは窒素装甲を突き破るほどの攻撃を放とうとする。

（もっと、もっと、もっともっとう！！！！）



ネギの周りの魔法の射手は十数個になり、修行の限界を超え、ネギの周りを光が埋め尽くす。

それは魔法の秘匿を完全に忘れ、ひと目を憚らない行動だった。そしてネギは限界を本能で感じたのか、瞬動を一瞬止め、百合子に狙いを定める。

「全力！！！！雷華！！崩！け「ネギ」

！！！！」

止まった、決まったと確信したタカミチ達の思考が、場の空気が、ネギの拳が。

ドン！！！！と念動力の塊がネギに直撃し、選手席へと吹き飛ばす。そして無情にも魔力を全てつぎ込んだ魔法の射手は霧散し、ネギの魔力は大幅に減少した、それもあつてかネギはそのまま夢の世界へと旅立った。

「勝者・・・・・鈴科百合子選手。」

「

」

その宣言を聞きステージを去った百合子の口が小さく動く、もしその声が聞こえていたり読唇術を心得ている者にはこう聞こえただろう。

メジャーハート  
心理定規、と。

「ネギ！なんで手を止めたのよ！！」

医務室、ネギを運んだ明日菜と他の面々は最後のネギの行動について聞いていた。

あの攻撃、端から見れば攻撃を止めてみすみすやられに行くような物であり、エヴァを始め全員が疑問に思っていた、魔法のことを口走らないように魔法関係者のみである。

そして当の本人は真っ青な顔をして震えていた。

「ぼ、僕にも分からないんです、確かにあの時攻撃が決まったと思います、で、でもその時！！その・・・鈴科さんに攻撃出来なくなつて、とても大事な人に攻撃するような気持ちになつて、・・・まるでお姉ちゃんに攻撃する時みたいな。」

「はあ？？アンタのお姉さんなら手紙で見たことあるけど、全然似てないじゃない？？」

明日菜の発言と共にタカミチやカモなどは頷く。

「ネギ、災難だったな。」

「シンさん！！」

全員が集まつてる中唯一遅れていたシンが医務室に入る。

「最後にアレはネエわ、どうしてこう科学者はKYなのかねえ？」

「シンさんは最後の事が分かるんですか！？！？ということはやっぱりま「おつと刹那、それは早計だぜ、アレは魔術じゃない、とつか鈴科は魔術師じゃないぜ」

「俺も説明したいが俺は待ちに待った決勝でね、クゥネル」

「はいはい」

シンはだらけた口調で準決勝の相手を呼ぶ、クウネルとシンの関係は準決勝の時エヴァによってネギ達に知らされたので今更驚かないがシンの数センチ前に現れたクウネルに驚く。

「うおおっ！！おい、そう言う登場は止める！！」

「ははは、いいではないですか。」

「~~~~~！！！！まあいい、それじゃあ説明頼んだぜ。」

目が死んだ謝罪を受けたシンは説明を任せ部屋を出た。

「ふう、本当にどうしたんでしょうねシンは。」

クウネルは誰もいないはずの扉を見て溜息をつく。

「オイ！さつさとあの女の事を話せ！！」

「おお怖い怖い、そうですねえ・・・・まず第一にシンの言う通り彼女は魔法使いでなければ魔術師でもない、<sup>いのう</sup>そう彼女は人工の幻想、超能力者です。」

魔法使いが知るさらなる異能、3つの幻想はどう交差しどういう世界を描くのか

## 第五十一話 超能力者の手札（後書き）

さて、今回はチート百合子のターンでした。  
次回はとうとう最終決戦、かなり長くなると思います。

## 第五十二話 戦闘開始

### 第三者視点

二人の異邦人がステージに向かう。

互いは違う地、違う周り、違う文化、違うチカラで生きてきた。観客には木製の数メートル足らずの道が、まるで地平線まで続くような道のように見えた。

その長い道の上で、二人は話す。

「次は全力で行きます。」

異邦人の一人、最強の超能力者鈴科百合子はもう一人の異邦人に言った。

科学者であると共に最強の超能力者はこの世界に存在しない制服を着ている。

「結構結構、まあ楽しもうぜ、戦いを。」

もう一人の異邦人、神の右席の魔術師シン・F・ハント目で答える。

神父であると共に嘗て神を越えようとした集団の末席、この世界の最強の魔術師は、漆黒の修道服を着ている。

二つの足音が、ステージ近づく、戦場となる地に近づく。

「皆様お待たせしました！！まほら武道会決勝戦です！！！！序盤では全く予想できなかったこの組み合わせ！勝利の女神はどちらに微笑むのか！！??？」

その二人を待つ凡人、朝倉和美、本来は入りえない世界に足を踏み入れてしまった女。

「朝倉！この戦い刃物や拳銃以外なら使ってもいいんだよね？」

試合開始を宣言しようと思っていた朝倉にシンは聞く、その顔はクウネルに似た策士の顔でありラカンの様な戦いに生きる者の顔だった。

今まで素手で戦ってきたシンが今更何を？と考えるが朝倉は答えた。

それと同時に、シンの影は伸びる。

「え、ええもちろん！しかし、それで有利になるとは言えな、つてえええええええ！」

シンはある程度伸びた影からアックア直伝の5メートルのメイスを取り出した。

どこから取り出したかと言うより、それを使う事自体に観客は驚愕する。

「シ、シンさん、さすがにそれは「いいですよ。」え、そ、それじゃあ」

さすがにまずいとシンを止める朝倉をよく通る声で百合子は許可する。

流石、とシンは言っで、そのメイスを軽く振り、構える。

「FIGHT！」

ドガン！

「！！！！！！！！」

朝倉が試合開始をしたと同時にシンは聖人の力を最大限に引き出しメイスを横に振るった。しかし、巨大な衝突音は百合子からしたのではなく、百合子と真逆の位置にあった灯籠が吹き飛ぶ音だった。

「やっぱりだめか」

シンは百合子の反射は全力のメイスも反射した、そしてメイスは使えないと判断したのかメイスを湖に突き刺し、構えた、その動作の中でも、シンに隙は存在せず、それは達人の域に達した者達も知っていた。

その間も百合子の鉄面皮は揺るがない

「い、一撃目から凄かったです、全く効かなかった鈴科選手も凄いですね……」

解説席に座っていた豪徳寺薫は開いた口をなんとか操り、驚愕の声を上げる。

「確かに鈴科選手は予選から攻撃を喰らっていません、どういう原理が分かりませんが、只言えることは鈴科選手に放たれた攻撃は……180度真逆に跳ね返されると言うことです。」

それに全く驚かない、むしろ分かっていたような茶々丸は、百合子に匹敵しうる鉄面皮で答えた。

それは計算に強いガイノイド故の結論だった。

「羅漢銭……でしたか？」

ついに百合子が動き出す、おもむろにポケットからゲームのコインを取り出し、前に飛ばすように構える。それは真名の羅漢銭を彷彿とさせたが決定的に足りない物があつた。

「おつとー！ー！鈴科選手がコインを取り出した！これは第三試合の龍宮選手のが使っていた羅漢銭かぁー！？しかし、そんなあからさまな構え「ヒュン」

ドガァ！」………」

羅漢銭はその名の通り小銭を暗器として飛ばす技であり、それは敵に悟られないようにすることが重要だ、百合子の攻撃には羅漢銭では無かった、それは最速の科学兵器、超電磁砲。

超電磁砲は朝倉の横数ミリを駆け、湖にオブジェの様に突き刺さるメイスを中心を貫いた。

「行きますよ魔術師」

「空間移動かよ！！」

百合子は誰にも感知できない1次元を移動し、シンの背後に移る。

ドガァ！

ドガァ！

ドガァ！

超電磁砲はシンに向かい走る、もし当たればそこには綺麗な風穴が開くだろう。

しかし、その構えの意味を知っていたシンは、持ち前の反射神経、判断力、脚力を利用して、横へ転がった、……。しかし、それを



上回るスピードで、弾丸は走る。

ドガアアア！と、超電磁砲の内の一つがシンの影を貫く。

煙に覆われたシンと佇む百合子がいるステージを沈黙が支配する中、百合子の周囲を走る電流がバチバチと叫ぶ。

煙が晴れ、中にいたシンに風穴は空かなかった。

「なんだアレは！シン選手の周りを巻物のような者が覆っている  
！！！！」

（危ねえ・・・ソーロルムの術式を発動する暇もありやしねえ、  
原典を持ってきて正解だったな。）

「いきなり原典を使うのか！？！？」

選手席のエヴァが驚きの声を上げる、あの後クウネルは見ながら  
お教えしますと言い、場所を移動した、今知ることとは鈴科百合子は  
超能力者であり複数の能力を使い、シンと同じ世界から来たと言う  
ことだ。

「あれは刹那さんを倒した能力ですね、あれは超電磁砲<sup>レールガン</sup>、彼女が  
扱う能力の中でもシンプルですが電気を操るといのは強力で10  
億ボルトもの発電能力を持ちます、そして・・・海原光貴が愛  
した御坂美琴の能力でもあります。」

「百合子選手の羅漢銭の速度が測定できました、秒速約1000メートル、音速の約三倍です。」

「そ、そんなスピードの羅漢銭！存在するんですか！」

茶々丸のアナウンスにより、隣の豪徳寺が驚愕の声を上げる、今日は驚愕ばかりだ。

「龍宮選手は居ないので分かりませんが………事実です。」

「この距離からの超電磁砲を防ぎますか………それならこれでどうですか？」

その瞬間、観客が持っているジュースの缶が一斉に消失し、ステージに降り注いだ。

「ヤベエ……！」

アルミ缶はギュルルと捻れ、圧縮され、爆ぜた。

ドガアアアアアアアン……！！！！  
シンクロトロン

量子変速によって加速した重力子はステージを吹き飛ばす。

ステージに巨大なクレーターが出来、石の地面が露出していた、それはある程度空中で起きた事だがもし地面のすぐ上で爆発したらステージは吹き飛んでいただろう。

「あなた、なにか魔術で精神攻撃

を防御してますね？心理掌握メンタルアウトが反応しないなんておかしい。」

「お！気付いた？そりゃあ俺だって防御策くらい考えるって。」

アルミの爆発を原典により防いだシンを、百合子はしかめ面で睨んだ、百合子は心理掌握でシンの精神を何度もその名の通り掌握しようとして試みるが全く出来なかったからだ。

それに対するシンの対策、光の処刑だ。

シンは試合が始まる前に光の処刑で自身の精神を上位に精神感應能力を下位にした。

あれは詠唱する必要があるので試合前にやらなければいけなかった。

「俺からも行くぜ！！」

その声と同時にドサアと大量の小麦粉がシンの服から出てくる。

それが次第に重力に逆らい出し、数枚の板のような形となる。それはシンの十八番、小麦粉のギロチン（切れ味皆無）だ。

数枚のギロチンが百合子に向かう。

「また珍妙な！！」

百合子は念動力で叩き落とすがすぐに再生し、再び百合子を襲う。

「くそー！！しつこいー！！」

何度も何度も小麦粉は攻め立てる、百合子は全身を覆うように念動力を展開し、その上で念動力の塊を振り回す。が、それは独りでに形を失い百合子の周りに漂う、その粉末の中でヒラヒラと舞う一枚のカード、そのカードには一枚の文字、その文字は今使われな

い古の文字、ルーン文字だった。

「粉塵爆破って知ってるか？」

量子変速に匹敵する爆発が、超能力者を中心に起きた。  
ドゴオオオオオオン！！！！

煙が晴れるとそこには肩で息をする百合子がいた。

「ハア、ハア……まさか切り札をここで使う事になるとは……  
……驚きました。」

百合子は外傷は無かった、一方通行の反射を使っただろう、荒い呼吸は急激なレベル変化と動揺であり、それが原因で空間移動も出来なかった。しかし、事実上百合子は無傷であり、それはシンも予想していた。

「朝倉」

「え、ハ、ハイ！！」

シンは後ろにいた朝倉を呼ぶ、

「お前、茶々丸のところ、せめて選手席から実況しろ」

「え、なんで「さっさとしろ死ぬぞ！！」「ハイイ！！」」

ドバアアア！！！！とシンの背後からヤマタノオロチの様な水の蛇が暴れ出し、百合子を貫かんと襲いかかる。

「くっ！！」

対する百合子も水流操作で立ち向かう、

ドバアアアアア！！！！と大量の水がステージ上でぶつかり合い、そのまま重力に習って降ってくる、もし朝倉がそこにいたら大量の水の質量で無傷では住まなかっただろう。

水が邪魔になっている内にシンは懷から折り紙の鶴を取り出し。

直径１メートルほどの水の塊がどこからともなく現れ再び百合子に迫った。

「なめるなあああ！！！」

百合子が始めて叫んだ、百合子は目の前に水の塊に匹敵する炎塊を生み出しぶつけた。

ジウウウウウウウ！！！！と音を立て、高熱の水蒸気がステージに満ちる。

それを振り払うように１０００度の炎剣を携え、周囲に原典を渦巻かせる魔術師が超能力者を襲う

「立て続けに！！！」

百合子は座標移動でステージの反対側に避難する。

「おかしい。」

「え？なんでエヴァちゃん？シンさん凄く押ししてるじゃん！！！」

戦いを観戦していたエヴァは一人違和感に気付く

「アイツは麻帆良に来てからずっと私の別荘で修行してたんだ、あれら魔術も見たことがある、しかしあの魔術は全て詠唱が必要だった。しかし、……アイツの口を見る限りずっと大口開けて大笑いしている。」

ステイルの使った炎剣、サーシャが使った水の術式、土御門の水の術式。それらは全て詠唱が必要な魔術であり、シンはしていなかった。

しかしシンは詠唱をしていた、厳密に言えば詠唱を集めていた、観客達に、麻帆良祭の参加者に、それは詠唱のできない魔術師、テルノアが使っていた術式。周囲の音に魔術的な干渉を行うことで魔術を発動させていた。

「さすがは魔術師、称賛に値します……私もお見せしましょう、本気を。」

そして、全てを操ると言っても過言でもない能力と、全ての物理的法則を塗り替える能力が、姿を現す。

## 第五十二話 戦闘開始（後書き）

どうも北中津です。

とうとう始まりました最終決戦、これから二、三話続きますので、戦闘シーン下手の自分の作品、よろしくお願いします。

## 第五十三話 超常決戦、開始

### 第三者視点

「私もお見せしましょう、最強を」

百合子はユラリとシンの方向を向く。

その小さな背中からは十数メートルにも及ぶ6枚の白い翼が展開された。その純白の翼は地面を叩き上空へと羽ばたいた。

「ていとくんよりも十分似合うじゃネエか！！！」

シンは原典をしまいながら背後の水を操り、巨大な水球をぶつける。

先の攻撃よりも巨大な水球を前に百合子に焦りの表情はなく、したことは6枚の翼を水球と自分の間に出しただけだった。

その全く意味がないような防御の前に、水球はジュウウウウと音を立て、蒸発した。

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

それを見越していたのか、水球が蒸発する前からシンは吸血殺しの紅十字を手に蒸発した水球のすぐ後ろにいた。

「上手い！！水球は囷か！！！」

誰かがそんなことを言った、しかし未元物質ダークマターの前には意味は無かった。



水球を消滅させたのと違う翼、それに一太刀加えた紅の炎剣は水と火の違いはあっても水球と同じくジュウウウウと音を立ててその姿を失い、

「まだまだア!!!!!!」

シンはもう片手に持った青白い炎剣が振るう、するとバチィィィイ!!!!!!と叫びの様な音を出しシンに電撃を浴びせた。

「グアアアアア!!!!!!」

火は電気を通す、その翼は帯電していたのかその身を犠牲にシンに電撃を浴びせた、原典をしまったことが仇となった。  
しかし犠牲になった6枚目の翼もすぐに修復される。

これを始めて見た者は総じてこう言うだろう、「物理的法則を無視してる」と。

そしてそれは選手席にも居た。  
それに嘗ての英雄は答える

「ええ、そうでしょう、しかし彼女の翼にそんな物通用しない、あの物質は文字通り物理的法則に当てはまらないのだから。あれに触れた水が蒸発しても、触れた火が鎮火しても、あれが帯電していても、なんらおかしくはない。」

学園都市第二位垣根提督の能力、ダークマター未元物質、その能力が生み出した物質は存在しない『見つかっていない』『どこかにはある』、そんなことではなく、この世に存在しない、そんな物質がこの世の物理的法則に従うわけが無く、この物質が存在する空間には一般人が

知る物理的法則は存在しなかった。

「だが、その物質がある限りお前が使っている能力は確実に未元物質！！その時は衝撃拡散も窒素装甲も一方通行も使っていない！！！！」

シンはその部分に勝機を見出した。

シンの手は懷に手が伸びる、そこから出てきた物は。

「北欧の土産シリリーズ！！レッサアア！！！！スペシャルカスターアアム！！！！」

霊装『鉄の手袋』炎や粉塵なども掴むことが出来る槍のような霊装である、しかもその改良版でありその霊装から出た赤いレーザーに当たった物も掴むことが出来る。

「叩き落とすぜ！！」

鉄の手袋から伸びたレーザーは百合子が気付く前に百合子本体の腹部に当たる。

「きゃー！！」

百合子はシンが鉄の手袋を振りまわした方向に揺れ、そのまま地面に叩きつけられそうになる。

百合子は未元物質の翼で何とかレーザーを阻もうと翼を操るが振り回されながら無理に操ろうとしたせいか、翼はステージを吹き飛ばしその翼はシンにも迫る

「チッ！！！！」

シンは翼の物理攻撃を何とかよけたが、その時鉄の手袋のレーザーが百合子から外れ、鉄の手袋の拘束から逃れる。百合子はそのまま未元物質を出さずにステージに立つ。

「危険ですね。」

未元物質を取り消した百合子はそう言いながら。

「そのレーザーは私に触れましたし、方向も直進のみです。」  
ベクトル

「頭のいいことで……！」

一方通行を使い百合子は鉄の手袋のレーザーのベクトルを操り安全な上空に向けた。

一筋の赤い光が空に向かって伸びていった、が。

「ゲッ！」

しかし遙か上空に延々と伸びていくレーザーはある物に遮られた。

「なんだこれ……！？？？操縦が……！！！」

それは麻帆良祭で編隊飛行をしていた飛行機の一つ。

ギョオオオオオオオオ……！と音を立てて上空を舞うように飛んでいた飛行機は丁度ステージに向けて飛ぶ、もとい降ってきた。

「マズイマズイマズイ……！！！！オイ鈴科何とかしろ……！！！！ハイパス！」

「貴方がやったんでしょー!!何でこっちに!!!!ええい!!仕方がない!!!!」

百合子に向けて綺麗な弧を描く鉄の手袋とそれに向けて落下方向が変わった飛行機。

丁度百合子とシンの中間にあつた鉄の手袋は黒い刃の様な物にバラバラに切り裂かれた。

「ギャアアアアアアア!!なんでオリジナルと同じ末路を歩ませるんだアアア!!」

小型だった故に何とか体勢を立て直した飛行機はそのまま彼方へと飛んでいく音と共にシンの悲鳴が木霊した。

「元と言えば貴方があんな物を使つたんでしょー!!」

百合子は翼を展開しながら反論するが。

「一方通行で飛行機くらい反射しろ!!!!」

「なんでわざわざそんなこと!!!!」

「ええい!ならばこれだ!!」

シンは影から新たな武器、ロータスフンド蓮の杖を取り出した。そして祈るように片膝を突き観客の声を使い詠唱を開始する。

ドガア!!と百合子の側頭部に衝撃が走る。

「????な、なんですか?」

謎の攻撃を警戒してか百合子は翼を繭の様に自分を包ませる。  
そしてシンの顔はクウネル戦でも見せた嫌らしい笑顔で。

「おいおい、自分からサンドバックになつてくれるのか？」

しかし蓮の杖には意味が無い、蓮の杖による座標攻撃は文字通り空間攻撃、やろうと思えば内蔵に直接衝撃を与えられる。しかし体は華奢な百合子にそれはまずいと思ったのか翼の繭の内側から百合子に座標攻撃を与えた。

繭の外からはボコ！ドガア！バキ！と音がする

しかし何発か与えると翼の繭が無くなり、その中からジト目の百合子が出てきた。

「オイオイ、なるべく顔はよけたんだぜ、そんな目するなよ。」

「いえ、貴方が攻撃を止めた時に肉体再生で治療しましたので。  
……痛かったです。」

「肉体再生かよ、汚ねえ！」

「いえ、私も……行きます！！！」

百合子は叫ぶ、しかし外見は変わらないように見えるが、彼女の体には鉄壁と言っていい反射の鎧が纏われていた。

百合子は両腕を伸ばし、両手の平を開けるようにシンに向け、能力者一方通行が頻繁に使っていた突進方法で突っ込む、足元のベクトルを操作した突進は瞬動に匹敵するスピードだった。

「そう簡単に、やられるかよオ!!」

シンは瞬動に匹敵するスピードの突撃を紙一重でかわす。

シンがかわしたと確認した百合子は突進のベクトルを全てブレーキに使いその踏ん張りでステージを吹き飛ばし、その弾丸と化した破片はシンに突き刺さる。

「クソオオオオ!!」

そして再び百合子は距離を取り

「反射については、桜咲刹那が使った対策を立ててきたのでしょうが……、あの理論を完成させるには私の演算パターンとAI M拡散力場、つまり一方通行の自分だけの現実を解析しなければいけないですね。」

「わかってるぜ?」

シンは瞬動と同時に百合子に正拳突きを与えた。

ドガア!!とこの試合で聞き慣れた音、しかしこの音は今まで以上に重要な意味が込められていた。

ドサと少し遅れて音が鳴る、それはさっきの立ち位置から少し離れた位置、木製のステージと鈴科百合子の体がぶつかった音だった。

「成功だな。」

シンは一言、そう言った。

その誰に言ったか分からない言葉に立ち上がった百合子は答える。

「なぜ・・・これほどの確に・・・」

「この試合の会話で確信した・・・お前の能力、贗作能力はその名の通り能力をコピーする能力だ、恐らくそのコピー方法はAIM拡散力場から自分だけの現実を理解、そして自分だけの現実とする、そんなところだろ、そしてお前が一方通行は歴代で一人しか発現していないと言ったな、悪いがそいつの演算パターン諸々はある人から教えてもらってたんだよ。」

通称海原ファイル、それは学園都市でも暗黒面のデータが凝縮されたファイルでその中には一方通行の演算パターンもあった。

「お前がずっと未来だったとしてもサンプルくらいは取られてたんだろ？暗闇の五月計画も一方通行の演算パターンを参考に使われてたらしいしな。」

暗闇の五月計画、絹旗最愛を初めとする能力者が一方通行の演算パターンを参考に各能力者の自分だけの現実を最適化しようとした計画である。

「・・・・・・・・概ね正解です、しかし反射の鎧は所詮一方通行の副産物、しかもこれからは様々な能力を織り交ぜていきますよ。さあ！行きますよ魔術師。」

「来な！！能力者！！」

場は、超常決戦へ。





## 第五十三話 超常決戦、開始（後書き）

どうも北中津です。

今回は一方通行、未元物質です、レッサーカスタムのくだりは自分の精一杯のギャグとでも思って下さい。

木原神拳の登場、予想以上の短さで申し訳ありません。

次回も戦いは続きますが、それも含めてですが、能力の一つ一つの戦いが短いのと、能力を無理に全て見せようとしている感があると思います。その当たりは自分の技量のなさです。

## 第五十四話 暴走Ⅱ 顕現

シン視点

さて、反射の鎧は何かあった、しかしその他の能力はどうするか・・・

「余所見をしている暇など、ありますか？」

早速か！！

鈴科は背後の灯籠の一部を砂鉄のチェンソーで切りとっている。あれを念動力でぶん投げるか？いや、あのバスケットボール大の石の塊、しかも高さ的には俺よりも高いから直撃コースなら観客席に行く事もない。

ならばアレを撃つても問題ない、俺以外には。

「上！！」

俺は瞬動術で全力で上に飛ぶ、そのコンマ数秒後、俺が元いた位置は一筋の光、もとい超電磁砲が貫いた。ったく、あんな兵器ズバズバ使いやがって、俺は幻想殺しじゃねえんだぞ。

超電磁砲はステージを貫き、地中を吹き飛ばした。

この戦闘だけで、ここら一体戦場みたいだな、まあ戦争みたいなモノなんだが。

「うおっ！？」

この束縛感、念動力！！どうする、聖人の力で振り切るか！？聖母崇拜の聖人の力なら何とかなりそうだが、それか原典を展開！？

その間にもどんどんステージとの距離は縮まっていく。

しかし、いきなりの開放感、そして背後の違和感。

ドゴツ！！と背中に衝撃が走る。

「グアッ！！」

念動力はフェイクか！！本命は空間移動からの窒素装甲での打撃攻撃！！

このままじゃステージに熱烈なダイブしちまう！！！！

「虚空瞬動！！」

魔力の噴射で180度真逆の方向に方向転換でなんとかステージ直撃は避けたが、背中の衝撃は流石窒素装甲だ、それよりも問題はあの空間移動、あれの前には間合いは無意味、一番の対抗策は動揺だが心理掌握で冷静を保つことも出来ないとは言いきれない。

取りあえず炎剣を持つ、炎剣をなくすために水流操作か末元物質、一方通行を使うはず、その瞬間はあの体には隙が出る。

そして水球を湖から出す。

「行け！！」

水球を鈴科に向けて飛ばすが、それは原子崩しを焼きこてのよう  
に使い蒸発させる。この水蒸気の中ならば目隠しになる、俺は瞬動  
術で鈴科の真横で炎剣を振り抜く。

「うおおおお！！」

しかし炎剣は無惨に空を切る。

ゴオオオオと突風が水蒸気のカーテンを吹き飛ばす。

「あなたの水球は囷と容易に分かります、水球を撃つても一方通行で反射される、ならば水球はフェイクで貴方の直接的な攻撃が本命、蒸発させなくても水球のサイズならば十分目隠しになる、それは水蒸気が充満している時にその炎剣で水蒸気爆発を起こさなかったことから分かります。あとは透視能力で貴方の位置を把握した後、空間移動で避難、どうですか？」

「ご説明どうも」

丸わかりか、どうするかな……

超視点

「ユリは頑張ってるみたいネ」

私は主催者室からユリの勇姿を眺めてるヨ、  
流石ユリヨ、あの英雄をこうも簡単にあしらうとはネ、シンサンも本気じゃないようだけど困っているようダ。

「チョットまずいよ、ゆり。」

「どうかした力？ハカセ？」

ワタシの後ろで明日の計画のためにイロイロしてくれているハカセが言う、ユリはあんまりダメージは無いと思うんだが？大抵のダメージは肉体再生で何とかなるしネ。

「ゆりの利点は複数の能力を扱える事だよ、それは脳内を自分だけの現実能力の中に複数ある他人の現実の一つで染める、ただ今は回転率が高すぎる、もともと現実をあんなに記憶すること自体が脳にとって異常なのにあの回転率、ゆりの脳が耐えきれるか、微妙だよ。」

## シン視点

さて、どうするか……小麦粉はもうないし天罰術式は、置いてきてしまった……いや、流石にあんなのジャラジャラ付けたら絶対鈴科に透視能力で目付けられて、空間移動で取られるだろ、学園内でも結構使ったし、茶々丸のメモリーを見られていたらそれこそ真っ先に狙われる。まあ、そんなことしないが……

## ヒュン

目の前に広がる広大な景色、ん、高度500メートルってところかな。

汚ねえ！！！！座標移動かよ！！！！場外にさせる気かよ！！

俺は魔力を足元に集中する

「虚空……瞬動おおおおお！！！！」

視界の片隅にあった小さなステージがどんどん大きくなる

ドオオオオオン！！！！

ステージに直撃、流石に百合子に直接攻撃はまずいから、ステージに着地、もとい破壊した。

俺はもう幾つ目か分からないクレーターから起きあがり

「このKY学者！！！！なんだよ座標移動つてよ！！！！その場外はいかんだろっ！！！！」

「聖人の身体能力を測りたかったんです、それに準決勝で貴方も場外だったじゃないですか。」

くっ、なんてドライな奴、原作の一方通行はもっとハッキリ言ったのに……

「まだいきますよ。」

百合子の背後の湖がうねり、暴れ狂う、俺の専売特許を！！

そしてそう考えている間にも専売特許、もとい水の塊が今度は俺に向かってくる。

「叩き落とす！」

俺の手には何かの柄、しかしその先には空気のハンマーがある。

ドパア！！と無色の空気の塊と蒼い水の塊が衝突し、水の塊はあ

つけなく破壊された。  
やけに脆い？

「そちらは粉塵爆破でしたから。」

！！！！！！！！  
原典！！！！！！！！

この試合、粉塵、量子変速に続く大爆発が起きた。

ドオオオオオン！！！！！！

「ゲホ！ゲホ！！！！危ねえ・・・・・・・・やっぱりこういうのはアツチが専門かぁ」

水蒸気爆発、まあ科学が本場だからなあ、  
あっち

さて？聖なる右は・・・論外、もう聖母崇拜全力で肉体言語で  
鈴科と語り合うか？それか・・・

奥の手、  
いくか。

「が、ガああああああああああああああああ！！！！！」

なんだ！！悲鳴！？しかもこの声！？

俺が鈴科を見ると、鈴科が頭を押さえている！？幻覚じゃないだろうし、なんだ！！？？

ブシャアアアアアアアと音を立て現れた。

巖密には出てきたとか、生えてきた、とか言うのだろうがこれは、  
顕現が最もふさわしいと俺は思う。

「ucbpvutahgqeuo;vツrqhgAugfr;oo  
gvuo;rドgvn[o@dj!;!;!;!;!」

何が起きたのか、この言語から察しは付くだろう、まさかコレが出るとは……

「jfvbぶwu;コgurgvu;oギヤqerhivf;f  
ujbr!;!;!;!;!;!;!;!;!」

鈴科百合子の背中には、一対の噴射する黒翼が現れていた。

バラアアアアと黒翼が何十本に分裂し、俺に迫る。

「チイツ!;!;!」

瞬動術でかわす!!

ギユオオオ!!と黒翼は方向を変え、再び俺を狙い走る。クソツ  
!!一方通行は本来は感知系でもある、ステージ内なんて狭い範囲  
じゃ意味がない!!超は!?!?こんなの完全にイレギュラーだろ  
!!

「きゃあああ!!!!」

俺を狙って来た黒翼は決壊したダムのように、本数を増やし、狙  
いを増やす。

この黒翼!!!俺以外にも!?!まずい、観客席を!!!!

「お前等アア!!!!逃げ」ドゴオオオ!!!!」

俺は気付かなかった、ステージの中心に俯いたまま佇み、全ての



黒翼さつりくを操り、統べる鈴科は、ユラア、と右手を上げるのを、

俺の真上に尋常じゃない衝撃！？提督の時のベクトル攻撃か！  
メシメシメシィ！！と全身が悲鳴を上げる、クウネル以上だ！！し  
かも重力攻撃というより、ベクトル攻撃！！

頭に、モロ、に、視界がぼやける。

クソ……意識……が……

## 第五十四話 暴走Ⅱ 顕現（後書き）

待っていた人お待たせしました、ケ、やっぱそんなかな人、申し訳ありません

さて、とうとう来ました黒翼、原作でもハッキリしていないのに早速使ってしまった。

次回、とうとうシンの豹変の秘密（大抵察しは付きますよね）が明らかに！？

## 第五十五話 理性と本能（シンと ）

### 第三者視点

「あーあ、何だよアレ！？反則とかの次元じゃネエだろ！！5、6次元くらい超越してんだろ！」

シンは真暗な空間を歩く、何もない、ただの闇、その空間をシンは全く疑問を抱かず、拗ねた子供のように両手を後頭部で組んで歩く。時には足元の石を蹴るように足を上げたり、検閲に軽々と引かかるような内容を怒鳴り散らしたり、地団駄を踏む、そのような迷惑極まりない言動をしても諫める者は一人もいない。

しかし、闇の中に闇以外の物、者をシンは見つける。

「災難だったな。」

闇の中で椅子に座り、優雅に紅茶を飲む男は言う。

シンはキョトンとした顔で

「まったくだぜ！！お前なんてココで俺見てゲラゲラ笑ってたんじゃないやねえだろうな！？」

男に向かい合うようにドガツと乱暴に椅子に座り、悪態を付く。その様子を見た男は下品ではない、卑しくもない、優しさのみを内包しつつ全てを見据えたように笑う

「それはないだろ、俺だって痛いんだ、ふむ、・・・・こうやって話すのは始めてか？」

「アア、．．．．．Bad to meet you シン・  
ファナリス・ハント」

男の名はシン・ファナリス・ハント言う。

「それで、お前はなんだ？」

シンと呼ばれた男は、紅茶を飲みながらシンに問う。

「分かるだろ！？俺はお前、お前は俺」

「ようは二重人格みたいな者か？」

「イヤイヤイヤ、それはチョット違うぜ、俺は、俺だけとお前じやないとも言える、まあわからねえだろうからこの俺の解説を聞けつて。」

シンは一息つく。

「まず俺はお前とは魂レベルで違う、俺がここに生まれたのはお前がこの体に来た時、あの世界に来た時だ、神の野郎のミスでこの体にお前という存在が憑依した時、その時、上書きされた魂の残滓、それが俺だ。」

上書きされた魂の残滓、それは原罪のない世界で生きてきた者の魂の残りカス。

「なるほど・・・それで、体を返せと？」

「いやいやいや、だから俺が生まれたのはお前が憑依した時だつて、俺は別に憑依されたオリジナルのシンというわけじゃない、確かに器はたましいその通りなんだが、中身は空っぽだ。だからオリジナルのシンは完全に消滅したつて言えるな、それで、そんなスツカラランの俺がこのタイミングでここまで行動出来るのはな、その器に貯まったからなんだよ、感情がな。」

「感情？」

「イエエス、その感情がお前の欲望、煩惱その他諸々修道士として不要な感情だった、もともとお前はただのオタク寄りの一般人だったんだぜ？それがいきなり神父だ、そりゃあ煩惱は貯まるはな、それが一気に加速したのは英雄なんて呼ばれた頃か？まあ、そのの廃棄場所として選ばれたのが俺だ。まったく、あっちこっちの設定を全部ひつくるめたような存在だよ、俺は。」

空の器は満たされた、欲望という感情によって。

「お前が行動できるまでの感情が貯まったきっかけが、鈴科との邂逅か、あの時から自分がコントロールしにくくなったとは思っていただがそう言うことか。」

「俺はお前の禁欲さに比例して成長した、それでここまで来た、全く、俺を形成する感情の9割が煩惱、欲望だぜ？ほんと尊敬に値

するよ、俺達の感情はお前が理性、俺は本能、つまり俺とお前は真逆、正と負、光と闇、表と裏、そう言う意味では二人でやつと一人前なんだよ。」

今までのシンは生きているようで、死んでいた。

神父として、英雄として、象徴として生きていて、ヒトとして、人間として、生物として死んでいた。

「なるほど・・・それで俺はここに閉じこめられて、お前が好きかってやってくれたわけか、まったく、・・・・・・・・まあいい、所詮自分の感情をコントロール出来なかった俺の責任、身から出た錆か。」

「さすがは神父様！！！やさしいこつたねえ、まあ安心しろや、俺はお前の意志決定には反対しないからよ！！！」

スタンディングオーバーションをするかの如く拍手喝采するシンは続ける。

「俺は感情が貯まったなんて言っても0が0.5位になっただけだ！！この体の中での力関係は完全にお前が優勢なんだから！！！」  
そして「俺の構造として一番近いのは、つばさでキヤットな色ボケ猫、あれは猫の構造がストレスだかな、俺達の関係性として最も近いのは決闘でカードな高校生と王様、あれは魂が違うからな、まったくよ、なんだコレ？読者の脳内もナンデこんな設定？？とかワケ分からんことしとんなや！！とか飛び交ってるんじゃないか？まあ、言っておくと、魔法世界編で大きな役割を果たす予定だと言っておこう。」

「おい！！メタ発言&作者に負担をかけるようなことするな！！

「！！しかもネタ発言多すぎだ！！」

「ハッ！！俺はお前の不要な感情の塊だぜ！？タブーにはベタベタ触れるぜ？、ネタはお前が放棄したからこっち来たんだよ！！」

「なっ！！！！！！」

シンの絶句

「不法投棄は自分に返ってくるぜ〜〜、まあいいじゃねか！  
！それよりよ、そろそろ起きねえと10カウントじゃね？そろそろ  
行こうぜ。」

シンは立ち上がり、さっきまで座っていた椅子を蹴り飛ばし、闇  
へと送る。

「ああ！！」

「あん？」

「まだ大事なのを、聞いていないぞ。」

「なんだよ？俺はほとんど言ったと思うべ、読者さんの質問には  
答えるけど。」

本能のシンはハア？とでも言っただように首をかしげる。

「後半消せ、聞いてねえのは…………お前の名前だ。」

「…………ハハッ！！そっぴやそうだ！！そっぴやア〜〜お

前は神でファナリス《きょうしんしゃ》だよな……それじゃあ、俺は」

シンは俗に言う、ジヨ ヨ立ちをして

「アンリマユ・リベリアス・ハント!! どうだ!! まさに俺にぴったり!! 気軽にアンリと呼んでくれ。」

ニヤアと笑って、シンもといアンリはシンを見る。

「まあ、いいと思うぞ。それじゃあアンリ、改めて頼む。」

「ハハッ!! 俺も頼むぜ!! シン!!」

二人は硬く、握手をした。ここにシン・ファナリス・ハントは完全に人間となった。

「それで、どっちが行くんだ? 俺、お前?」

シンは頭を掻きながらシンに聞いた、シンはどうせアンリが行きたいと言えば行かせるつもりだったが、自分が平和主義者と言うことはアンリは戦闘狂だと言うことはわかってるからだ。

「そうだな……よっしゃ!! 俺達でいくぜ!!」

「は?」

しかしアンリの言葉にシンはあっけにとられる。

「今のライダーだって二人で一人だろ? どうだ?」



「イヤ、なんだその無理矢理理論」

「あなたと、合体したいってか！いいじゃねえか！完全な人間シン・F・L・ハントなんてどうだ！？合体なんて古からの勝ちフラグだぜ！！日曜7時枠なんてこれのオンパレードじゃねえか！！」

ズンズンとアンリは詰め寄る、分かりやすい押しとプレッシャーでシンもはあと溜息をして

「わかったよ」

イエイエス！！と言いながらアンリはガッツポーズをする。

「掛け声はどうするッ！？ユニゾンイン？フュージョン！？いや、ここは古風にパイルダーオン？」

「そんなのいらん！！！（俺ってこんなにオタクだったか？）」

「気付いてなかったのかよ、学校でもクラスメイトまあまあ引いてたぞ。」

いまさら何と言った風に、アンリは自分に貯められた記憶を引っ張り出す、それによると学校内では結構なオタクだったらしい。

「もう行くぞ！！」

「りょーかいだ、相棒」

「どうしたアルカ！？ユリのあんな能力見たことがない！？それにアレじゃ観客席にも被害が！！」

主催者室にいた超は外の惨状を目にする、何十、何百にも分裂した黒翼は標的を見失い暴れ回り、龍宮神社の本殿が抉れ、徐々に観客席の安全装置を削り取る、百合子は正気を失い黒翼の制御は不可能、選手はステージに一際近い選手席で黒翼を防ぐので精一杯、頼みの綱のシンは謎のベクトル攻撃によって圧死寸前であった。

「ワタシが過去に戻って！！」

「ちょっと待って超！！」

超の手元で光るカシオペア、学園祭中と言うこの時期限定だが過去未来を自由に駆けるその機械を手に超はこの惨事が起こる前へと向けて飛ばうとするがそれは、百合子に並ぶ同志、葉加瀬によって止められる。

「この辺り一面に、謎の力場が広がってる、物理法則を完全にねじ曲げるほどの強力なヤツ！！たぶんゆりの影響で！！この場でカシオペアを使ったらどうなるか分からない！！」

「力場の及ばない場所は！！瞬動でそこまで！！」

「難しいよ、力場は現在進行形で拡大している、もう学園中を覆う位まで、しかもかなり速い！！」

「クソ!!」

超は主催者席を出た、目的は力場外に出ることではなくもつとも百合子に近い場所、選手席。

「超・・・・・・・・」

葉加瀬は、その背中を見ることしかできなかった。

この戦いの渦中、そこは地獄絵図。

この戦いの中心、そこには全てをなぎ倒し、吹き荒らす嵐がいた。

「超!? 何してるアルカ!! これ以上は危険アル!!」

「離すネ、古!! ユリはワタシの仲間ネ!! ワタシの同志で!!  
ワタシの無茶なエゴにも付いてきてくれた!!!! 大切な親友ネ!  
!!!」

選手席に着いた超はそのまま、黒翼が暴れ狂う中をステージに向かおうとするが、古菲を始め刹那、明日菜、ネギなどに止められ、選手席に押さえつけられる。カシオペアを使うことが出来ない超は、今は所詮中国拳法の達人であり、決して役に立たない超能力者であった。

しかし黒翼が襲いかかった隙をつき、拘束をふりほどいた超はステージに走りいつもの策士めいた仮面を脱ぎ捨て、超は百合子呼び続ける。

「ユリイイイイイイイイ！！！！」

肺活量の限界を超えた超の叫びは、百合子に僅かながらの影響を与えた。

ピタア！と数百の黒翼は完全に停止し、グル！と百合子の首が、顔が、目線が超を捉える。

「u v b t u h r v v b g u o r で b おる e b g s で v u o v e  
u」

だが超の叫びは百合子の意識を自分に向け<sup>てきい</sup>ることしかできなかった、数百にまで分裂し、今まで破壊という破壊を振りまいていた黒翼はあることが全てが統率の取れた軍隊の如く、様々な方向から超の華奢な体を貫かんと奔る。

ドスザクバキイグシャメキイ！！！！

数百の黒翼は様々な擬音を生み出した、しかし超の体には傷一つ無い、全ての黒翼は超の眼前で止まる、いや、阻まれた。

ステージ突き刺さった黒翼は土煙を上げ、中にいるモノを隠す。

「全く、いきなりがこれか。」

土煙から漏れた声は、抑揚のない落ち着ききつた声であり、理性的な声であった。

「オイオイオイオイ、そんなこと言うなよな！！上ヤンなんて高校生でコレ防いだんだぜ！！俺達はスペック激高チート聖人&原典

「なんだからよ！！！」

声は同じだが違う声、抑揚に富んだ感情的な声であり、本能的な声だった。

「なんだ？人間人間言うから聖人じゃないかと思っていたぞ？」

「待て待て待て、俺の魂の基礎ベースは純粹無垢のあの世界産だぜ！！  
パワーアップ  
より強化してもらわねえとな！！！！さあて、ここらで一発カッコヨ  
ク決めようぜ！！！！」

「ああ、そうするか。」

煙が晴れる、その中にいた男は冷血に熱血に冷徹に熱烈に慎重に  
大胆に理性的に本能的に言った。

「Terugubooks「全てを伝え背負う者」！！！！」

第五十五話 理性と本能（シンと ）（後書き）

とうとう判明したシンの変貌もとい、アンリの登場でした。

戦闘シーン0で申し訳ありません。さて、アンリという新キャラの登場でしたが、色々矛盾が発生しているかも知れません、そしてアンリも言っていたように何故こんなキャラを出すのか？

それは先日出した新巻でも分かるように「オイオイオイオイ！！なに堅苦しい説明いいわけししてんだよ！！」

「なんでてえめえがいるんだよ！！ここは唯一の言い訳ゾーンなんだよ！！キャラが独走するなっつーの、こんなのが許されるのはうみ こくらいだよ！！」 「はっはー、元氣いいね」「この先は容易に予想が付く、だから言っつな。」「んだよーお前の好きなジャンルだろ？まあいいや、ここからは俺の説明してやるよ」

「まず魔法世界編では原作キャラの別行動が急増してんな、まあ舞台が学園から異世界だかな、そう言う意味でも百合子とエツアリだけではいささか広すぎんだ」

「というわけです、ではここd」さて、今日のネタのこーなー、今日のネタはさっきのを含めて三つ！答えは2・5？まあいいや、それじゃは行くわ。」ケツ、やっと消えたか……あと魔法名の意味は背中です」

## 第五十六話 決着

### 第三者視点

「いくぜ」

ふたり  
シンは歩く、全身を原典という鉄壁で防ぎながら、豪雨のように降り注ぐ黒翼は全てが必殺の塊、しかし、歩く。

「b d e f b g r ツ u e b f v q フ a u o b ゴ v f i u ; q」

この中で最も倒すべき敵と認識した百合子は黒翼を超に向けたように飛ばす、だがそれは原典によって全て防がれる、それでも無知な獣のように何度も飛ばし続けるが、それは全て遮られる。

「d b v f i p w e c o b v u へ p w b g ツ v @ w e」

ドゴオオオ！！！！と百合子は黒翼は聞かないと本能で判断したのかベクトル攻撃を駆ける。

「きかないな！！」

シンは動きは止めるが、その場に仁王立ちになり、百合子を見下ろす。

メシイ！！とシンの背後は数メートルまで決れる。

「ハッ！！なんだかんだでレフリカ贋作か！！こんなんじゃ一方通行のオリジナル方が最強だな！！」

本来、対象を音速の速度で彼方へと飛ばすベクトル攻撃も、シンには防ぐことが出来、それは百合子の一方通行の不完全さと、一方通行と鈴科百合子との完全な壁を語っていた。

（おい、きかないと言っているが、テレスマ原典に回している天使の力以外は全部逆噴射に回してるだろ、もうカツカツだぞ。）

（もう、さっさと決めようぜえ！！とっておきをよ！！）

そして、焦土に近いステージを目配せし、百合子との距離を図る。

「この間合いなら、いいか」

シンは百合子を指さす。

それは、ある魔術の発動の動作であり、勝利への一手でもあった。

（いいか、一瞬でもベクトルが止めばその瞬間に撃つぞ。）

（オーケーエー！！！！）

その時、狙いを済ませたかのように、脳の疲労かベクトル攻撃が一瞬弱まる。

そして、その刹那の隙をシンは見逃さなかった。

「時間的問題と」「技術的問題と」「専門的問題でコレ一発だ」

ドンッと、百合子は飛んだ、と言うより吹き飛ばされた、あるチカラによって、それは百合子の全身を満遍なく襲った、そのままぱたりと倒れ、黒翼は形を失い、ベクトル攻撃は完全に力を失った。



シン

と辺りが静まる、黒翼に

逃げまどっていた一般人も、勇敢にその死闘を見届けようとしていた戦士も、学園中でこの戦争を見ていた傍観者も時が止まるかの如くその中心を見ていた。

フリズスキャルヴ  
「「北欧王座」」

そう言った、そして不敵な笑みで。

「「俺達の勝ちだ。」」

そして、嵐の如く静まっていた者が、嵐の如く歓声を上げた。

「まほら武道会！！優勝はシン・F・ハント選手でーーーーす！  
！！！！」

朝倉はボロボロの戦場跡と言っても遜色ないステージを何とか転ばないようにシンの腕を上げ、正式にシンの勝利を叫んだ。

「そ、それじゃあ、早速受賞に」「チョット待った！！」「へ？」

それをシンは手で制止する。

そのシンはフラフラで、今にも倒れそうである。

「「少々疲れた、寝る、後ステージ改修しろ、出来たら起こせよ、

サプライズを用意してある。刹那――！！！！」

「ハッ、ハイ――！！」

「「ベツトまで運べ」」

そのままバタと倒れ、そのままクレーターへとコロコロ落ちていったシンはなおも寝続けていた。

「シ、シンさ――！！！！ん！！！！」

「そ、それでは改めて――！受賞式を行いたいと思います――！！」

ピカピカのステージの中心で朝倉は今までの死闘を讃えるように叫ぶ、朝倉の隣にいる超の手にはもう一つのマイクと、メダルがある。

そのメダルを三位のネギとクウネル、二位の百合子、一位のシン。

「さすがはネギ先生ネ、しかし残念だったヨ。」

「い、いえ（シンさん、何を考えているんだろ？）」

ステージに上がる前、

「おい、ネギ!!」

「あつ、シンさん!! お体はもう大丈夫なんですか!？」

「ハ、俺の従者にはあの木乃香がいるんだぜ!! 最近修行見てやれなかったからな!! ここまで成長したとはオドロキだ!! 流石、エヴァとお前の指導だ!!」

「ほ、本当にシンさんですか? なんだか口調が」

「あー、それ、刹那とか真名にも言われた、俺らしさは戻ったけど、半信半疑だつてよ、まあいいや、それよりも!!」

ズイ、とシンはネギに顔を近づけ、嫌らしい笑みをしながら。

「受賞式、何が起きても逃げんなよ、これは俺主催のサプライズでな、三位以上全員が全員参加、勿論主役はお前だ。」

「え?」

「俺は今回は司会役? 語り部?」

「それでは入場です!!!」

「お、じゃあ行くぞ。」

「え、ちょちよつと!!!」

ネギの回想の内にメダル授与はとうとうシンの場面、

「おい超、ここは優勝者から熱いセリフを言うべきじゃね？」

シンは確認を取りながらも、マイクをほぼ強奪する。

「レディーーーーーース!!!アーーーーーンド!!!ジェン  
トルメーーーーーン!!!オイオイお前等アア!!!俺等が頑張っ  
てる間にお前等暢気にネットで何見てたあ?子供先生涙の秘話??  
ハッ、楽しそうだな!!!.....そこでサップラアアイズ  
!!!何とここで特別ゲストだあ!!!!!!ここまで言えば.....  
分かるわなア?」

シンは一息つく、しかし観客や選手、クウネルと百合子、超の三  
人はニヤリとこれから始まる舞台を楽しみに待ち望むように笑む、  
その三人はネギ同様事前にサプライズ内容を聞いているので、計画  
を後押し、また友との約束を果たす機会を与えてくれたこのサプラ  
イズには大いに賛成であった。

シンは再び大きく息を吸う、そしてトラウマとも言える魔術を発  
動する

「イッツショーーーーーターーーーーーイム  
!!!!!!」

シンの逆立った金髪が、光る！！！！それを知っているネギ一行は顔面蒼白となり、その中でもシンのすぐ隣にいたネギは今にも逃げ出しそうだが、クウネルにがっちり肩を掴まれていた。

ぺかー 略 ビツカアアアア！！！！

ドオオオオオオオオオオオ

そして煙がステージを包む、

「「さて、じゃあクウネル、頼んだぞ。」」

「ええ、決勝じゃないのが少々不満ですが、いいでしょう。」

煙の中、まるで見えているかのようにクウネルの肩を叩く役目を終えたシン、そして懷からカードを取り出す役目を演じるクウネル、友との約束を守るため。

「「おーい百合子、超と朝倉とっ捕まえたか？？」」

「捕まえましたよ、さつさと行きます。ああ頭痛が。」

「えっ？ちよ、何これ？」

「さつさと行くヨ、朝倉。」

煙が晴れる、そして舞台には二人の役者、一人は子供の身で英雄と女王の血を引く少年、そして

「ゲホツゲホツ！！！！くっそ~~~~、またアルの演出か？」

もう一人が振り向く、それと同時に揺れる少年とური二つの顔立ち、そして赤毛。

「よお、お前がネギか？」

父、英雄、ナギスプリングフィールドだった。

「さて、こっちは尋問といくか。」

観客の興味関心全てがステージの戦いに向いている時、その光浴びる舞台とは対照のうす暗い主催者室<sup>ぶたいうちら</sup>、そこでは役目を終えた人物が揃っていた。

「約束ですし、仕方がないでしょう。」

「まずはワタシ達の計画、ユリの能力とこの世界に來た経緯、そしてシンサンの質問でいいかな？」

シン、超、百合子の三人はコードが床を占めていた主催者室の中心で、コードを押しつけそこに無理矢理スチール製の無骨な机とパイプ椅子三つをドカンと置いて、そこに座っている。その側でモニターに向かっている葉加瀬はこの大会全ての情報操作に勤しみながらも聴覚は三人の会話に耳を向けている

「オーケーオーケー、カツ井がないのは残念だが実際は禁止ら

しいしな」

（アンリ）

（あ？なんだよシン？）

シンの脳内、その真つ暗空間で二人の男が向かい合う、一人はシン、もう一人はシンの不要な感情から生まれたと言っているいいアンリマユ。

（変われ、お前は何を口走るか分からん。）

（大丈夫だって、オレアお前の聞こうとしているコト全部分かってるぜ。）

（こういうのは理性的な方がいいんだよ、それに変わってくれたら……）

シンの考えは実際口に出さずともアンリには理解できる、シンの無言は会話とは違うもう一つのアンリとの意思疎通であった。

（おお、なるなる、オッケイ！じゃあ終わったら起こして。

Good night）

アンリは闇の中に消えた。

「まず、私達の計画、それは全世界への魔法の存在の暴露です。詳しい内容は申せませんがこれにより未来に起こる未曾有の悲劇を回避できます。」

百合子は対面に君臨する魔術師、下手をすれば計画の最も巨大な障害になりかねない男に説明する。

「我々、といっても私はオマケ程度ですが超はその悲劇を回避するため未来に訪れました。」

「……………悲劇、それは魔法世界関係、それも戦争などの人為的な事ではなく天災の様な類か？」

「……………！」

「その反応、正解かな？なに、簡単なことだ、まず未来の魔法と科学の戦争と言う可能性、今戦争を起こすとして、科学力も発達していない今ならば魔法世界にも被害は薄い、しかしそれでは魔法と科学のハイブリットであるカシオペアが出来るとは思えない、あれは科学と魔法が手を組んだことによって出来たと言ってもいいからな、百合子個人の技術では作れないだろうし」

そして、超を指差し。

「超は火星人と名乗ったらしいな、ならば魔法世界が火星に存在することも白昼の元にさらされたと言うことだろう。」

「魔法世界の正体……………気付いていたの力？」

本来メガロセンブリア元老院しか知らない事実、魔法世界は火



星の一部に存在することが超、サウザンドマスターの子孫と言うこともあるかも知れないが超が知ることが出来たのはそれほどの事が起きたと言うことであつた。

「大戦時代、俺は魔術で惑星をいじくつたからな、その時気付いた。」

淡々と告げられる異常、大戦の終盤、シンが神戮を発動するために星座を魔法陣として操作した時、起点となる自分が存在する星を確認した時、地球ではなく火星に自分がいることを知った。

「未来で火星の公転周期がずれていると問題になったが………  
そついうことダタのか、まあ今はイイネ」

そして超はシンに言う、今まで言つた事を、改めて。

「シンサン、そこまで知っているのなら単刀直入に言うヨ、私たちと共に僅かながらの正義をなさない力？」

伸ばされた手、問われた言葉、未来の悲劇

三つが交差する点、そこで魔術師は選択する。

## 第五十六話 決着（後書き）

この駄文を待つてくださった方々、お待たせ致しました。本業となつてゐる学業のほうで、様々な問題が乱立し、投稿が出来ませんでした。さて、とうとう決着が付きました、そして本来のナギネギが始まりました、北欧王座は原作でも言及されていたように超反則技であり、天才のシンにも扱える者ではなかったと説明しておきます、次回、とうとう北中津の無理矢理、百合子の能力説明のコーナー

## 第五十七話 一の戦い、終了（前書き）

非常にお待たせしました。

本職で忙しさが反乱を起こしやっとな落ち着きを取り戻しました。

## 第五十七話 一の戦い、終了

### 第三者視点

「シンサン、そこまで知っているのなら単刀直入に言うヨ、私たちと共に僅かながらの正義をなさない力？」

超は立ち上がり手を伸ばす、それに答えることで、この世界の未来は大きく変わる革命か継続か。

「断らせて貰おう。」

それをシンは継続を選んだ。

「それは、正式にネギ先生の側に付くと言うことかナ？」

伸ばした手を戻し、座る超はシンに問う。

予想済みとでも言うように涼しい顔をしているが、目には驚きと失望が渦巻き、場の空気は一変した。

その空気の中で沈黙を守っていた百合子は、未だに話さない、それは超と念話で話しているのかどうかは分からない。

「この革命ともエゴとも言える計画、俺は不干渉だ。」  
シンは続ける

「恐らく明日、お前達は計画を実行するだろう、その時戦うお前とネギ達との戦い、言ってしまうえば完全なるエゴのぶつかり合い、過去に起こってしまった出来事を無かったことにしようとするお前、

未来に沢山の人を救うことが出来るのに古くからの掟を頑なに守ろうとするネギ達、これをエゴと呼ばずして何と言う？」

「元々俺の行動理念はまず百合子や俺の世界の人間の悪を止めること、自分たちの問題は自分たちで果たす、これこそ俺のエゴなんだがな……。だが俺は自分の正義を突き通す。次に弱者の救済、力がない奴は死んで当然と言うが全員がそういうわけではない、全員を千尋の谷に突き落とすわけにはいかないからな、ああ、ただど戦うと覚悟した人間には容赦しないが。」

それにと、シンは言い、  
「百合子はどうせ明日は療養だろう？だから俺も戦う気はない。それに一般人に被害は出さないんだろう。」

その言葉に今まで沈黙していた者が立ち上がる。

「私は明日も！」

クッ！！！」

勇ましく立ち上がった百合子は明日の計画の参加を表明するが、先の戦いの影響、黒翼の顕現により脳に異常な負担を負った。

「立ち上がっただけで頭痛を起こす奴がか？能力の使いすぎだ、それにあの黒翼、脳の検査をした方がいいぞ、お前が動かないのなら俺も動かん、俺を止めるだけで十分に役立っている。」

「そうネ、ユリには明日は休んでもらうヨ。」

超もそれに同意する、あの時の暴走を見ればそう思うのは当然だろう。

「超！」「ユリ！！！！」………わかりました。」

超の一喝、その泣き出しそうな声と、今も震えている体を見て百合子は引き下がる、再びこの空間を沈黙が支配する。しかし俯いていた超は顔を上げ

「失礼したネ、それじゃあユリについて話そう力。」

「私の能力、能力贋作の本来の名称は乱立幻想<sup>イマジニックス</sup>、能力贋作は蔑称です、しかし、私の能力はもう一つ名前がありました、そこから、お話ししましょう。」

「私の能力、乱立幻想が目覚めた当初は、私はA I Mを視認することとしかできない貧弱な能力でした、解析も出来なければ、追跡することも出来ない、しかしある日、私は他人のA I Mからその人の自分だけの現実に触れることが出来るようになりました、そして授業中も隣の人の自分だけの現実を解析し続け、理解していました」一息「そして運命の日、私はとうとう隣の人の能力を行使することが出来ました。」

シンと超の二人は無言、沈黙。

「その翌日には私は長点上機学園への転校が決まっていたました、私は置き去りでしたから、学園都市の命令には逆らえませんでした、それから今まで機会に保存されてきたA I Mから能力をコピーするというカリキュラムにのみ勤しむ、いえ、強要されました。」

本来鈴科百合子は一步通行にも匹敵する頭脳の持ち主であり、その知能故、無理難題といえるカリキュラムに耐えることが出来、それ故に長期にわたり能力と共に苦痛を得てきた。苦痛とは人の修練の結晶とも言える能力をそのままコピーする事への罪悪感、他人の現実そのまま脳に移すという脳への負担であつた。

「人のテストをカンニングする様な私の能力は何時しか、贋作能力と呼ばれる様になりました、そして、私は一方通行、未元物質をコピーする事により学園都市第1位となりました。」

そして、と乱立幻想は言う。

「ある日、私のカリキュラムに、ある人物が来ました、例によってその人の能力をコピーしろと研究員は言いました、その人物は私の友人であり学園都市第6位世戸瑛夜、初めての原石でした。」

原石、天然の能力者、上条当麻や姫神秋沙、削板軍覇がこれにあたる。

「彼女の能力は仮想知覚<sup>イフセンス</sup>、並行世界を観測する能力です。」

並行世界、その言葉にシンが外に見せずに反応する。

「結論から言つて実験は失敗しました、その影響によって私はこの世界の未来に來た、そこで途方に暮れていた私を助けてくれたのが、超と言うわけです。」

「あそこまで毅然として途方に暮れるとは言いにくいけどネ。」

## 回想

「Can you speak Japanese?」

「え、ええ出来ますが?どうかしましたか?」

「私、鈴科百合子と申します、日本と言う国の学園都市の者ですが、ここは何処でしょうか?私が見る限りイギリスだとは思いますが、どうも携帯等が反応しないのです。」

「ま、迷子アルカ?それなら日本大使館まで案内す「すいません、私、パスポート等を所持していなく、恐らく不法入国という形になるでしょう。」ナ!?」

「問題はありません、イギリスなら海を渡ればいいでしょう。」

「渡る?ど、どうやってやるか?」

「無論(超能力で)飛んでですが?」

「(魔法で人目を憚らず)飛ぶ!?!??そ、それは駄目ヨ、魔法関係者ならソッチ向けの施設があるヨ!」

「魔法?何を言っているのですか?」

「え?ま、魔法関係者じゃないの力…………。」



「魔法……文献と歴史書で、嘗て学園都市以外にも超能力を研究した機関が英国やローマにあり、その者達は超能力を魔術と呼んだことはありましたがそれは投薬などで得た能力では無いとありました、まさか……いや、彼女の話を聞く限り、魔法とやらは秘匿主義の様ですね、魔術はそれほどに秘匿には徹していませんでした、それに魔術は聖職者が多く扱っていたと、……つまりこの魔術と魔法は別物？いえ、時代が魔術を秘匿へと導き魔法と名を変えたとも考えられます、ハッ！元々ここが私がいたところとも考え難い、仮想知覚の影響で世界を移動した？まだそれを決めるのは早計か。」

「ア、アイヤー……」

回想終了

「なるほど……わかった。」

シンは立ち上がる、舞台では主催者室の沈黙とは対照的に歓声が上がっている、そろそろ表彰式の続きをしなければいけない、それはこの会話の終了を意味した。

「質問はあるかな？」

「いや、もうない。これで十分だ。」

シンは背中を向けたまま言う。

「コレは個人的な質問なんだが……シンさんは、自分の選択

を本当にすべき事なのかと考えたことがある力？」

シンは、ああ、と言って振り替える。

「言っただろう？俺は自分の正義を突き通す、そのための力もある、それに・・・自分の行動が悪かったか善かったかなんて、そんなの未来の批評家に任せりゃいいだろ？」

シンは言った、アンリは言った、それはシンの本心から言われた。

「私が未来の批評家なんだけどネ？」

「ハッ！未来の歴史にお前はいないだろ？お前はもう当事者なんだよ、お前達が来た時点でこの世界は違う歴史を辿る。・・・じゃあな。」

シンは部屋を出た。

拍手が包むステージの中心、ある父と息子が立っている。

息子と出会っていない父と父と出会っただけの息子、二人の途方もない距離と壁、それを知りながらも息子は父に挑み、負けた。

だが敗北に意味は在り、父の勝利にも意味があった。

ナギとネギの戦いが終わったその場に

「ナギ！！」

一人の吸血鬼、今はただの少女である、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、その者も父を想う者の一人であり、この時を、まがい物の時でも、父と出会う時を待っていた。

マスター  
「師匠」

ネギは自身の師匠の登場に、ただその名を呼ぶだけである。

「ん？           へー、ほー」

「五月蠅い、黙れ。」

ナギもネギとエヴァとの関係に気付いたようで、その奇妙な縁に感心しているようだ、しかしそのような事もエヴァには不要なようだ、医務室で寝ていた時の服装で観客の目も憚らずナギに近づいていくエヴァ。

「呪いのことはどうでもいい、どうせ貴様は幻影だし今はシンが何とかするらしいしな、まあ実際にやるか最近の行動からは考えられんが。」

「呪い？・・・あー！！！！！！あつたな！！悪い悪い！！つて、・・・？シン？なんであいつが？お前に呪い掛けた時は確かにいたけど・・・」

「今は麻帆良の神父をしている、雇われ神父という者だ。」

「うおっ！！！！シン！？」

ナギの背後にはシン、それも数センチの間隔であった。

シンの登場にはさらなる混乱を産む。

「久しぶりだなー!!どうしたんだよ、こんなところで!!?」

その後からはペラペラとナギの話が始まりそうだった。

シンはハアと溜息をつき。

「オイオイオイオイ、俺に構ってないでエヴァちゃんがちょい涙目だぜ、さっさと相手してやれ。」

アンの言葉でナギが振り向くと、シンの登場でのけ者にされたエヴァが目には涙を溜めていた。

「悪い悪い!!で?呪いだっただけ?」

「それはもういい!!...抱きしめろ。」

「ヤダ。」

「貴様あ~~~~!!!!ならば、頭を撫でろ、それで許してやる。」

「あいよ」

クシャ、とエヴァの軟らかい髪をナギの手が包む。

「ネギ。」

頭を撫でながら父は息子に言う、

「お前が今までどう生きてきて、お前に何があったのか・・・」

俺のその後に何があったかは知らない。」一息「まあ、この若くして天才最強無敵偉大な超クールなこの俺に憧れるのも分かるがな。」

「は」

「イヤイヤイヤ、お前とクールは対極に存在する言語だぜ？」

「んだよ。」ナギはそう言って「それにしてもシン、変わったなあ、」

「さあて、お前やラカンの馬鹿に毒されたんかねえ？」

アンリはおどけて言う、それを聞いたナギはハハツと笑い。

「まあそっちも似合うぜ、お前さ、それこそイギリスとか大戦が始まる前はよかったけど、なんか近ごろ険しいって言うか、無理してるって言うかな………本心を押しつぶしてるような、な？」

「お前はホントにすごいよ！！さっきの天才は俺も肯定してやるよ！！！！」

ナギはポカンとした顔で、

「ハハツ！！やっとわかったか！！！！………さて………ネギ、」

ナギを光が包む、それは時間切れが近いと言うことを示していた。エヴァも心なしか寂しさの残った顔をし、ナギも息子に最後の言葉を伝える。

「はい・・・」

ネギもそれを理解し、心する。

「お前は、お前自身になりな。」

そして、クウネルの約束は果たされ、シンの催しは終わりを迎え、エヴァは長年思っていた男との再会し、息子は父と拳で語り、言葉で語った。

「それでは！コレで正真正銘！！まほら武道会を終わります！！！！  
！またの機会に会おう！！！！！！」

そして、様々な思いを巡らせた戦いは終わり、次の戦い、世界の命運を懸けた戦いの始まりが、始まった。

## 第五十七話 一の戦い、終了（後書き）

とてもお待たせしました。

長々長とお待たせさせた割りにはたいした成長も見られない至って普通の文でした。

百合子は幻想乱立、そのメカニズムはほぼオリ設定&強引設定でした。

超の目的の後に百合子の能力とか順番違くな！？とおっしゃる方もいらっしゃるかも知れませんがご了承下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4615j/>

---

とある神父と魔法先生

2011年3月20日09時15分発行